

松本市文化財調査報告No.34

松本市赤木山遺跡群 I

——緊急発掘調査報告書——

1985.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

松本市赤木山遺跡群 I

——緊急発掘調査報告書——

1985.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

序

この遺跡は昭和 55 年度着工しました、県営ほ場整備事業小赤地区にあり、当地区には数多くの遺跡が散在し、当初より埋蔵文化財の存在が確認されている遺跡であります。

昭和 59 年度の区画整理工事の着工にあたり、県、市教育委員会の皆様と事前打合せにより調査方法、調査期間、費用負担等について再三検討をいただき、発掘調査による記録保存の方針を決定しました。

調査の実施は松本市教育委員会に全面的に受託をしていただくことになりました。その結果縄文前期の土器、石器等数多くの出土品が発掘され、寿地区の歴史を探るうえで貴重な資料となることと思います。

この発掘調査が計画どおり完了できましたことは、県、市教育委員会の適切な御指導とお忙しい中、調査団に参画され発掘調査にあられた皆様の御尽力のたまものと感謝しております。

なお遺跡発掘にあたり、5 月より支障なく調査が行われましたことは、寿土地改良区の役員、地元関係者の御協力と御理解によるものであり、心より感謝の意を表します。

昭和 60 年 3 月

長野県中信土地改良事務所長 丸 山 仁 志

序

寿地区の南端に位置する赤木山には、赤木山遺跡群と総称される十数箇所の遺跡があり、先土器時代から近代にわたる各種の遺物を出土するところとして関心を集めておりました。ところが、昭和 55 年から進められている県営ほ場整備事業がこの遺跡群の周辺にも及んだため、松本市教育委員会では長野県中信土地改良事務所の依頼を受けて、昭和 57 年度から埋蔵文化財の発掘調査を行ってきました。今回の調査はその 3 年目にあたり、遺跡群のうち 3 遺跡を対象とした規模の大きいものとなりました。

発掘調査は市教委職員を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により、5 月 15 日から 9 月 30 日というこれまでにない長期間にわたって実施され、多大な成果をおさめて無事終了いたしました。調査内容は本文で詳述してあるとおりで、縄文時代から平安時代にかけての住居跡、墓跡などや、それらに伴う土器、石器が多数発見され、この地が古くから人々の生活の根拠地となっていたことが証明されました。特に、北原遺跡から出土した今から七千年前の縄文時代早期の土器片、白神場遺跡から発見された松本市内では初めてという方形周溝墓などは注目に値すると思われまます。

今回の発掘は、記録保存とよばれ、開発のために遺跡を破壊するがその前に記録をとっておくという性格のもので、本書を残して遺跡は消え去る運命にあります。せめて、本書に記された調査結果が十分に活用され、郷土や先祖の歴史を探る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この調査にあたり多大な御理解と御協力をいただきました寿史談会、寿土地改良区、炎天の下、発掘に従事された地元の皆様に心からなる謝意を表して序といたします。

昭和 60 年 3 月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

例 言

1. 本書は昭和59年5月11日から9月30日にわたって実施された松本市寿小赤に所在する赤木山遺跡群の内、白神場遺跡、北原遺跡、松山遺跡緊急発掘調査の報告書である。
2. 本調査は県営ほ場整備事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が調査を行なったものである。
3. 本書の執筆は第1章事務局、第2章第1節太田守夫、第2節田中正治郎、第3章第3節1(1)：島田哲男、2、3：関沢聡、第4章第3節1：島田哲男、2：関沢聡、第6章神沢昌二郎、その他の項目については直井雅尚が担当した。
4. 本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の助力を得た。
5. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器復元	滝沢智恵子、吉田浩明
土器拓影	滝沢智恵子、原克江
遺物実測	島田哲男、竹原学、小口妙子、田中正治郎、関沢聡、直井雅尚
トレース	向山かほる、小岩井佳恵、倉科由加理、田中正治郎、竹原学、関沢聡、神沢昌二郎、直井雅尚
遺構写真	直井雅尚
6. 図版2の土器展開写真は小川忠博氏が撮影したものを同氏の許可を得て掲載したものである。
7. 遺物の注記にあたって遺跡の略号は次の様にもちいた。

白神場遺跡	K A S K	北原遺跡	K A K H
-------	---------	------	---------
8. 遺物の実測図及び写真については紙面の都合により全てを掲示し得なかった。
9. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記述を重視したため文章として掲載できなかったが、出土遺物及び図類と共に松本市教育委員会が保管している。

目次

第1章 調査経過	
第1節 事業の経緯と文書記録	5
第2節 調査体制	5
第3節 作業の経過	6
第2章 遺跡の環境	
第1節 赤木山の地形と地質	7
第2節 周辺遺跡	11
第3章 白神場遺跡の調査	
第1節 調査の概要	
1. 調査の方法	13
2. 調査結果の概要	13
第2節 遺構	
1. 住居址	15
2. 方形周溝墓	34
3. 集石	38
4. 土壙	40
5. 溝址	59
6. 土器単独出土	59
7. 竪穴状遺構	60
第3節 遺物	
1. 土器	61
2. 石器	65
3. 石製品	70
4. 土製品	70
5. 鉄器	70
第4章 北原遺跡の調査	
第1節 調査の概要	117
第2節 遺構	
1. 集石	120
2. 住居址	120
3. 土壙	120
第3節 遺物	
1. 土器	121
2. 石器	124
第5章 松山遺跡の調査	143
第6章 調査のまとめ	145

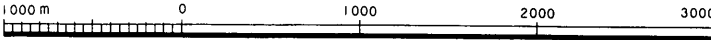
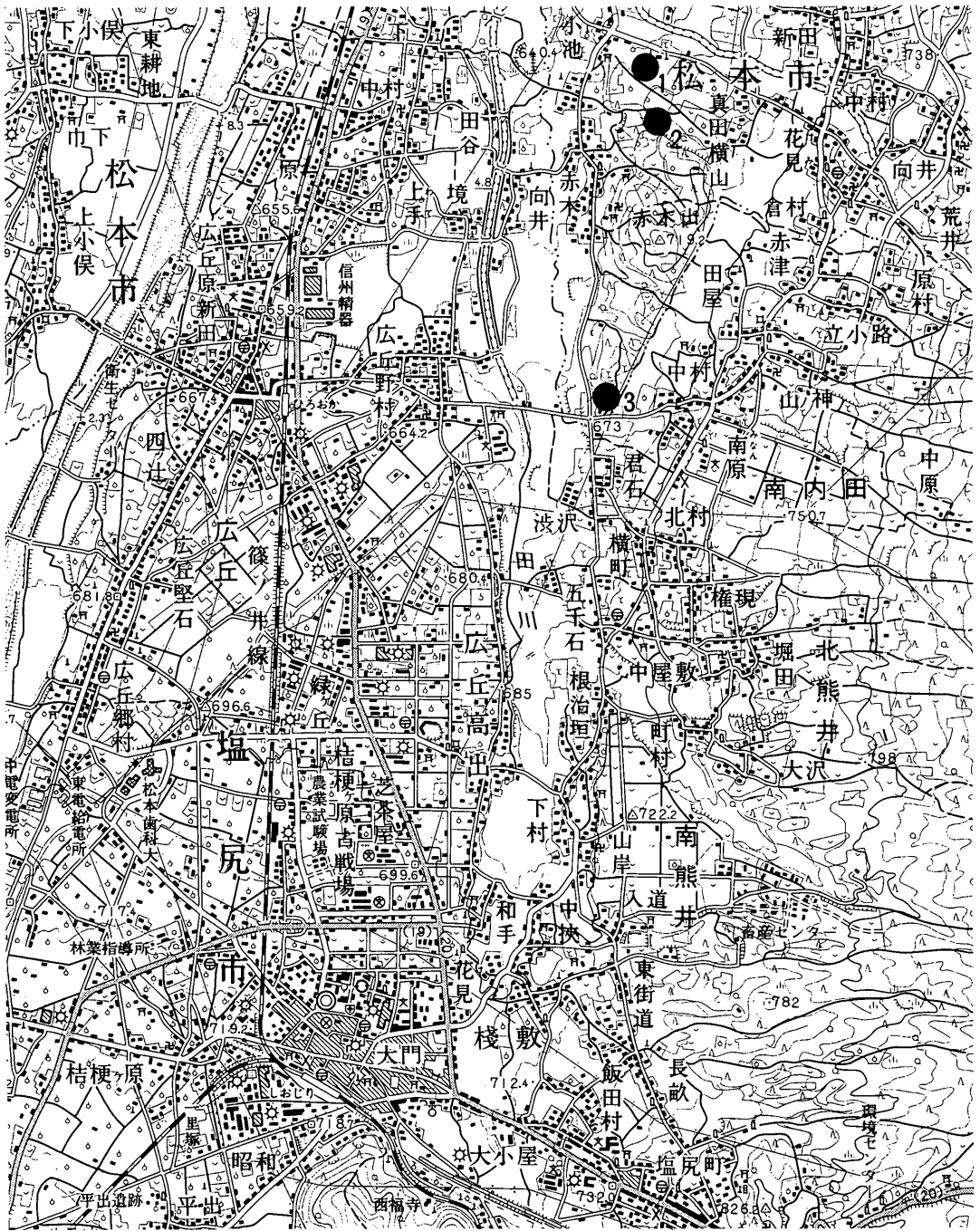
目次

第1図	調査地の位置	4	第31図	土壙(5)	49
第2図	白神場遺跡地層断面	8	第32図	土壙(6)	50
第3図	赤木山礫層と片丘礫層	8	第33図	土壙(7)	51
第4図	遺跡分布及び周辺遺跡	12	第34図	土壙(8)	52
第5図	調査範囲(白神場遺跡)	14	第35図	土壙(9)	53
白神場遺跡関係					
第6図	第1号住居址	16	第36図	土壙(10)	54
第7図	第5・6号住居址	18	第37図	土壙(11)	55
第8図	第7号住居址	19	第38図	土壙(12)	56
第9図	第7号住居址ピット断面	21	第39図	土壙(13)	57
第10図	第7号住居址焼土検出状況	22	第40図	土壙(14)	58
第11図	第7号住居址遺物出土状態	23	第41図	溝址	59
第12図	第8号住居址	24	第42図	土器単独出土	59
第13図	第9号住居址	25	第43図	彩色土器	60
第14図	第2号住居址	27	第44図	第12号住居址出土鉄器	74
第15図	第3号住居址	28	第45図	縄文土器実測図(1)	75
第16図	第3号住居址炭化材出土状態	29	第46図	縄文・弥生土器実測図(2)	76
第17図	第4号住居址	30	第47図	縄文土器・土製品実測図(3)	77
第18図	第4号住居址炭化材出土状態	31	第48図	土師器実測図(1)	78
第19図	第12号住居址	32	第49図	土師器実測図(2)	79
第20図	第12号住居址遺物出土状態	33	第50図	土師器実測図(3)	80
第21図	方形周溝墓1	34	第51図	住居址出土土器拓影(1)	81
第22図	方形周溝墓1主体部	35	第52図	住居址出土土器拓影(2)	82
第23図	方形周溝墓2	36	第53図	住居址出土土器拓影(3)	83
第24図	方形周溝墓3	37	第54図	住居址出土土器拓影(4)	84
第25図	集石1・3・5	38	第55図	住居址出土土器拓影(5)	85
第26図	集石2・4	39	第56図	住居址出土土器拓影(6)	86
第27図	土壙(1)	45	第57図	住居址出土土器拓影(7)	87
第28図	土壙(2)	46	第58図	住居址出土土器拓影(8)	88
第29図	土壙(3)	47	第59図	住居址出土土器拓影(9)	89
第30図	土壙(4)	48	第60図	住居址出土土器拓影(10)	90
			第61図	住居址出土土器拓影(11)	91

第62図	住居址出土土器拓影 (12) ……………92	北原遺跡関係
第63図	住居址出土土器拓影 (13) ……………93	第86図 調査範囲……………116
第64図	住居址出土土器拓影 (14) ……………94	第87図 調査地全体図……………117
第65図	住居址その他出土土器拓影 (15) ……95	第88図 土層図……………118
第66図	住居址その他出土土器拓影 (16) ……96	第89図 集石……………118
第67図	土壙出土土器拓影 (1) ……………97	第90図 第1号住居址・出土土器……………119
第68図	土壙出土土器拓影 (2) ……………98	第91図 土壙1～3……………119
第69図	土壙出土土器拓影 (3) ……………99	第92図 出土土器拓影 (1) ……………129
第70図	土壙出土土器拓影 (4) ……………100	第93図 出土土器拓影 (2) ……………130
第71図	土壙出土土器拓影 (5) ……………101	第94図 出土土器拓影 (3) ……………131
第72図	土壙出土土器拓影 (6) ……………102	第95図 出土土器拓影 (4) ……………132
第73図	土壙出土土器拓影 (7) ……………103	第96図 出土土器拓影 (5) ……………133
第74図	土壙出土土器拓影 (8) ……………104	第97図 出土土器拓影 (6) ……………134
第75図	土壙出土土器拓影 (9) ……………105	第98図 出土土器拓影 (7) ……………135
第76図	土壙出土土器拓影 (10) ……………106	第99図 出土土器拓影 (8) ……………136
第77図	土壙出土土器拓影 (11) ……………107	第100図 出土土器拓影 (9) ……………137
第78図	土壙出土土器拓影 (12) ……………108	第101図 出土土器拓影 (10) ……………138
第79図	出土石器 (1) ……………109	第102図 出土石器 (1) ……………139
第80図	出土石器 (2) ……………110	第103図 出土石器 (2) ……………140
第81図	出土石器 (3) ……………111	第104図 出土石器 (3) ……………141
第82図	出土石器 (4) ……………112	第105図 出土石器 (4) ……………142
第83図	出土石器 (5) ……………113	松山遺跡関係
第84図	出土石器 (6) ……………114	第106図 調査地区全体図……………143
第85図	石製品・出土石器 (7) ……………115	第107図 トレンチ土層図……………144

表目次

第1表	作業の経過 ……………6
第2表	白神場遺跡土壙一覧表……………42
第3表	白神場遺跡石器一覧表……………71
第4表	北原遺跡石器一覧表 ……………127



1. 松山遺跡 2. 北原遺跡 3. 白神場遺跡

第1図 調査地の位置

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和58年8月12日 埋蔵文化財保護協議を現地にて実施。出席者は県教委文化課郷道指導主事・中土土地改良事務所花岡主事外4名、地元研究者大久保知己、市教委神沢。
- 昭和59年1月17日 昭和59年度補助事業計画書提出。
- 1月17日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査実施時期等について打合せ。出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
- 4月25日 昭和59年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議実施。調査について細部の打合せ。出席者、中土改花岡主事外3名、市教委神沢外4名。
- 4月25日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 4月25日 昭和59年度県営ほ場整備事業小赤地区赤木山遺跡群埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 5月1日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月10日 赤木山遺跡群埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 5月21日 昭和59年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月6日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月19日 昭和59年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 10月5日 赤木山遺跡群埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 12月5日 赤木山遺跡群埋蔵物の文化財認定通知。
- 昭和60年2月19日 文化財保護事業執行状況調査。調査者は県教委文化課太田喜幸指導主事。

第2節 調査体制

団長：中島俊彦（松本市教育長）、調査担当者：神沢昌二郎、調査員：吉田浩明、西沢寿晃、三村肇、横田作重、太田守夫、森義直

発掘作業協力者：瀬川長広、滝沢智恵子、三沢元太郎、大出六郎、土屋君子、二木徹、五十嵐周子、赤羽千鶴、古屋人兄、小松悞、柳沢みな子、樋口宗子、百瀬知寿子、石田富士子、南律子、武田求、佐々木雅子、若林進、小林由美、島村靖明、関隆登志、清水さつき、宮本悦子、上條茂一、

高野健介、永田一照、倉科由加理、堀内いくみ、笠原達雄、中野美恵子、宮坂てるみ、浅川幸仁、田中厚、大熊義夫、太地めぐみ、宇留賀由里、山口容子、木内和枝、若林雅子、水野裕、栗野原成子、大野征二、百瀬純一、関勝之、小島和樹、細野真理、小谷匡紀、佐藤雅和、三村竜一、三沢学、中野郁子、樋口雅彦、鈴木優一、中垣内薫、寺脇明美、山本淳子、稲田保弘、宮澤富美恵、小林泰訓、佐々木航、大久保衛、中沢秀三、赤羽浩、西村勝利、星名雪子、木股錬治、額顯伸一、小林良文、上島敬子、竹内明子、石川武、高橋将樹、高見淳子、竹下千波、高橋由美子、塩原裕、吉岡文、山本直樹、今井古治、金丸栄子、水尻俊伸、吉池信司、川合純、小祝仁司、斉藤朋也、佐藤文雄、滝沢岳彦、島田恵美、山本有希、宮尾さやか、池本由紀恵、小松史子、小林美弥子、丸山更志、横山礼子、高野昌英、竹原学

整理作業協力者：滝沢智恵子、森山由美、直井スガ子、堀内いくみ、向山かほる、倉科由加理、井口千佳、山田真一、山下泰永、柴田尚子、伊那史彦、竹原学、三村竜一

事務局：平林竹夫（社会教育課長）、神沢昌二郎（文化係長）、百瀬清（同主査）、熊谷康治（同主事）、直井雅尚（同主事）、高桑俊雄（囑託）、原克江

第3節 作業の経過

各作業の経過は次表のとおりである。

第1表 赤木山遺跡群調査経過

		5月	6月	7月	8月	9月
白 神 場 遺 跡	発片付け	■	■	■		
	表土除去	■	■	■		
	遺構検出		■	■	■	■
	1住		■	■		
	2住		■	■		
	3住		■	■		
	4住		■	■		
	5住			■	■	
	6住			■	■	
	7住			■	■	
	8住			■	■	
	9住			■	■	
	12住			■	■	
	方形周溝竪1		■	■		
	2			■	■	
	3				■	■
	集石1				■	■
	2				■	■
	3				■	■
	4				■	■
	5				■	■
	上場		■	■	■	■
	灌地			■	■	■
	竪穴状遺構1		■	■	■	
	2			■	■	
3			■	■		
4				■	■	
5				■	■	
6				■	■	
全体測量					■	
北原遺跡					■	
松山遺跡					■	

第2章 遺跡の環境

第1節 赤木山の地形と地質

1 位置と地形

本遺跡は赤木山丘陵の南端、海拔690～695mに位置している。これを地形上からみると、丘陵の堆積頂面の平坦面より南東傾斜面上にかけて展開している。

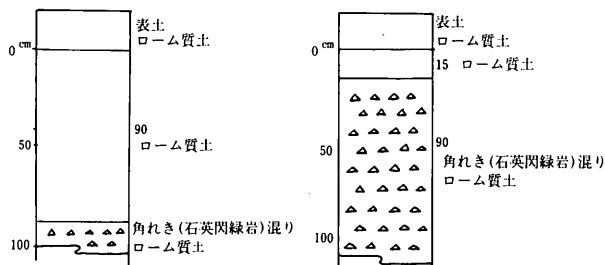
遺跡ののる丘陵は、東から流れ下った南・中・北洞川などの河川によって分離された赤木山丘陵のなかで、最も南部にあるものである。起伏の状態は、赤木山丘陵全体と同様、頂上に平坦面、西側に急斜面、東側に緩い傾斜面をもっている。

すなわち、北側は南洞川（N60° W）の谷（深さ3～10m）で切られ、西側は比高25～30mの急斜面（N-S）をもって田川沿いの平地に臨み、その間に段丘状の崖錐性堆積面、小扇状地性の堆積面をはさんでいる。東側は15m下の水田地域を隔て、塩尻市片丘南内田区（鉢伏山地西麓斜面地形）に対しての。この側は1m前後の比高をもつ階段状の緩い傾斜面で、山脚はほぼ直線的に北北東（N30° E）へ延びている。南側は以上の斜面に囲まれて、平面形が楔状となった丘陵の先端を切るように、小田川（小場ヶ沢川）が流れている。この側にも階段状の斜面があって、675mまで下っているが、最下部の段は人為的な部分がみられる。また階段状の斜面は山頂を取りまくように広がっている。

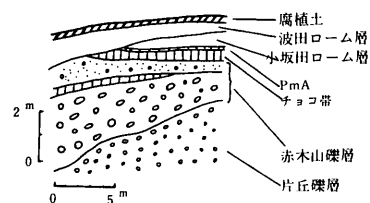
2 遺跡の地形と地質

遺跡の地形面は、丘陵の山頂に広がる平坦面を主とし、上下二段（比高1～1.5m）に分けられる。上段はI・IIトレンチ（海拔694～695m）に当り、傾斜とその方向はそれぞれ $\frac{25}{1000} \cdot \text{ESE}$ 、 $\frac{100}{1000} \cdot \text{SSE}$ である。下段はIII・IVトレンチ（海拔680～693m）に当り、傾斜とその方向はそれぞれ $\frac{15}{1000} \cdot \text{ESE}$ 、 $\frac{100}{1000} \cdot \text{SE}$ である。傾斜度は南東に大きく、南南東に小さくなっている。

遺跡の地質はI・IIトレンチはローム質土、III・IVトレンチはローム質土と一部角礫混りのローム質土である。上段（I・II）のローム質土の厚さはそれぞれの測点で、1m（+）・90cm（+）・80cm（+）・70cm（+）で、表土を加えると恐らく1mを超えると考えられる。下段の角礫混りローム層土の分布は、海拔692～693mの等高線より以下で、IIIトレンチの $\frac{1}{3}$ 、IVトレンチの $\frac{2}{3}$ を占める。ローム質土と角礫混りローム質土の接触点付近では、厚さ1mのローム質土層の下底に風化した石英閃緑岩の角礫が存在する。またそこから数メートルしか離れない場所の角礫混りのローム質土で



第2図 白神場遺跡地層断面



第3図 赤木山礫層と片丘礫層

松本盆地団研1977.「松本盆地の第四紀地質」より

は、ローム質土15cm (表土を加えるとさらに厚くなる)、その下は角礫層90cm (+) と変化が激しい。一般に接触点付近より離れて下に向うほど礫層が浅くなっている。下段のローム質土は粘土が多いためか、乾燥すると固くなり割目ができている。(第2図)

礫の種類は石英閃緑岩(粗粒・細粒)・綠色ぎょう灰岩・ホルンフェルス(砂岩・礫岩)・玢岩・礫岩(チャート・石英・粘板岩を含む)で、石英閃緑岩が多くいずれも鉢伏山地の横峯や高ボッチの西側にみられるものである。礫の大きさは最大で20×15cm、多数は5×5cm大である。

遺跡の住居跡などは、このローム質土や角礫混りのローム質土を掘り下げてつくられている。

ローム質土と角礫混りローム質土との関係は、整合的であって、礫層上にまたは礫層の堆積中にロームの降灰があったように考えられる。このような堆積状態は東の塩尻市片丘・松本市内田(鉢伏山地西麓斜面地形)にも多くみられ、ローム層は波田ローム、礫層は波田礫層と考えられている。このことは赤木山の地形形成を考える上に大切なことで、後に述べるような相互連続の可能性がある。

遺跡を東から南へ囲む海拔688m以下の平たん面は、ローム質土を欠いている。表土の下は石英閃緑岩の角礫多数(径10cm以下)を含む上層2m(3mに及ぶところもある)で、さらにその下は石英閃緑岩の風化砂層や粘土層となっている。この厚さは南へ行くに従いすくなくなり、1mほどになるが砂層を混えて南端まで続く。たまたま浅い谷の部分でローム質土があらわれるので、恐らくローム質土を覆ったり、浸食したりして堆積したものであろう。

赤木山の地質については、赤木山礫層を基盤とし、その上に小坂田ローム層・波田ローム層・腐植土の堆積が模式的に考えられている。この関連でみると、丘陵のローム質土と角礫混りローム質土は、波田ローム層・波田礫層に相当し、浸食による残丘面と考えられる。また周辺の石英閃緑岩の角礫土層や砂層・粘土層は、その後の浸食時の堆積物と考えられる。(第3図)

3 周辺の地質と地形の形成

赤木山丘陵は一大遺跡地であって、今後も発掘が行われると思われる。そこで参考までに赤木山

の地形形成について概観をしておきたい。

赤木山丘陵には、縄文時代の遺跡が平坦面をはじめ、周辺の崖錐性堆積面、小扇状地性堆積面に至るまで広く分布している。これらから考えると、すでに縄文時代までに赤木山は現形が完成しており、むしろ遺跡遺物のない場所が、その後において変化のあった地形といえる。

赤木山丘陵を概観すると、北側を塩沢川（N60° W）に切られ、全体が楔状の平面形を示している。東側の山脚はほぼ直線的（N30° E）で、西側の山脚は段丘状（N-S）であるが、崖錐性堆積面や小扇状地性堆積面の出入がみられる。また先行河性の三つの川や数条の空谷によって横断されている。直線的な山脚や先行河性の川からは、断層活動による地塁、西側の段丘状の地形や東の内田地域の扇状地性地形からは、浸食作用による残丘など、いろいろに考察されてきた。もともと赤木山丘陵は地層の露頭に乏しく、その対比が十分にできていない。したがって地層の対比の外、周辺を含めた地形分類や地形面の対比が必要になってくる。

鉢伏山地の西麓には、山地を流れ下った小河流により形成された、小扇状地が複合している。田川をはさんで向い合う松本盆地南西部の扇状地とは対照的で、傾斜度が大きく形成過程の相違が歴然としていて、鉢伏山地の起伏を物語っている。

小扇状地をつくった河流のなかには、牛伏川や塩沢川のように、田川をつくった段丘地形や、それ以前の波田礫層の相当層（波田ロームに覆われている）がつくった地形を、覆ったり、浸食したり、破壊したりしているものがある。また松本市内田・塩尻市片丘地域にみられるように、山地を浸食したり、運んだ土砂礫を山麓近くや扇状地の末端、流れの両岸に堆積し沖積層を広げている。その一方、扇状地の扇頂近くや中間地域で、両側に古い地形面（ローム層や礫層）を多く残している。上流域では先端部沖積層により埋められているが、下流域になるほど高さを増し、長峰・尾根・小丸山などと呼ばれている。

これらの河流の数流は、赤木山の先行河性谷（川）につながっている。また両岸に残された古い地形面は、赤木山丘陵の各ブロックの山頂に残されているローム質土（ローム層）につながるものと考えられる。

このようにみると、赤木山丘陵の地形地質は、松本市内田・塩尻市片丘地域の扇状地性地形に連続するもので、この古い地形面は洪積世末に形成された浸食地形面と考えられる。この古い地形面を浸食して、その周辺に堆積したものが沖積層であるといえる。古い地形面や沖積層が田川（奈良井川）によって浸食され段丘化したものが、南熊井・北熊井・赤木山・小池・百瀬にわたる田川右岸の段丘地形と考えられる。

次に注目される地形は、赤木山と内田・南内田の間であって現在水田に利用されている凹地である。最近の圃場整備でさらに深さを増した感があるが、内田・南内田側の700m等高線と赤木山側の山脚（等高線700m前後）にはさまれた凹地（幅250m、南南西～北北東）である。さらにこの凹地は、赤木山山頂（719.2m）南内田田屋を結んだ線を境に、傾斜方向を変換している。この傾斜方向

の変換には原地形の影響もあるが、北部では塩沢川の堆積と河流の移動によるところが大きいと考えられる。赤木山北部の大規模な空谷が生れたのも、これによると考えられる。北原遺跡の地形面も、塩沢川かまたは関係のある流れによって形成された地形であろう。現在の北洞川の右岸第2段丘面であって、遺跡の地層はローム質礫混り土で、砂層の部分もある。

南部は $\frac{24}{1000}$ の傾斜をもっているが、二条の先行河性河流に横断されていて、水田の排水だけ傾斜に従い流れている。水田地域の土壌深度は20cm（一部40cm）、その下は角礫を含む褐色ローム質粘土質土壌である。

南部・北部とも湿地性で、大ふけ・小ふけ・ふけ田・払免などの地名を残している。遺物は現在発見されていない。またこの凹地は内田・南内田の水田の排水が集まるところであるが、湿地性は扇状地末端という地形に原因があると思われる。すなわち、内田横山の北洞川右岸段丘崖に、厚さ1mの粘土層（濃緑色・石英閃緑岩の礫を含む）が、石英閃緑岩の礫混り土層中にはさまれている。同じように南洞川や中洞川でも谷壁に粘土層の断片がみられる。これはある時期の堆積環境を示すもので、扇状地形成と関係をもつものと考えられる。

もともと、鉢伏山地西麓斜面形（扇状地）は鉢伏山地の隆起にともなうものである。山地の隆起と盆地の相対的沈降が原因で、赤木礫層（小坂田ローム）・波田礫層（波田ローム）の堆積をみたのである。山地西側の浸食の復活は、赤木礫層や波田礫層の作った地形を浸食し、現在のような高低をもつ扇状地地形をつくったものと考えられる。現在浸食の復活は赤木山を横断する、北・中・南洞川の三つの川で大きいのが、特に地形異常を示すような増傾斜運動はない。丘陵の東・西側推定断層、東側の山脚に地形異常が指摘されてきているが、現在地層の上で証拠となるようなものはみつかっていない。東側山脚の地形異常や、先行河性の川が存在を認めるとしても、それは現在に続く沖積層以前の、洪積世における断層活動によるものと考えられる。実際に白神場遺跡の周辺の堆積層をみても、凹地形に多少の疑問は残るが、浸食地形とする方が可能性が大きい。

4 遺跡の立地

白神場・北原遺跡を含めた赤木山及び周辺の遺跡に、生活が営まれるようになった環境は、ほとんど現在の地形に近く、大部分は洪積世末、沖積世初に形成が終っていたものと考えられる。赤木山にあってはローム質土の山頂面、すでに形成が終った周辺の崖錐性堆積面、小扇状地性堆積面である。松本市内田や塩尻市片丘にあっては、複合小扇状地をつくった河流が残した古い地形面とその周辺（海拔730～800m）の地下水のえやすい場所（第1湧水線）に集中している（この扇状地には第1～山麓沖積層末端、第2～等高線750m前後、第3～赤木山東麓の凹地の湧水線（帯）が三つある。）これらの場所は高燥地で、近くに湧水・河流水が得られ居住地の条件を満たしていたと考えられる。白神場にかぎってみれば、南南東向きの斜面は日照条件がよく、さらに秋冬の北西季節風を背後の山陵で受けるなどの条件が加わっている。

（太田守夫）

第2節 周辺遺跡

松本市寿区赤木に所在する赤木山は、標高690～720mの丘陵が南北約2kmにわたって細長く続く独立した山で、山中の至る所から遺物の出土をみている。遺物の時期は縄文時代中期を主体として縄文時代前期から後、晩期、弥生時代中期、古墳時代、平安時代の各時代にわたる⁽¹⁾。現在、この赤木山中に16ヶ所の遺跡が確認されており、赤木山遺跡群と総称されている。遺跡名を南側から列挙すると、白神場、前田、木下、中山、野石、赤木、赤木山、原度前、清水林、三経塚、石行、北洞、横山城、小赤、北原、松山、となる。これらの遺跡のうちで特筆されるべきことは、原度前遺跡の縄文時代中期初頭の土器や石製品(石冠)、清水林遺跡の独鈷石、北原遺跡採集の有孔玉石などである。また石行遺跡では多量の縄文時代晩期の土器が出土し、注目されている。横山城遺跡は昭和41年に藤沢宗平氏と松本深志高校地歴会により発掘調査が行われ、弥生時代中期の住居址が検出された。小赤遺跡は昭和57年に県営ほ場整備に伴う緊急発掘が松本市教育委員会により実施され、近世から現代にわたる暗渠排水溝址、中世の鍛冶屋場遺構が発見されている。前田・木下遺跡は昭和58年に、やはり県営ほ場整備に伴う緊急発掘が松本市教育委員会により実施され、縄文時代中期の住居址11軒、弥生時代後期の住居址1軒、奈良～平安時代の住居址1軒、中世の住居址1軒のほか竪穴状遺構、集石などが検出された⁽²⁾。

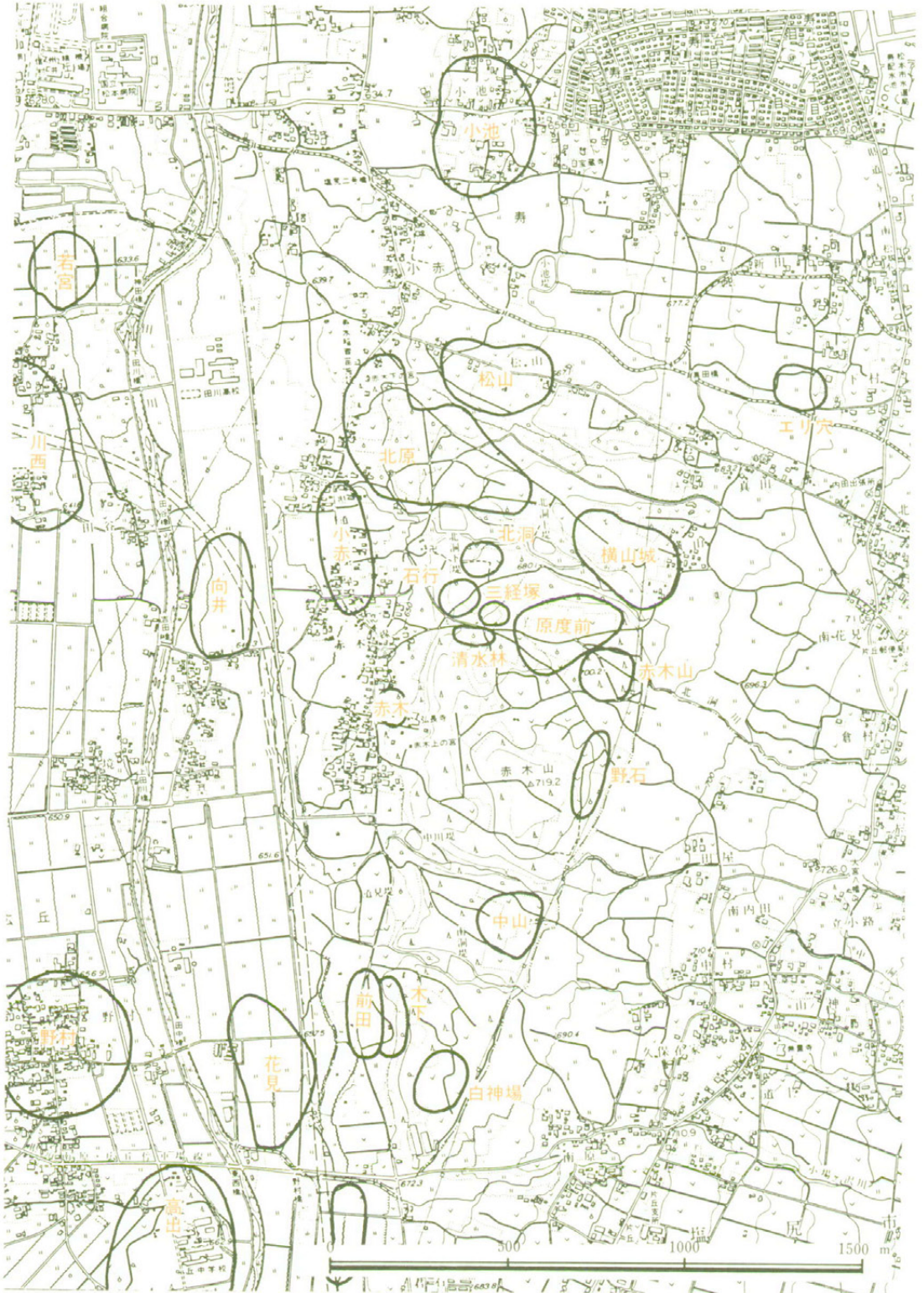
赤木山西方を北に流れる田川の流域では、いずれも塩尻市に含まれるが、右岸に花見遺跡、吉田向井遺跡、左岸に野村、吉田川西、若宮遺跡と続き、縄文中期、弥生後期、平安期の遺物が出土している。このうち、吉田向井遺跡は昭和57年に塩尻市教育委員会により緊急発掘が行われ、平安時代全般にわたる85軒もの竪穴住居址が検出されており、当地域における該期研究に好資料を提供することになった。また吉田川西遺跡は昭和59年から(財)長野県埋蔵文化財センターにより緊急発掘が行われており、平安時代の住居址が既に20軒以上検出されたほか、青磁、白磁、中近世陶器などが豊富に出土しており、その成果が期待されている⁽³⁾。

赤木山東方の筑摩山地西麓緩斜面には、標高800m付近まで、縄文時代中期を中心とする遺跡が点在するが、縄文時代早期の押型文土器を出土した五斗林遺跡、縄文時代中期の住居址19軒と多数の小竪穴が検出された雨堀遺跡、縄文時代後、晩期の土器、土製品を多量に出土したエリ穴遺跡が著名である。

註 (1) 赤木山遺跡群既出遺物については、松本市教育委員会『松本市寿小赤遺跡』1983に詳しい

(2) 松本市教育委員会『松本市前田木下遺跡』1984

(3) (財)長野県埋蔵文化財センター吉田川西遺跡現地説明会資料『掘り出された昔の吉田』1984



第4図 遺跡分布及び周辺遺跡

第3章 白神場遺跡の調査

第1節 調査の概要

1. 調査の方法

白神場遺跡 は場整備予定地にかかる遺跡の範囲内で、作付けと調査時期が整合する畑地を調査地として求めていたところ、10000㎡以上にわたる桑畑がこの条件と一致したため、そのうち約8700㎡を調査地として設定し、4枚の桑畑をそれぞれⅠ～Ⅳ区とした(付 図)。次に重機による抜根と表土除去に平行して、調査地の中央部に設けた基準点から南北及び東西に基準線を振り出し、それらから更に3mごとに直交する線を振り出して、各交点の地面に釘を打ち込んだ。このようにして調査地全体を3×3mの方眼で覆い、基準点からの方向と距離をN・S・E・Wと数字とを組み合わせた表現(たとえば N3-W6など数字の単位はm)で示して、調査地内の求める点や範囲を、平面的には同一基準で捉えて表記できるようにした。垂直方向の基準については、高低差が大きい場合同一の基準を作るのは得策ではないと考え、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区の最低位付近に杭を埋設して固定し、それぞれBMI、BMIII、BMIVとして標高測定のための基準とした。遺構の命名については、検出が終了し掘り下げが開始された時点ないしは第1回目の遺物取り上げの時点までにその性格を推定して行った。このため、遺構番号は、位置的、時期的にもちぐはぐなものになったが、出土遺物の注記等の手順から、後の整理の段階で修正することはあえて避けた。遺構の掘り下げは、竪穴住居址、竪穴状遺構については土層観察用の畦を十字に残し、土壌については2分割してまず半分のみを掘り下げ、土層観察を行ったのち全掘した。遺構からの遺物の取り上げは、土器類については一括品か小片か、また出土量の多さと層位などを勘案して必要と思われるものに対して出土状態の平面、断面図を作成したのち取り上げ、他は覆土と床面に分けて一括して取り上げた。炭化材は極力原位置に残して、出土状態の平面図を作成した後、一部をサンプルとして採取した。遺構の測量は、3mごとに打ち込んだ釘を利用した遺り方測量を行ったが、Ⅱ区の一部については平板を用いた。標高についてはレベルを用いて、先述のBMとの高低差を図類に記入し、調査の最後に各BMの標高を求めて修正した。

2. 調査結果の概要

白神場遺跡は赤木山南端の南から南東向きの緩斜面及びその後方の平坦地にある。今回の調査では、遺跡のうち斜面から平坦地にかけて約8700㎡という広範な面積を遺構存在確認調査の対象とし、縄文時代から近世に渡る各種の遺構とそれらに伴う多数の遺物を検出した。



第5図 調査範囲(白神場遺跡)

遺構では、竪穴住居址・方形周溝墓・集石・土壙・溝址・竪穴状遺構・土器単独埋設がある。竪穴住居址は10軒発見され、うち6軒が縄文時代前期末、3軒が古墳時代前期、1軒が古墳時代中期のものとは比定される。縄文時代前期の竪穴住居址は円形ないしは楕円形を基調としているが、若干不整なものがあり、また掘り込みが全体的に浅い。古墳時代のもは方形プランで、しっかりした掘り込みをもつ点が対称的である。方形周溝墓は3基発見されたが、主体部を残すものは1基のみであった。これらからは直接遺構に伴うとみられる遺物がなく、営まれた時期の推定がむづかしい。集石は5基検出されたが、掘り下げの結果しっかりした遺構になったものは2基で、いずれも下部に礫と炭のつまる掘り込みをもっていた。土壙は135基確認されたが、その形態には数種類あり、約1割が弥生時代中期のものである他は、すべて縄文時代前期末に属するものとみられる。溝址は第7号住居址を切る、細く弧状を呈するものが1基確認されたのみである。土器単独埋設は、平安時代の土師器の甕を、それがすっぽり納まる程度の小さく浅い穴を掘って埋めたもので、1ヶ所発見されている。竪穴状遺構は竪穴住居址と同程度の平面プランをもつが、他の施設などで明らかに弁別されるもので、6基確認されている。覆土中から近世の陶器片が出土したことなどから、その時期の所産と考えている。

遺物は上記の遺構に伴い、また包含層、検出面から多量に出土した。土器・石器・石製品・土製品・鉄器などがあり、このうち土器では縄文土器・弥生土器・土師器・陶器類、石器では石鏃・石錐・石匙・打製石斧・磨製石斧・横刃型石器・凹石等がある。量的にみると縄文時代前期末の遺構に伴う土器と石器が大半をしめている。

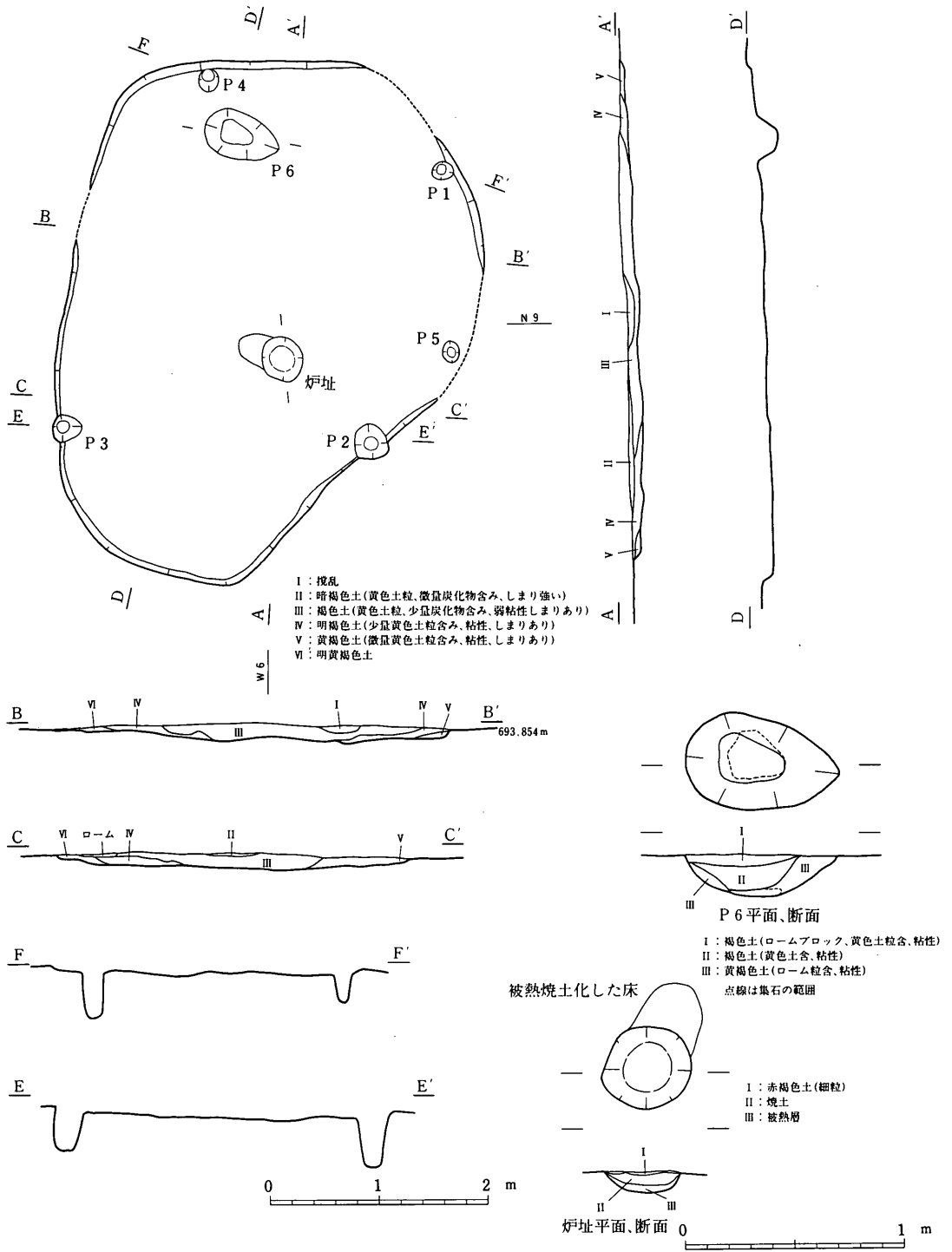
全体としては、多数の土壙・集石を伴った縄文時代前期末の小規模な集落を把握したこと、松本市初の方形周溝墓を検出したこと、古墳時代前半の住居址と土器の資料を得たこと、などが今回の調査の要点と言えよう。

第2節 遺構

1. 住居址

(1)第1号住居址 (第6図)

遺構 I区東半、N7～11-W4～8に位置する。プランは4.7×3.9mの楕円形を基調として南東隅を欠く、不整な形態をとる。削平が著しく、壁高は最大10cmを測るのみで、壁の傾斜も緩やかである。東壁や西壁の一部は全く失われている。床面はローム面をそのまま用いており、全体的に平坦だがやや軟弱である。ピットは壁際にP₁からP₅までがめぐり、北壁より約30cm南に大きめのP₆がある。P₁からP₅は深さが25～40cmを測り、その配置からみても柱穴に比定することができる。P₆の底面には径2～5cm大の小礫の集石があったが、どのような性格のものかは不明である。炉址は床面中央南寄りの焼土を伴うピットがあたると考えられる。平面形は径40cmの円を呈し、深



第6図 白神場遺跡第1号住居址

さは10cmと浅く、周囲に被熱層を形成している。

遺物 覆土中及び床面上から少量の土器、石器が出土している。土器はいずれも縄文土器で、北寄りの床上から、大形の深鉢形土器の一括品（第45図1）が得られている。その他、拓影により26点を提示した（第51図1～26）。石器は石鏃、ピエス・エスキーユ、スクレーパー、石核、横刃形石器、打製石斧、凹石、（第79・81～85図1・2・53・54・58・67～69・72～74・99～102）が出土している。遺物よりみて、本址は縄文時代前期末頃の住居址と考えられる。

(2)第5号住居址（第7図）

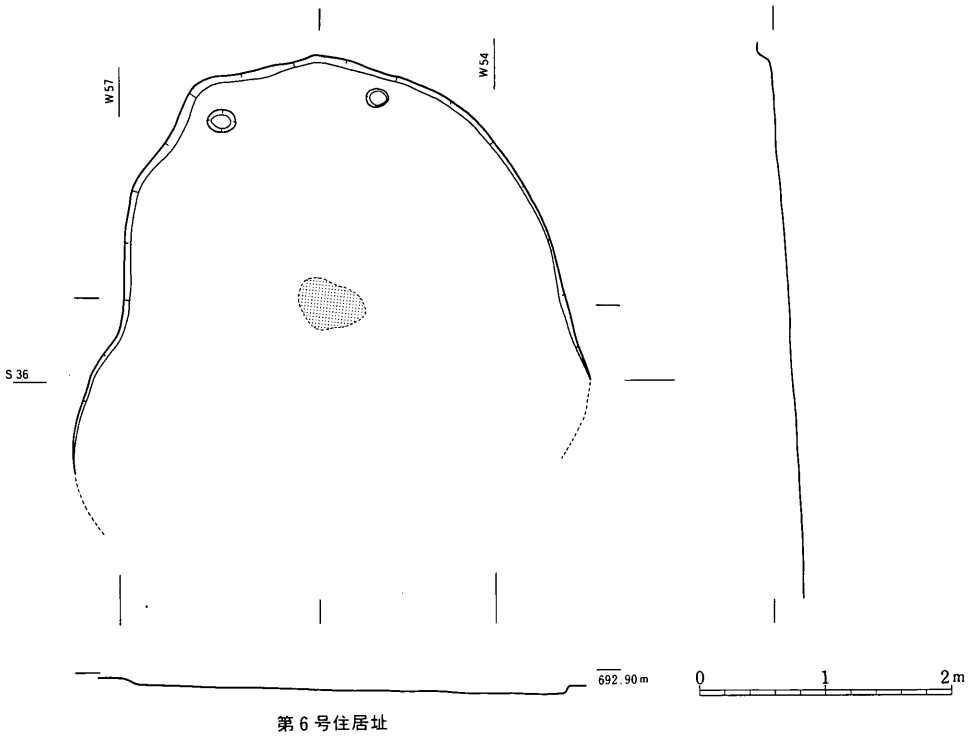
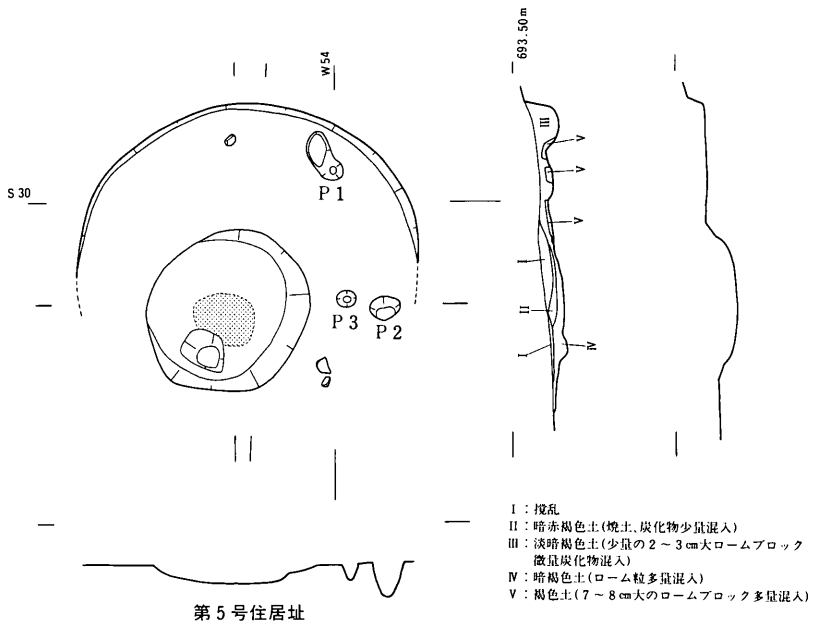
遺構 III区中央部、S29～32-W54～56に位置する。抜根及び表土除去の際、南半分が削平されてしまった。プランは直径2.7m位の円形を呈していたものと推定される。壁は北側のみ残存し、最大で15cmを測る。床面は桑の抜根時にほとんど破壊されてしまい、かつて床面を構築していたと思われる固い小ロームブロックが覆土中に散らばっているという悲惨な有様であった。このため規模の小さいピット類は不明瞭で、 P_1 ：-7cm、 P_2 ：-32cm、 P_3 ：-18cm（数字は床からの深さ）の3ヶが検出できたにすぎない。炉址は中央部と思われる場所に位置する径1.2mくらいの地床炉で底面に焼土が残る。

遺物 本址は前述の様にかなり破壊されたものであったため、量が少く、一括品もない。縄文土器、石器が出土しており、土器は図示1点、拓影56点である。石器は、石鏃2点（第79図3・4）提示した。土器からみて本址の時期は、縄文時代前期末と考えられる。

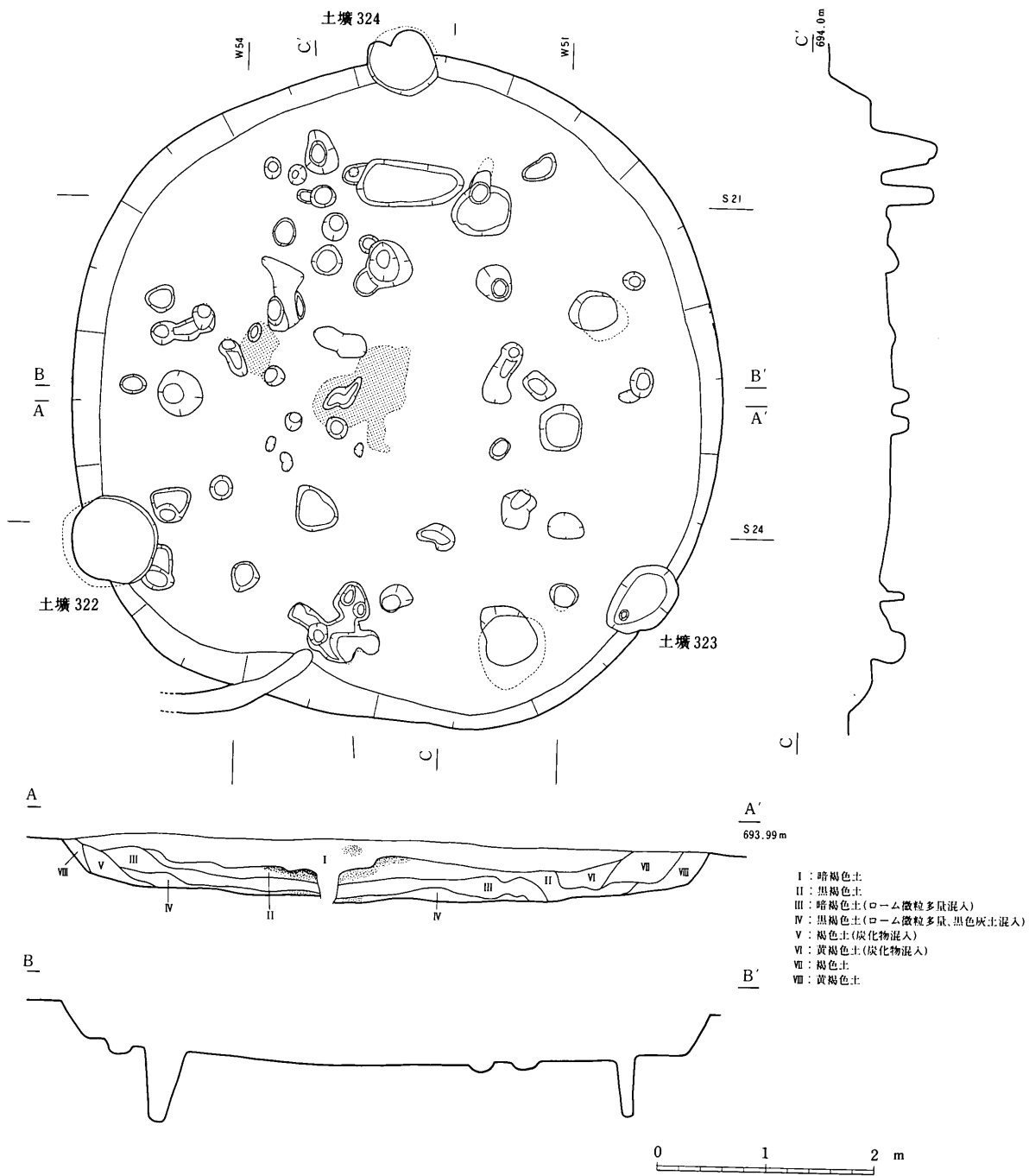
(3)第6号住居址（第7図）

遺構 III区中央部、S34～37-W54～57に位置する。これは第5号住居址の2m程南である。本址も第5号住居址同様に削平がひどく、南半部は失われている。プランは南北4.2m、東西3.8mくらいの楕円形を呈していたと推定される。壁は北側で最も残存して10cmを測る。床面も第5号住居址と全く同じで非常に不明瞭なものとなっており、南半部は範囲の推定すら困難である。ピットは北壁際に2ヶ確認されたにすぎない。いずれも深さ23cmを測る。炉址は本来の床面中央部とおぼしき場所に、30×20cmの範囲で焼土が残るのみで、掘り込みは全くない。

遺物 少量の縄文土器と石器が出土しているにすぎない。重機による表土除去を行った際、本址の位置から、ある程度の土器片がまとまって出土しており、調査が進行した後、それらも本址出土品に加えた経緯がある。土器は図示1点、拓影29点、石器は石匙が1点提示できたのみである。



第7図 白神場遺跡第5号・第6号住居址

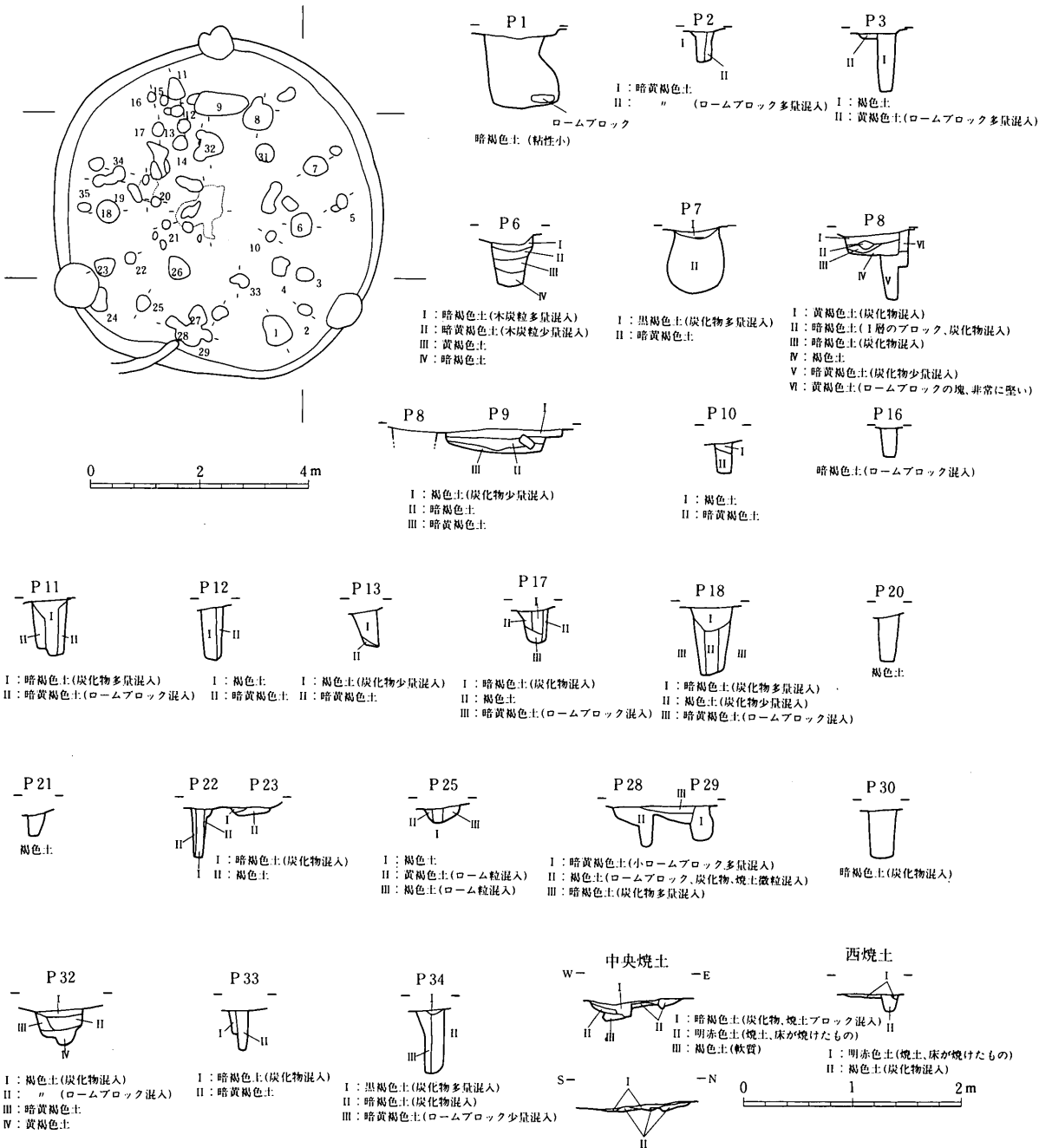


第8図 白神場遺跡第7号住居址

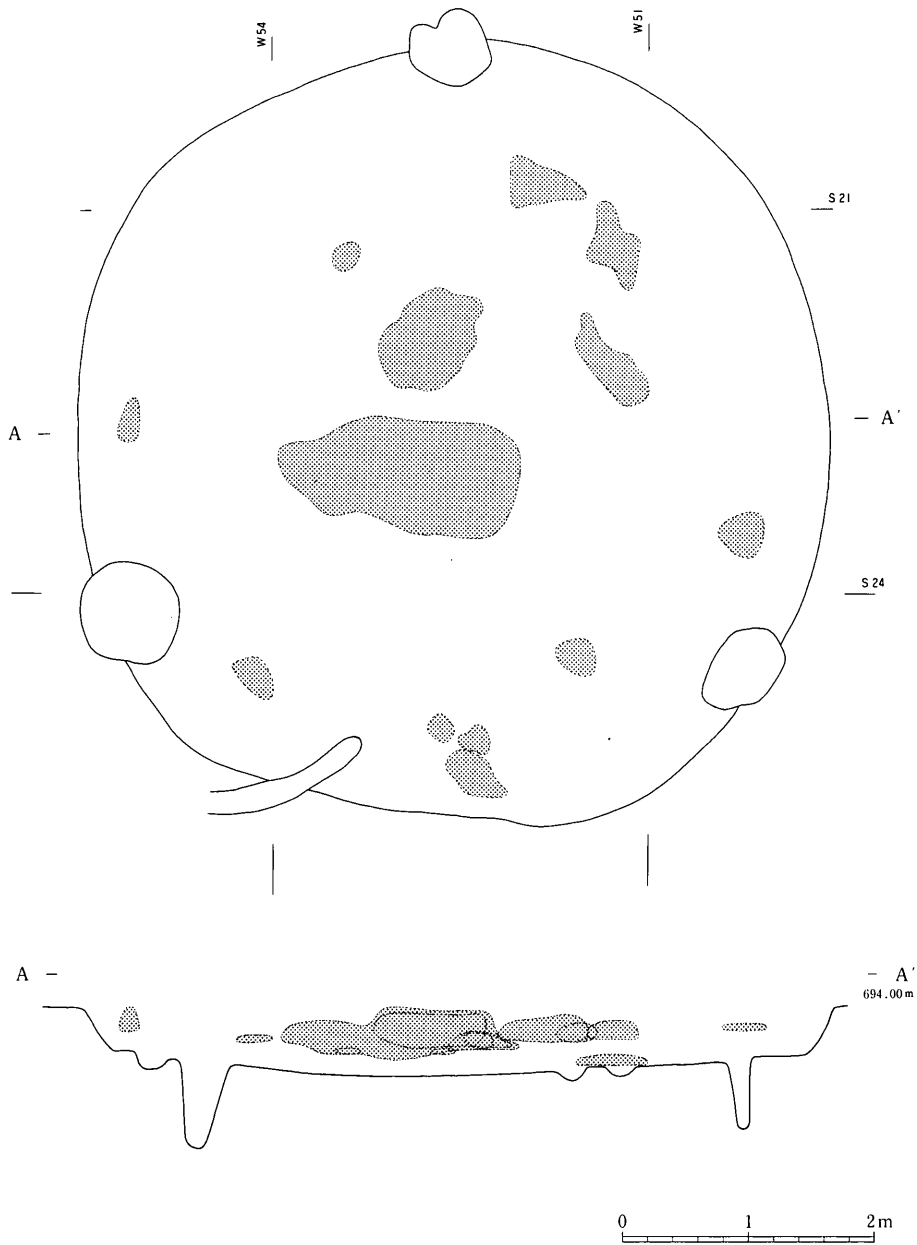
(4)第7号住居址(第8~11図)

遺構 III区北端部、S20~25-W50~55の一带に位置する。土壙322~324、溝址に切られている。本址は周辺の地山にロームが残っており、重機で表土除去をした時点から黒く明瞭に輪郭が現われて、その存在が予見されていた。プランは直径6mの整った円形を呈す、本遺跡の中では比較的大形の住居址である。壁はかなり外傾しているが掘り込みはしっかりしており、壁高は30~40cmを測る。残存状態はきわめて良好である。床面は中央部分へ向って緩やかに窪んでおりかなり固い。色調が若干暗い部分もあったので貼り床の有無を確認するため、調査終了後トレンチを入れてみたが、単に地山のロームを固めただけの床であった。ピットは総数で40ヶ以上というきわめて多数が検出された。これらのピットのうちには柱痕を残しているとみられる土層をもつものが多い。(P₂・P₃・P₈・P₁₀・P₁₁・P₁₂・P₁₃・P₁₆・P₁₇・P₁₈・P₂₀・P₂₂・P₂₅・P₂₈・P₃₀・P₃₃・P₃₄)。炉址は、床面中央部にある焼土をもってあてたいが、掘り込みは全くみられない。本址に付随する施設は以上の様であるが、本址の最大の特徴は覆土中層に大量に存在した焼土及び被熱層である(第10図)。どうやら覆土II層が形成された段階でかなり大きな火が焚かれたらしく、中央部を中心にII層の上面が著しく焼け、その熱は20cmはあるII層の下部まで及んでいたことがわかる。焚火当時、既にII層上部に埋没していた土器片にも二次焼成をうけて赤変しているものがあつた。この焼土化した部分を平面的に捉えたのが第10図であるが、中央部の大きな焼土化部分を取り囲むように小さな焼土化部分が衛星状にめぐり、あたかも炉址と柱穴の関係の如き観を呈している。このため、II層上面になんらかの居住の痕跡があつたのではないかとの疑問も生じるが、この点は実は調査中から懸案になっており、II層上面に床面のような気配がないかは絶えず気をつけていたので、今のところそのようなことはない結論づけたい。ただし衛星状にめぐる小焼土化部分の分割と土層観察を行っておらず、明らかに調査時の失策と認められ、上記の問題を解明する1つの糸口を失ってしまったことは残念である。

遺物 覆土中及び床面付近から大量に出土した。土器、石器、石製品、土製品、古銭がある。ただし古銭は寛永通宝で、本址検出面の攪乱中からである。土器は覆土下層及び焼土化部分の上から1点づつ一括土器が出土した他は破片であるが、量はきわめて多い。ほとんどが縄文時代前期末に比定されるものであるが、I層中(焼土化部分より上)からは若干時期の新しくなると思われる遺物も少量出土しており、本址の埋没と焼土化部分の形成以後の時間差を考える好資料といえる。図示した土器は3点(第45・46図4~6)、拓影は197点にのぼる。第45図4は床面上、第46図5はI層中より出土したもの、同図6はP₇中と本址を切る土壙323中から別々に出土したものである。6の出土状況から推定すると、P₁やP₇など大形のピットは土壙322~324の様に本址を切る土壙の一種で、本址に直接関係しないのかもしれない。石器は石鏃・石錐・ピエスエスキュー・石匙・打製石斧・磨製石斧・凹石・磨石・敲石と、多様なものが出土している(第79~85図6~12・40~43・55・

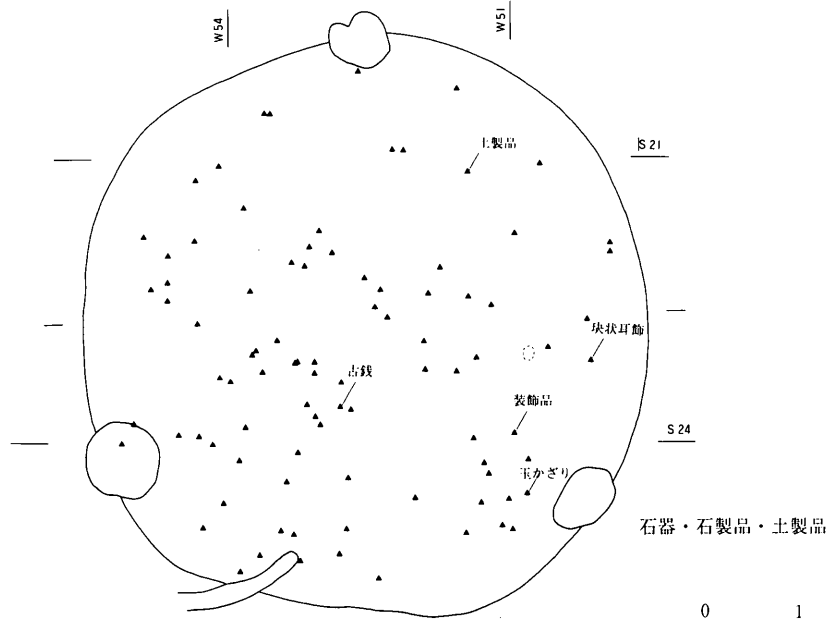
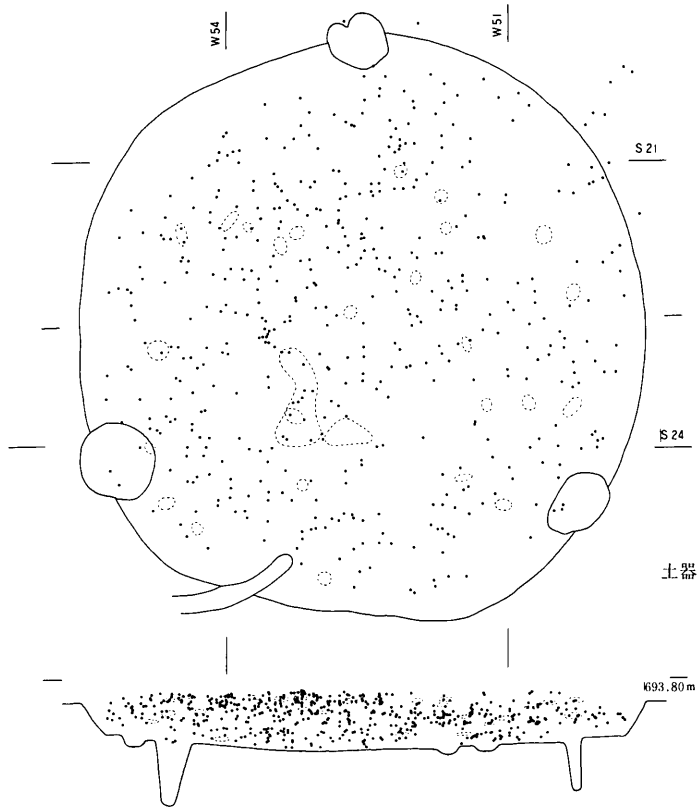


第9図 白神場遺跡第7号住居址ピット断面

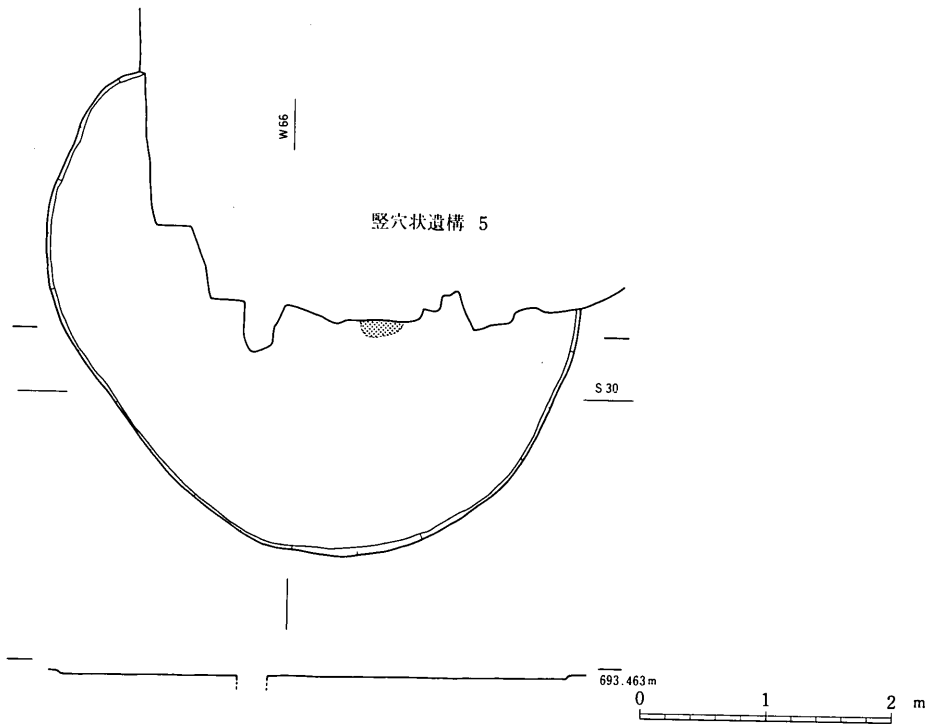


第10図 白神場遺跡第7号住居址焼土検出状況

62・63・75～77・96・103～106)。特に石鏃は7点、石錐は4点と数が多い。石製品は、玦状耳飾りと飾り玉が1点ずつ出土している（第85図1・3）。いずれも欠損品である。土製品は2点出土している（第47図11・12）。12はミニチュア土器、11は性格不明の手捏ねの土製品で、あるいは土偶の一種とも考えられる。以上のように本址からは多種多様の遺物が出土した訳で、これらは縄文時代前期末における遺物の良好なセットと捉えられよう。



第11図 白神場遺跡第7号住居址遺物出土状態

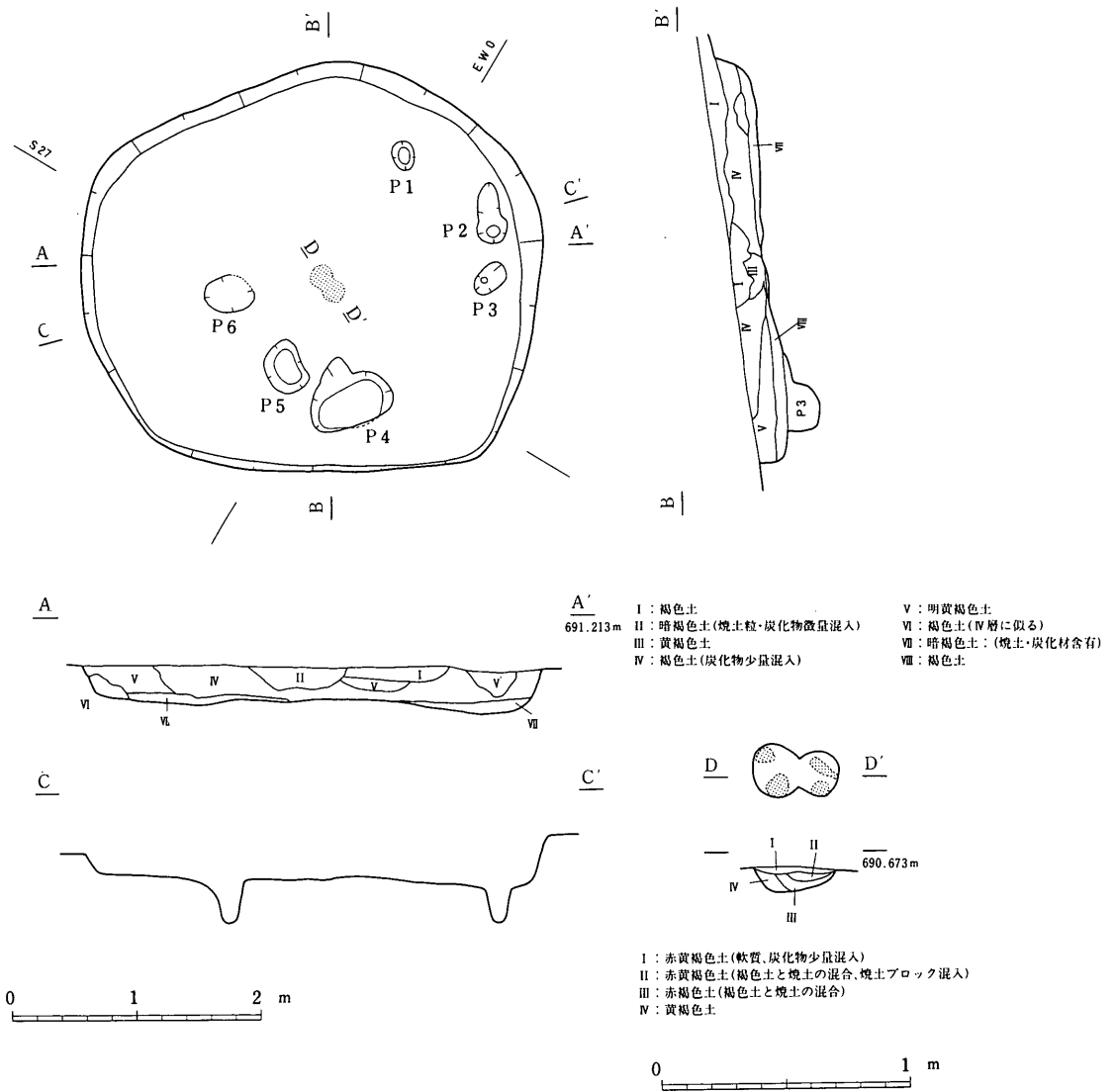


第12図 白神場遺跡第8号住居址

(5)第8号住居址 (第12図)

遺構 III区中央部、S28～32-W64～68に位置する。竪穴状遺構5によって中央から北東部分、面積にして2/5程を完全に破壊され、しかも桑の抜根と表土除去の際の削平で残存部分も非常に不明瞭なものとなっている。このためプランの確認は非常に困難で、結局、抜根により固い小ルームブロックとなって覆土中に浮上散乱した、かつて床だったものの分布範囲から推定した。プランは直径4.2mの円形と考えているが確かではない。壁は全く不明で、図示したラインは推定線である。床面は前述の通り、不明瞭かつ軟弱なもので、ピット等の検出もなかった。炉址は床面中央部東寄りに若干焼土がまとまっていたところがあってここをあてたい。竪穴状遺構5に北側を切られている。

遺物 少量の土器が出土しているにすぎない。土器はいずれも縄文時代前期末のもので本址の時期もそこに求めたい。隣接する竪穴状遺構5の、本址推定プランと重複する範囲一帯からも該当の土器片がある程度の量得られ、本址に属するものと考えられたが、今回の報告では触れなかった。



第13図 白神場遺跡第9号住居址

(6)第9号住居址 (第13図)

遺構 IV区中央部、S25~28-E1~W3に位置する。調査地の中ではこの一帯は比較的傾斜が急なところである。また地山がロームから下層の角礫混りローム質土に移り変わるあたりであり、プラン検出がかなりむずかしいところでもあった。本址も当初はもう少し北へ張り出すプランに基づいて掘り下げを開始したのであるが、途中で修正が重ねられ図示した様な平面形になった。プラ

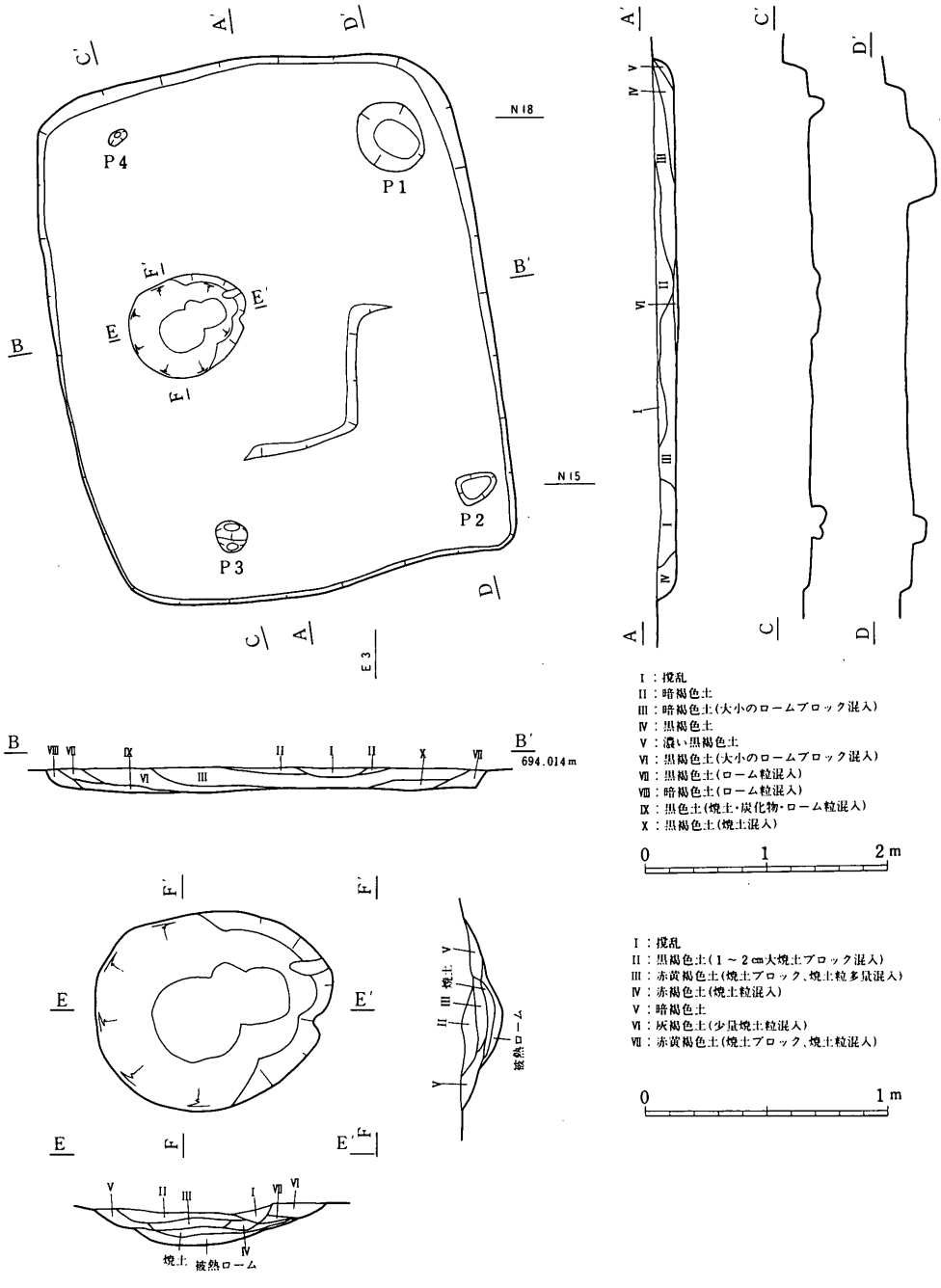
ンは、長径3.5m、短径3.2mくらいの楕円形を基調とし、東部、北西部へやや張り出して、不整な五角形状を呈している。壁はいずれも急な傾斜でしっかり掘り込まれており、25～40cmの壁高を測る。床は周囲の斜面の傾きと同じに南へ緩傾し、中央部はロームを貼り固めた堅緻なものであるが、その北側一帯は暗褐色土を用いた軟弱なものであり、西半及び南半は地山をそのまま床としている。ピットはP₁～P₆の6ヶ検出され、床面からの深さはそれぞれ、P₁:7、P₂:30、P₃:13、P₄:28、P₅:11、P₆:17 (cm) を測る。柱穴配置の想定はどのピットをとり上げても不整なものとなり、今後の検討課題としたい。炉址は床面中央部にあり、直径20cm程の円を東西に2つ連ねた様な平面形をした地床炉である。僅かな掘り込みをもち、内部に少量の焼土が存在している。以上の住居址各施設の他に、本址北端床上からは少量ではあるが炭化材が一括して検出されている。周辺には小規模な焼土もあるが、住居址全体からみると部分的で、本址の廃絶に直接関連するものではないと考えられる。

遺物 覆土下層及び床面上から出土している。土器と石器があり、量は少いが内容はかなり充実している。土器はすべて縄文時代前期末に属するもので、1点を図化し(第46図6)、19点を拓影で提示した(第65図)。第46図7は南半部覆土下層より一括出土したもので、底部周辺を欠くのみ品の優品である。石器は、石鋏・石錐が出土しており、7点を提示した(第79・80図13～16・44～46)。本址は出土土器からみて縄文時代前期末の廃絶と考えられる。

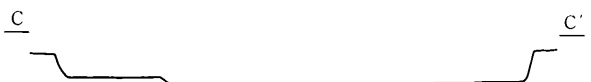
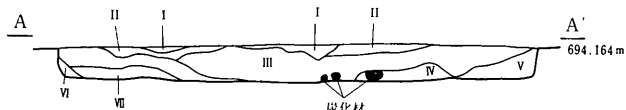
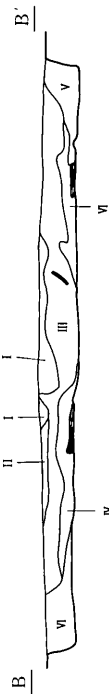
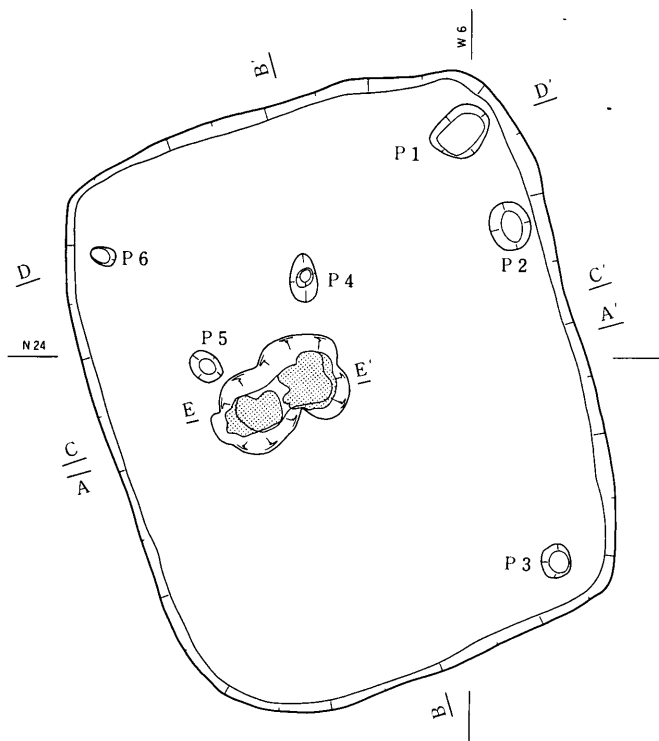
(7)第2号住居址 (第14図)

遺構 I区東端部、N14～18-E1～4に位置し、土壇Iの一部を破壊する。東西3.6m、南北4.5mの隅丸長方形を呈し、東を入口部とみると主軸はS-82°-Wを指す。壁はいずれも20cm内外の壁高を測り、外傾する。床はロームをタタキ固めた堅緻なもので、中央部に特徴的な段をもつ他は、概して平坦である。ピットはP₁からP₄まで4ヶあり、配置はそれぞれ各コーナー部分に近く柱穴かと思われるが、平面規模や深さに著しい違いがある。炉は中央部西寄りのP₃・P₄中間に位置する地床炉で、100×80cmの東西に長い楕円の平面形を呈し、底部に焼土と被熱層をもつ。本址で特徴的であったことは、覆土下層から床面直上にかけて焼土や炭化材が散在していたことである。炭化材は燃焼が進行して細片となっており材の大小や性格は不明だが、本址の廃絶に関連するものと考えられる。

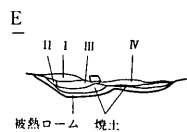
遺物 覆土上層、下層から縄文土器、弥生土器、土師器及び石器が出土している。ただし土器類はいずれも小破片で、一括して出土する状態は示さなかった。また、焼土や炭化材のあり方に関連する出土状態のものもみられなかった。本址の廃絶時期は出土土器のうち最も新しい時代のものをあてて古墳時代前期とみ、土器は当該期のもののみ図示した(第48図)。



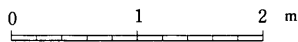
第14図 白神場遺跡第2号住居址



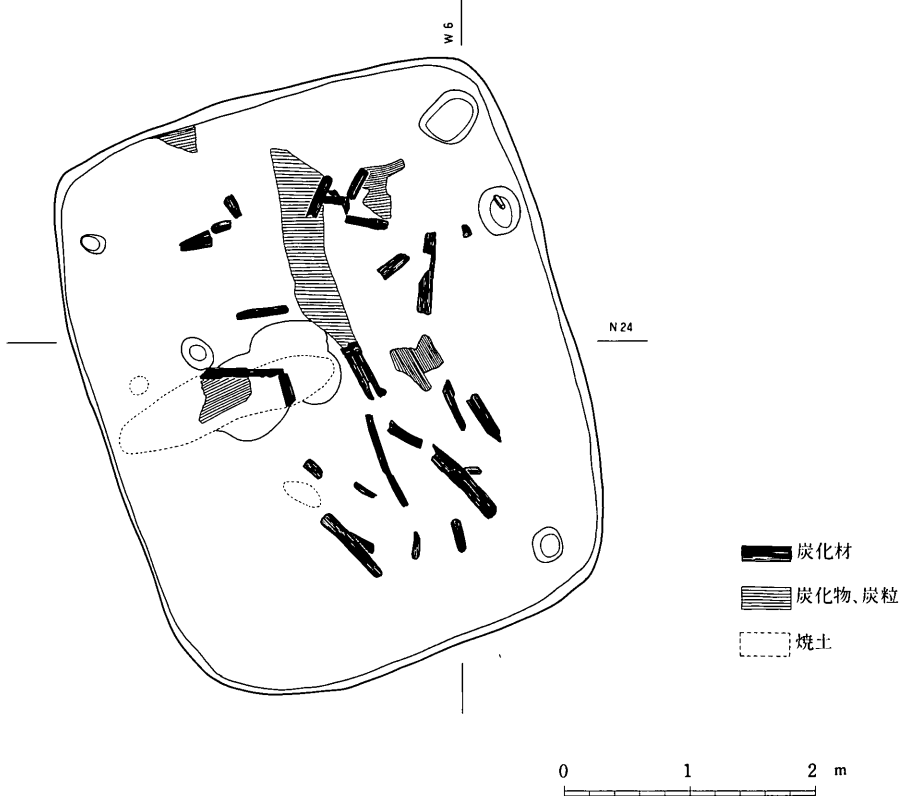
- I : 攪乱
- II : 明黒褐色土
- III : 明黒褐色土(ロームブロック混入)
- IV : 黒褐色土(少量炭化物混入)
- V : 暗・黒褐色土
- VI : 暗・黒褐色土(ロームブロック混入)
- VII : 黒褐色土(焼土・炭化物多量混入)



- I : 黒褐色土(ローム粒少量混入)
- II : 黒褐色土(小さなロームブロック多量混入)
- III : 濃黒褐色土(少量ロームブロック、焼土塊、炭化物混入)
- IV : 暗褐色土(焼土塊・炭化物混入)



第15図 白神場遺跡第3号住居址

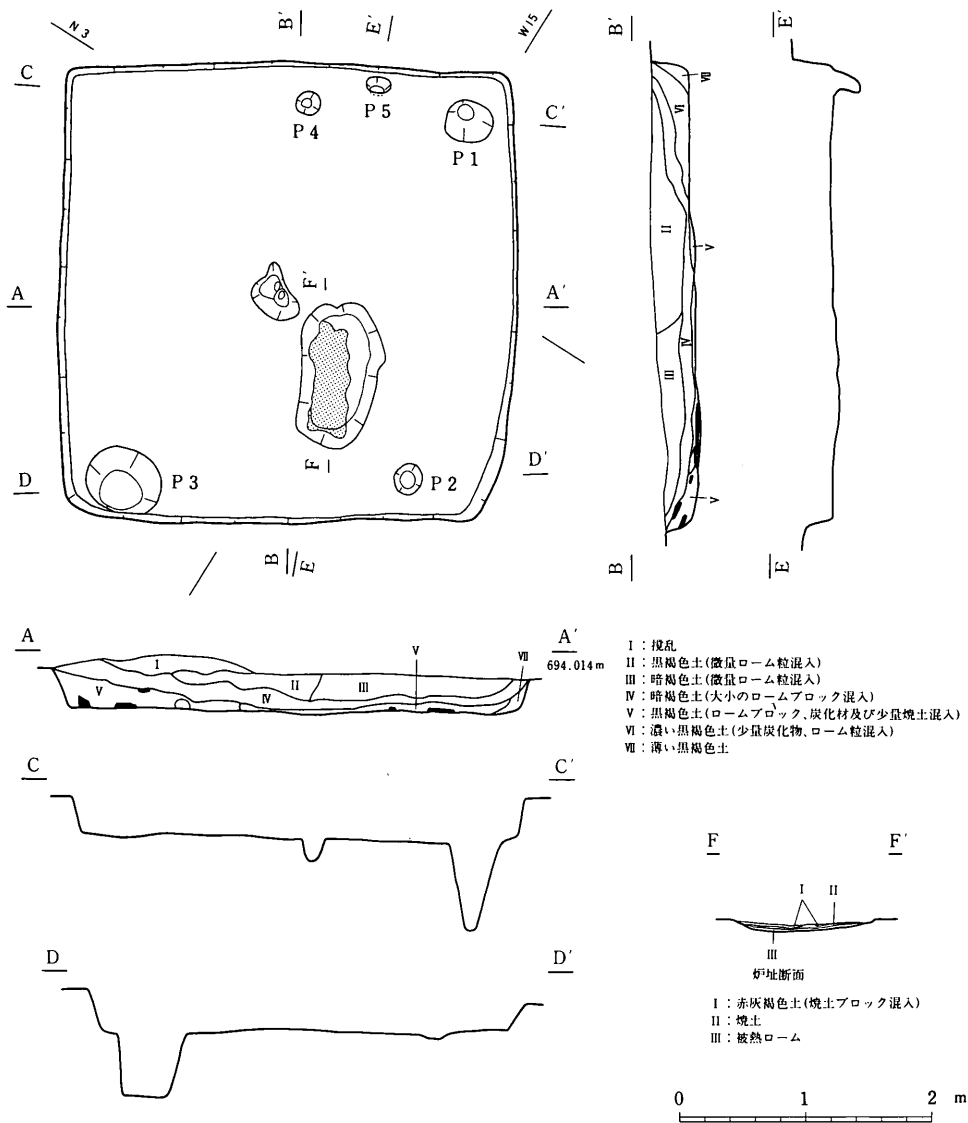


第16図 白神場遺跡第3号住居址炭化材出土状態

(8)第3号住居址 (第15・16図)

遺構 I区北端、N22～26-W5～9に位置する。東西3.8m、南北4.7mの隅丸長方形プランをとり、炉址の位置からみて東側に入口部を想定すると主軸はS-73°-Wを指す。壁の傾斜は垂直に近く、25～30cmの壁高を測る。ロームを掘り込んだ床面は平坦で、中央部を中心にかなり堅緻なものとなっている。ピットは6ヶあり、床面からの深さはP₁:10、P₂:30、P₃:7、P₄:65、P₅:9、P₆:11(cm)を測る。配置に偏りがあり、床面からの深さも大幅に異なるので、どのピットが柱穴にあたるのかは不明である。炉址は中央部西寄りにあり、不整な円形を東西に2つ合わせた様な平面形をもつ地床炉で、東西115cm、南北70cmの規模をもつ。内部には焼土と被熱層が観察された。本址の覆土下層から床面にかけて、多量の炭化材と焼土が検出されたことは特記に値する(第16図)。炭化材は径10cmのものを最大にして、長さは70cmに及ぶものもみられ、可能な限り原位置に残して、出土状況や配列を観察したが特別な傾向はつかめなかった。

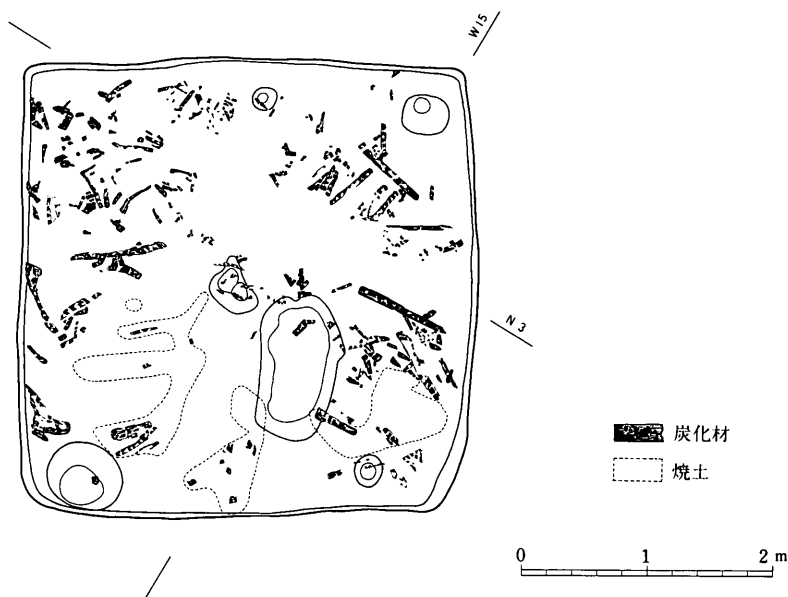
遺物 覆土中より縄文土器、弥生土器、土師器が出土した。土師器に若干一括品があるが、他は小破片である。縄文土器は前期末に、また弥生土器は中期前半に比定できるものであるが混入品とみられる。土師器は古墳時代前期のものであり、3個体が図示できた(第48図)。本址の廃絶時期も



第17図 白神場遺跡第4号住居址

古墳時代前期に求められよう。

※炭化材の樹種については、本址の8ヶ所からサンプルを採取して、(財)長野県埋蔵文化財センターの小林至調査研究員に鑑定を依頼したところ、2ヶが広葉樹(ケヤキが有力、またはハリギリ)、残り6ヶは同じ針葉樹(カヤが有力、イチイ、ヒノキの可能性もあり)との結果を頂いた。

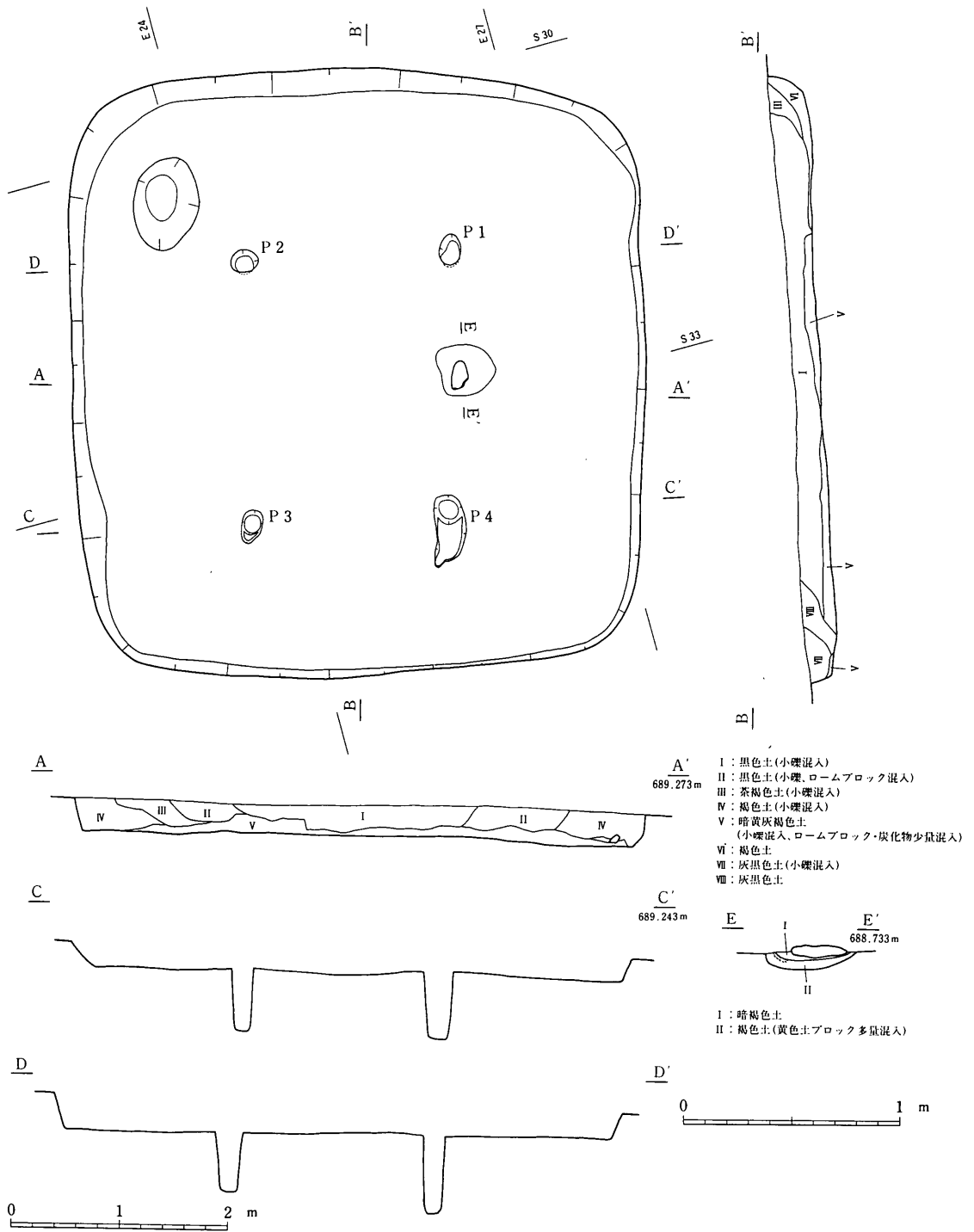


第18図 白神場遺跡第4号住居址炭化材出土状態

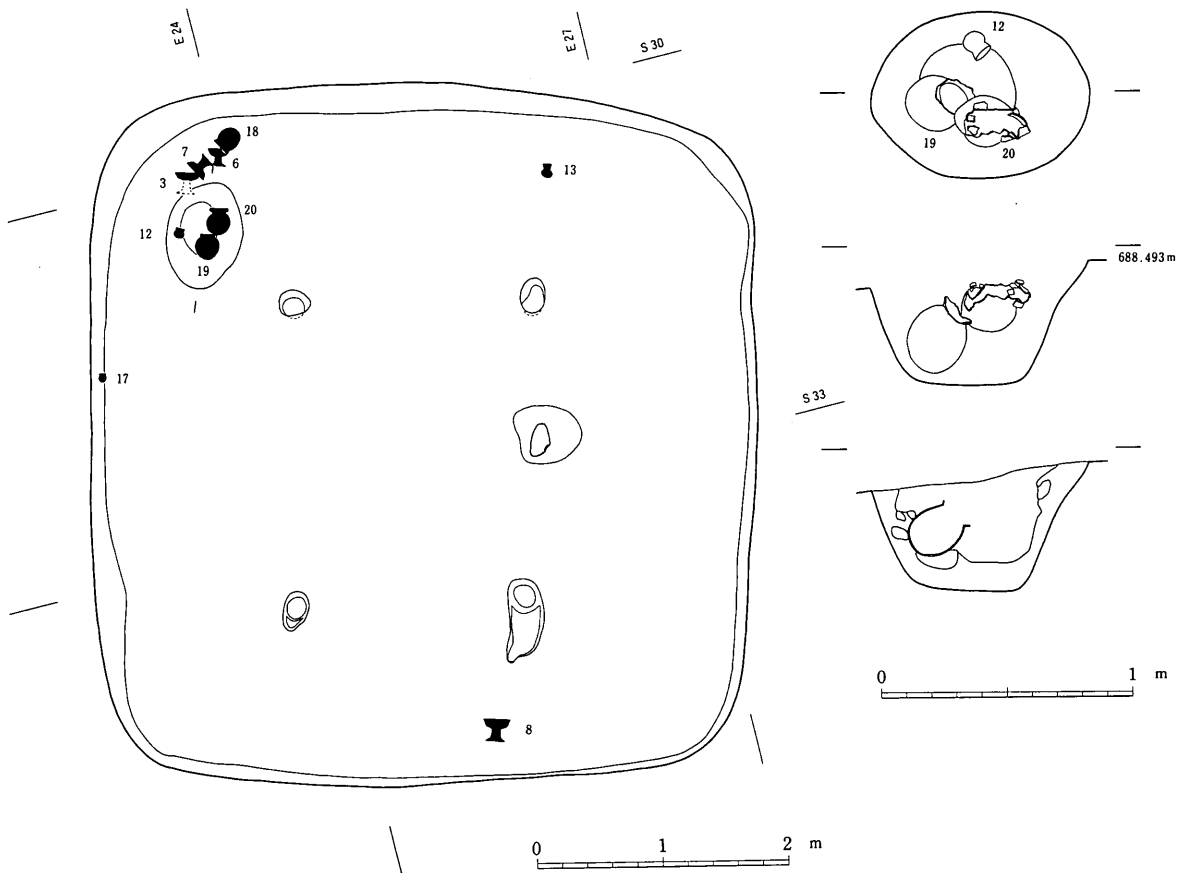
(9)第4号住居址 (第17・18図)

遺構 I区N1～4-W14～17に位置する。1辺3.6mの方形を呈し、主軸はS-33°-Eをとる。壁は北西辺が垂直に近くその他はやや外傾しており、いずれも30～40cmの壁高を測る。床はローンをそのまま用いて、平坦で非常に堅い。ピットは5ヶ確認され、それぞれの床面からの深さはP₁:70、P₂:3、P₃:53、P₄:18、P₅:20、(cm)を測る。上屋構造に関係するものとしては相互が対角線上の位置にあり比較的深いP₁とP₃が考えられ、さらにP₄、P₅も出入り口部の施設に関連するものである可能性がある。炉は床面中央部の東寄りに設けられた、110×60cmの楕円形を呈す地床炉で床面には焼土と被熱層が残る。この炉址の西隣には底面に焼土をもったピットがあり、やはり炉と同様な機能をもったものであったとみられる。本址の覆土下層及び床面上には多量の炭化材と焼土が遺存しており、炭化材は1m近い長さのものもみられた。特に東、南、西側部分に残った炭化材は本址中央部から放射状に開く如き配列が観察でき、上屋が焼けて堅穴内に崩落した状況を想起させるものであった。

遺物 覆土中より縄文土器、弥生土器、土師器が出土している。いずれも小片であり、縄文土器、弥生土器は混入品、土師器は古墳時代前期の様相をもっており、本址の廃絶時期もそこに求められる。4点が図示できたのみである(第48図)。



第19図 白神場遺跡第12号住居址

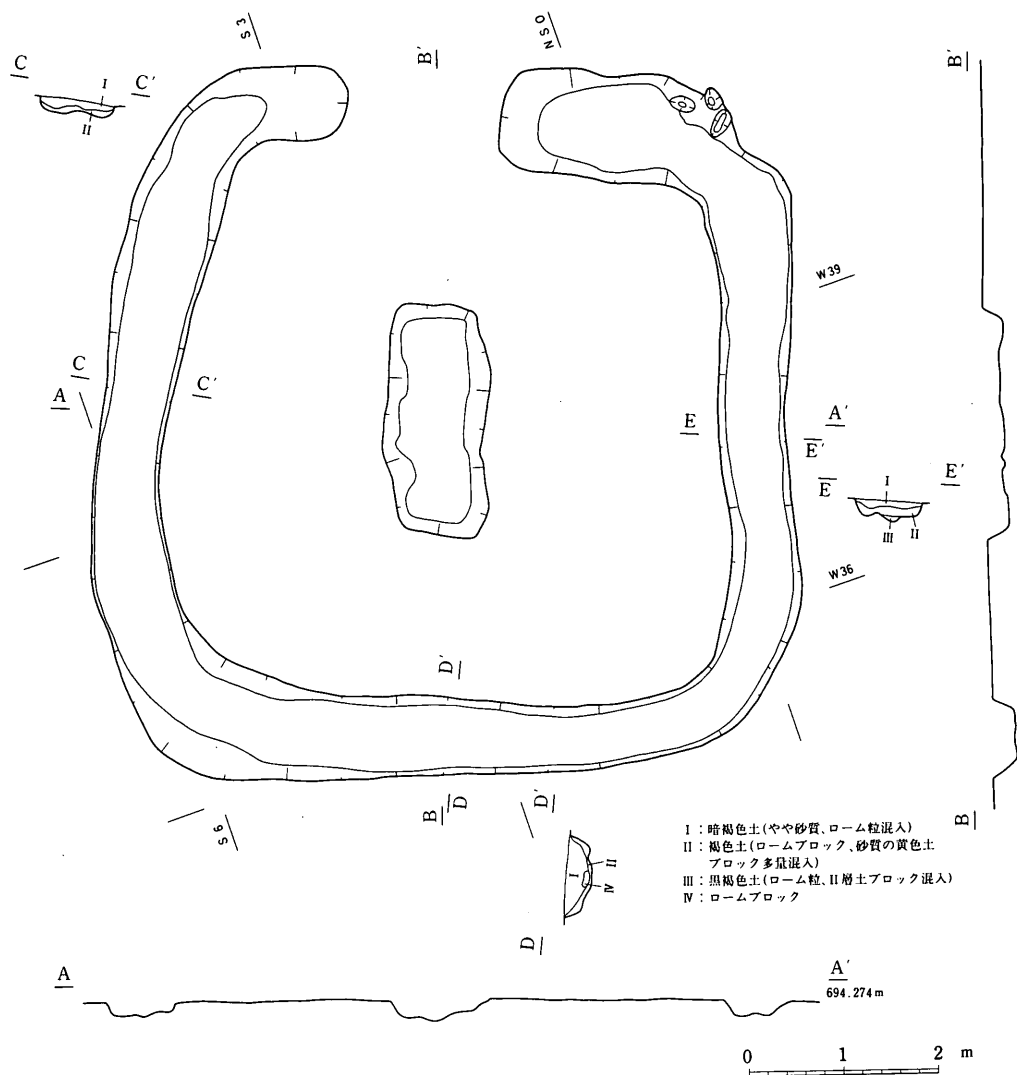


第20図 白神場遺跡第12号住居址 遺物出土状態

(10)第12号住居址 (第19・20図)

遺構 IV区 S 30～35－E 22～28に位置する。一辺約5.3mの隅丸方形プランを呈する。主軸方向は出入り口を西側と想定してS－74°－Eになる。壁は外傾気味に立ち上がり、30～35cmの高さをもつ。床は地山である小礫まじりのローム質土をそのまま用いてあり、南へ向って緩く傾斜する。ピットは4ヶ確認され、いずれも60cm前後の深さをもって方形に配列していて、柱穴とみて間違いない。北西コーナーには85×60cmの楕円形を呈す貯蔵穴がある。炉址はP₁・P₄間にあり僅かに掘り窪められたところに平板の石がはいつている。端部に微量の焼土が残るのみである。本址は、遺跡中では比較的大きく柱穴もしっかり確認できた良好に遺存する住居址であった。

遺物 土器と鉄器があり、いずれも床上及びその付近から出土している。土器は古墳時代中期の土師器で、高杯・埴・甕などが一括品で出土している。貯蔵穴内からは壺・甕・埴がほぼ完形で一括出土した。鉄器はいずれも鏃とみられる。(第44・49・50図)

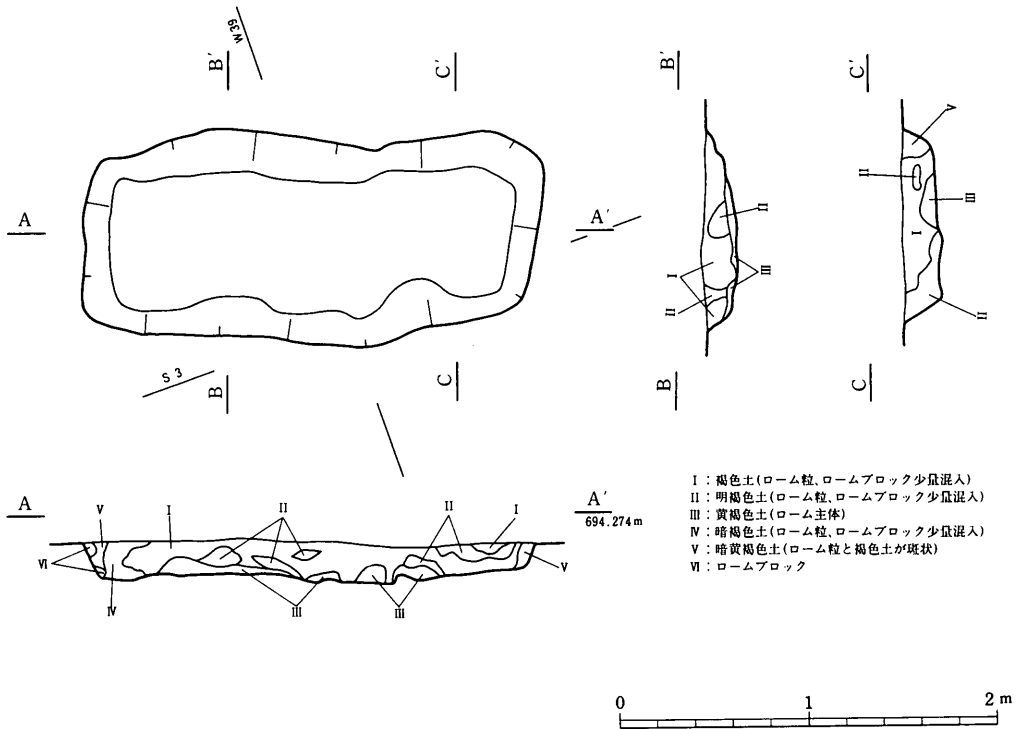


第21図 白神場遺跡方形周溝墓 1

2. 方形周溝墓

(1) 方形周溝墓 1 (第21・22図)

遺構 NS 0 ~ S 3 - W36 ~ 39に位置し、土壇43・85・86・95を切る。周溝のプランは、1辺の中央部に陸橋部をもつ7.5mの隅丸方形をとるが、陸橋部をもつ辺が若干短くなって台形に近くなっている。主体部は2.4×1.1mのやや不整な長方形を呈し、主体部土壇の主軸線がそのまま延びて陸橋部を通して本址全体の主軸となっており、S-69° - Eを指している。周溝の掘り込みは深いところで約40cm、断面形は逆梯形から半円形を呈す。底面には僅かな起伏がある。主体部土壇の掘り込みも、壁は緩傾し、底面にはかなりの起伏があって0.3mと浅い。周溝の覆土は、抜根等の攪乱があるが、概ね自然埋没の状態を示している。主体部土壇については、攪乱により著しく乱されているが、自然埋没した状況は観察できない。マウンドの有無は確認できなかった。



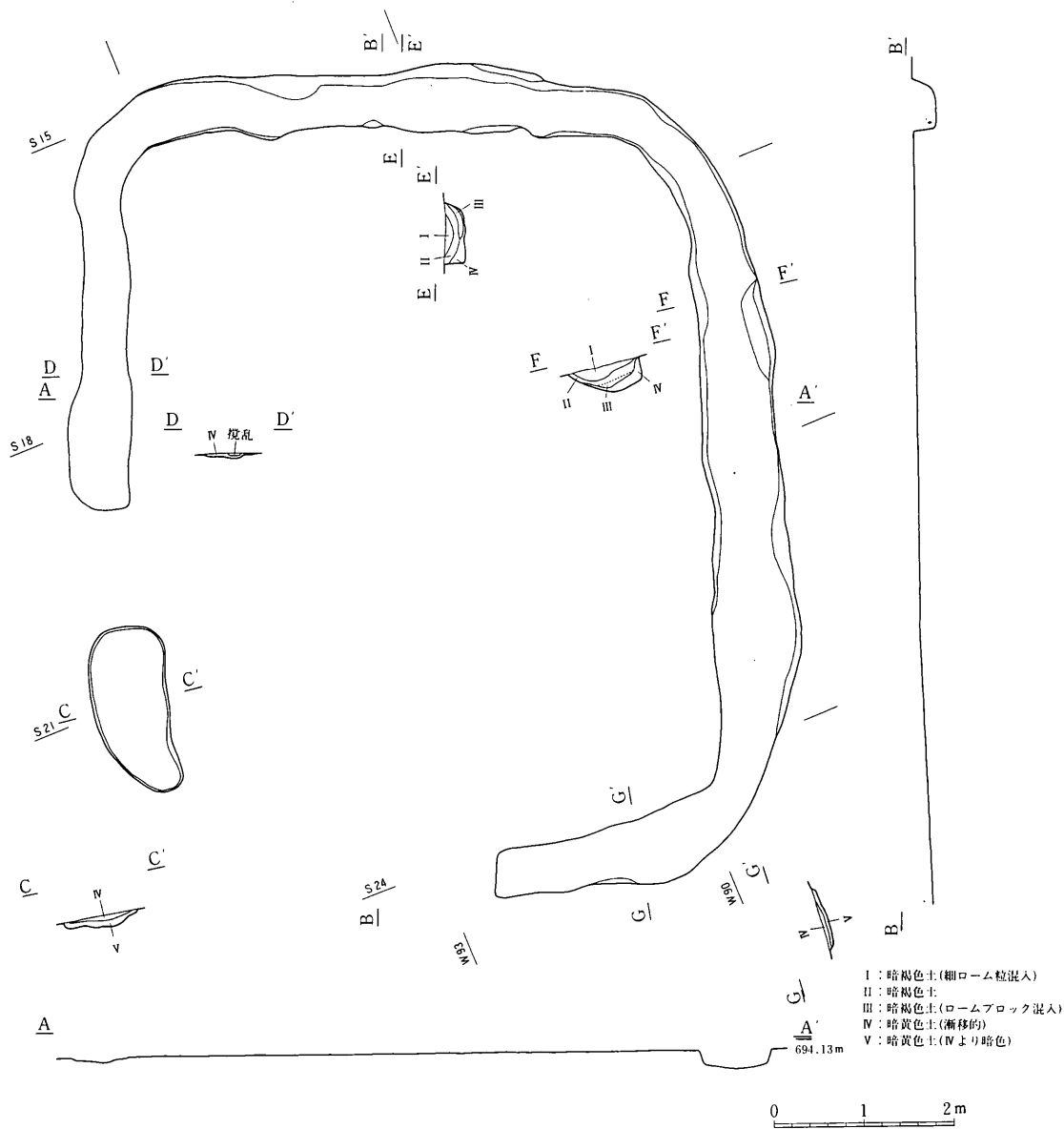
第22図 白神場遺跡方形周溝墓1 主体部

遺物 縄文時代前期末及び弥生時代中期に比定される土器片が、周溝や主体部土壌の覆土から出土したのみであり、本址に直接伴うような出土状態を示す一括遺物は得られなかった。縄文土器は明らかに混入であり、本址出土の最も新しい時期を示す弥生土器も中期前半を下るものではなく、時期を決定する材料に用いるには疑義がある(第65・66図)。

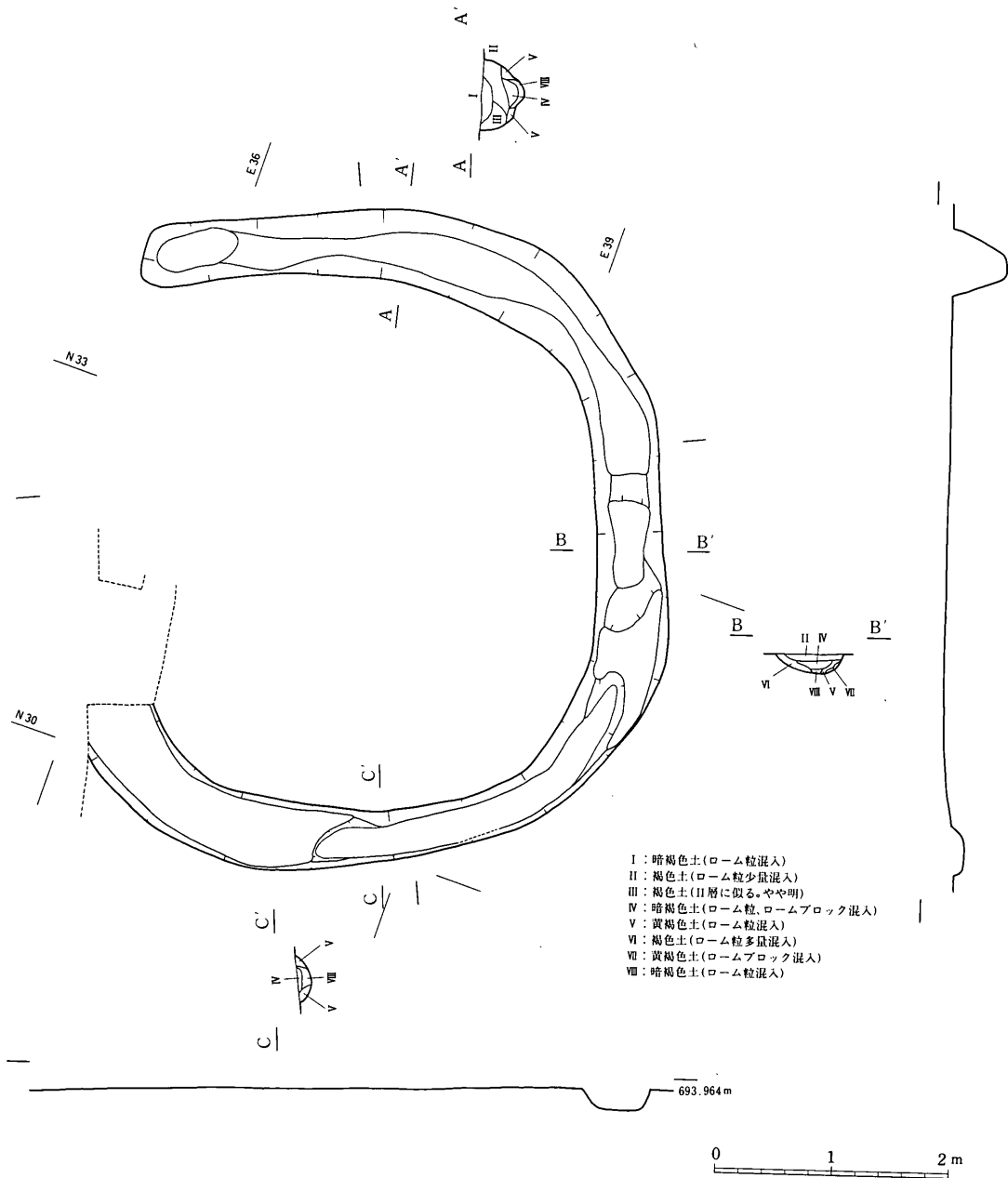
(2) 方形周溝墓2 (第23図)

遺構 S15~24-W90~96に位置する。これは調査区の西端にあたり、自然地形はこれより西は急激に傾斜を増して下方へ向っている。削平が著しく、主体部はすでに無く、周溝も非常に浅くなって一部は失われている。プランは、基本的には9.2×7.9mの隅丸長方形の1辺中央部が開口する形を呈するのであろう。主軸方向はS-67°-Eであり、方形周溝墓1と酷似する。周溝の削平は南西隅へ向かって激しく、その周辺では深さは5~10cmを測るのみであり、北東隅周辺が最もよく残り40cm内外を測る。堆積は自然埋没の状態を示している。

遺物 縄文時代前期末及び弥生時代中期に比定される土器片が数点出土しているにすぎない。いずれも小破片であり、縄文土器は混入、弥生土器については方形周溝墓1と同様、その扱いをめぐって疑義が残る。



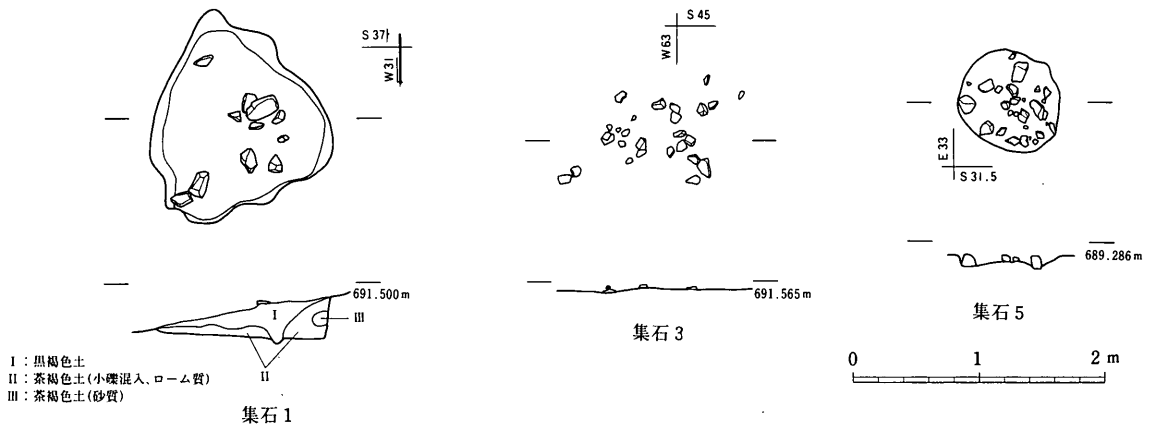
第23図 白神場遺跡方形周溝墓 2



第24図 白神場遺跡方形周溝墓3

(3)方形周溝墓3 (第24図)

遺構 II区中央部、N30～35-E36～40に位置する。II区では唯一の遺構である。一辺5.6mの隅丸方形を呈すと推定されるが、西辺は現代の攪乱によって全く失われている。主体部も削平されて、痕跡もなかった。周溝は最大幅65cm、深さ45cmを測るしっかりしたものであるが、南へいく程浅くなる。覆土は自然堆積の状態であった。遺物は、縄文土器とみられる小破片が2片出土したのみであり、本址の時期を捉える手懸りは全くない。



第25図 集石 1、3、5

3. 集石

(1)集石 1

III区東端部、S 37・38-W32に位置する。径1.5m位の不整な土壙の内に10~30cm大の角礫がはいっている。石の配列に規則性はなく数も少ないので土壙として捉えた方が適切であったかもしれない。土壙は底面が平らで、南半の壁を削平されている。遺物はない。

(2)集石 2

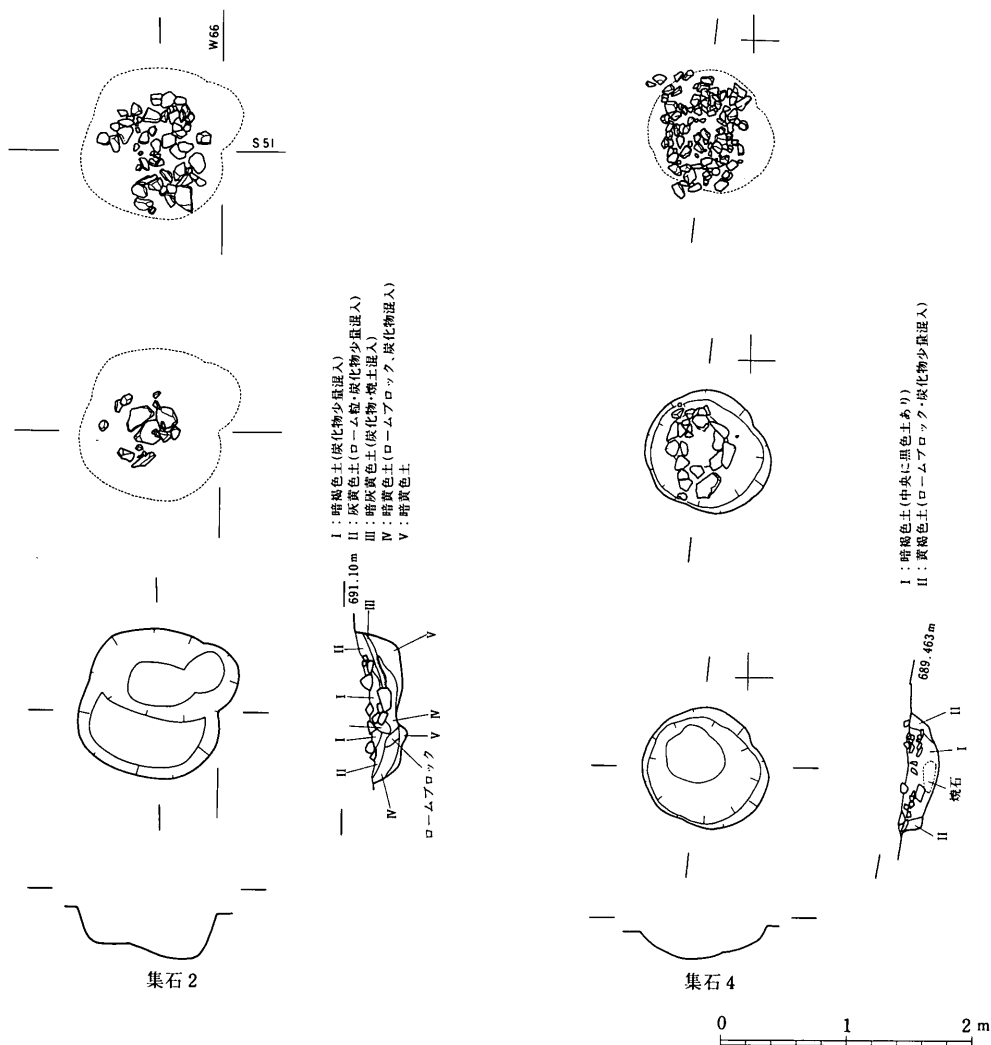
III区南端、S 51~W66に位置する。上面に約1m径で礫が集中し、それらの外周の一部に炭化材が含まれていた。上面の礫を取り除くと更に若干大きめの礫が40cm位の範囲に組んだように配置されており、その周辺には焼土と炭化物がみられた。礫は上面のものいくつかと下面のものすべてが熱を受けた状態のものであった。最終的に石をすべて取り除くと、径1.1mの不整円プランを呈す土壙になった。集石炉の一種であろう。遺物の出土はなかった。

(3)集石 3

III区南半、S 46-W63にある、径10cm位の礫が1mほどの範囲内にまとまったものである。下部に掘り込みはなく、遺物もなかった。

(4)集石 4

IV区東端、S 27-E 30に位置する。80cm径の範囲内に径10cm以下の礫がびっしり集められた上面形を呈し、下部に土壙がある。礫の間には僅かな炭化物もみられた。上面の礫を取り除くと、土壙の底面に接して20cmを超える平板の礫が中心にすえられており、その周囲を環状に組んだように20



第26図 白神場遺跡集石 2・4

cm内外の大きめの礫が取り囲んでいた。底面に接した平板の礫は焼けてボロボロになっており原形をとどめない程で、下部の他の礫も熱をうけていた。集石 2 と同様、集石炉の一種とみられる。遺物の出土はなかった。

(5)集石 5

IV区東端、S31-E33に位置する。これは集石 4 の東隣にあたる。径80cm、深さ 8 cm くらいの円形の窪みに角礫が集められているものである。遺物の出土は全くなかった。

4. 土壙（第27～40区）

(1)分布

今回の調査で土壙は135基確認された。この数は発見された各種遺構の中では、とりわけ多く、土壙が、本遺跡を代表する遺 と言えよう。分布は、I区の中央及び東部に集中し、一部III区北半とIV区北半に広がっている。即ち、傾斜地（III・IV区）よりは平坦地（I区）に分布の中心がある訳である。このことは、6軒のうち5軒が斜面上にある縄文時代の住居址の分布と対称的で、しかも同期の第1・7・9号住居址に囲まれた範囲内に大多数の土壙が集中するのは示唆的ではある。

(2)形態

平面形は概ね、円形、楕円形、長方形の3種に分けられるが、これらを基調にした不整なものも多い。長方形をとるのはIV区のごく一部である。平面形の規模は、ほとんどが50～200cmのうちにおさまる。最大級のもは楕円形プランをとる土壙312の長径255cm、同じく土壙45の長径245cmなど楕円形のものに多い。土壙45・102・103は調査時には、それぞれ別の命名をしたが、どうやら一連のもので不整な弧状をなす特殊なものである。断面形にもいくつかの類型がみられたため、次の様に分類した。

A：台形を呈すもの。正確には逆台形と言った方が良いかもしれない。底が平坦で壁が外傾しながら立ち上がるものである。従来、皿状などと呼称されていたものにあたる。

B：方形・長方形を呈すもの。底が平坦で、壁が垂直に近い角度で立ち上がるもの。方形・長方形の関係については、削平の度合いによって方形も長方形となり得るので一括した。浅いものについてはA類と近似性を持つものが多い。従来、タライ状などと呼称されていたものにあたる。

C：半円形を呈すもの。底は確かにあるのだが、丸底で壁との区別がつけ難いもの及び、それが削平されて浅くなったと考えられるものにあたる。深さが著しく、およそ半円形と言えないものも丸底であれば本類に加えた。

D：三角形を呈すもの。正確には逆三角形と言った方が良いかもしれない。壁上端からガラガラと底へ向うもので、底部に面的なものが感じられない一群である。従来、スリバチ状などと呼称されていたものにあたる。

E：開口部以下に最大径をもつもので、従来、袋状あるいはフラスコ状などと表現されてきたものである。本類の設定に対しては、①基本的にはB類及びC類の下部が単に広がったにすぎない。②開口部径と最大径の差がごく僅かなものから、かなり大きなものまであり、それらが同一の性格を持つとは考え難い。などの難点がある。

F：上記A～Eのいずれにもあたらないものを集めた。二段底のもの（土壙27）、底面の凹凸が著しいもの（土壙82）、一方の壁の下部へ横穴状にもぐり込むもの（土壙87・102）などがある。

以上A～F類の他に中間型の様なものもあり、各類に該当する土壙数はA：81基（60%）、B：14基（10.4%）、C：20基（14.8%）、D：4基（3.0%）、E：6基（4.4%）、F：2基（1.5%）、その他、

不明：8基（5.9%）である。

(3)覆土

土壙を埋めていた覆土については、個々にみると、表土である暗褐色土を基調として基盤のロームや各遺構に特徴的な土質がそれぞれ組み合わせられて形成されており、特別な共通性はみられない。しかし、覆土の堆積状況を示す土層にいくつかの類型があり、次の様に分類した。

a：自然堆積を示すもの。各土層が土壙の形状に合わせて層的に重なり合って堆積しているものである。

b：一時期ないし短期間にかなりまとまった埋没状況を示すもの。かなり深い土壙でも単層であるか、ないしは不規則な土層の堆積が観察されるもので、ローム粒・ロームブロックが混入している例が多い。この様な覆土は、かなり特殊な状況下で形成されたもの、例えば、人為的な埋め込みなども想定できる。

c：土層の区分が不明瞭で漸移的に土色、土質が変化するもの。数は非常に少ない。中には土壙の壁と覆土の間さえ著しく不明瞭なものもある。本来、a類とした自然堆積においても、堆積が間断なく続け各層間が漸移的な傾向を帯びるものであるが、本類は、(感覚的な表現で遺憾だが)これとは雰囲気異なり、シミのように中央部から周囲へぼんやりと色調が変わっていく感じなのである。無理して分層し、非常に細くなってしまうたり、分層に手古摺り単層とした土壙もある。

以上の3類の中で特にc類は見分けがつかずa・b類との中間型として捉えたものが多い。各類の全体に対する比率は、a類：70.4%、b類：23.0%、c類：5.9%、となる。

(4)遺物出土と時期（第67～78図）

土壙の多くからは、多少の差はあるが、土器、石器などの遺物が出土した。出土層位はまちまちで土器はほとんどが小片であった。土器には縄文時代前期末、弥生時代中期、古墳時代前期のものがみられ、これらが各土壙の埋没時期、ひいては所産時期を示す唯一の手懸りとなった。時期の判明する土器を出土した土壙72基のうち20基が弥生時代中期、1基が古墳時代前期、他は縄文時代前期末に所産時期が求められると考えている。

出土遺物で特記されるものは、土壙23・46・320からの一括土器（第46・47図）、土壙18からの彩色土器片、土壙81からの2本の打製石斧などである。また土壙320からは石皿片も出土したが、今回は未報告である。

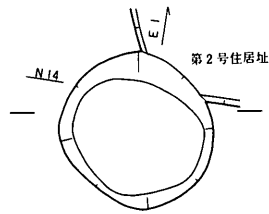
第2表

白神場遺跡土壙一覽表

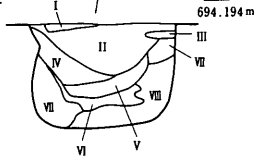
番号	掲載図	位置	平面形状 規模 (cm)	断面形状 深さ (cm)	覆土の特 徴	出土遺物 土器 (片)	拓 影 土 器 数	石器 美 土 器 数	備考	番号	掲載図	位置	平面形状 規模 (cm)	断面形状 深さ (cm)	覆土の特 徴	出土遺物 土器 (片)	拓 影 土 器 数	石器 美 土 器 数	備考
1	27	N14-E1	円形 120×110	B 80	a	11.43				23	29	N13-W23	楕円形 125×75	A 40	a				一括土器あり
2	27	N14-W1	楕円形 130×90	A 30	a	12.14	1			24	29	N13-W20	円形 90×80	A 20	b				
3	27	N12-W3	円形 120×120	A 30	a	41.62	1			25	29	N18-W15	円形 80×70	A 25	b	7.34	1		
4	27	N13-W6	不整形 125×85	A 30	bora	143.09	2			26	29	N20-W21	楕円形 60×45	A 20	a	4.81			
5	27	N14-W8	円形 80×75	A 30	a	8.61				27	29	N22-W21	円形 50×50	F 35	a				
6	27	N26-W3	不整形 100×100	E 40	b	512.50	12			28	29	N12-W9	円形 90×80	A 20	b	138.59	4		
7	27	N9-W10	円形 70×55	A 15	a					29	29	N11-W9	楕円形 125×85	A 40	bora	177.28	7	1	
8	27	N8-W13	円形 90×90	B 40	a					30	29	N6-W21	円形 115×100	A 15	b	3.19			
9	27	N9-W15	円形 45×45	C 25	aorb			1		31	30	N1-W6	円形 100×100	A 25	a	75.25	5		
10	27	N8-W14	円形 70×70	C 25	a	107.26	3			32	30	N14-W40	円形 110×105	A 30	a	888.78	34		
11	28	N6-W13	不整形 75×65	A 25	a					33	30	N11-W37	円形 70×70	A 15	b	38.93	1		
12	28	N4-W13	円形 75×75	A 20	corb					34	30	N10-W37~38	楕円形 160×120	A 20	a	730.64	11		
13	28	N2-W13	円形 95×80	A 20	a	40.96	2	1		35	30	N9-W40	円形 80×75	E 60	a	516.33	20		
14	28	N3-W27	円形 90×90	C 25	a	63.14	2	1	土壙37を切る	36						2.20			
15	28	N3-W29	楕円形 130×100	A 25	a	63.88	1			37	28	N2-W27	円形 95×80	C 25	a				土壙14に切られる。
16	28	NS0-W29	円形 120×100	A 45	bora	876.24	8			38	30	N14-W32	楕円形 155×70	A 40	a	23.80	1		
17	28	S4-W25	円形 95×95	A 30	aorb	50.21	4			39	30	N20-W17	円形 85×75	A 25	a	82.53	1		
18	28	S3-W26	不整形 110×75	A 30	a	142.98	6			40	30	N10-W46	円形 75×70	C+E 80	bora	67.97	1		
19	28	N3-W21	円形 110×100	A 30	a	324.41	16	2		41	30	N8-9-W48	不整形 140×120	C 40	a				
20	29	N7-8-W19~20	円形 210×200	A 35	a	2.414.43			中層に埴土 古墳時代	42	31	N14-W51	円形 140×135	A 30	a	215.89	8		
21	29	N8-W28	楕円形 80×60	A 10	b	25.98	2			43	31	NS0-W41~42	楕円形 180×140	C 50	a	370.93	11		方形周溝帯1に貼られる
22	29	N15-W28	円形 80×65	A 25	a	86.84	6	1		44									脱丸

番号	掲載図	位置	平面規模 (cm)	断面深さ (cm)	覆土の性状	出土遺物		備考	掲載図	位置	平面規模 (cm)	断面深さ (cm)	覆土の性状	出土遺物		備考
						土器 (g)	石器数							土器 (g)	石器数	
45	31	S 6 ~ 7 - W33	不整形円形 245×105	C 50	a	493.44	3	1	69	N 7 - W46	円形 75×75	B 90	b	18.25	1	土壇68を切る
46	34	N 8 - W39	不整形方形 110×80	A 35	b				70	S 9 ~ 10 - W30	楕円形 215×140	C 70	aorc			
47	31	N 8 - W42	楕円形 113×75	A 100	b	29.23	1		71	S 9 - W27	楕円形 210×130	C 50	aorc			
48	31	N 12 - W51	楕円形 140×90	C 25	a	10.47			72	S 6 - W27	円形 80×80	B 30	a	287.26	6	
49	31	S 12 - W48	不整形円形 200×120	C 30	a	189.88	6		73	S 4 - W30	楕円形 75×50	B 20	a	103.30	2	
50	32	S 9 - W48	楕円形 155×120	A 25	a	53.09	2		74	N 15 - W15	楕円形 80×60	A 15	a	14.62		
51	32	S 4 - W55	円形 125×100	A 40	bora	79.13	3	2本の切り合いいか?	75	N 16 - W12	円形 100×80	A 25	a	31.87	1	
52	32	N 1 - W56	円形 70×60	A 20	a				76	N 16 - W27	円形 80×80	A 40	b	85.23	2	1
53	32	NS10 - W57	楕円形 100×65	B 30	b	20.18	1		77	N 4 - W16	円形 70×65	A 30	a	8.68		1
54	32	N 2 - W54	円形 80×70	C 30	a				78	N 11 - W22	円形 80×80	A 15	b	18.02	1	
55	32	N 4 - W55	不整形円形 90×50	A 30	a	3.99			79	N 8 - W40	楕円形 120×100	B 25	b	162.77	7	土壇105を貼り、土壇46に貼られる。
56	32	N 9 - W56	楕円形 90×60	A 25	a	32.39	2		80	S 3 - W13	円形 130×125	A 35	aorb	256.75	7	
57	32	N 10 - W52	円形 70×70	C 20	b	126.94	2		81	S 8 - W35	円形 80×65	A 35	a	170.30	4	2
58	32	N 12 - W57	円形 70×60	B 20	a	13.99	1		82	N 20 - E 1	楕円形 100×70	F 25	b			
59	32	N 13 - W56	楕円形 80×35	C 15	bora	52.76	1	1	83	N 24 - W 2	楕円形 125×100	A 30	a			
60	32	S 2 - W55	円形 100×85	A 55	a	316.70	7		84	N 26 - W 2	楕円形 90×60	D 45	a	8.75		
61	32	N 3 - W58	不整形円形 100×100	A 30	a	30.70	1		85	S 6 - W36	円形 110×105	A 90	a	208.94	7	土壇86・方形周溝墓1に切られる。
62	33	N 2 - W60	楕円形 100×75	A 40	b	52.76	2	土壇63に切られる	86	S 6 - W36	楕円形 145×110	A 35	a	165.85	6	土壇85を切り、方形周溝墓1に切られる。 弥生
63	33	N 2 - W60	楕円形 80×45	A 40	a				87	S 10 - W45	円形 95×90	A 35	b	14.97	1	
64	33	NS 0 - W59	不整形円形 140×100	B 45	b	63.58	3		88	S 5 - W44	円形 95×85	B 45	aorc	414.89	10	
65	33	S 10 - W56	不整形円形 140×110	C 50	a	20.93			89	S 5 - W46	楕円形 100×55	A 20	a	31.00	2	1
66	33	N 4 - W60	楕円形 120×80	A 25	a	10.28			90	N 1 - W45	円形 145×130	A 45	a	147.72	2	
67	33	N 5 - W63	楕円形 180×100	A 30	a	74.85	1		91	S 3 - W49	円形 65×60	D 70	a	6.40		土壇96を切る
68	33	N 7 - W46~47	円形 150×150	A 70	a				92	N 7 - W32	楕円形 150×90	A 40	c			

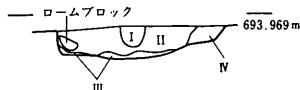
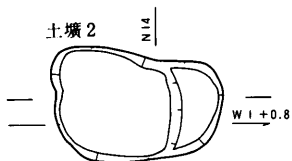
番 号	掲 載 図	位 置	平 面 規 模 (cm)	断 面 形 態 (cm)	覆 土 の 特 徴	出土遺物		備 考	番 号	掲 載 図	位 置	平 面 規 模 (cm)	断 面 形 態 (cm)	覆 土 の 特 徴	出土遺物		備 考
						土 器 (g)	石 器 実 測 数								土 器 (g)	石 器 実 測 数	
93	36	N 1 - W30	楕円形 120×90	A 30	aorc				310	38	S24 - W42	円形 90×80	B 60	a	189.54	2	
94	36	N 6 - W26	楕円形 155×90	B 25	b				311	38	S28 - W55	円形 100×95	B 60	a	123.68	3	
95	36	S 2 - W34	楕円形 200×100	A 60	Cora	17.13	1	方形周溝墓1に切られる	312	38	S42~43 - W41~42	不整形 255×225	D 75	Cora	76.69		
96	36	S 2~3 - W48~49	楕円形 200×130	A 70	Cora			土壌91・101に切られる	313	38	S33 - W52	楕円形 105×75	A 50	a			
97	36	S 3 - W33~34	不整形楕円形 170×75	C・F 40	Cora				314	38	S35 - W34	円形 100×90	C 40	a			
98	36	S 3 - W31~32	楕円形 205×80	A 60	corb			土壌99に切られる	315	39	S25 - W77	楕円形 135×95	A 25	a			
99	36	S 3 - W31	円形 100×100	D 70	b	61.08	2	土壌98を切る	316	39	S25 - W79	円形 75×80	A 10	b			
100	37	S11 - W47	円形 85×80	C 30	a	9.35	1		317	39	S28 - W74	円形 110×110	A 25	b			
101	36	S 3 - W49	円形 50×45	C 40	a			土壌96を切る	318	39	S31 - W72~73	不整形 190×150	A 35	borc			
102	31	S 7 - W33	楕円形 110×75	C・F 50	a			土壌45・103と一連	319	40	S46 - W29~30	不整形楕円形 245×120	A 60	Cora	114.79	5	
103	31	S 7 - W33	円形 60×50	A 30	a			土壌45・102と一連	320	39	S24 - W59	円形 90×90	A 30	a			土壌321を切る 一括土器あり
104	31	S 6 - W34	円形 70×70	A 31	a	25.85	1	土壌45を切る	321	39	S24 - W59	円形 85×80	A 40	b			土壌320に切られる
105	34	N 8 - W40	楕円形 100×65	A 40				土壌79に貼られる	322	39	S24 - W55	円形 80×80	F 60	a	49.12	2	第7号住居址を切る
106	37	S 4 - W54	円形 100×85	B 20	aorb				323	39	S25 - W50	楕円形 70×50	C 40	a	125.49	1	第7号住居址を切る
107	37	NS 0 - W38	円形 90×90	B・E 85	b	671.90	13		324	39	S20 - W53	円形 60×60	E 45	a	19.76		第7号住居址を切る
301	37	S21 - W46	円形 160×150	A 20	a	19.93	1		401	40	S18~19 - E10~11	楕円形 160×125	A 25	a			集石あり
302	37	S25 - W46	円形 115×115	A 20	a				402	40	S16 - E 5	不整形楕円形 170×130	A 70	aorc	282.35	7	
303	37	S24 - W44	円形 105×100	A 20	a	25.83	1		403	40	S27 - E 7	楕円形 150×115	A 30	a			
304	37	S23 - W43	円形 105×100	A 15	aorb	42.25	1		404	40	S23 - E 2	円形 90×90	E 50	aorb	35.13	1	
305	37	S24 - W38	円形 100×100	A 20	aorb												
306	37	S24 - W35	円形 70×70	A 10	aorb	10.20											
307	38	S27 - W41	円形 80×80	E 50	a												
308	38	S32 - W35	円形 65×60	B 20	aorb												
309	38	S27 - W30	円形 100×100	C 40	a												



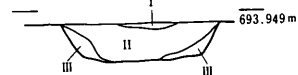
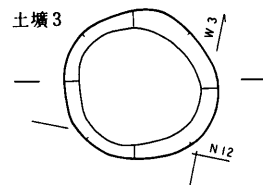
土壌1



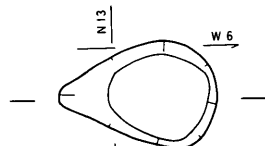
- I : 攪乱
- II : 黒褐色土(ローム粒混入、中央部ほど黒い)
- III : ロームブロック
- IV : 黒褐色土
- V : 黒灰褐色土
- VI : 黒灰褐色土(Vより濃、ローム粒混入)
- VII : 黄灰褐色土
- VIII : 明黄褐色土



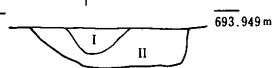
- I : 茶色土(しまり薄く、ローム微粒多量混入)
- II : 暗褐色土(ローム粒微量混入)
- III : 暗褐色土(1~2cm大のロームブロック混入)
- IV : 茶色土(ロームブロック混入)



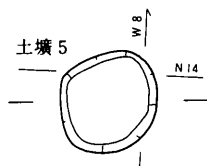
- I : 攪乱
- II : 暗褐色土(ローム微粒少量混入)
- III : 暗黄褐色土(1~2cm大ロームブロック混入)



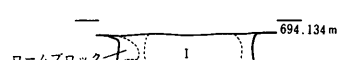
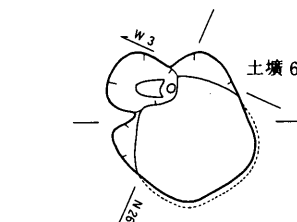
土壌4



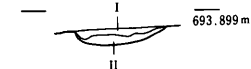
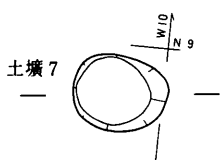
- I : 暗褐色土
- II : 暗褐色土(大小ロームブロック少量炭化物混入)



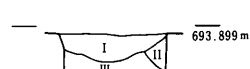
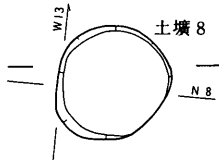
- I : 暗褐色土(ローム微粒少量混入)
- II : 暗褐色土
- III : 暗黄褐色土



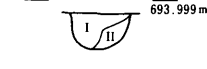
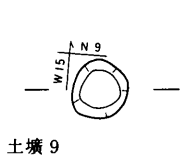
- I : 暗褐色土(炭化物、焼土混入)
- II : 暗褐色土(ローム粒、小ロームブロック少量混入)



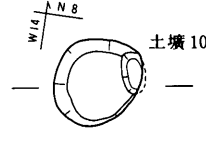
- I : 暗褐色土(炭化物少量混入)
- II : 暗褐色土(ロームブロック混入)
- I層下面に焼土あり



- I : 暗褐色土(小ロームブロック多量混入)
- II : 黄褐色土(ロームブロック多量混入)
- III : 黒褐色土(小ロームブロック少量混入)
- IV : 黒褐色土

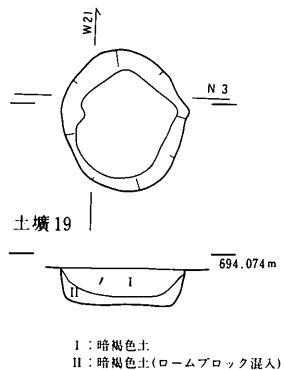
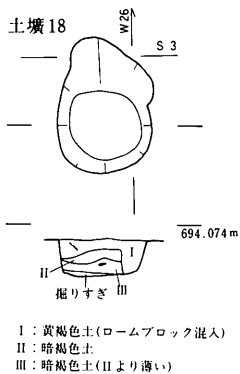
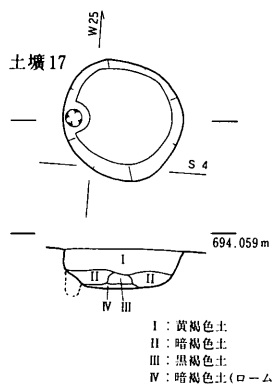
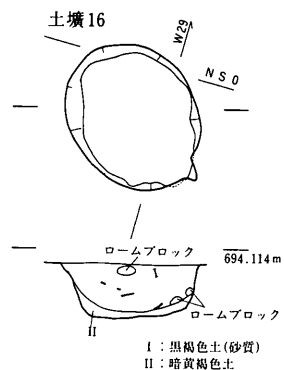
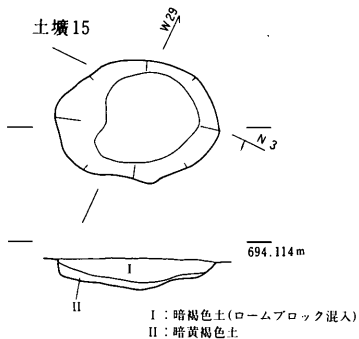
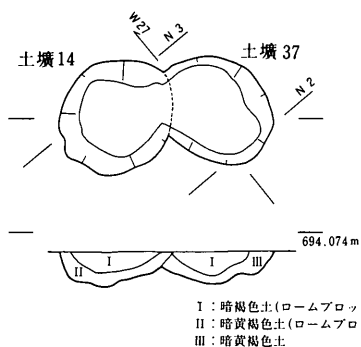
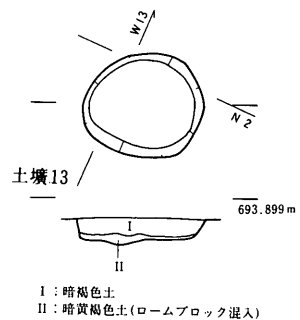
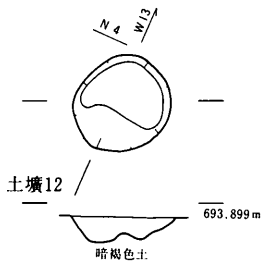
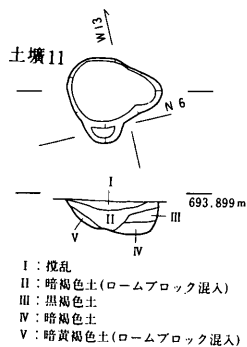


- I : 暗褐色土(炭化物少量混入)
- II : 暗黄褐色土

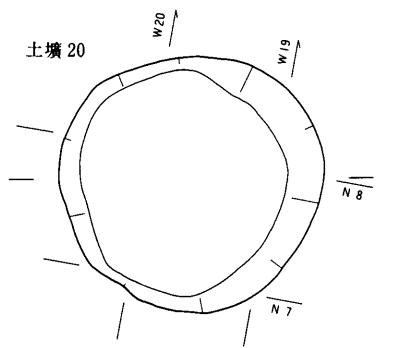


- I : 暗黄褐色土(小ロームブロック多量混入)
- II : 暗褐色土(炭化物少量混入)
- III : 暗黄褐色土

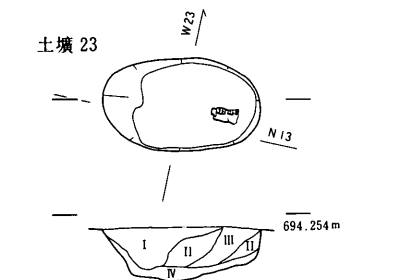
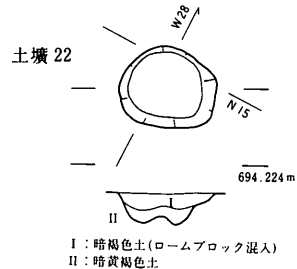
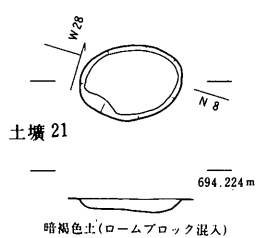
第27図 白神場遺跡 土壌 (1)



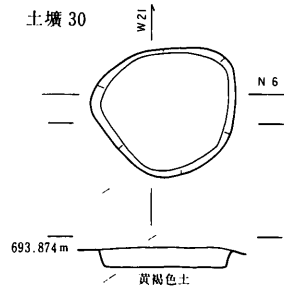
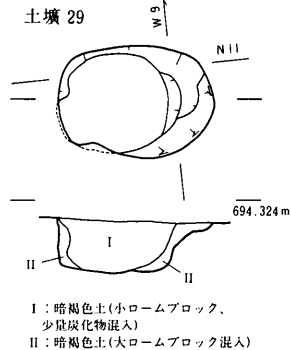
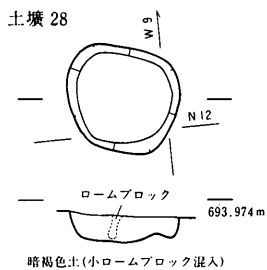
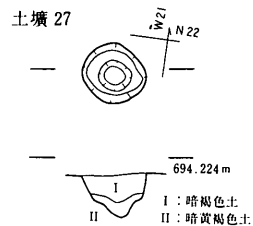
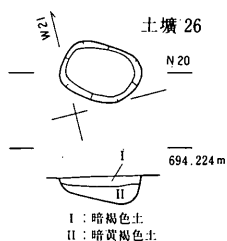
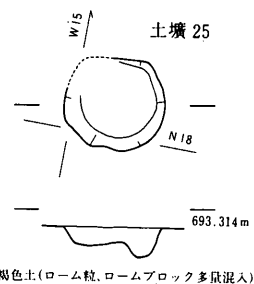
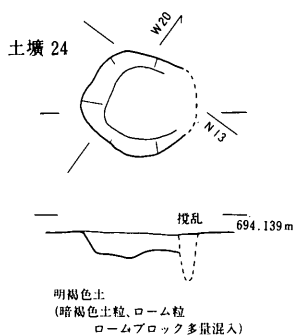
第28図 白神場遺跡 土壌(2)



- 焼土 焼土 III
- I: 暗灰黄褐色土
 - II: 炭灰層
 - III: 暗褐色土(ロームブロック混入)

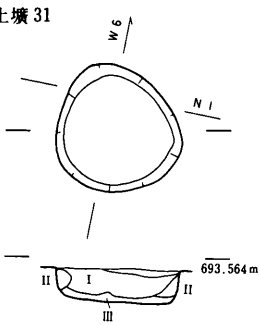


- I: 黒褐色土(小ロームブロック炭化物少量混入)
- II: 暗褐色土(小ロームブロック混入)
- III: 黒褐色土
- IV: 暗黄褐色土



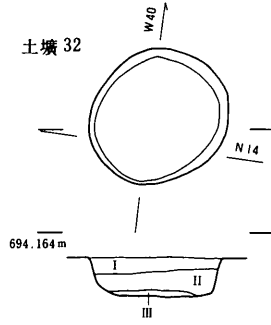
第29図 白神場遺跡 土壌 (3)

土壌 31



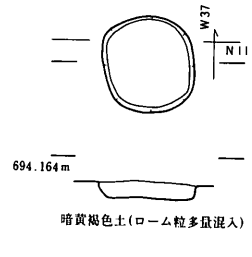
- I : 暗褐色土(ロームブロック少量混入)
- II : 暗黄褐色土
- III : 暗黄褐色土(ロームブロック多量混入)

土壌 32

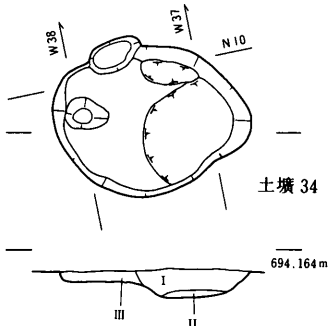


- I : 明褐色土(炭化物少量、ローム粒多量混入)
- II : 暗褐色土(炭化物少量、ローム粒多量混入)
- III : 暗黄褐色土(ローム粒多量混入)

土壌 33



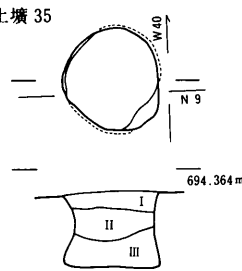
暗黄褐色土(ローム粒多量混入)



土壌 34

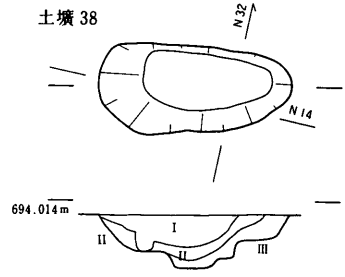
- I : 暗褐色土(ローム粒多量混入)
- II : 暗黄褐色土(ローム粒多量混入)
- III : 明褐色土(ローム粒、ロームブロック多量混入)

土壌 35

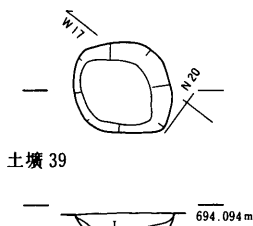


- I : 明褐色土(多量ローム粒、少量炭化物混入)
- II : 褐色土(多量ローム粒、少量炭化物混入)
- III : 暗褐色土(多量ローム粒、少量炭化物混入)

土壌 38

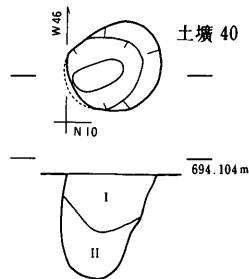


- I : 暗褐色土
- II : 暗褐色土(ロームブロック混入)
- III : 暗黄褐色土



土壌 39

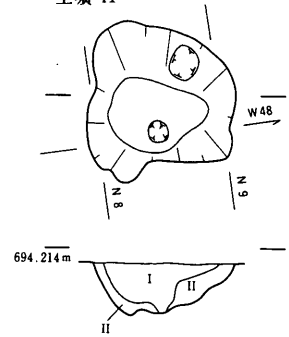
- I : 暗褐色土
- II : 暗黄褐色土



土壌 40

- I : 暗褐色土(ロームブロック混入)
- II : 暗褐色土

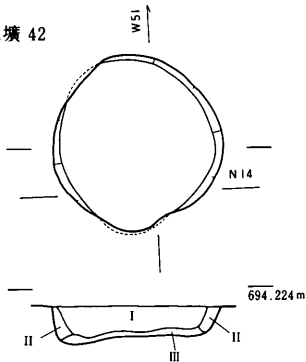
土壌 41



- I : 褐色土
- II : 褐色土(大ロームブロック混入)

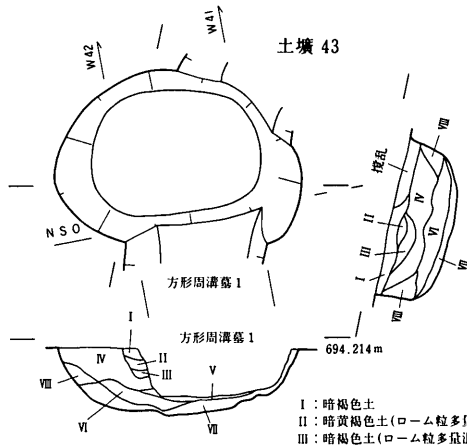
第30図 白神場遺跡 土壌 (4)

土壙 42



- I : 暗褐色土(炭化物少量混入)
- II : 暗黄褐色土
- III : 褐色土(小ロームブロック混入)

土壙 43



- I : 暗褐色土
- II : 暗黄褐色土(ローム粒多量混入)
- III : 暗褐色土(ローム粒多量混入)
- IV : 暗黄褐色土(小ロームブロック多量混入)
- V : 暗褐色土(小ロームブロック多量混入)
- VI : 黒褐色土(ローム粒少量混入)
- VII : 暗褐色土(ロームブロック混入)
- VIII : 暗黄褐色土(小ロームブロック少量混入)

黄褐色土(ロームブロック少量炭化物混入)
 黒褐色土(ロームブロック少量炭化物混入)
 暗褐色土(ロームブロック少量炭化物混入)
 暗黄褐色土(ロームブロック少量炭化物混入)
 褐色土(ロームブロック少量炭化物混入)

土壙 102

S 7

土壙 103

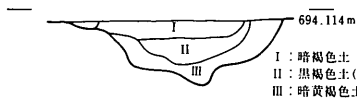
S 8

土壙 104

S 6

土壙 45

W 33

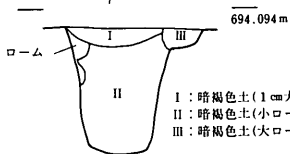


- I : 暗褐色土
- II : 黒褐色土(小ロームブロック少量混入)
- III : 暗黄褐色土(ロームブロック多量混入)

土壙 47

W 42

N 8

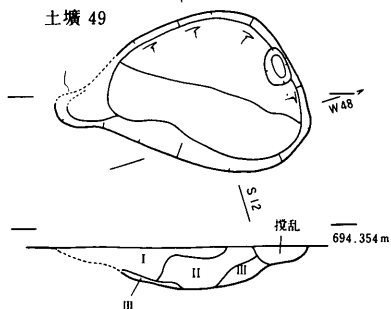


- I : 暗褐色土(1cm大ロームブロック混入)
- II : 暗褐色土(小ロームブロック混入、しまり悪い)
- III : 暗褐色土(大ロームブロック混入)

土壙 49

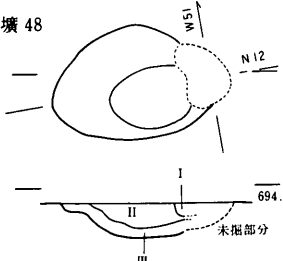
S 12

W 48



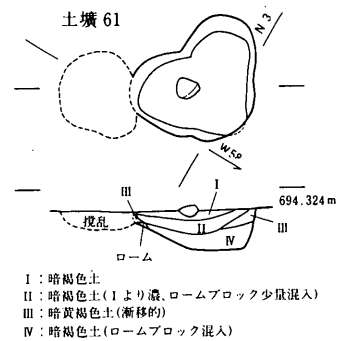
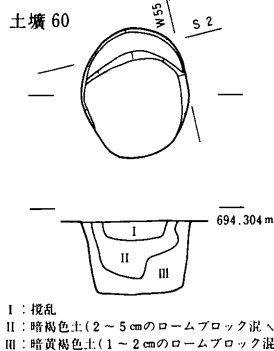
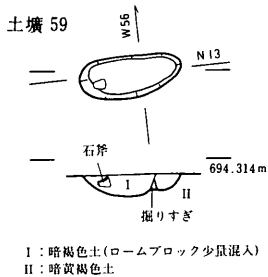
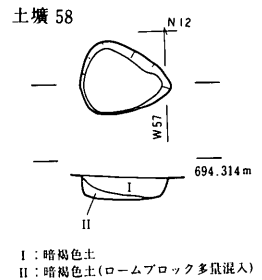
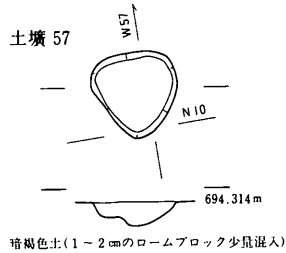
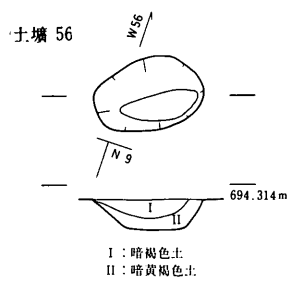
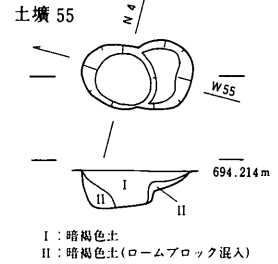
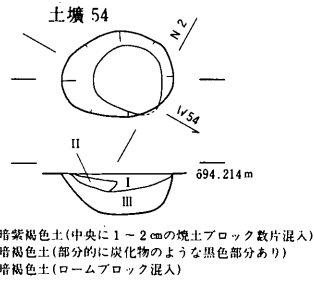
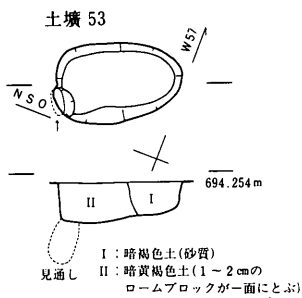
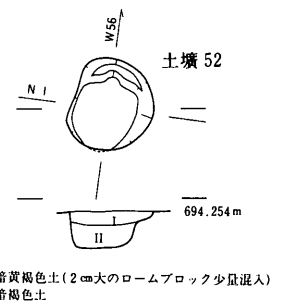
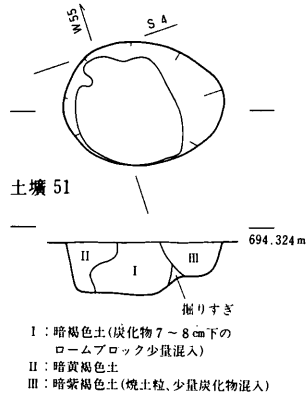
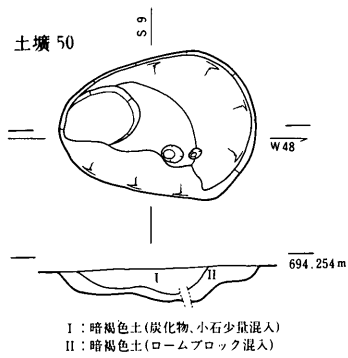
- I : 褐色土(細粒)
- II : 暗褐色土(ロームブロック少量混入)
- III : 暗褐色土(ロームブロック多量混入)

土壙 48

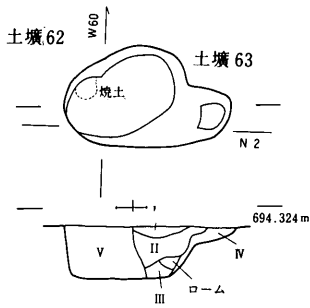


- I : 暗紫褐色土
- II : 黒灰褐色土(しまりない)
- III : 黄褐色土

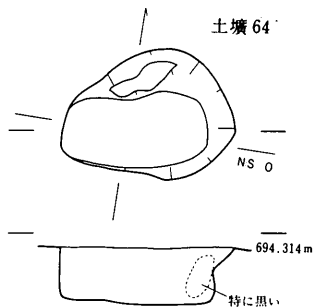
第31図 白神場遺跡 土壙 (5)



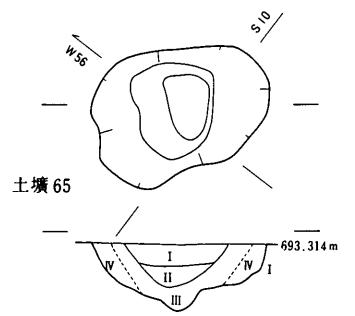
第32図 白神場遺跡 土壙 (6)



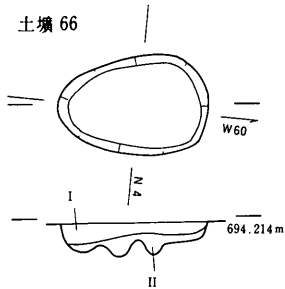
- I : 暗褐色土(炭化物少量混入)
- II : 暗褐色土(暗紫褐色に近い)
- III : 暗褐色土
- IV : 暗黄褐色土(漸移的)
- V : 暗褐色土(微量焼土塊・炭化物及び1~2cmのロームブロック混入)



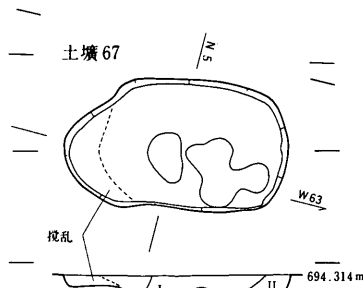
- 暗褐色土(大小ロームブロック混入)



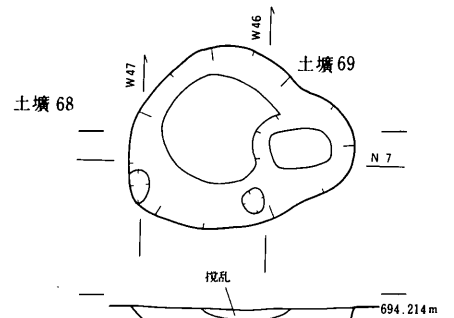
- I : 暗褐色土(1~2cmのロームブロック少量混入)
- II : 黒灰褐色土(ローム粒少量混入)
- III : 暗黄褐色土(大ロームブロック混入)
- IV : 暗黄褐色土



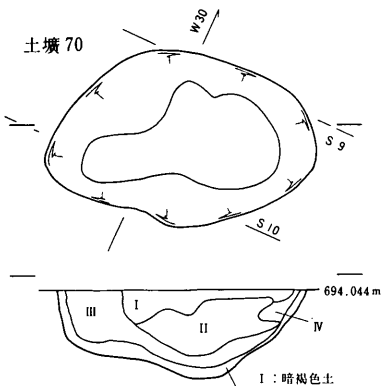
- I : 暗褐色土
- II : 暗黄褐色土



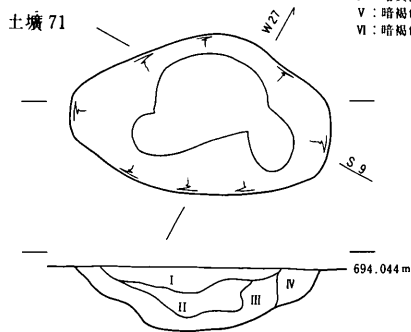
- I : 暗褐色土(ローム粒微量混入)
- II : 暗褐~暗黄褐色土(大ロームブロック多量混入)



- I : 暗褐色土(大小ロームブロック混入)
- II : 黒褐色土
- III : 暗褐色土
- IV : 暗黄褐色土
- V : 暗褐色土(IIIよりやや暗い)
- VI : 暗褐色土(ロームブロック多量混入、粘質)

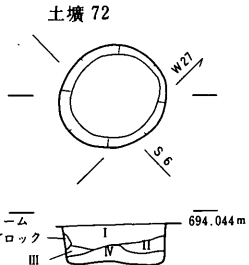


- I : 暗褐色土
- II : 黒褐色土
- III : 暗褐色土(小ロームブロック混入)
- IV : 暗黄褐色土
- V : 暗黄褐色土(ロームブロック多量混入)

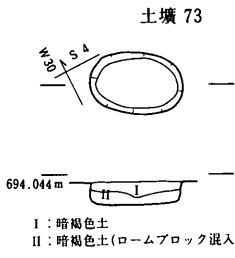


- I : 暗褐色土(ローム粒少量混入)
- II : 暗褐色土
- III : 褐色土(ロームブロック多量混入)
- IV : 暗黄褐色土

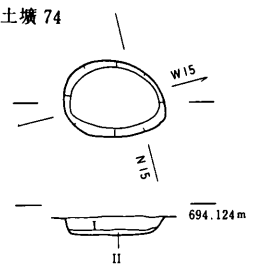
第33図 白神場遺跡 土壌(7)



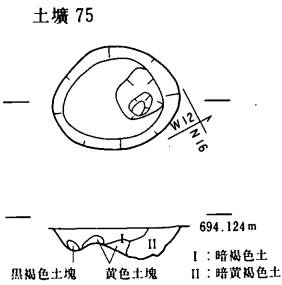
- I : 暗褐色土
- II : 暗褐色土(小ロームブロック少量混入、Iより濃色)
- III : 暗黄褐色土
- IV : 暗黄褐色土(ロームブロック多量混入)



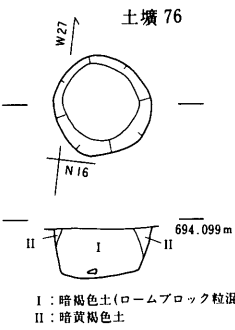
- I : 暗褐色土
- II : 暗褐色土(ロームブロック混入)



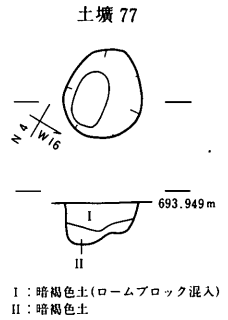
- I : 暗褐色土
- II : 暗黄褐色土(ロームブロック混入)



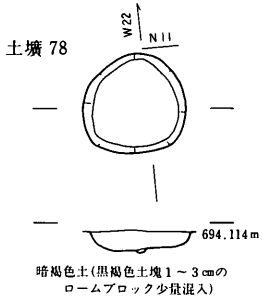
- I : 暗褐色土
- II : 暗黄褐色土
- III : 黒褐色土塊 黄色土塊



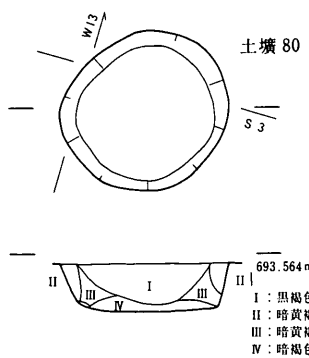
- I : 暗褐色土(ロームブロック粒混入)
- II : 暗黄褐色土



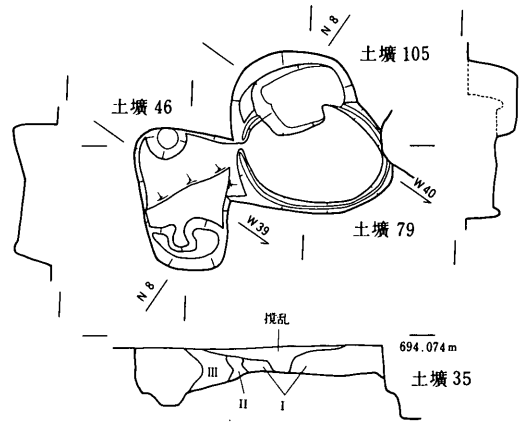
- I : 暗褐色土(ロームブロック混入)
- II : 暗褐色土



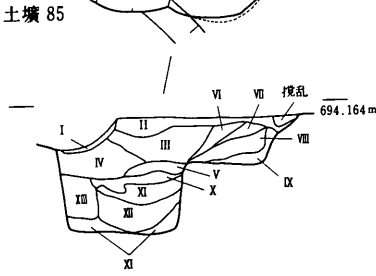
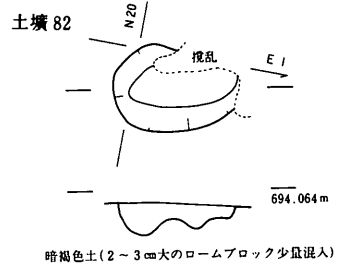
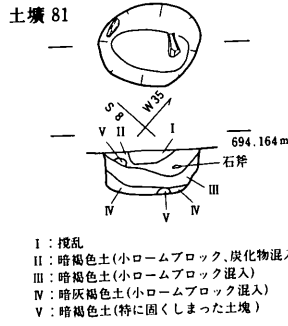
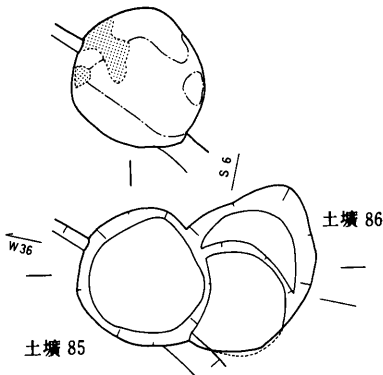
- I : 暗褐色土(黒褐色土塊1~3cmのロームブロック少量混入)



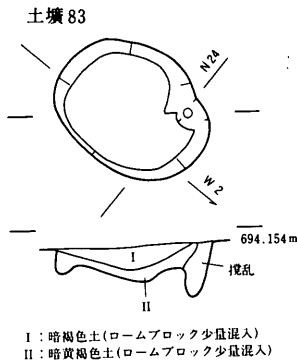
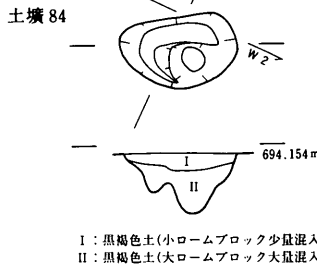
- I : 黒褐色土(ローム粒多量混入)
- II : 暗黄褐色土(壁と漸移的)
- III : 暗黄褐色土(2~3cm大のロームブロック混入)
- IV : 暗褐色土(2~3cm大のロームブロック混入)



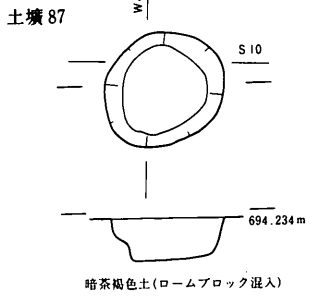
第34図 白神場遺跡 土壌 (8)



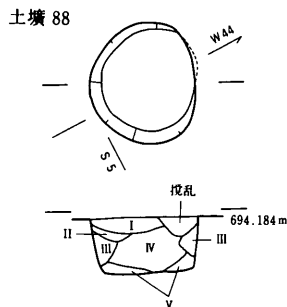
- I : 攪乱
 II : 暗褐色土(小ロームブロック、炭化物混入)
 III : 暗褐色土(小ロームブロック混入)
 IV : 暗灰褐色土(小ロームブロック混入)
 V : 暗褐色土(特に固くしまった土塊)
- I : 暗黄褐色土
 II : 暗黄褐色土
 III : 暗褐色土(ロームブロック、ローム粒
 少量炭化物混入)
 IV : 暗褐色土(ローム粒、ロームブロック混入)
 V : 黒褐色土(ロームブロック混入、しまり悪い)
 VI : 暗褐色土(ローム粒混入)
 VII : 暗黄褐色土(ローム粒大量混入)
 VIII : 暗褐色土(微量炭化物、少量ローム粒混入)
 IX : 暗褐色土(ロームブロック混入、しまり悪い)
 X : 黄褐色土(固くしまる貼り床)
 XI : 暗褐色土(ローム粒少量混入)
 XII : 暗褐色土(2~4cm大の鮮明なローム
 ブロック多量混入)



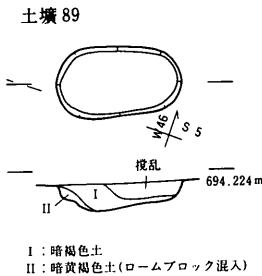
- I : 暗褐色土(ロームブロック少量混入)
 II : 暗黄褐色土(ロームブロック少量混入)



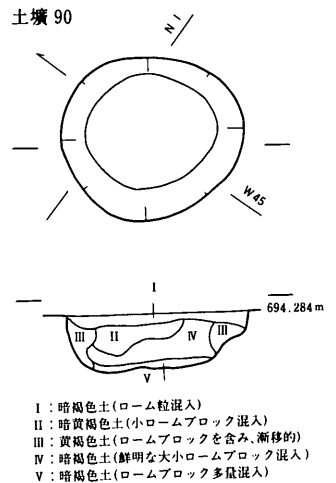
暗茶褐色土(ロームブロック混入)



- I : 暗黄褐色土(ローム粒多量混入)
 II : 暗褐色土(ローム粒混入)
 III : 暗黄褐色土(漸移的 Iより明るい)
 IV : 暗褐色土(炭化物少量混入 IIより濃い)
 V : 暗褐色土(小ロームブロック混入しまり悪い)

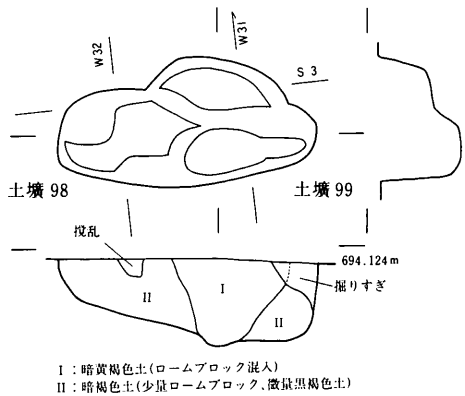
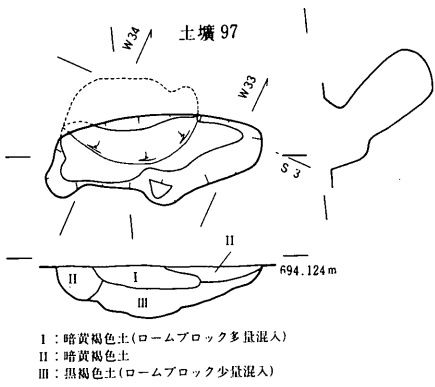
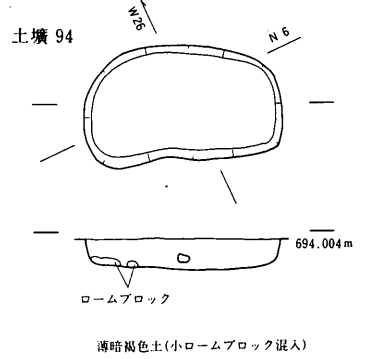
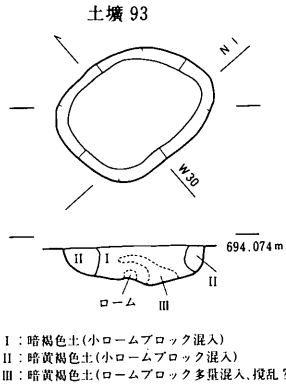
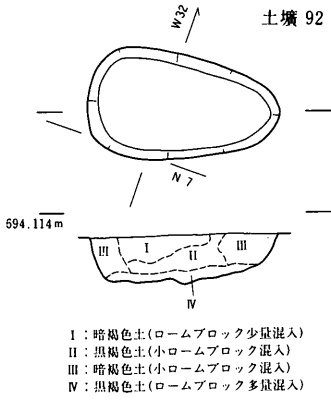
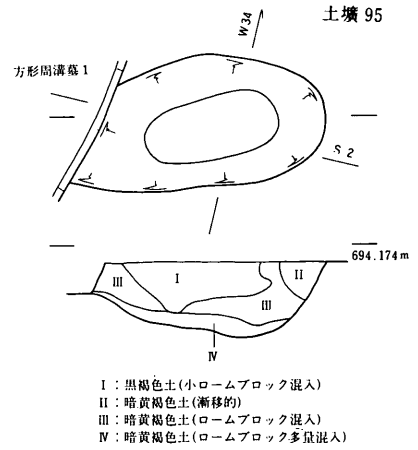
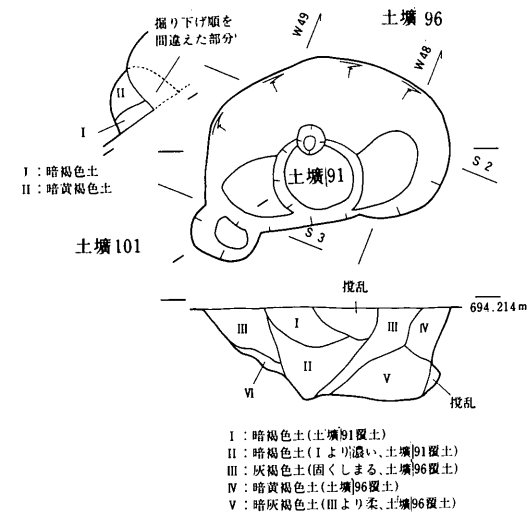


- I : 暗褐色土
 II : 暗黄褐色土(ロームブロック混入)

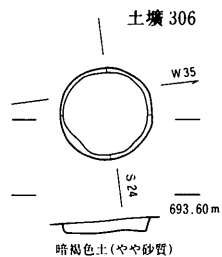
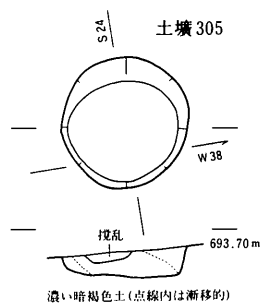
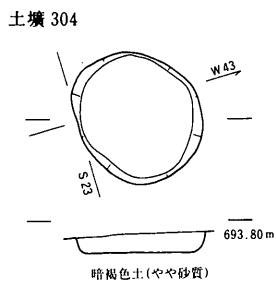
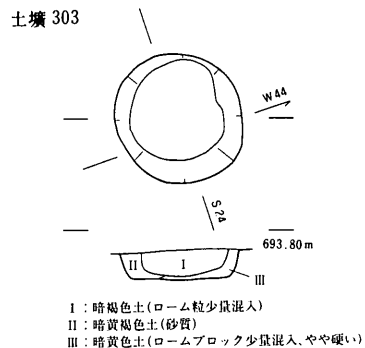
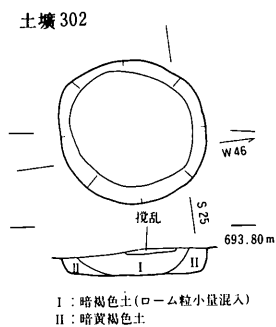
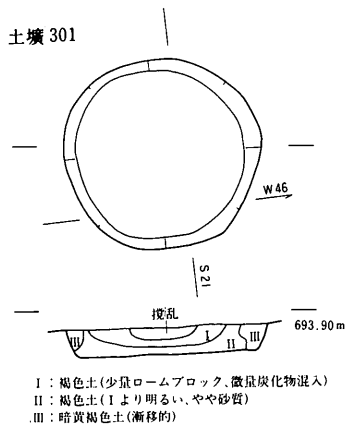
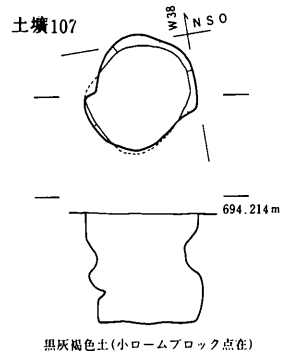
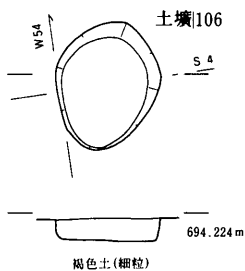
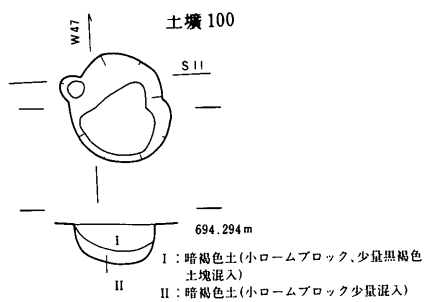


- I : 暗褐色土(ローム粒混入)
 II : 暗黄褐色土(小ロームブロック混入)
 III : 黄褐色土(ロームブロックを含み、漸移的)
 IV : 暗褐色土(鮮明な大小ロームブロック混入)
 V : 暗褐色土(ロームブロック多量混入)

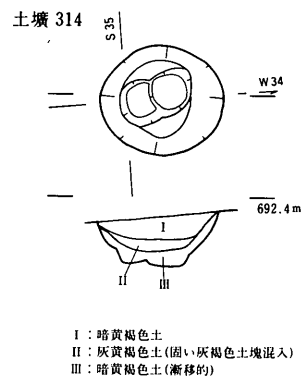
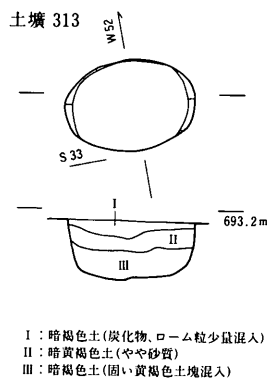
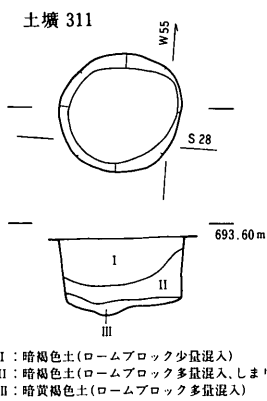
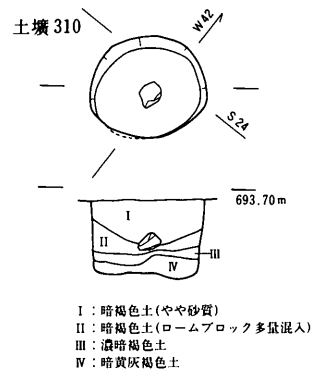
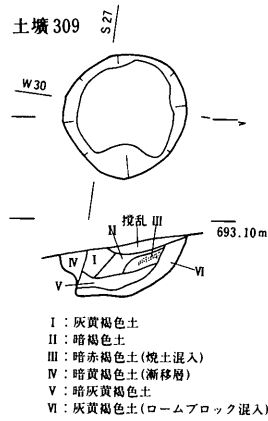
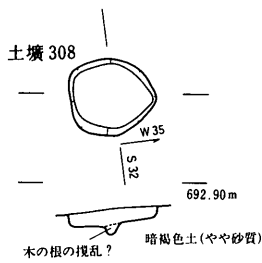
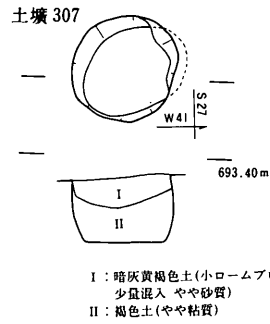
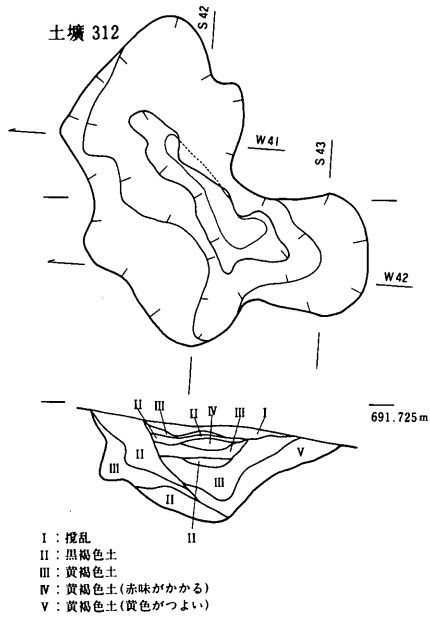
第35図 白神場遺跡 土壌 (9)



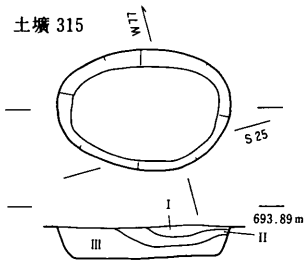
第36図 白神場遺跡 土壌 (10)



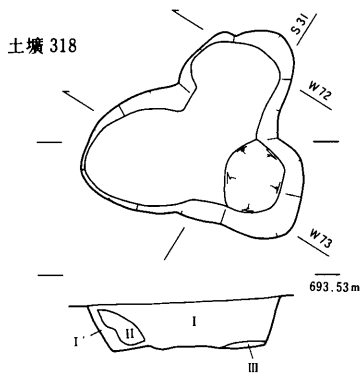
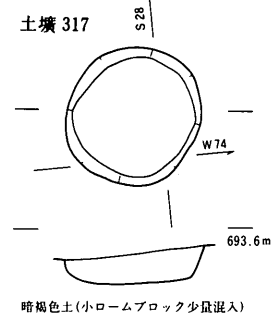
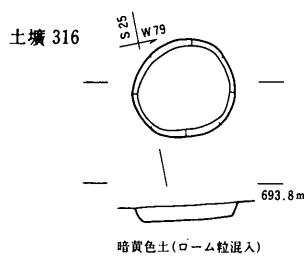
第37図 白神場遺跡 土壌 (1)



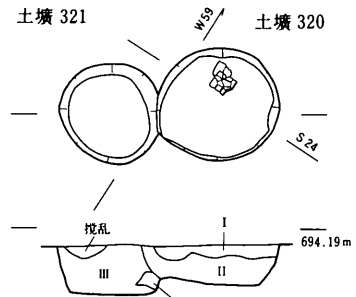
第38図 白神場遺跡 土壌(12)



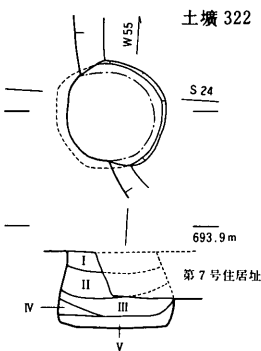
- I : 暗褐色土(固くしまる)
- II : 暗黄褐色土
- III : 暗褐色土(ローム粒少量混入、しまり悪い)



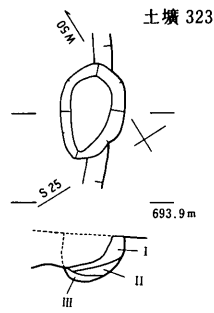
- I : 暗褐色土(小ロームブロック混入)
- I' : よりロームブロックが多い。
- II : 黒色土(ロームブロック多量混入)
- III : 灰黒色土



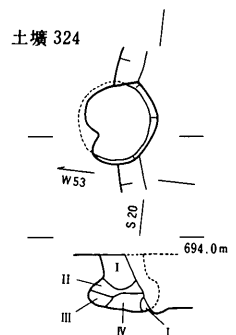
- I : 暗褐色土(ローム粒微量混入)
- II : 暗黄褐色土
- III : 暗黄褐色土(1~5cm大のロームブロック混入)
- IV : 黒褐色土ブロック



- I : 褐色土
- II : 黄褐色土(微小木炭片混入)
- III : 褐色土(木炭片少量混入)
- IV : 暗黄褐色土(木炭片少量混入)
- V : 暗褐色土(1cm大の木炭片多量混入)



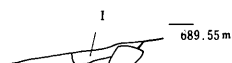
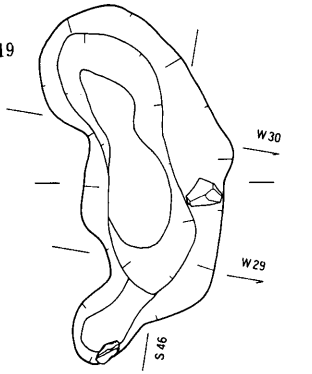
- I : 褐色土(炭化物少量混入)
- II : 暗黄褐色土(炭化物少量混入)
- III : 暗褐色土(炭化物、ロームブロック少量混入)



- I : 攪乱
- II : 褐色土(炭化物少量混入)
- III : 黒褐色土(炭化物少量混入)
- IV : 暗褐色土(炭化物少量混入)

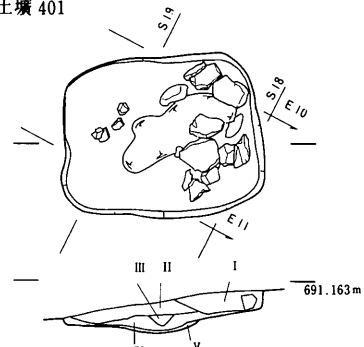
第39図 白神場遺跡 土壙 (13)

土壌 319



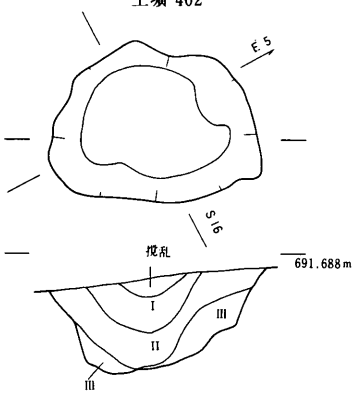
- I : 黒褐色土
- II : 暗褐色土
- III : 暗黄褐色土
- IV : 黄褐色土(小礫混入)

土壌 401



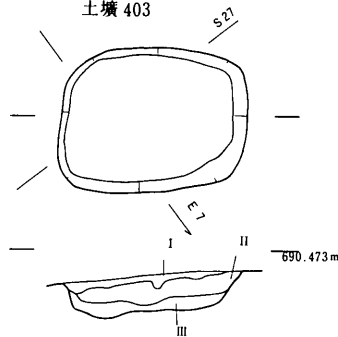
- I : 黒褐色土
- II : 暗褐色土
- III : 黒褐色土ブロック
- IV : 褐色土(ローム粒混入)
- V : 暗黄褐色土(漸移的)

土壌 402



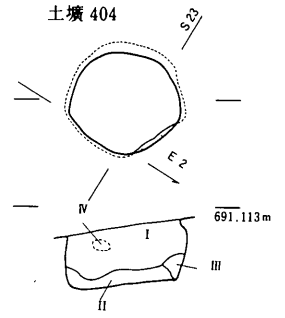
- I : 暗黄褐色土
- II : 暗黄褐色土(大小のロームブロック混入)
- III : 暗黄色土(大ロームブロック多量混入)

土壌 403



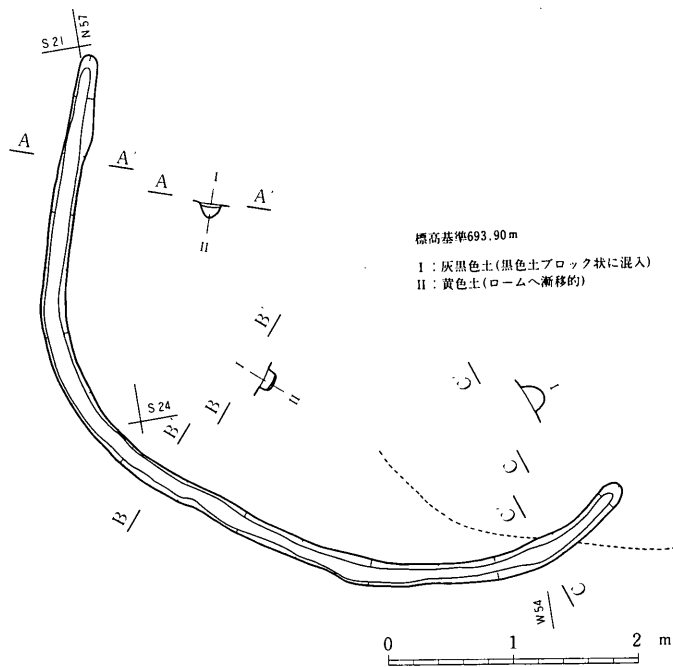
- I : 黒褐色土
- II : 黄褐色土(少量の小礫混入)
- III : 暗黄色土

土壌 404



- I : 暗黄褐色土
- II : 暗褐色土
- III : ロームブロック
- IV : 黄褐色砂質土

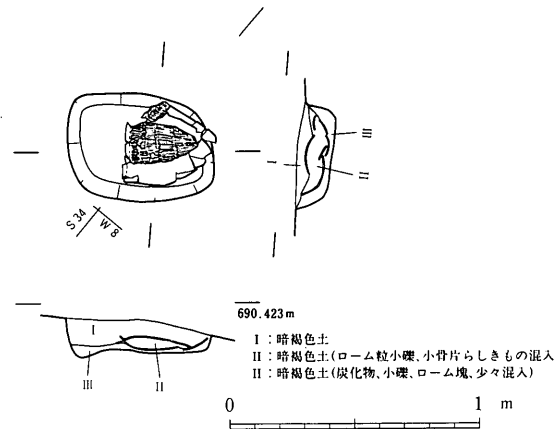
第40図 白神場遺跡 土壌 (14)



第41図 白神場遺跡溝址

5. 溝址

III区北端部、S 21～25-W 55～57に位置し、第7号住居址を切る。直径5.5mほどの大きな弧状をえがいている。掘り込みは10～15cmを測り、断面は半円形を呈する。覆土は灰黒色で、第7号住居址との重複部分においても明瞭に識別できた。遺物は少量の縄文土器片があったのみで図示し得なかった。本址の性格であるが、調査時に削平された竪穴住居址の周溝の一部が残存したものの可能性を認めて、囲まれる範囲及び周辺をピット等の検出に努めたが、なにも発見できなかった。



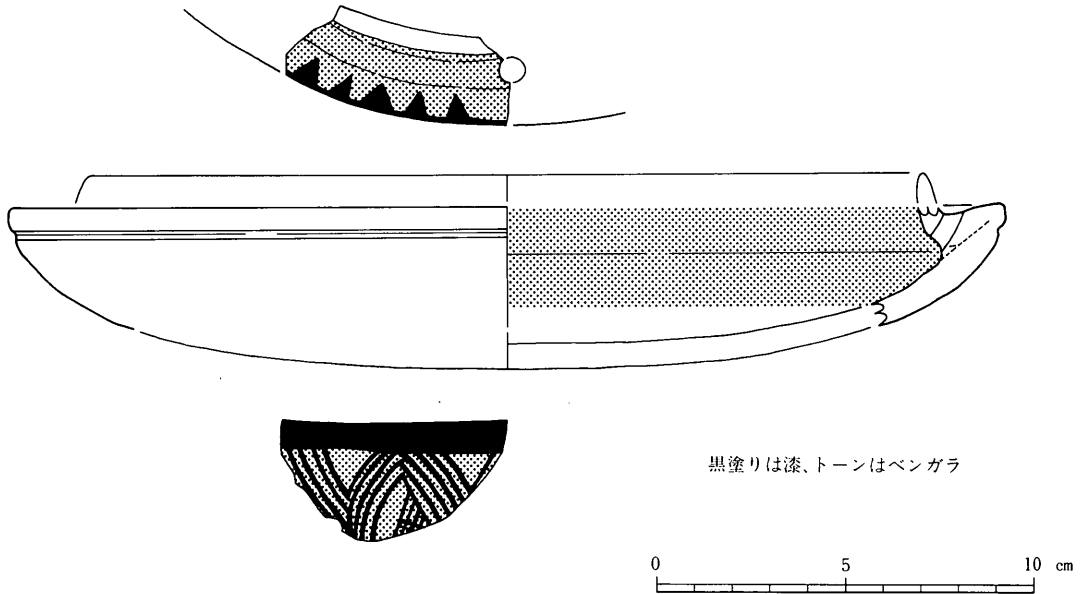
第42図 土器単独出土

6. 土器単独出土

IV区西半、S 34-W 8に位置する。70×45cmの隅丸長方形を呈す小規模な穴を掘り、その中に平安時代の土師器甕を横位に埋設した遺構で、土壙の一種とも考えられるが、穴は土器を納めるためのみの目的で掘られたと捉え、この名称を用いた。周辺は傾斜面で、土器は口縁部を傾斜の上方に向けて置かれていたらしく、埋設後に土圧などで押しつぶされた形で原位置を保って出土した。平安時代前半に比定される土器で、火葬墓かとも考えたが骨類の検出はない。

7. 竪穴状遺構

平面形はやや不整な方形或いは長方形を呈し、竪穴住居址の様に掘り込まれてはいるが住居址ではないものをこの呼称で一括した。6基確認されたが、このうち1～5は、平面規模に大小あるがいずれも暗褐色土中に大小のロームブロックが大量にはいるしまりの悪い土の単層で覆土が構成され、底面は20～30cmの高低差をもってきわめて著しい凹凸がある点で全く共通している。内部からは各種の遺物が出土したが、近世の陶器片などが少量混じっており、近世以降、部分的に深耕した跡と判断した。6については当初住居址かとも思われたが、住居址としての施設が全くなく、床面や壁も不明瞭なものであったためここに含めた。



第43図 彩色土器実測図

第3節 遺物

1 土器

(1)縄文時代の土器

本遺跡からは、縄文前期末の土器群が検出された。住居址、土壌のあり方などからみてほぼ単一時期としてとらえられるものと考えられ、それら遺構から出土した土器群も、一部を除いては、ほぼ同一時期と考えられるが、完形品及び完形に近いものは、少なく、ほとんどが破片ある。

1、1号住居址（第45・51・52図）

本址からの出土土器片を文様で分けると、縄文（単節48%、羽状22%）70%、平行沈線文14%、結節状凹線文3%、結節状浮線文7%、沈線3%、その他（三角陰刻文）3%と縄文施文土器の比率が高い。破片から復元できた土器が1点有り、これは三角陰刻文、結節状凹線、沈線、縄文を組み合わせで施文している。

文様のモチーフ、組み合わせがわかるものはほとんどないが、渦巻及び三角状のモチーフを描くものが多いと思われる。

1は、前にもあげた、本址唯一破片から復元できた大型な深鉢である。口縁部が外面に肥厚化した、口縁がやや外傾する筒形の器形で、口縁部に三角陰刻文を3cmおきに上下交互に配し、胴上半部に、横位沈線で三段に区画し、その中に結節状沈線、沈線で相対する渦巻きを組み合わせたモチーフを描き、渦巻文の中心には凹文を、渦巻きが接し三角状に開いた部分には三角陰刻文を施している。胴下半部には縄文（RL）を横位回転して施文している。

2、5号住居址（第45・53・54図）

本址からの出土土器片を文様で分けると、縄文（単節22%、羽状10%）32%、平行沈線文56%、結節状凹線文4%、結節状浮線文6%、その他2%と平行沈線文施文土器の比率が高い。

文様のモチーフ、組み合わせは、はっきりとしないが縄文と他の施文を組み合わせるものが多い。また、平行沈線のもは、綾杉状になるものが多い。

49は関西系の北白川下層Ⅲ式併行の土器である。

3、6号住居址（第45・54・55図）

本址からの出土土器片を文様で分けると、縄文（単節30%、羽状20%）計50%、平行沈線文23%、結節状凹線文13%、結節状浮線文13%、その他1%と縄文土器の比率が高い。

文様のモチーフ、組み合わせは、5住とほぼ同じく、縄文と他のものを組み合わせたとと思われるものが多いと思われる。また、結節状浮線文には、角形と弧状のものが見られる。また、古い様相と思われるボタン状貼付文のなごりを残した貼付文も見られる。

15は、関西系の北白川下層Ⅲ式併行に近似するものである。

4、7号住居址（第45・46・56～63図）

本址は、本遺跡で最大の住居址で、上層のものと下層のものに分けられる。

上層のものは、5と6で半截竹管の平行線と縄文を組み合わせたものである。6は土壙323からも出土している。これは、縄文前期末でも後出するもので、178～181も同様な破片である。

下層のものは（上層のものも一部含む）は、土器片を文様で分けると、縄文（単節19%、羽状13%）32%、平行沈線53%、結節状凹線文1%、結節状浮線文8%、沈線3%、その他3%と平行沈線の比率が高い。また、波状口縁も多く見られる。

文様のモチーフ、組み合わせは、その文様それぞれで組み合わせるものは少ないが、モチーフは、渦巻及び曲線、弧状のもの、綾杉状などのものが見られる。浮線文には、縄文を転がしたものの、結節状浮線文（角型、弧状）が見られる。その他では、三角陰刻文の他に円形陰刻文が見られる。177、187～193は関西系、北白川下層Ⅲ式併行の土器である。また、無文の小型な土器が見られる。

5、8号住居址（第64図）

本址からの出土土器片を文様で分けると、縄文（単節12%、羽状8%）20%、平行沈線72%、その他8%と、平行沈線の比率が高い。

文様のモチーフ、組み合わせは、はっきりしないが、平行沈線では、綾杉状、弧状のものが見られる。

6、9号住居址（第46・64・65図）

本址からの出土土器片を文様で分けると、縄文（単節29%、羽状29%）58%、平行沈線14%、結節状浮線文14%、沈線4%、その他10%と縄文の比率が高い。底部欠損のほぼ完形品が1点有り、これは、沈線文、三角陰刻文、菱形陰刻文、結節状浮線文を組み合わせ施文している。

文様のモチーフ、組み合わせがわかるものは、ほとんどない。

7は、前にもあげた、ほぼ完形のラッパ状に口縁部が開く深鉢で、口縁端部に斜状の浮線文、その下に三角及び、菱形の陰刻文を施し、胴部を二段に横位の結節状浮線文を、その間に、渦巻、三角状モチーフの結節状浮線文、下部に波状に2本結節状浮線文を施している。

7、土壙（第47・67～78図）

土壙全体を通して見るならば、やはり縄文土器の比率が高く、次に平行沈線文の比率が高いものである。

10は、土壙23から出土した、胴部がやや脹らみ、口縁部がやや外反する深鉢で、口縁部に四単位の小突起を配し、鋸歯状文を削り出し、胴部には羽状縄文を施している。

13は、無文で小形な有孔土器である。

8、方形周溝墓、遺構外出土の土器（第65・66図）

方形周溝墓に混入していた土器、遺構外の土器は、すべて土器片であり、ほぼ、住居址、土壙と

同じ様相を示しており、平行沈線文が多い。

以上、極簡単に出土土器にふれて見たが、全体的に見ると、縄文の比率が高く、次いで平行沈線文の比率が高い。これらを編年的にあてはめて見るならば、関東の諸磯C式～十三菩提式への移行期であり、八ヶ岳山麓の日向II式、中信地区前期末の唯一の編年である桜沢式にあたり、扇平遺跡分類のII～IV類に併行するものと考えられる。また、9号住居址出土の完形品モチーフ、縄文を施文した土器群の多さから北陸地方の影響も考えなければならない。

彩色された土器（第43図）

土壙18から出土したもので、破片であるが漆とベンガラにより彩色された、有孔浅鉢である。

下地にベンガラを塗り、漆で筆状のものを使用して、文様を描いたもので、文様は、この時期の土器に施される文様と同様の文様の、鋸歯状文、三角形状文を描いている。三角形状文は、細い線の組み合わせで描き出されている。この様な彩色土器例は、福井県鳥浜貝塚、県内では、原村阿久遺跡、富士見町日向遺跡、塩尻市舅屋敷遺跡より出土している。この土器については、富士見町井戸尻考古館の武藤雄六氏の御教示を得た。

※ 土器の文様用語については、扇平遺跡（会田他、1974）を参考とした。

参考文献

- 会田進他 「扇平遺跡」 1974
武藤雄六 「八ヶ岳山麓における縄文時代前期末の遺跡——長野県諏訪郡富士見町日向遺跡の調査——」 信濃18巻4号 1966
武藤雄六 「長野県富士見町菟畑遺跡の調査」 考古学集刊第4巻1号 1968
鈴木孝志 「長野県北安曇郡松川村鼠穴字桜沢遺跡」 考古学雑誌 第42巻2号

(2)弥生土器

方形周溝墓1の周溝中、住居址覆土及び土壙のいくつかから出土しているが、今回出土した各種土器の総量に占める割合は僅かである。1点を実測図（第46図8）で、他を遺構ごとまとめた拓影の中で示した（第63・65～78図）。ただし、弥生土器を出土した遺構からはその数量に匹敵する縄文土器または土師器が出土している例が多かった。そのため小破片であったり形態や文様が類似していたりして特に縄文土器との弁別が困難なことが多く、加えて短期間の整理のため検討の時間もほとんどなく、拓影で示したものの中でも今一つ正確に把めなかったものがある。

第46図8は土壙46からの一括品を復元実測したものであるが、破片数が少なく、あるいは器形に狂いがあるかもしれない。7本ぐらいを単位にした楕状の施文具によって左から右方向へ、上から下の順序で施文され、胴下半は無文になる壺とみられる。口縁端部外側面には指圧痕が連続している。

拓影で提示した弥生土器は、主に土壙6・19・34・60・79・81・89・402、方形周溝墓1からの出

土品にみられる。この他、土壙（以下、土壙は「土」と略）43・45・51・56～59・75・76・86・100・104・319からの出土品にも該当するものがあると思われる。文様からみると、条痕をもつもの、へらによる沈線で文様を描くもの、波状文をもつもの、縄文をもつもの等がある。個別にみると、条痕をもつものには、土6-2・3・7・9、土34-11、土45-2、土49-2、土51-2・3、土56-2、土57-1、土58、土60-2・3、土79-4、土81-1～3、土100、土402-1・5・6、方形周溝墓（以下「方周」と略）1-8・17～19等、条痕の幅の太いものと、土6-1、土19-14・15、土60-5等細密なものがある。このうち口縁部破片の土60-3、方周1-8は口縁端部外側面に縦の刻み目を持ち、土81-2には口縁端部上面に指頭圧痕がならぶ。へらによって沈線で文様を描くものは、土6-8、土34-4、土75、土79-6、土319-1、方周1-13・15があげられる。土75、方周1-13・15は横線間に横向きの「ハ」の字が重なる様に連続される共通の文様モチーフをもつ。土6-8は網状文風の文様が、また土34-4は上に開く弧が描かれている。土79-6は沈線で方形に区画される中に刺突を施すとみられるもので、他に出土例はない。土319-1は細めのへらで鋸歯を描いており、他の弥生土器より若干時期が下るかもしれない。波状文をもつものは土6-12、土89-2がある。櫛状になった施文具を使用しているようだが、土89-2のはひとときわ太い。この他にも同様施文具で横線をひいているとみられるものもある。縄文をもつものは土402-1のみと少ない。細かい縄文の上にへらで楕円を縁どりその外側を磨り消したものであろう。器種についてみると、ほとんどが破片で不明だが、壺（土6-7、土34-11）、深鉢（土57-1）などがあるようだ。土34-4は小形の壺の口縁だが、外面に僅かに赤色塗彩が残っている。

以上の本遺跡出土の弥生土器は全体として、文様の特徴からみて弥生時代中期前半の時期に比定できるものと考えられる。

(3)古墳時代の土器（第48～50図）

第2～4・12号住居址及び土壙20から出土している。遺構単位で時期を捉えると、形式（器種）とその組成から二時期に分けられる。即ち、第1の時期のものは第2～4号住居址・土壙20出土品、第2のそれは第12号住居址出土品である。以下、記述の為、便宜的に前者の時期をI期、後者の時期をII期とする。

I期：壺・甕・台付甕・高坏・坏がみられるが小破片の上、量が少ない（第48図）。壺には、口頸部が大きく「く」の字形に外反するもの（3住-1・2）、外反する口頸部の端部が更に外方へ屈曲するもの（4住-1）がある。3住-1の胴部はミガキが施される。4住-4は形態から甕の口縁とみえるが内外面にミガキが観察でき、壺であろう。甕には4住-3・4があたる。底部片でハケメが施されている。台付甕は2住-3、3住-3がある。いずれも台部周辺で前者にはケズリ状の調整が、後者にはハケメがみられる。この他、土壙20からはS字状口縁甕の破片が数片出土しているが図示不能であった。高坏は2住-2の1点のみである。坏部には若干の稜を有し内外面にミガキをもつ。坏も2住-1の1点のみであり、緩やかな丸底と僅かにくびれたのち大きく外開する本

期独特の器形を呈す。以上Ⅰ期の土器は古墳時代前半に位置づけられると考えられるが本遺跡での組成を究明するには量が不足している。

Ⅱ期：壺・甕・小形甕・埴・高坏がある（第48～50図）。12住-20は完形の壺で球形の胴部に有段口縁をもち底部はやや突出してすわりの悪いものになっている。調整は口縁部が内外面ともタテ・ヨコ・ナナメにミガキがあり、胴部は外面がタテハケメのちミガキ、内面はヨコハケメが観察できる。14も有段口縁の壺であるが、20と異なり口縁上段が下段と同様大きく外反している。ミガキはみられない。甕は12住-18・19の2ヶあり、いずれも完形に近い一括品である。器形は両者とも共通し、底部が丸底で球形の胴部から張り出した様な形態をとるのが特徴的で、このため胴部は球形よりは卵形に近い。18は外面及び内面上半を、19は外面のみをハケメで調整される。その他12住-16も同種の器形を呈すと思われる。小形甕には12住-11・17がある。11は「く」の字に外反する口縁部とミガキ調整からみて壺の小形品とした方が良くかもしれない。17は口縁が直立気味に外開し、底部は上げ底となっている。雑なつくりで歪みがある。埴には12住-12・13があてられる。12は雑なつくりで、粗いミガキが若干残るのみである。13は胴部外面に丁寧なミガキが施されている。高坏は良好なものが多く、12住-1～10が出土している。坏部に稜を著しく残すものとそうでないもの、また脚部も細身のものやや中央部がふくらみをもつものなどの相違があるが、脚端部はいずれも大きく外開する器形を呈す。四段階の組み合わせ成形によっていると考えられる。ミガキ調整についてもその有無にバラツキがある。以上の各形式の様相からみて本期は古墳時代中期に相当すると考えられる。

2. 石器（第79～85図）

今回の調査で表採・出土した石器のうち、本報告で掲載できるのは定形的な石器108点である。このほかに剥片・碎片・使用痕のある剥片・2次加工のある剥片等が相当量出土しているが、今回はこれらについて扱うことができなかった。

なお石器の図化・記述にあたっては、打製石斧、凹・敲・磨石については実測可能なものを、その他の器種については表採・出土したすべてのものを対象とした。

(1)石鏃（1～35）

未製品1点を含め35点出土した。すべて黒曜石製である。1は横長剥片素材の石鏃未製品。B面は、発達した打瘤と打瘤裂痕をみる主要剥離面で、右側縁上方に調整剥離が施されている。A面はネガティブな1枚の剥離面の両側縁に調整剥離が施され、先頭部がつくりだされている。石鏃については、その基部の形態から、円基（4・35）、平基（13・21・24・25・33）、凹基無茎（2・3・5～9・11・12・14～18・20・22・23・26～29・31・34）、凹基有茎（32）に分類できる。

円基の石鏃は2点出土。4・35ともやや厚めの剥片が素材として用いられている。背面には調整剥離が集中して施されるのに対し、腹面には素材の主要剥離面を大きく残し、調整剥離はほとんど

みられない。また、長さ・重量が他のものよりも比較的大きく、本遺跡出土の石鏃としては異質なものである。平基の石鏃は5点出土。全体的に、調整加工は粗雑で、器厚は比較的厚い。なお、13は背面の周辺部にのみ調整剥離が施され、腹面はポジティブな1枚の剥離面である。本遺跡で大半を占めるのが凹基無茎の石鏃で23点出土している。えぐりこみの浅いものが多いが、長脚鏃(20)が1点出土している。凹基有茎の石鏃は1点のみ出土。中部地方における有茎石鏃の出現は、縄文時代後期初頭から中葉にかけてとされているが⁽¹⁾、本遺跡の縄文土器は前期末を主体とし、他には中期初頭のものがわずかに出土しているにすぎない。弥生時代に下る可能性をもつものである。10は下半を失い基部は不明であるが、完形であれば大きさ・重量が石鏃としては最大のものになると思われる。両面加工で器厚は厚く、凸レンズ状を呈しているが、調整は粗雑である。尖頭器、あるいは尖頭状石器⁽²⁾と呼ばれるものかもしれない。

(2)尖頭器 (36)

1点出土。チャート製。片面に自然面を残す横長剥片を素材とした木葉形の尖頭器である。B面は発達した打瘤をもった主要剥離面で、その縁辺部にのみ調整剥離が施されている。A面は、自然面を大きく残し、右側縁に調整剥離が施され、左側縁下部には、器厚を減じるためと思われる階段状剥離が施されている。

(3)石錐 (37~52) ⁽³⁾

16点出土した。すべて黒曜石製である。37・50は平面形が二等辺三角形を呈し、その2辺に調整剥離が施され、錐部が作り出されている。38・45は、錐部につまみ状の長い頭部が伴っているものである。39・40・52は長い棒状の錐部につまみ状の頭部をもつものである。錐部への調整は3点とも両面両側縁に施されている。なお、40・52は、錐部と直交するT字状のつまみ部にも調整剥離が施されている。44・51は、棒状のものである。44は両面調整、51は片面調整である。46は、先端部でわずかにカーブする、断面三角形の棒状のもので、2面に顕著な調整剥離をみる。一応石錐としてとりあげた。42・43・48は、素材である剥片の縁辺に簡単な調整を施しただけで錐部を作り出したものである。42・43は片側縁を両面にわたって、48は片面の両側縁に調整剥離がみられる。47は比較的厚い剥片の両側縁に調整剥離を施して、断面三角形の先頭部を作り出したもので、一応石錐としてとりあげた。49は頭部に比べて錐部への調整が明瞭でなく、あるいは未製品かもしれない。41は石錐のつまみ状の頭部で、錐部は失われている。

(4)ピエス・エスキーユ (53~57)

5点出土した。すべて黒曜石製。53は上部に平坦面をもつものである。上下に両極剥離面を残し、左右両側縁には、連続する微細な剥離痕(← →)が観察される。他の4点は、上下に両極剥離面を残し、片方の側縁部に上方から加撃された截断面をもつものである。

(5)スクレーパー (58~60)

3点出土した。ともに、素材である剥片の縁辺部に簡単な調整剥離が施され刃部が作り出されて

いる。58・60は黒曜石製。59はチャート製で、腹面はポジティブな打瘤をみる主要剥離面で、平坦打面を伴っている。

(6)石匙 (61～66)

6点出土した。すべて横型石匙である。63が黒曜石製、他はすべてチャート製である。61・62・64・66は外彎する刃部をもつものである。61・62は背面の一部に自然面を残している。66は片面中央部の剥離面がなす稜は鈍く、しかも光沢を帯びている。着柄、あるいは手ズレにかかわる痕跡かもしれない。63・65はまっすぐな刃部をもつものである。なお、65の裏面には刃部調整は施されていない。

(7)石核 (67・68)

2点出土した。黒曜石製。ともに、打面を転位しての剥片剥離が行われている。67は両面にわたって3方向から剥片剥離が行われたもの。A面には、右寄りに上からの加撃によるネガティブな剥離面が残されている。その打面は平坦打面で、加撃による碎屑の剥落がみられる。B面には、下からと左からの加撃による少なくとも3枚のネガティブな剥離面を残している。68は片面で剥片剥離が行われたもの。A面には2枚の大きなネガティブな剥離面を残すが、その加撃の方向はほぼ直交する。B面は下方に自然面をもち、上方には、自然面から加撃したと思われる剥離痕を残しているが、石器の素材となるような剥片は剥離されていない。

(8)横刃型石器 (69～71)

3点出土した。これらは、背面(A)に自然面を大きく残し、整形・刃部調整のための剥離は腹面(B)に集中して施されている。69は砂岩製である。70は砂岩製、両側縁と刃部に数回の調整剥離を施しただけのものである。71はホルンフェルス製。頭部から片側縁にかけて両面に調整剥離が施されている。刃部調整はB面に施される。A面の刃部端には、連続する小剥離痕が観察されるが、調整に伴うものかどうか不明である。なお、70・71のA面の刃部付近には、使用によると思われる平滑な磨耗痕が観察される。

(9)打製石斧 (72～95) (4)

24点図示した。石質については一覧表を参照されたい。72は短冊形、円刃のものである。調整剥離は背面に集中して施されている。なお、側縁部に磨耗痕が観察される。73は撥形、円刃のものである。風化が激しく、剥離面の稜は不明瞭である。また、刃部の一部には磨耗痕が観察される。74は打製石斧の頭部である。75は扁平な剥片を素材としたもので背面に調整剥離が施され、頭～側縁部が作り出されている。腹面はポジティブな1枚の剥離面で、側縁の一部に調整剥離をみる。一応打製石斧としてとりあげた。76は短冊形で下半を失っている。背面の一部に自然面を残し、頭部の両面の一部には磨耗痕が観察される。77は打製石斧の胴部。78は短冊形の打製石斧で刃部は失われている。器面の風化が激しく、剥離面は不明瞭である。79は寸づまりの撥形ともいべきもので、刃部は直刃である。両面ともに中央に数枚の大剥離面を残し、さらにその縁辺から調整剥離が施さ

れ、全体の形状が整えられている。また、頭部には平坦面をもち、そこから剥離が行われている。背面下部には自然面を残している。80は偏刃の刃部で、上半を失っているが撥形を呈すると思われる。81は扁平な剥片を素材としたもので、短冊形、偏刃を呈する。調整剥離は片面に集中し、粗雑である。器厚からいえば、スクレーパーに属するものかもしれない。82は胴～刃部にかけてのもので刃部は直刃である。背面の一部に自然面を残し、調整加工は粗雑である。83は79と同タイプのもので、寸づまりの撥形で刃部は直刃である。背面には自然面、大剥離面を残し、周辺に調整剥離が施され、頭部に平坦面をもつ点も共通している。腹面にはポジティブな1枚の剥離面に調整剥離が施されている。84は撥形を呈するもので、刃部を一部失っている。両面ともに中央に数枚の大剥離面を残し、側縁部は階段状剥離による調整が施されている。また、刃縁部から側縁部にかけて磨耗痕が観察され、その稜は丸みを帯びている。85は撥形で偏刃の大形打製石斧である。頭部には平坦面をもつ。84と同様に、数枚の大剥離面からなる器面に、階段状剥離を用いて、側縁部が調整されている。なお、胴部両側縁の一部に、磨耗痕が観察される。86は、短冊形を呈するもので、刃部を失っている。片面には研磨を受けているとみられる自然面をもち(← →)、あるいは磨製石斧の転用品かもしれない。87は、打製石斧の頭部で、背面には自然面を一部残す。また、両側縁には磨耗痕が観察されるが、背面左側縁の磨耗の範囲は明瞭でない。88は打製石斧の頭部と思われる。89は、破損された打製石斧の刃部で、破損面縁辺の片面に連続する微細な剥離痕が観察される。いわゆる使用痕のある石器として扱うべきものだろう。90は打製石斧の刃部で偏刃である。91は撥形、あるいは短冊形を呈するもので円刃である。なお、刃部から背面右側縁の一部にかけて、磨耗痕が観察される。92は打製石斧の頭部である。背面には自然面を大きく残している。93は大型の打製石斧の頭部である。頭部端にわずかな平坦面をもち、調整剥離は背面側に集中している。腹面は現存部では1枚の剥離面で、側縁の一部に調整が施されているだけである。94も打製石斧の頭部で、調整剥離は両面から行われている。また、両側縁には磨耗痕が観察される。95は撥形、円刃の大形打製石斧で、頭部を一部失っている。両面とも数枚の大剥離面をとどめ、調整剥離は全周に及んでいる。

なお、82～85を出土した土壌は、伴出した土器から弥生時代に所属する可能性をもつものである。これらの石斧については、いわゆる石鋏の可能性をも考えねばならないだろう。

(10)磨製石斧 (96～98) (5)

3点出土し、2点を図示した。96は蛇紋岩製、磨製石斧の刃端部で、全体の形状はうかがえない。97は砂質粘板岩製、磨製石斧の胴部である。上部は折損によって失われている。下部も折損していると思われるが、2次加工が施されている。98は蛇紋岩製、片面の器表が刃部を除いて失われているが、蛤刃状の刃部と、面取りされた側面をもつと思われる。なお、刃部には光沢を帯びた磨耗面(---)が観察される。

(11)凹・敲・磨石 (99～108) (5)

10点図示した。石質については一覧表を参照されたい。99は片面に磨面をもち、その中央には2

つの凹部がみられる。また、片側縁には、磨面と自然面との間に平坦面をつくりだすほどの敲打が施されている。100は扁平で棒状を呈する。両面に凹部、片面と側縁部に磨面をもつ。特に、側縁部の磨耗度は激しく、光沢を帯びている。101は両面に2つの浅い凹部と上・下端に敲打痕をもつものである。なお、片側縁には両面にわたって調整剥離が施され刃部様のものが作り出されている。102は平面・断面とも長方形を呈すものである。片面に浅い凹部をもち、側面部には磨面、下方には敲打痕を残している。103は、片面に敲打によると思われる器面の剥落が全体にわたってみられる。もう片方の面には磨面がみられ、その中央には凹部がみられる。104は両面及び両側面の4ヶ所に深い凹部をもつものである。また、片側面を中心に顕著な敲打面が残されている。105は先端の一部と下端に敲打痕を残す。特に、下端には敲打の結果平坦面が形成されている。106は棒状の磨石で、両面に磨面をみる。107は、石鹼形を呈するもの。片面に凹部をもち、もう片面には磨面をみる。この磨面はわずかに彎曲するもので、磨面中央部よりも周辺部の方が磨耗度が激しい。また、両端に敲打痕をもつ。108は凹石の破片である。

なお、土壙320より、石皿が1点出土しているが、今回は報告できなかった。

注(1) 鈴木道之助「石錐」『縄文文化の研究』7 1983 p.92

(2) 小林康男「石器」『男屋敷—長野県塩尻市男屋敷遺跡発掘調査報告書—』塩尻市教育委員会 1982 p.149～151

(3) 石錐の各部名称については

矢島國雄・前山精明「石錐」『縄文文化の研究』7 1983 を参考にした。

(4) 打製石斧の側縁・刃部を残された磨耗痕については、スクリーントーン及び← →で示した。

(5) 凹・敲・磨石については、器面に施された使用痕等を表現するため、図中で次の記号を用いた。

磨面の範囲は、点線及び← →

敲打痕の範囲は、スクリーントーン及び← →

3. 石製品（第85図）

4点出土した。1は玉髓製の玦状耳飾で、約 $\frac{1}{2}$ を失っている。挽き切りによる切り目作業が1度放棄され、新たに切目をやりなおして成形されている。器面には研磨によると思われる擦痕が観察される。2は瑪瑙製、管玉未製品の可能性をもつもの。研磨途中のものと思われ、器面に鈍い稜が残り、横断面が多角柱状を呈している。なお、両端には研磨は及んでいない。3は玉髓製、有孔の飾玉である。欠損部分が多いので、全体の形状はうかがえない。孔壁には、穿孔の際につけられたと思われる横走る擦痕がみられる。4は閃緑岩製、有孔線刻礫と仮称したものである。器形はやや胴張りのカマボコ形を呈し、全面には研磨による擦痕が観察される。上・下面は研磨によって平坦面が作り出されている。A面は、中央に2条の断面U字状の切目が施され、さらに、その上から穿孔されている。この2孔は内部で結合している。なお、切目については、曲面上での穿孔の際に錐のプレを防ぐためのものと思われる。B面には、研磨によって側面部に鈍い稜が作り出されている。C面は下方に穿孔しかけの痕跡をとどめている。また、平坦面には線刻が施されている。線刻の内容は不明である。なお、このなかには、漢字の「天」・「十」に類似するものもあるが、線刻の切り合いの関係から復元した刻順と漢字の筆順は明らかに異なっている。D面は、研磨によって作り出された平坦面に穿孔が施されている。穿孔は途中で止められているが、その断面は鋭いV字状を呈している。おそらく、この孔はA面の2孔とともに、ヒモ通しに関わるものと思われる。所属時期は不明である。

4. 土製品（第47図）

第7号住居址（12～14）及び土壙19（15）から出土している。12は上からみると楕円形を呈し両側面に竹管による細かい押引文を施文している。欠損してよくわからないが、縦方向に貫通孔があったようだ。13は雑な造形の土製品で、突起が2本下方へ出ていて、その間に浅い孔が刻まれている。土偶の一種かとも思うが何であるかよくわからない。14は台を有し胴の張る形態のミニチュア土器で完形品であるが胎土が悪く脆い。15は台部をもつ筒形を呈す有孔土器のミニチュアである。孔の数は体部のものが10ヶ、台部に2ヶである。

5. 鉄器（第44図）

第12号住居址から3点出土している。1は長さ8.0cmを測る細長いもので断面は長方形を呈する。鏃の一部とみられる。2・3は厚さが1～2mmという薄いものでやはり鏃の一部と考えられる。重量は1が8.52g、2が2.70gを測る。これらの他にも検出面から数点の出土があったが近・現代の攪乱に伴うものとしてここでは除外した。

第3表 白神場遺跡石器一覽表

石 鏃

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	基部	出土	備考
1	3.1	1.7	0.5	1.54	黒曜石			第1住(覆土)	石鏃未製品
2	2.6	1.4	0.6	1.73	"		凹基無茎	第1住	
3	2.0	(1.4)	0.4	(0.57)	"	片脚	"	第5住(覆土)	
4	2.7	1.7	0.6	2.30	"		凹基	"	
5	(2.3)	(1.0)	0.4	(0.46)	"	片脚端	凹基無茎	第6住	
6	1.6	1.5	0.3	0.45	"		"	第7住	
7	1.8	1.4	0.4	0.60	"		"	第7住(Pit 1)	
8	(1.4)	1.5	0.4	(0.51)	"	先端	"	"	
9	(1.5)	1.7	0.5	(0.80)	"	"	"	"	
10	(2.4)	(1.9)	(0.7)	(3.19)	"	胴~基部		"	
11	0.7	(1.2)	(0.2)	(0.15)	"	胴~先端	凹基無茎	"	
12	(1.5)	(1.3)	0.4	(0.86)	"	先端・片脚端	"	第7住(覆土)	
13	2.1	1.8	0.4	1.50	"		平基	第9住(Pit 1)	
14	(1.7)	(1.6)	0.3	(0.70)	"	両脚端	凹基無茎	"	
15	2.1	(1.3)	(0.5)	(0.73)	"	片脚	"	"	
16	1.7	2.0	0.3	1.03	"	先端	"	"	
17	2.3	1.7	0.3	0.86	"		"	第12住	
18	(2.7)	(1.5)	(0.3)	(0.70)	"	片脚	"	方形周溝墓1	
19	(1.8)	(1.9)	(0.3)	(1.04)	"	先端・基部		集石1	
20	(1.9)	(1.8)	0.3	(0.64)	"	片脚	凹基無茎	土壇19	
21	(1.7)	1.7	0.4	(0.93)	"	先端	平基	"	
22	2.0	1.6	0.4	0.83	"		凹基無茎	土壇322	
23	(2.2)	(1.5)	0.3	(0.53)	"	片脚	"	竪穴状遺構6	
24	1.9	1.8	0.5	1.42	"		平基	I区	第1住北東
25	(2.3)	(1.6)	0.5	(1.56)	"	基部	"	"	S 6 W 54グリッド
26	(1.4)	1.4	0.3	(0.48)	"	先端	凹基無茎	"	N 0 W 6グリッド
27	(1.8)	(1.5)	0.3	(0.59)	"	片脚	"	"	N 12 W 21グリッド
28	(1.4)	1.6	0.4	(0.68)	"	先端	"	"	
29	(1.7)	(1.0)	0.3	(0.43)	"	先端・片脚	"	II区	
30	(1.1)	(0.7)	(0.2)	(0.12)	"	胴~基部		III区	
31	(3.0)	(1.7)	(0.4)	(1.10)	"	片脚	凹基無茎	IV区	
32	(2.4)	(1.1)	0.3	(0.42)	"	先端	凹基有茎	"	
33	1.9	(1.5)	0.6	(1.35)	"	基部端	平基	III区表採	
34	(2.1)	(1.4)	0.3	(0.78)	"	両脚	凹基無茎	"	
35	(2.4)	1.4	0.6	(1.67)	"	先端	凹基	"	

尖頭器

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
36	6.6	3.8	1.1	27.99	チャート		竪穴状遺構5	

石 錐

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
37	2.3	1.7	0.4	1.32	黒曜石		第5住(覆土)	
38	2.7	1.2	0.6	1.55	"		第6住	
39	3.3	1.1	0.4	0.67	"		"	
40	2.3	1.6	0.5	0.74	"		第7住	
41	(1.7)	2.2	0.9	(2.64)	"	錐部	第7住(覆土)	

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
42	2.6	0.9	0.4	0.71	黒曜石		第7住	
43	2.7	0.8	0.6	0.64	"		"	
44	(1.7)	0.5	0.3	(0.32)	"	錐部端	第9住(覆土)	
45	2.5	1.1	0.5	1.14	"		"	
46	5.8	0.9	1.0	4.30	"		第9住	
47	2.4	1.2	0.7	1.72	"		土壙9	石錐?
48	2.7	0.8	0.4	0.62	"		土壙13	
49	2.8	1.2	1.0	2.59	"		竪穴状遺構5	
50	1.9	1.4	0.4	0.73	"		竪穴状遺構6	
51	(2.2)	0.7	0.5	(0.77)	"	錐部端	I区	
52	(1.6)	1.8	0.6	(1.10)	"	錐部	IV区表採	

ピエス・エスキーユ

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
53	2.3	2.0	0.6	2.45	黒曜石		第1住	
54	1.6	1.5	0.6	1.28	"		"	
55	2.4	1.7	0.8	2.57	"		第7住	
56	2.3	2.0	0.8	4.33	"		I区	N27E 3グリッド
57	2.0	1.3	0.8	1.60	"		IV区	S21E24グリッド

スクレーパー

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
58	4.6	2.5	0.6	5.53	黒曜石		第1住	
59	3.7	4.0	0.8	9.59	チャート		土壙32(覆土)	
60	3.5	2.3	0.7	4.97	黒曜石		IV区	S21E24グリッド

石 匙

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
61	4.8	5.5	1.3	29.87	チャート		第6住	
62	4.1	5.2	0.7	12.37	"		第7住	
63	3.1	3.4	0.5	4.39	黒曜石	一部欠	"	
64	(2.6)	(3.2)	0.4	3.25	チャート		土壙22	
65	2.8	3.9	0.7	5.88	"		土壙89	
66	3.2	5.1	0.7	8.75	"		検出面	

石 核

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
67	2.8	4.2	1.2	14.71	黒曜石		第1住	
68	2.7	4.5	1.5	16.20	"		"	

横刃型石器

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
69	6.8	8.3	2.1	122.1	砂岩		第1住	
70	7.9	5.3	2.2	127.2	"		竪穴状遺構5	刃部磨耗痕
71	8.0	6.3	1.6	106.9	ホルンフェルス(砂岩)		"	"

打製石斧

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
72	(10.4)	3.4	1.0	(35.3)	砂岩	頭部	第1住	側縁部磨耗痕
73	(7.8)	4.4	1.1	(43.2)	"	"	"	刃部磨耗痕
74	(5.3)	3.4	0.7	(15.3)	"	胴～刃部	"	
75	(8.3)	3.7	0.8	(22.8)	砂質粘板岩	頭部	第7住	
76	(7.0)	(4.2)	1.5	(59.0)	砂岩	胴～刃部	"	頭部磨耗痕
77	(4.4)	(5.5)	(1.1)	(33.1)	"	頭部・刃部	"	
78	(7.2)	3.7	1.5	(49.8)	"	刃部	方形周溝裏1	風化激しい
79	9.1	7.3	2.8	230.2	ホルンフェルス(砂岩)		" 3(検出面)	
80	(5.1)	4.4	1.1	(31.8)	砂岩	頭～胴部	土壌14	
81	7.2	4.3	0.6	26.0	ホルンフェルス(砂岩)		土壌29	
82	(8.5)	(6.2)	1.6	(75.7)	砂岩	頭～胴部	土壌45	
83	10.6	8.1	1.9	178.5	緑泥質砂岩		土壌59	
84	(15.8)	5.6	1.1	(233.7)	緑泥変岩	刃部	土壌81	刃縁部磨耗痕
85	18.2	8.4	3.5	650	ホルンフェルス(砂岩)		"	側縁部磨耗痕
86	(9.5)	4.5	2.0	(105.0)	"	刃部	竪穴状遺構3	
87	(6.3)	(6.0)	(1.9)	(87.7)	砂質粘板岩	胴～刃部	竪穴状遺構5	側縁部磨耗痕
88	(3.6)	(3.9)	(1.3)	(24.9)	ホルンフェルス(砂岩)	"	"	
89	(4.5)	(4.3)	(0.8)	(21.5)	"	頭～胴部	" (覆土)	破損面に使用痕
90	(5.2)	(5.7)	(1.6)	(55.2)	砂質粘板岩	"	I区	N12、W63グリッド
91	8.2	4.0	1.6	58.1	砂岩		"	S12、W45グリッド、刃縁部磨耗痕
92	6.1	4.7	1.3	42.5	緑泥質砂岩	胴～刃部	"	NS0、W51グリッド
93	7.7	8.3	2.8	212.4	千枚岩(粘板岩)	"	"	S6、W39グリッド
94	(6.3)	(4.8)	(1.3)	(50.4)	千枚岩(緑泥質)	"	"	S6、W48グリッド、側縁部磨耗痕
95	(17.0)	9.6	3.1	600	ホルンフェルス(粘板岩)	頭部端	III区	

磨製石斧

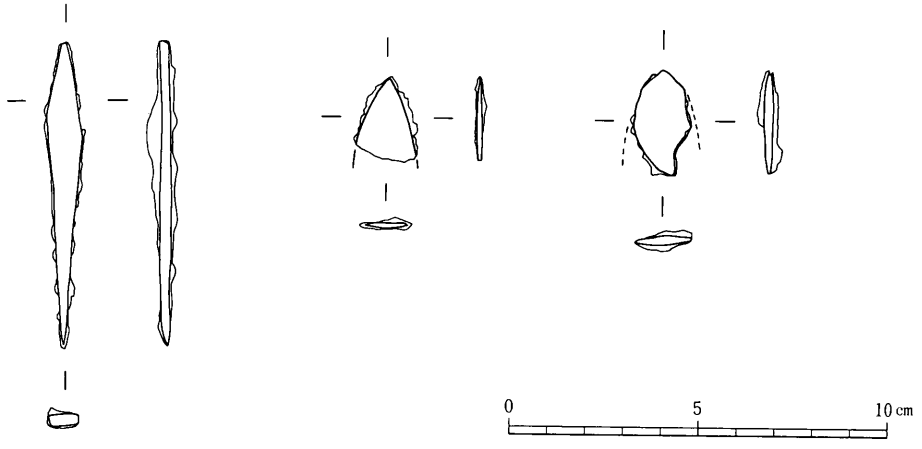
No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
96	1.6	3.5	0.9	4.9	蛇紋岩	頭～胴部	第7住	図なし
97	5.9	4.5	1.6	72.7	砂質粘板岩	頭・刃部	I区	N9、W60グリッド
98	8.6	4.9	2.1	117.5	蛇紋岩		"	

凹・敲・磨石

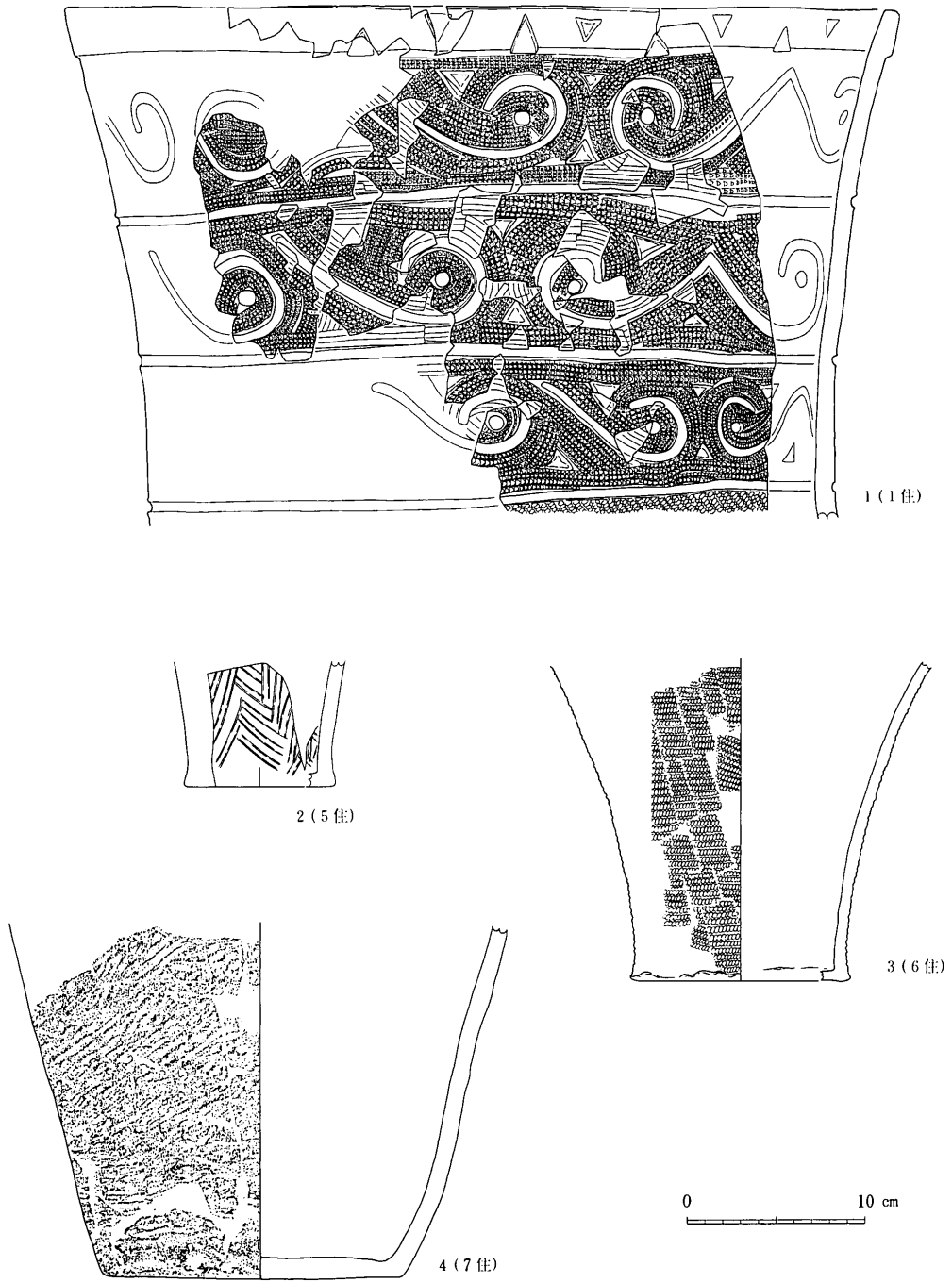
No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	凹部	敲打痕	磨面	出土	備考
99	10.7	8.2	3.2	430	安山岩		○	○	○	第1住	
100	14.1	5.6	0.8	243	砂岩		○(×2)		○	"	
101	10.3	5.6	2.5	189.9	"		○(×2)	○		"	
102	11.2	7.4	3.4	670	石英閃緑岩		○	○	○	"	
103	9.4	(8.3)	3.9	(525)	安山岩	ほぼ完	○	○	○	第7住	
104	10.0	(7.2)	4.4	(470)	"	片側辺	○(×4)	○		"	
105	9.1	5.9	2.4	282.7	砂岩			○			
106	(16.4)	(4.3)	(2.6)	(309.7)	"				○(×2)	第7住	
107	9.4	6.3	2.2	275.4	安山岩		○	○	○	土壌76	
108	(5.7)	(4.5)	(2.0)	(76.2)	砂岩	一部残	○			土壌77	

石製品一覧表

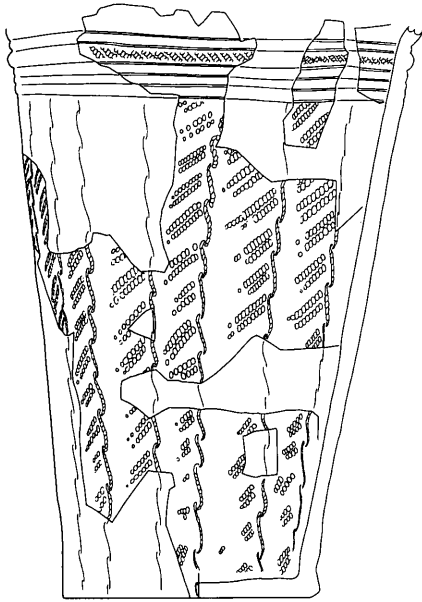
No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	欠損状況	出土	備考
1	塊状耳飾	(2.2)	(2.1)	(0.5)	(2.13)	玉髓	約1/2欠	第7住	
2	管玉未製品?	(1.7)	0.7	0.7	(1.61)	瑪瑙	両端	II区	
3	—	(1.8)	(1.6)	(0.7)	(1.90)	玉髓	一部残	第7住	
4	有孔線刻磔	4.0	2.9	2.1	41.63	閃緑岩		I区	



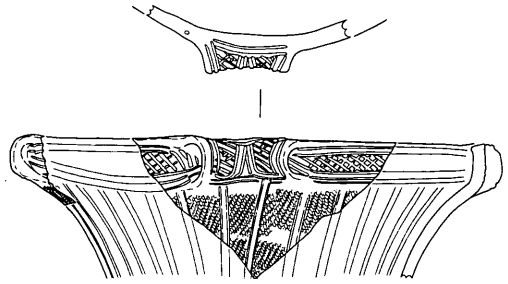
第44図 白神場遺跡第12号住居址出土鉄器



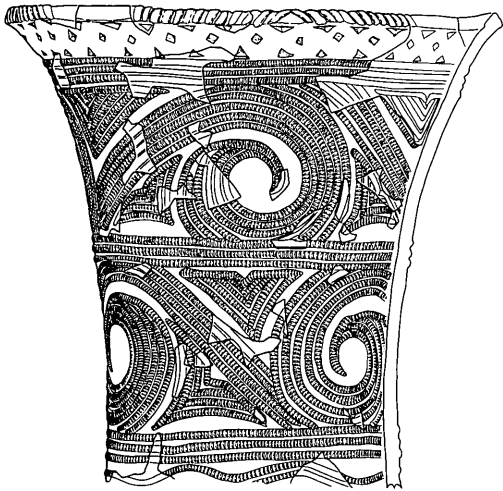
第45図 白神場遺跡縄文土器実測図 (1)



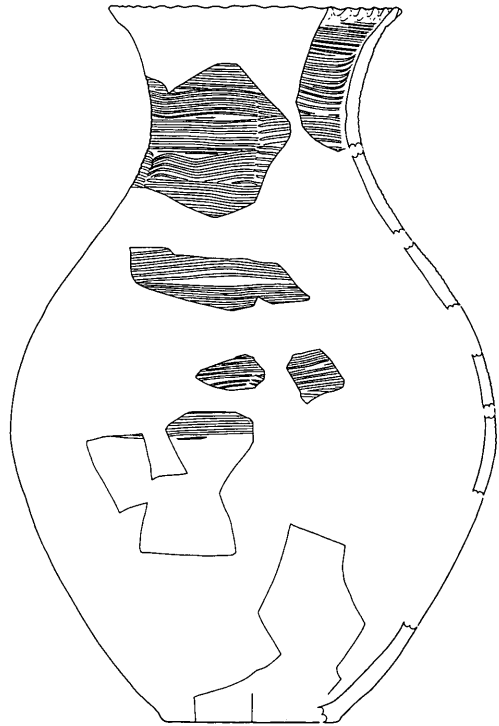
5 (7住)



6 (7住)



8 (9住)

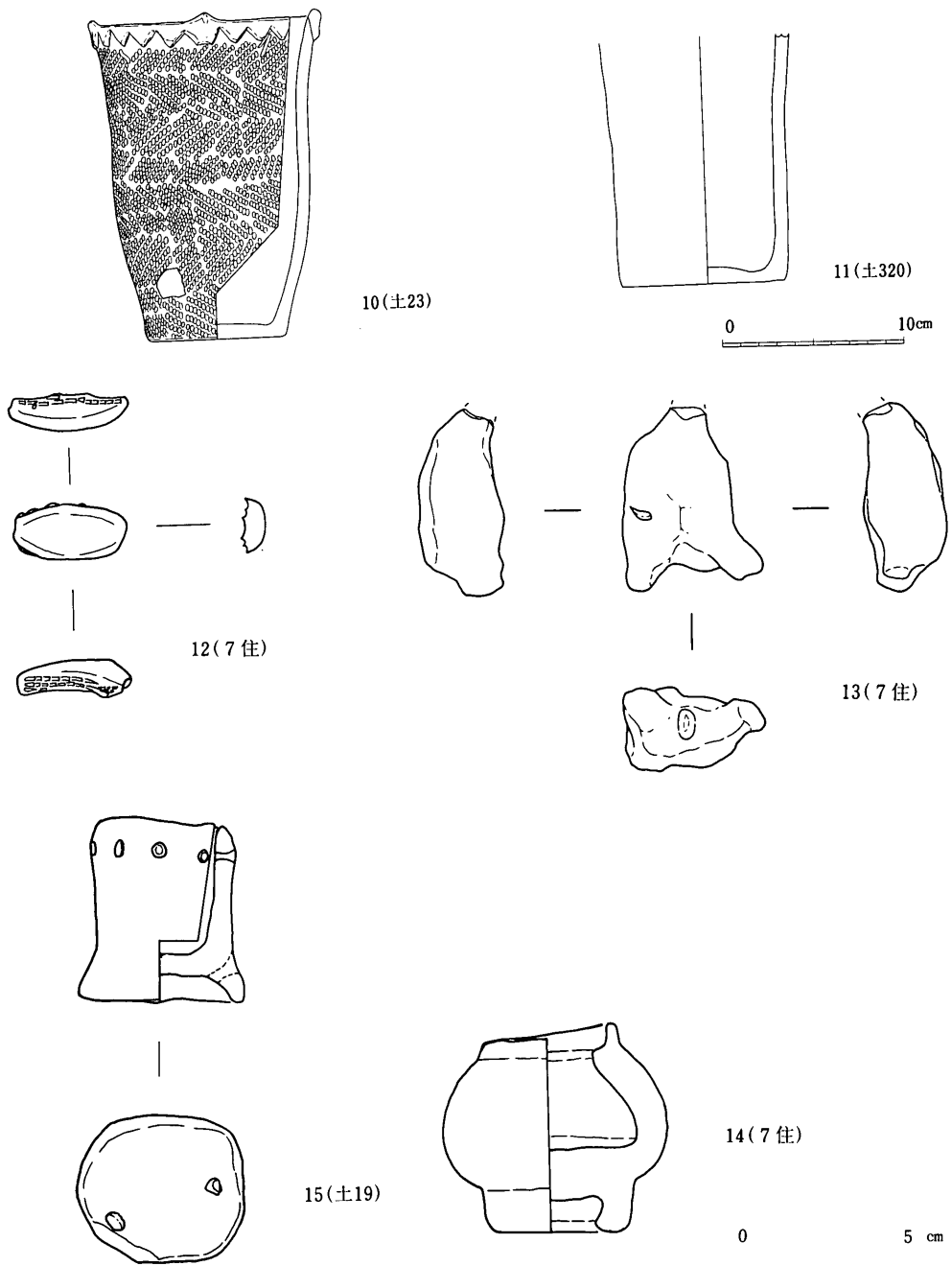


9 (土46)

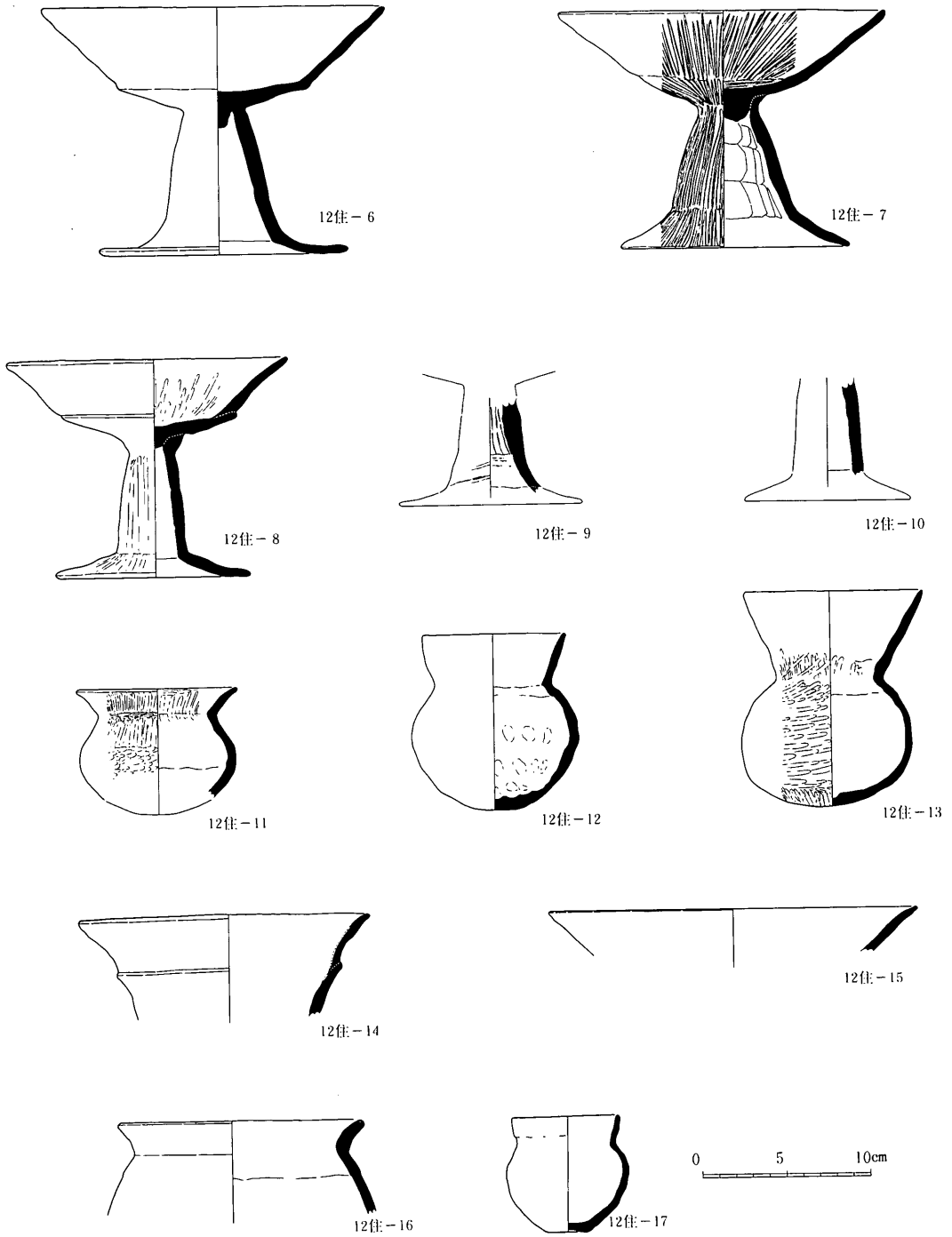
0

10 cm

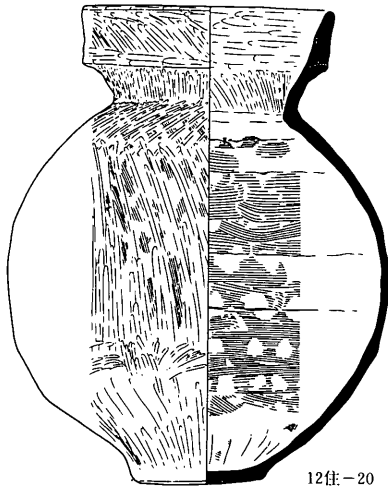
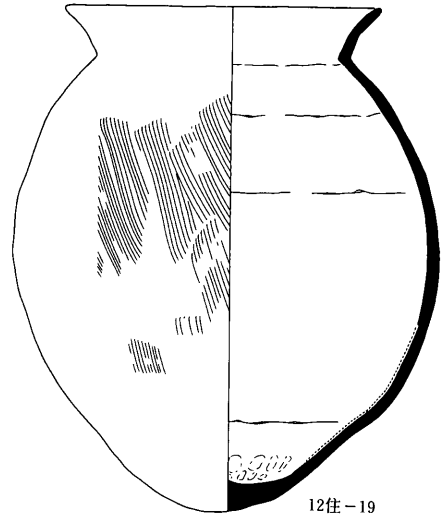
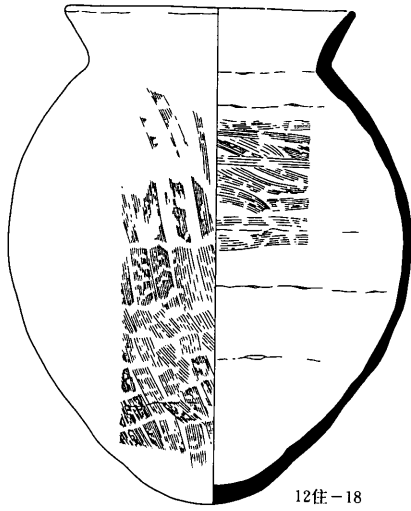
第46図 白神場遺跡縄文・弥生土器実測図(2)



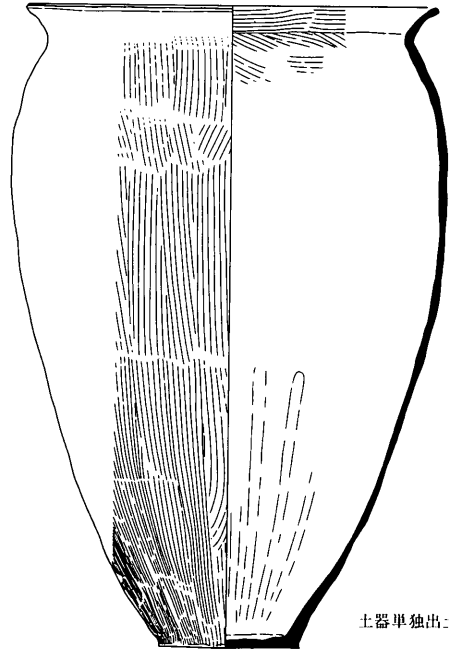
第47図 白神場遺跡縄文土器・土製品実測図 (3)



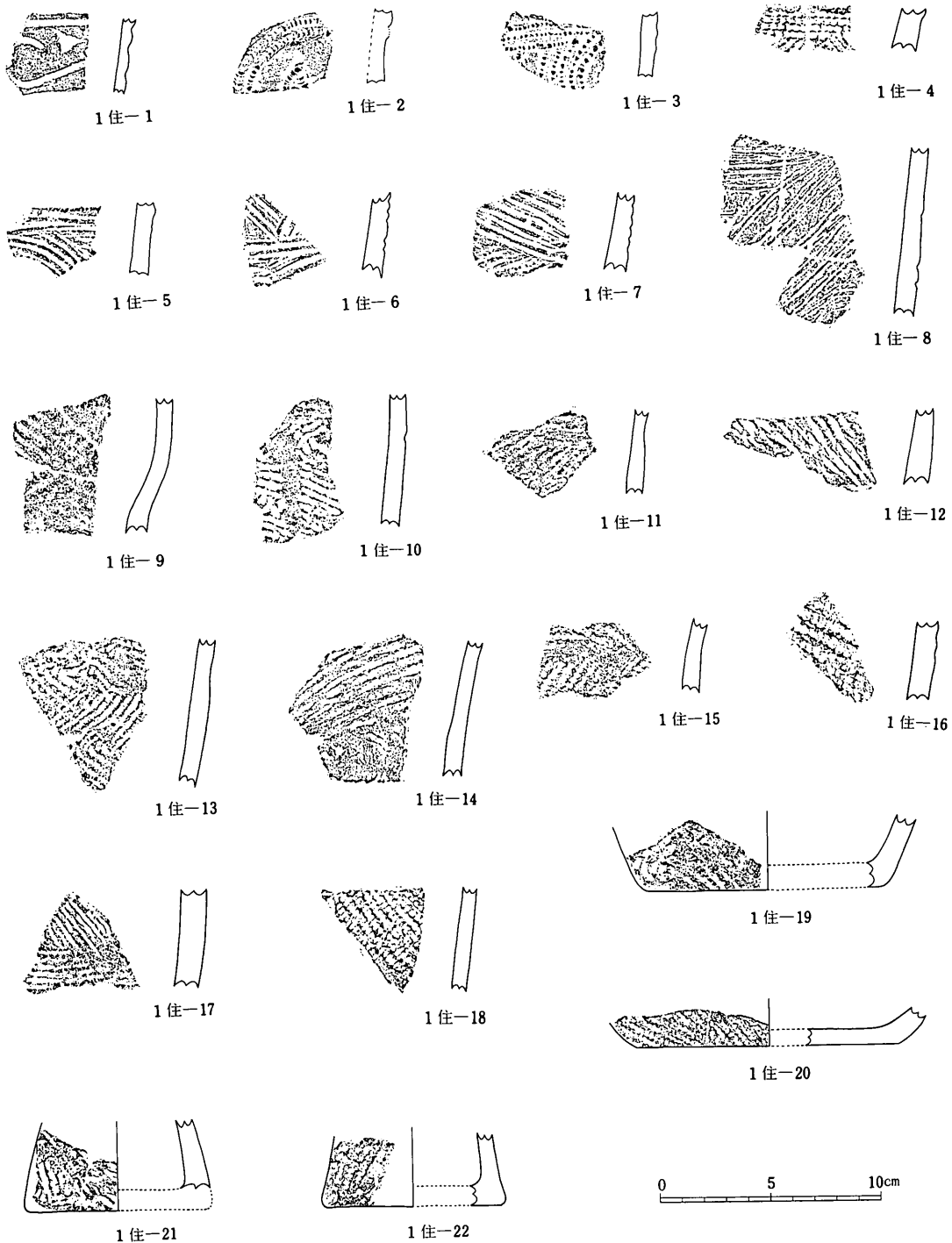
第49図 白神場遺跡土師器実測図 (2)



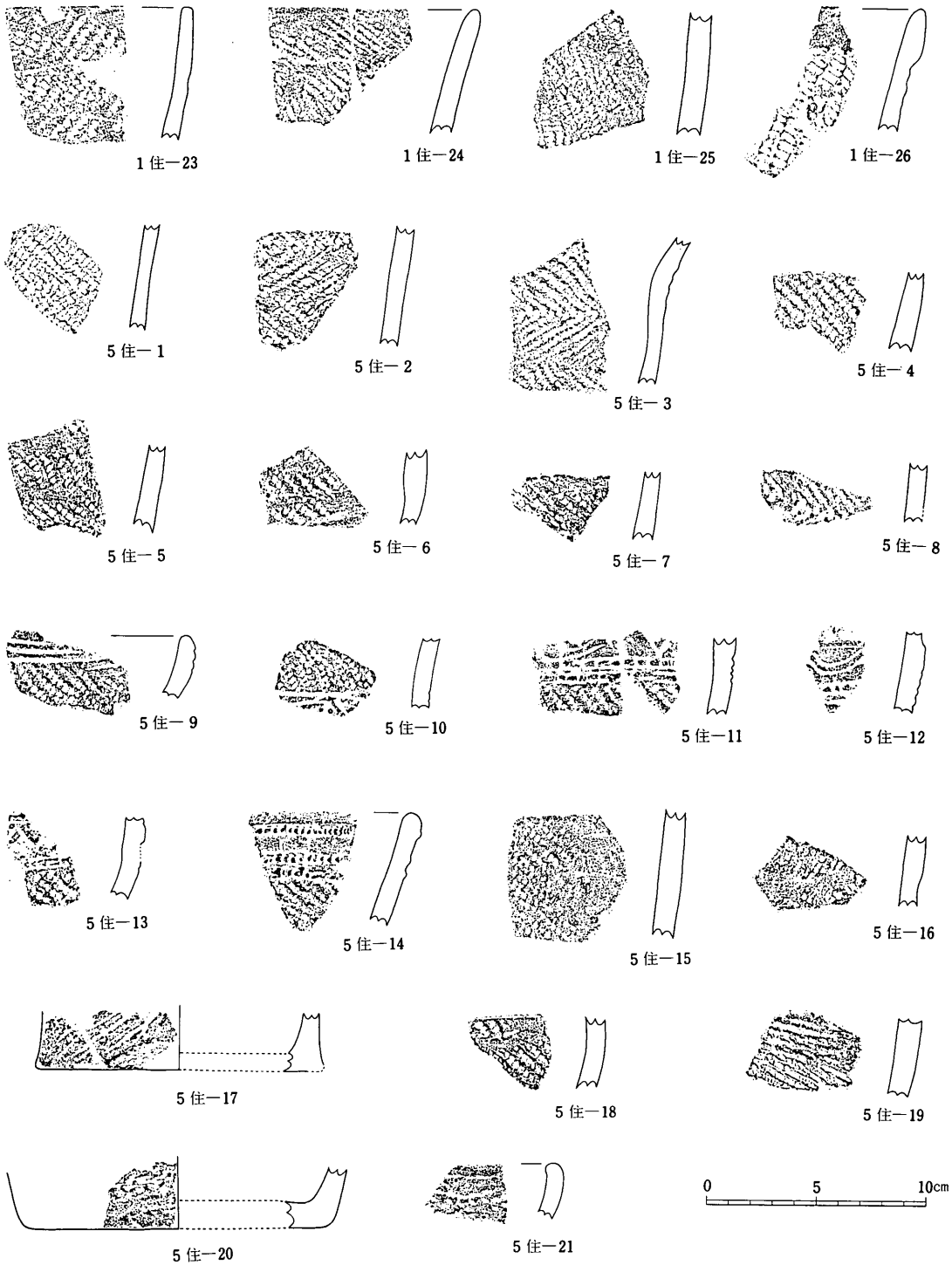
0 5 10cm



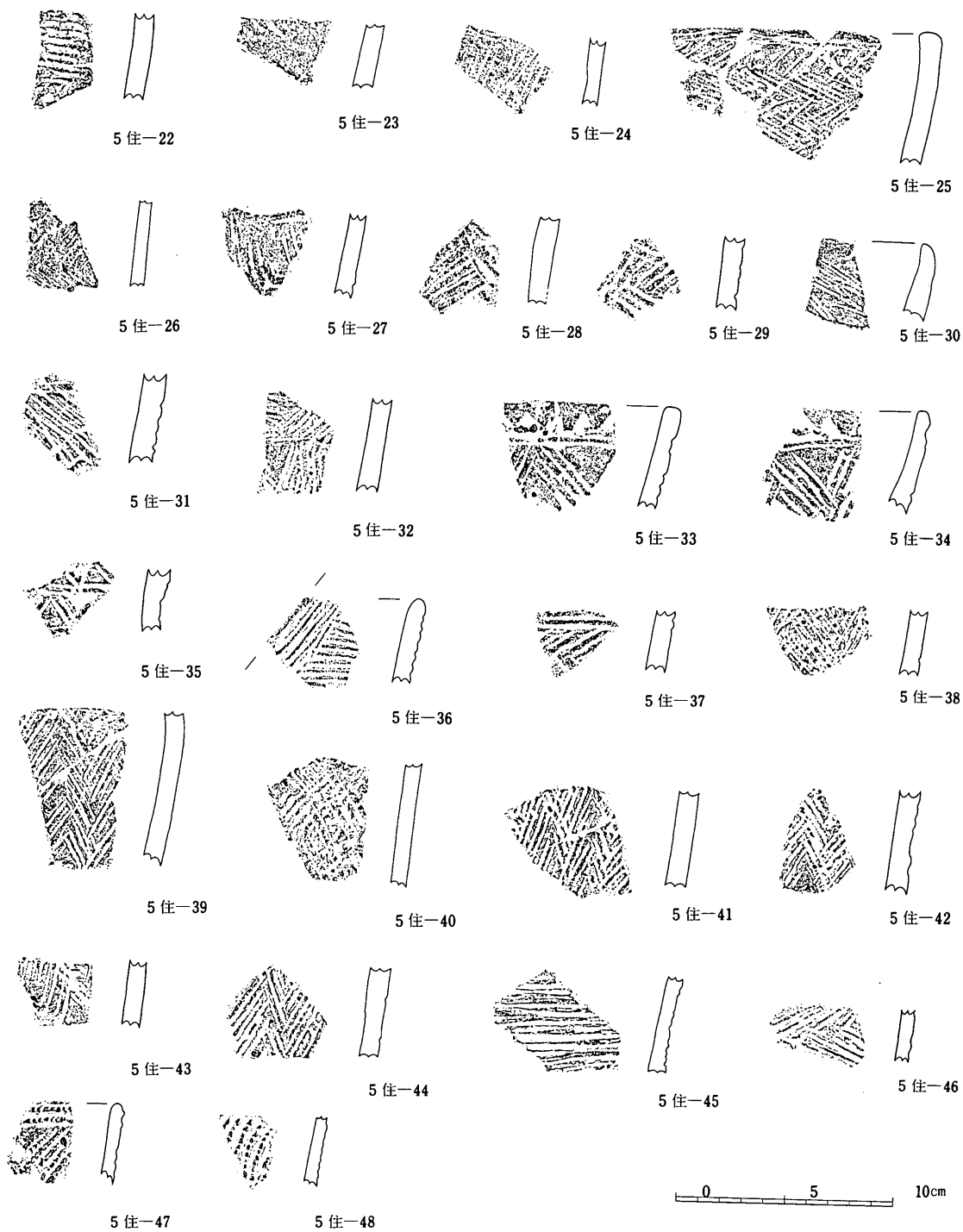
第50図 白神場遺跡土師器実測図 (3)



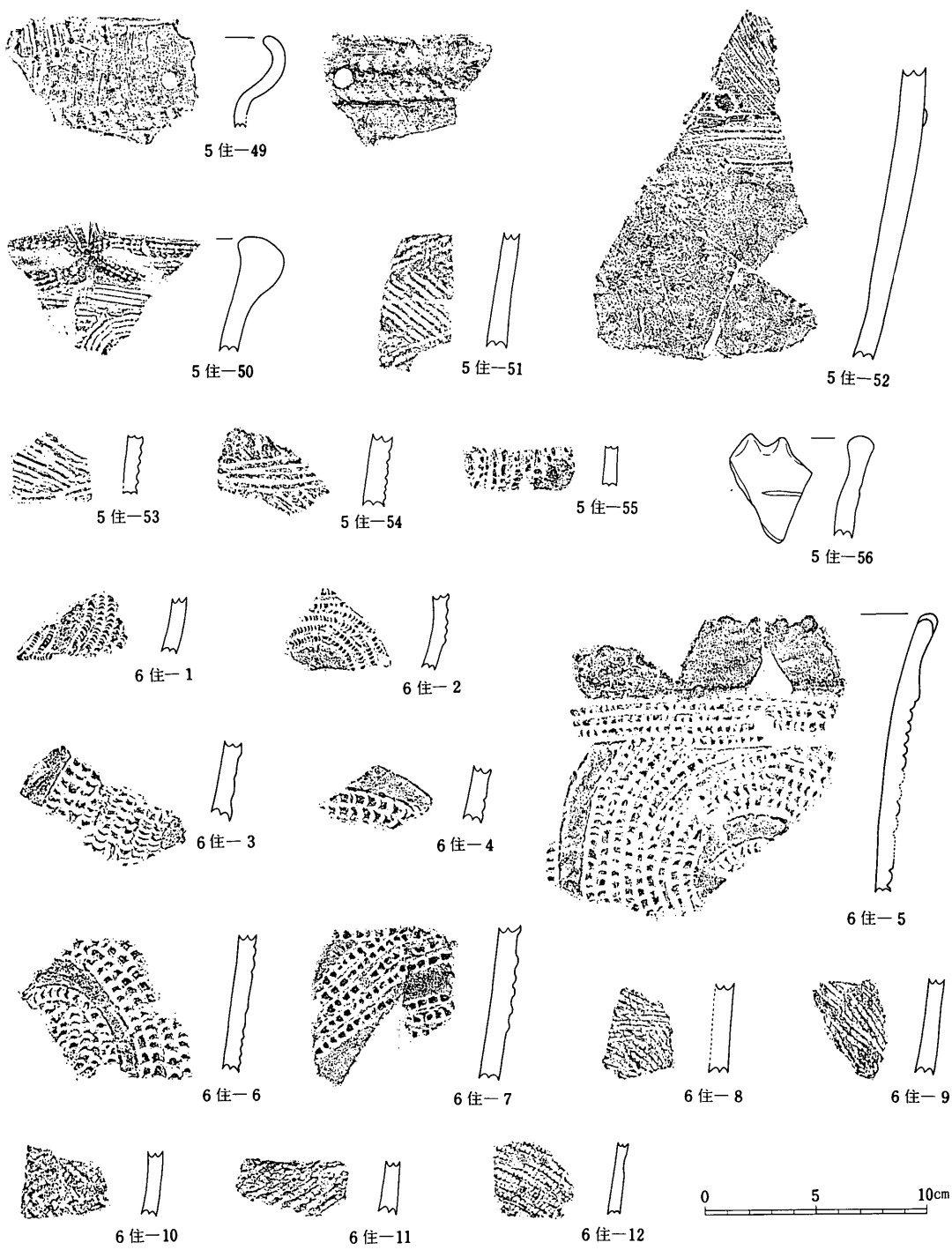
第51図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (1)



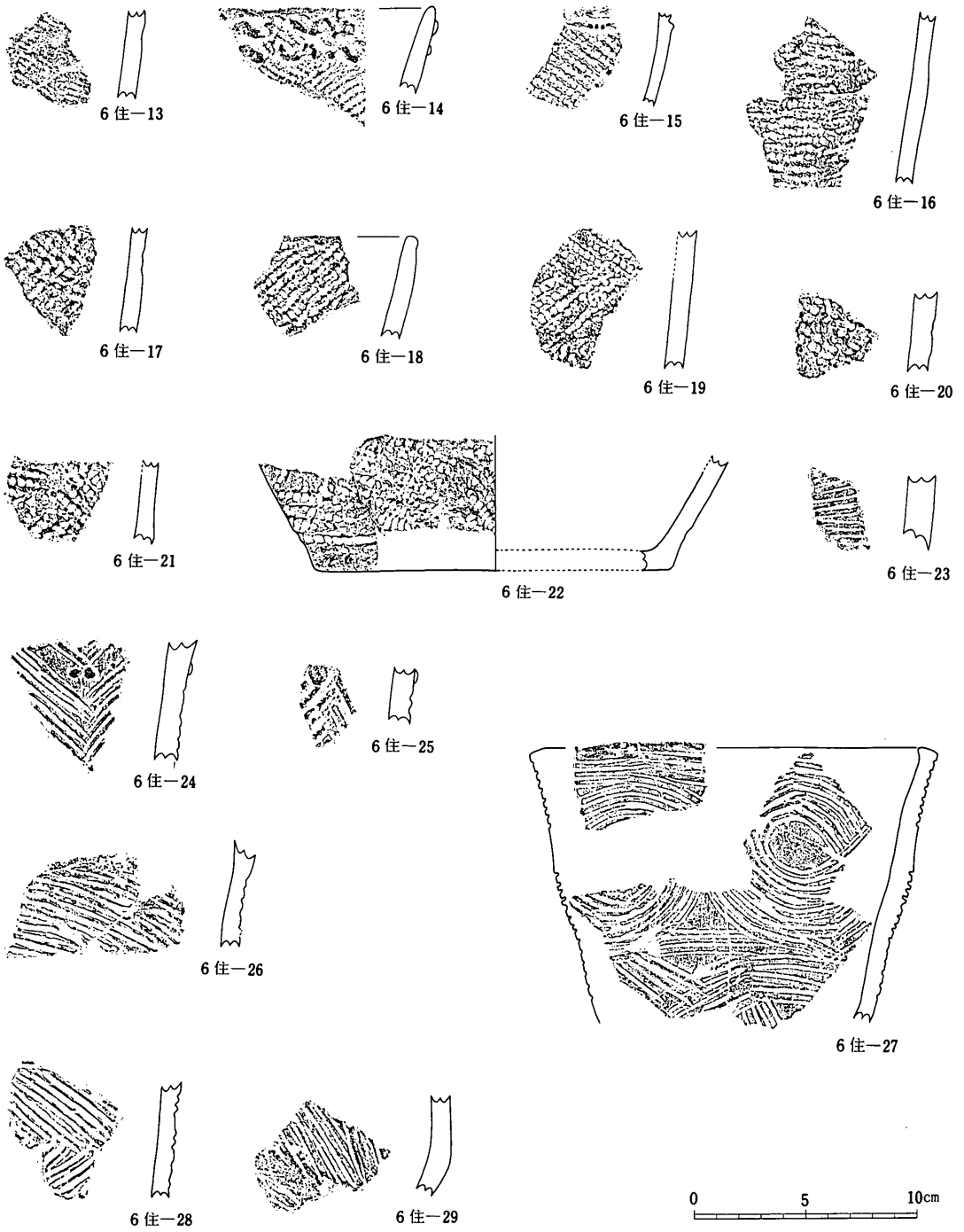
第52図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (2)



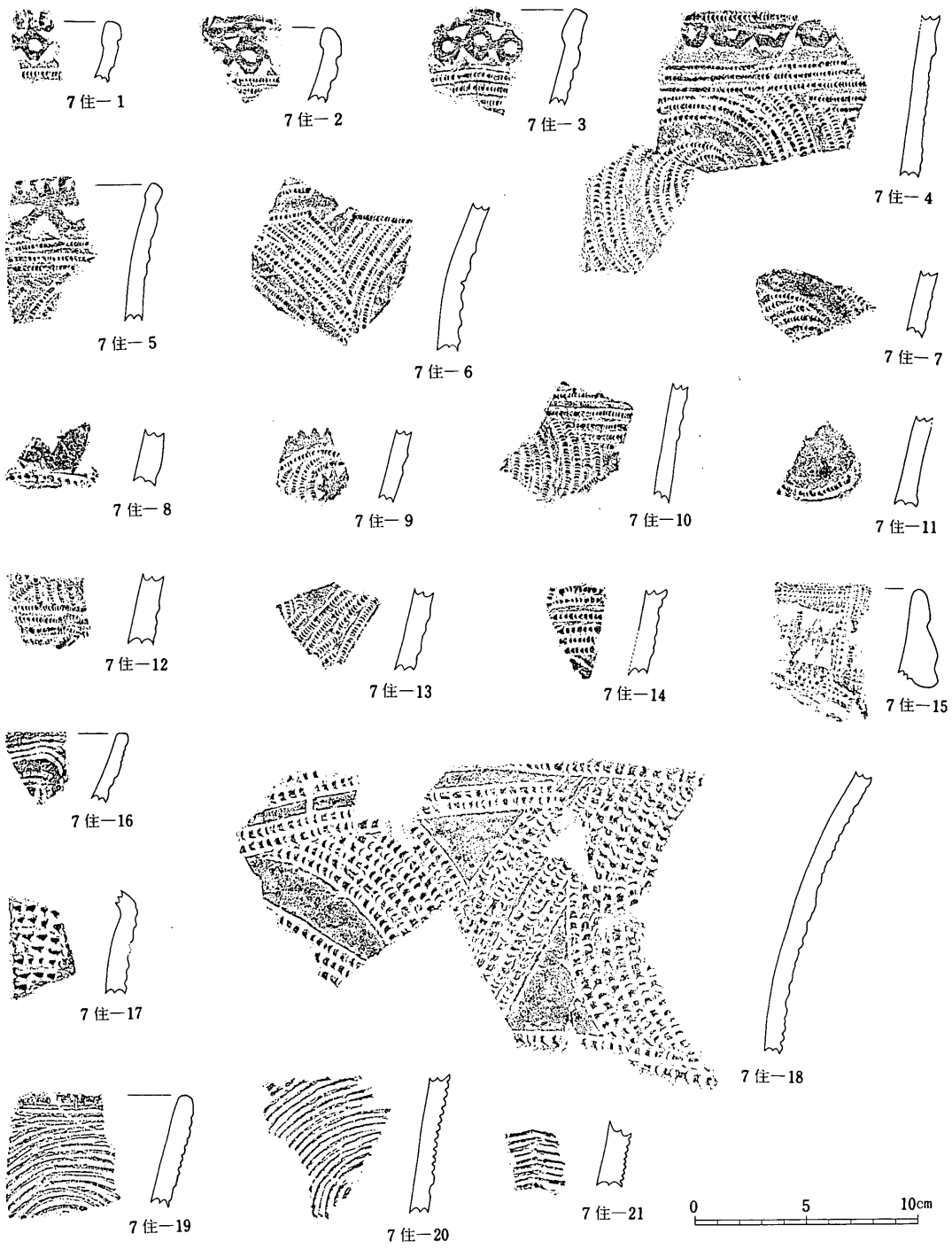
第53図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (3)



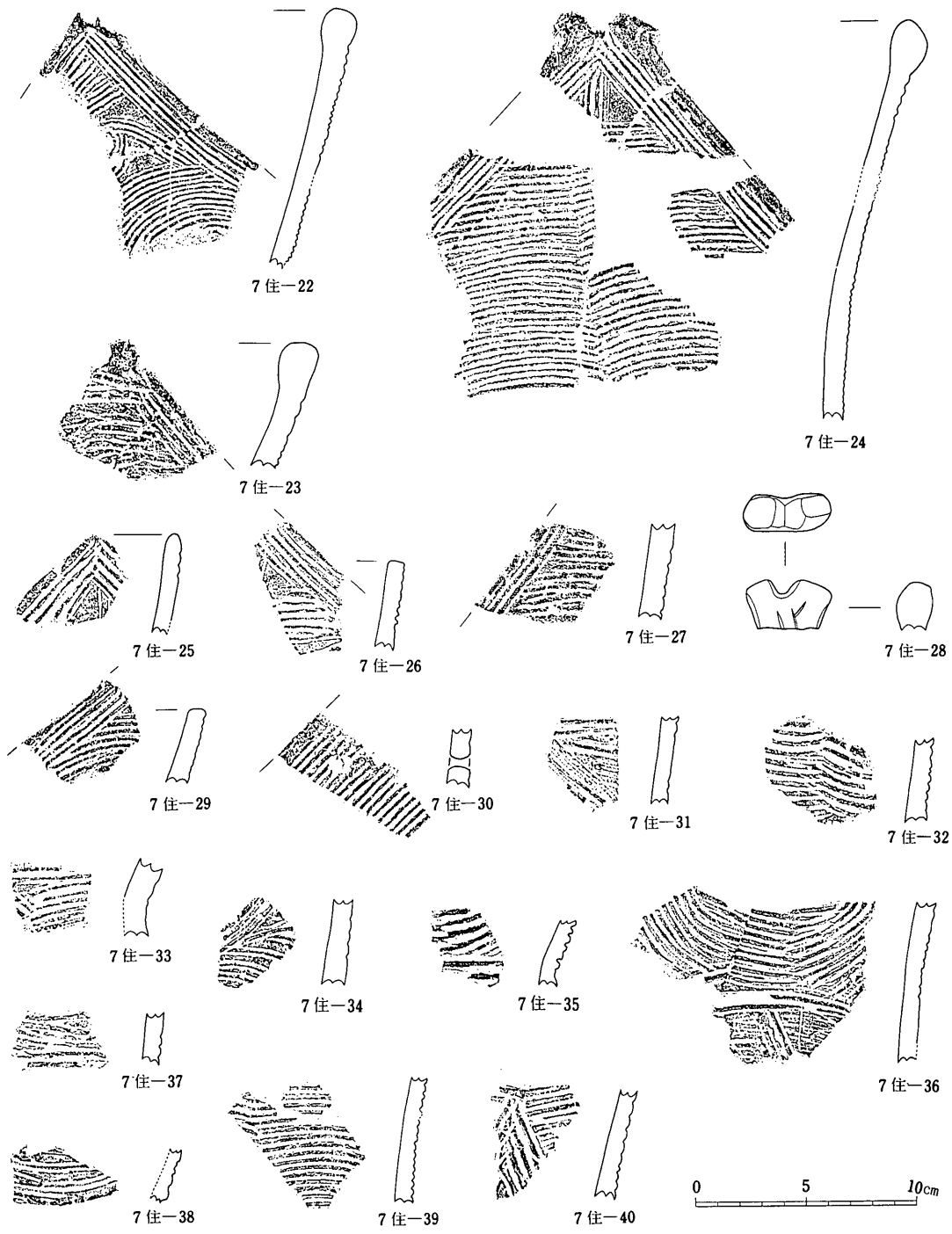
第54図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (4)



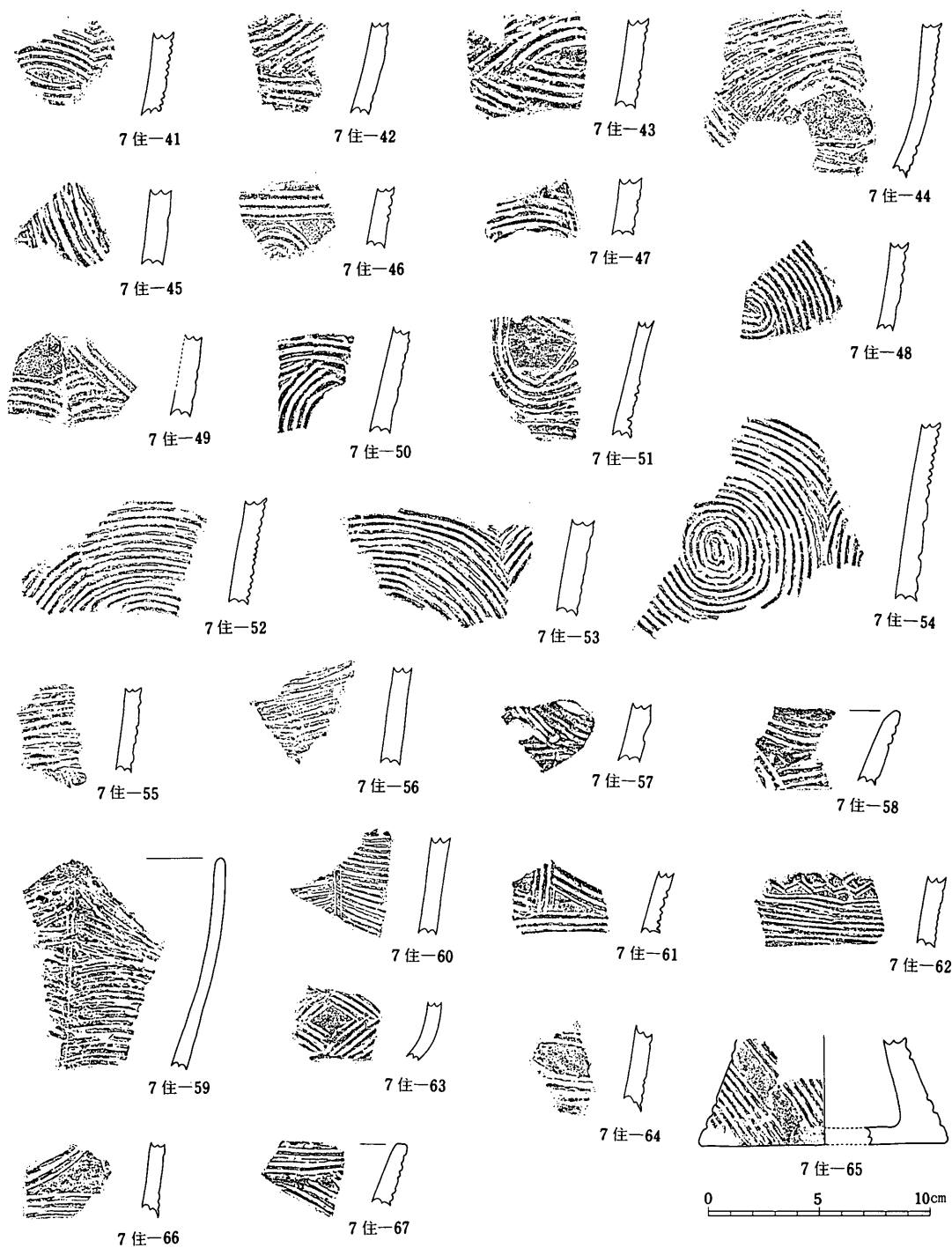
第55図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (5)



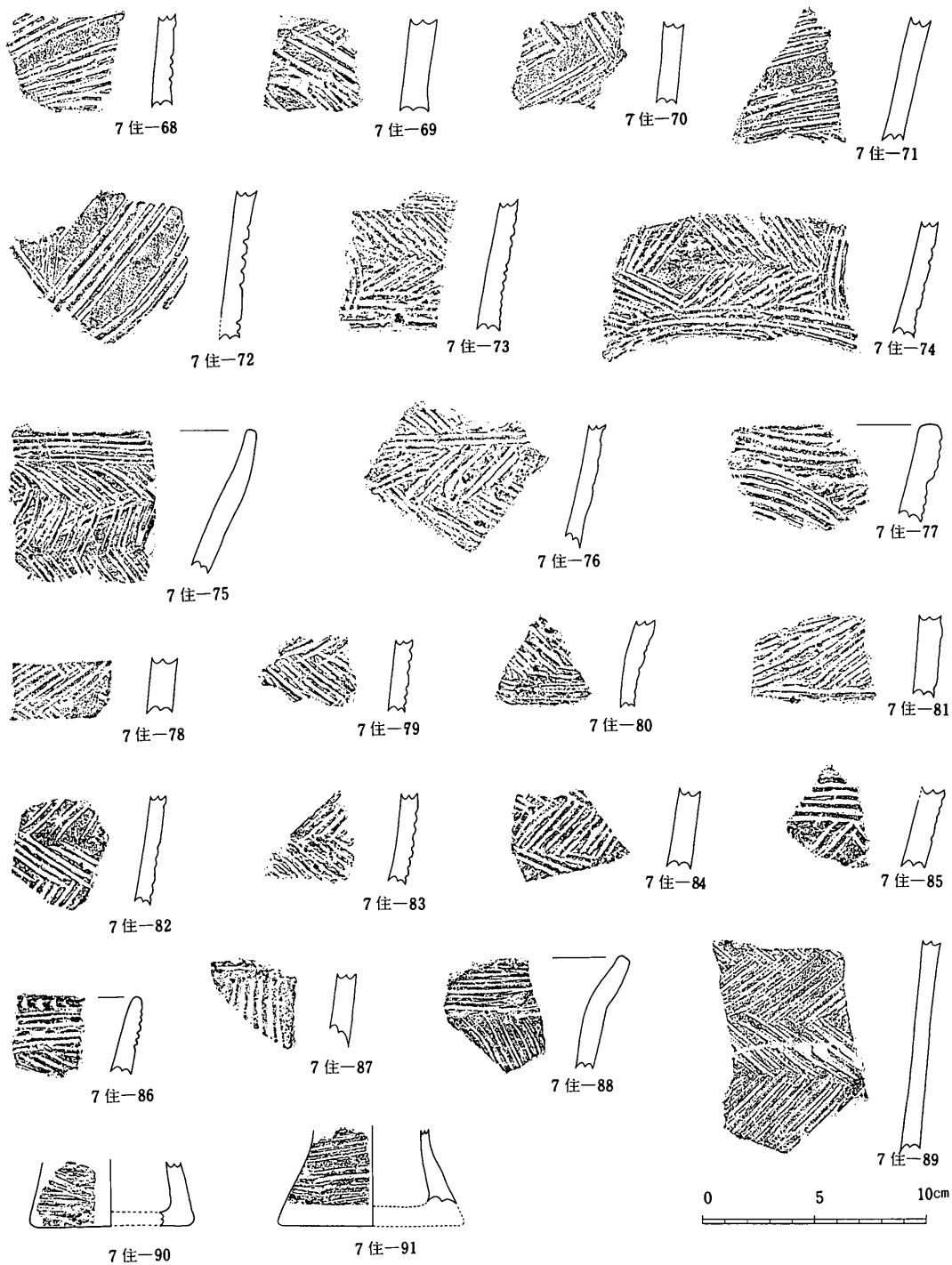
第56図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (6)



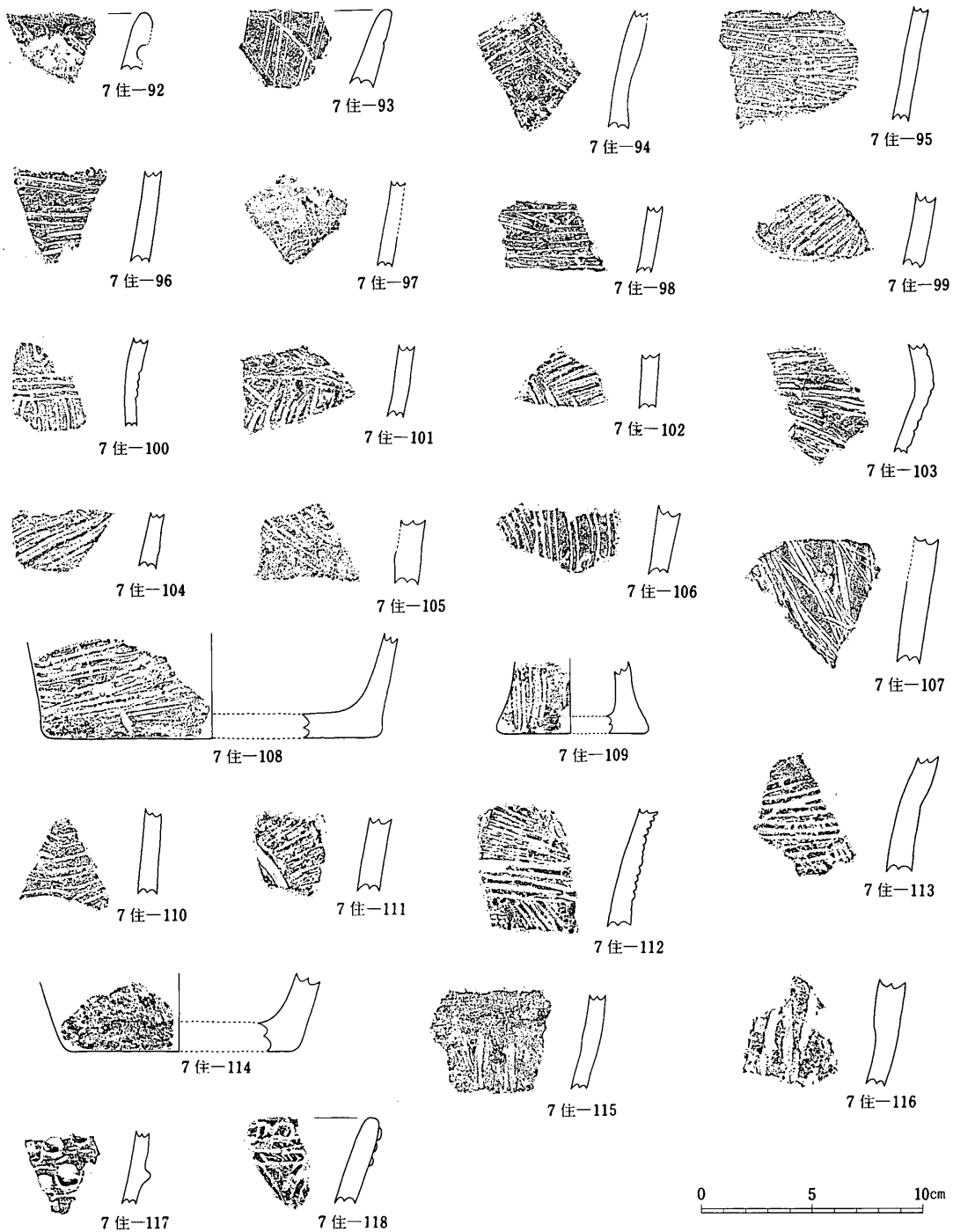
第57図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (7)



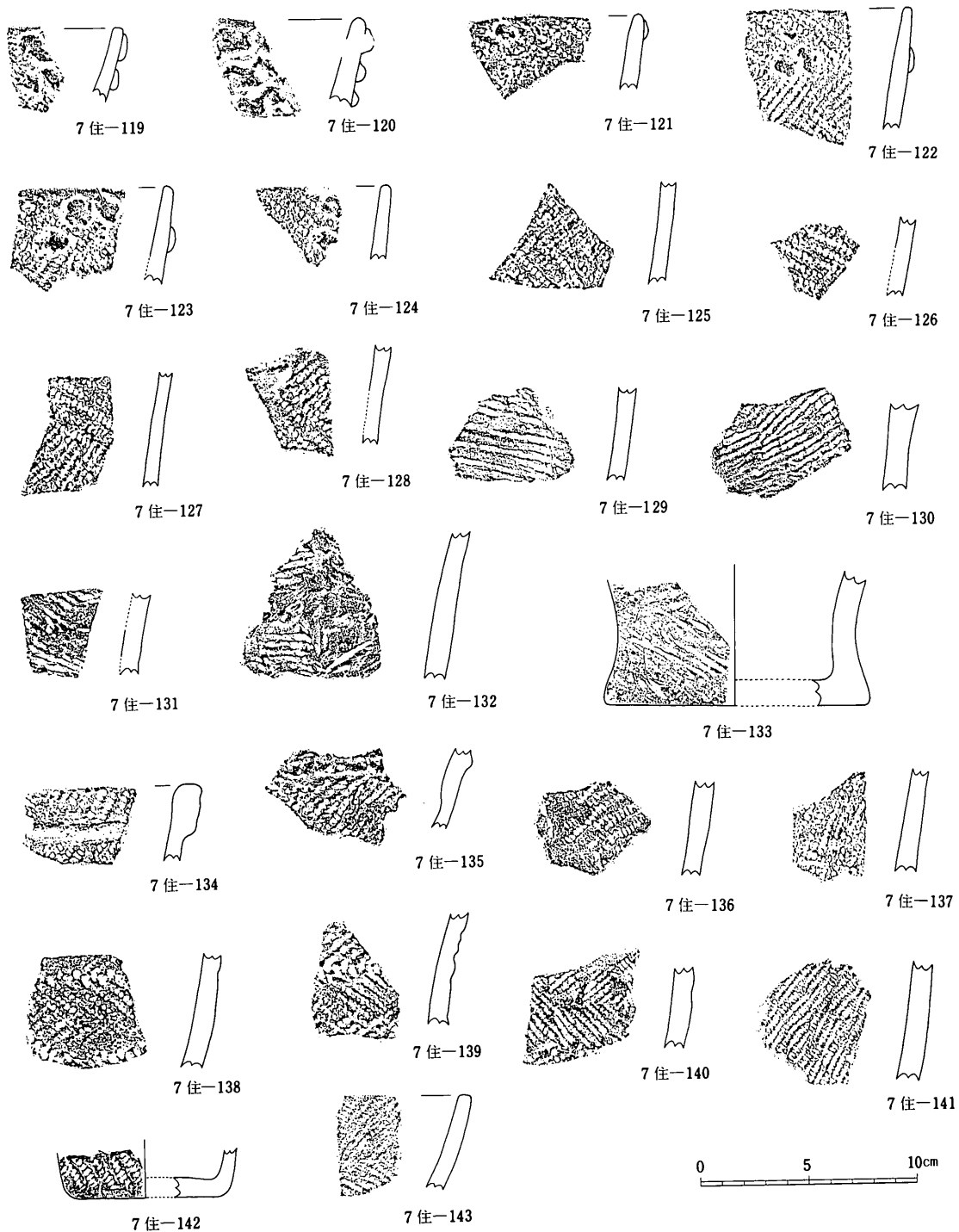
第58图 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (8)



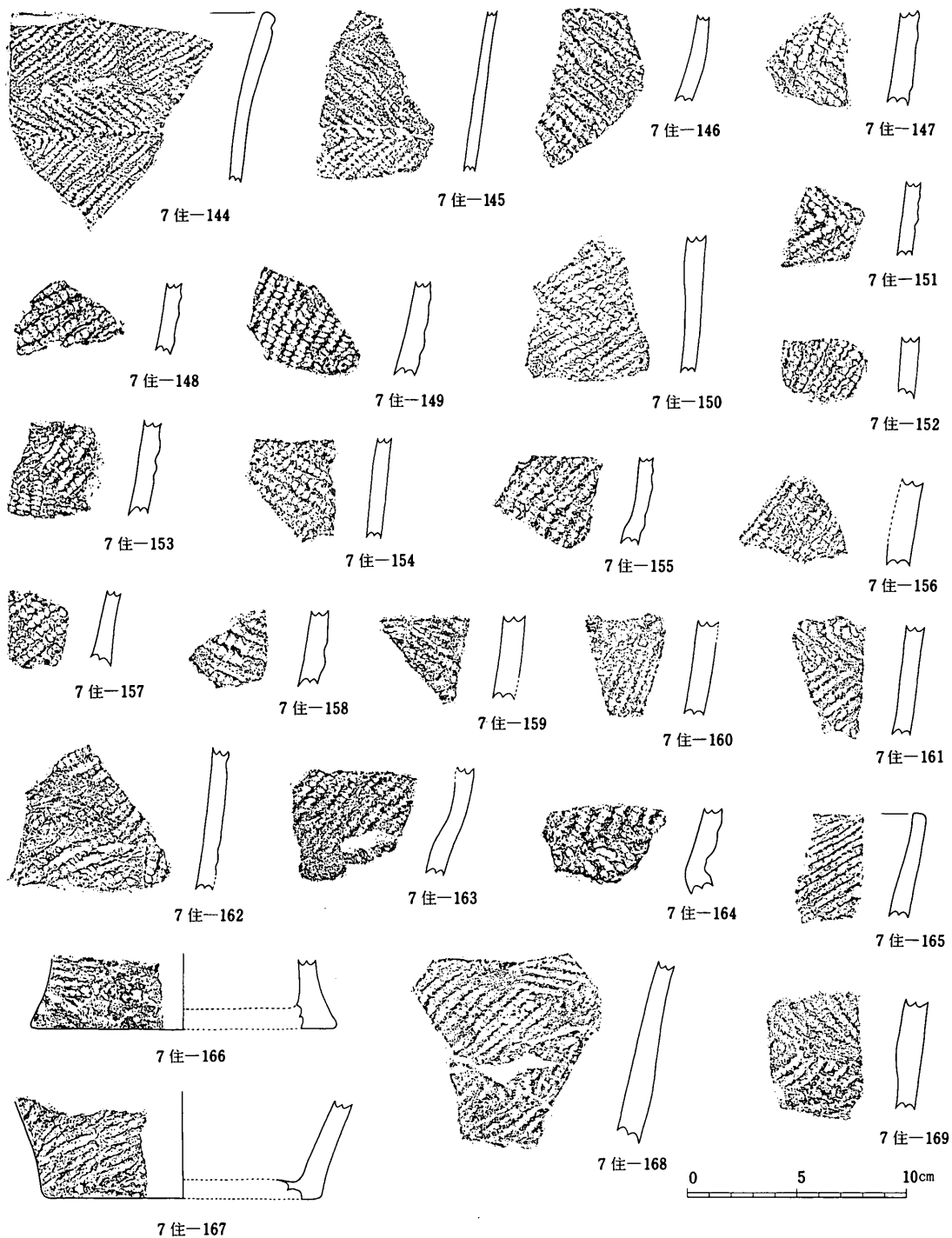
第59图 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (9)



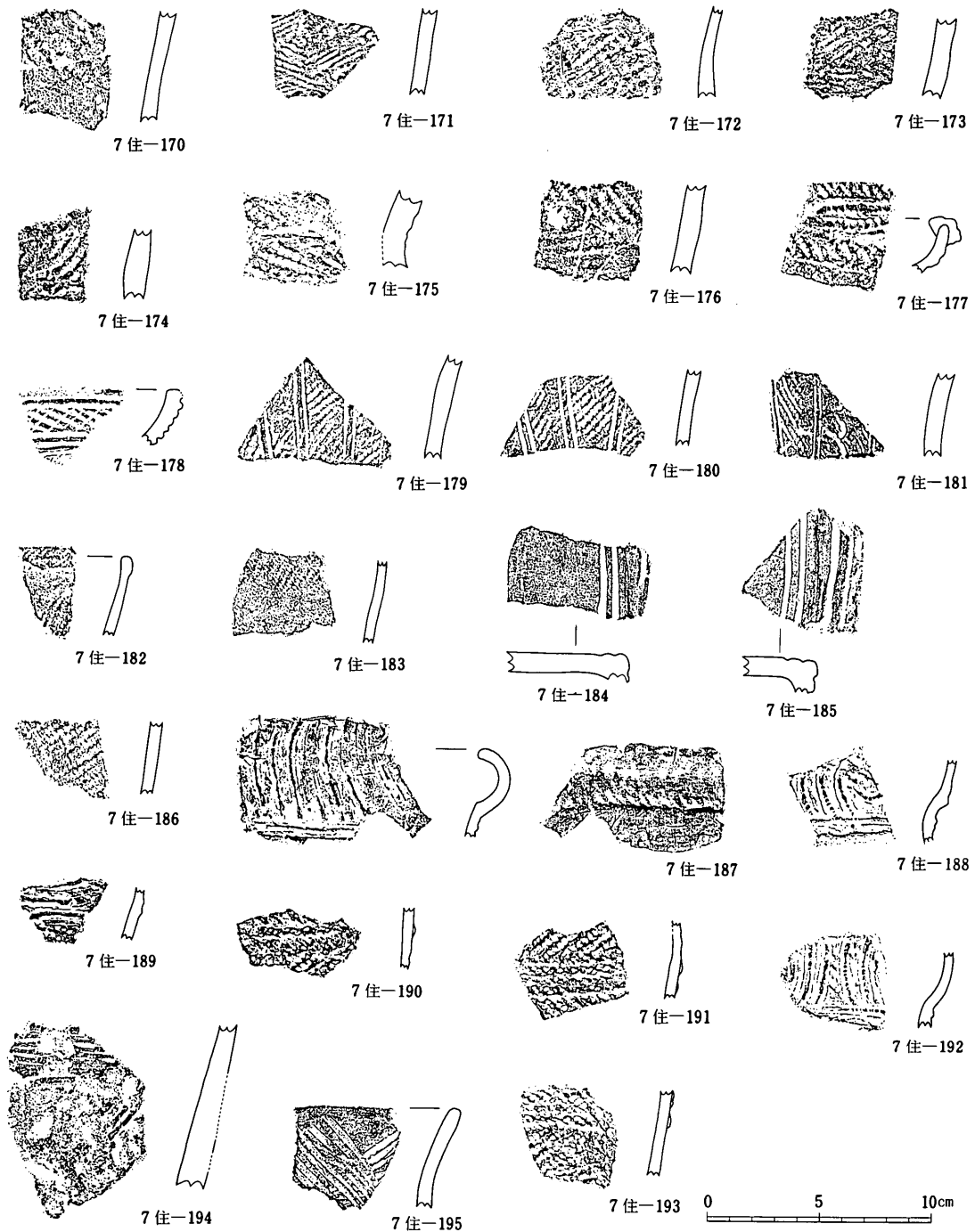
第60图 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (10)



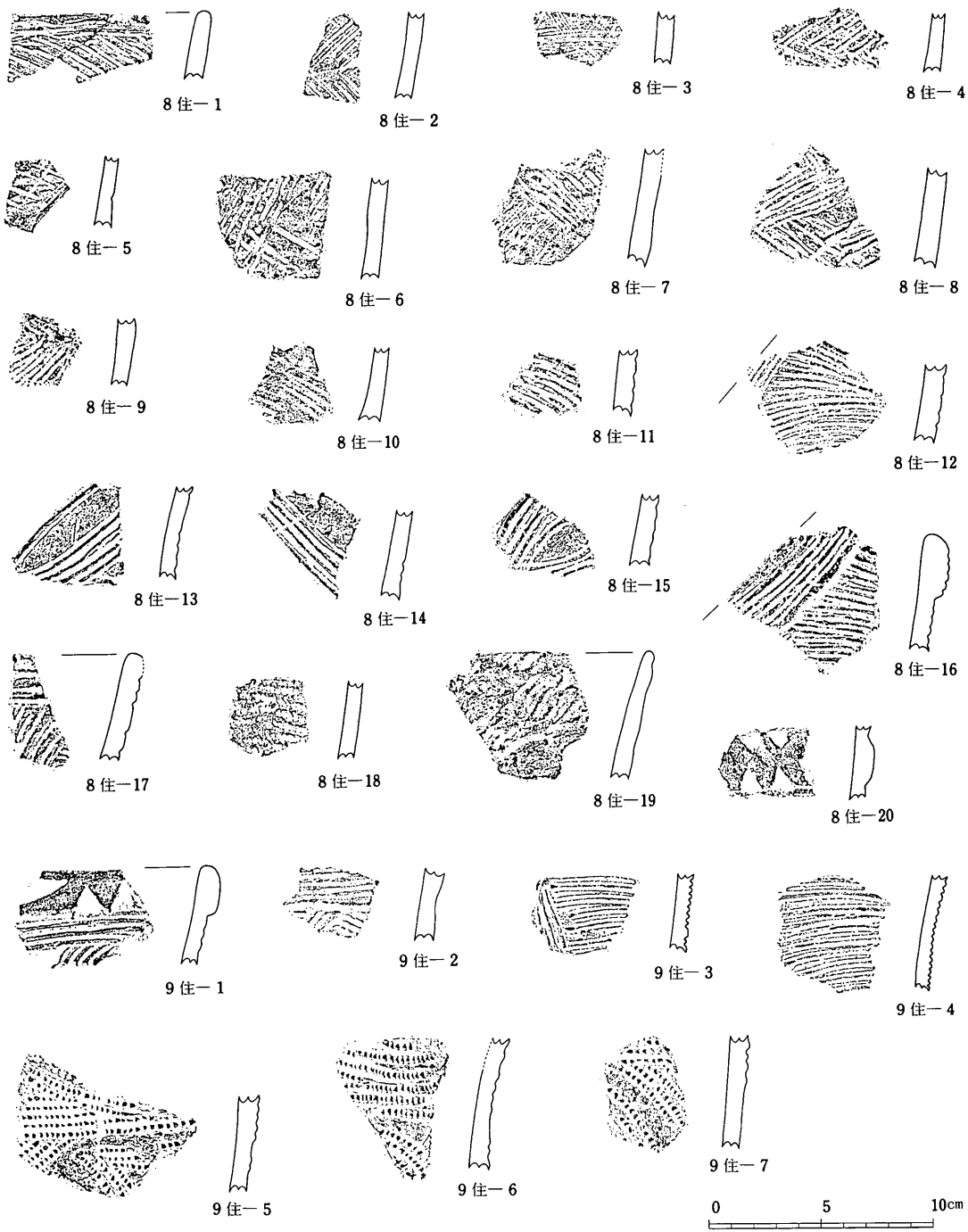
第61図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (1)



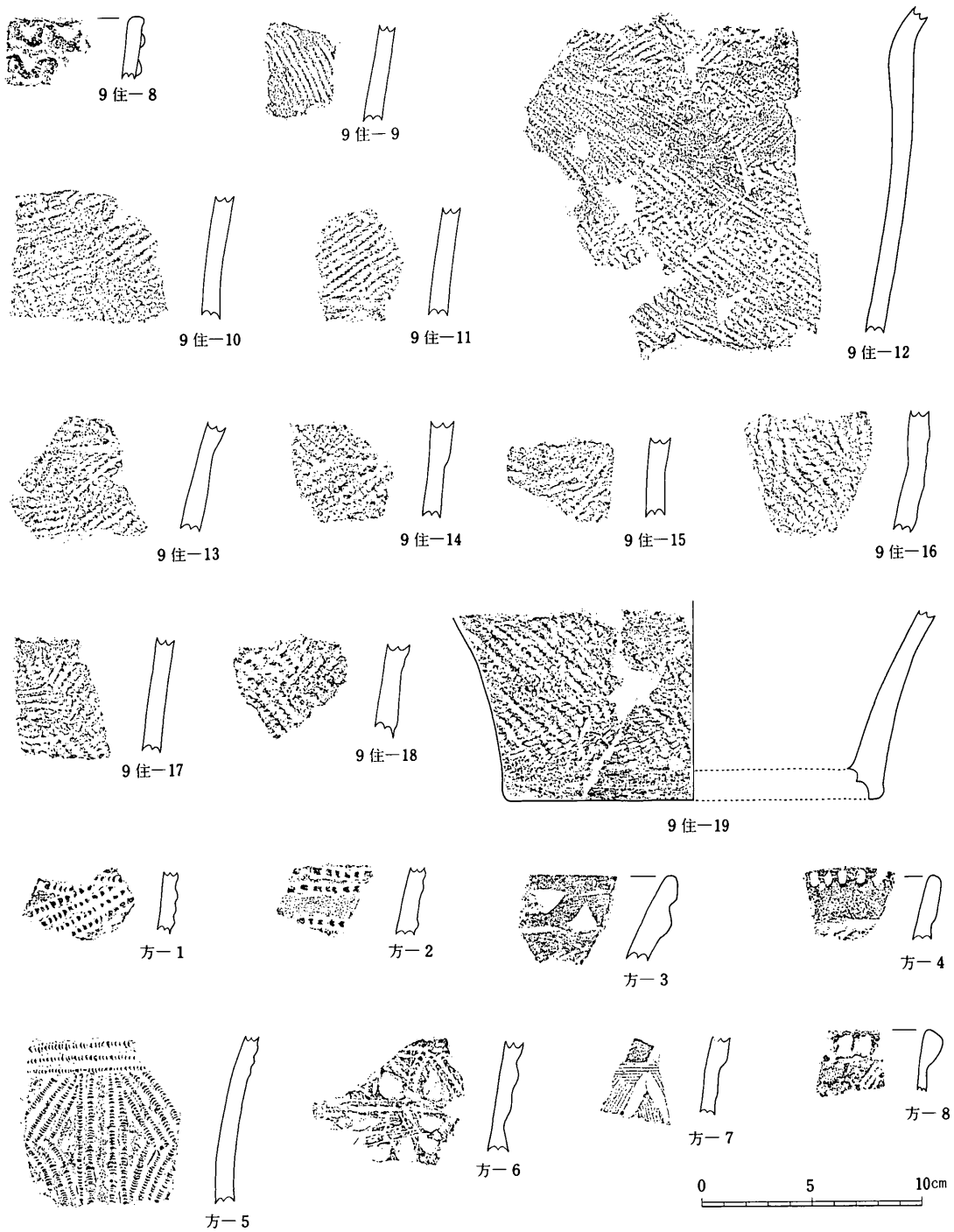
第62図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (12)



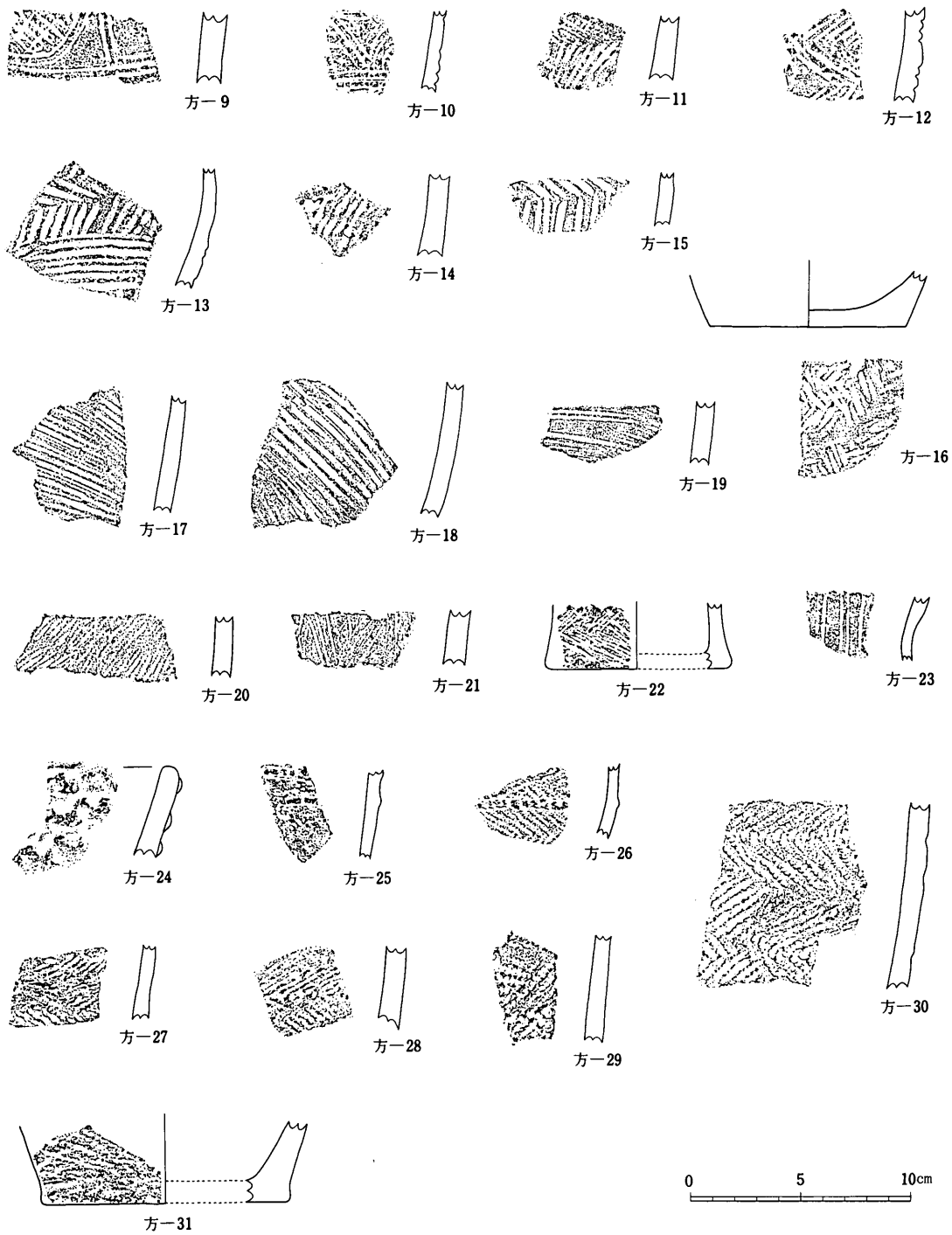
第63図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (13)



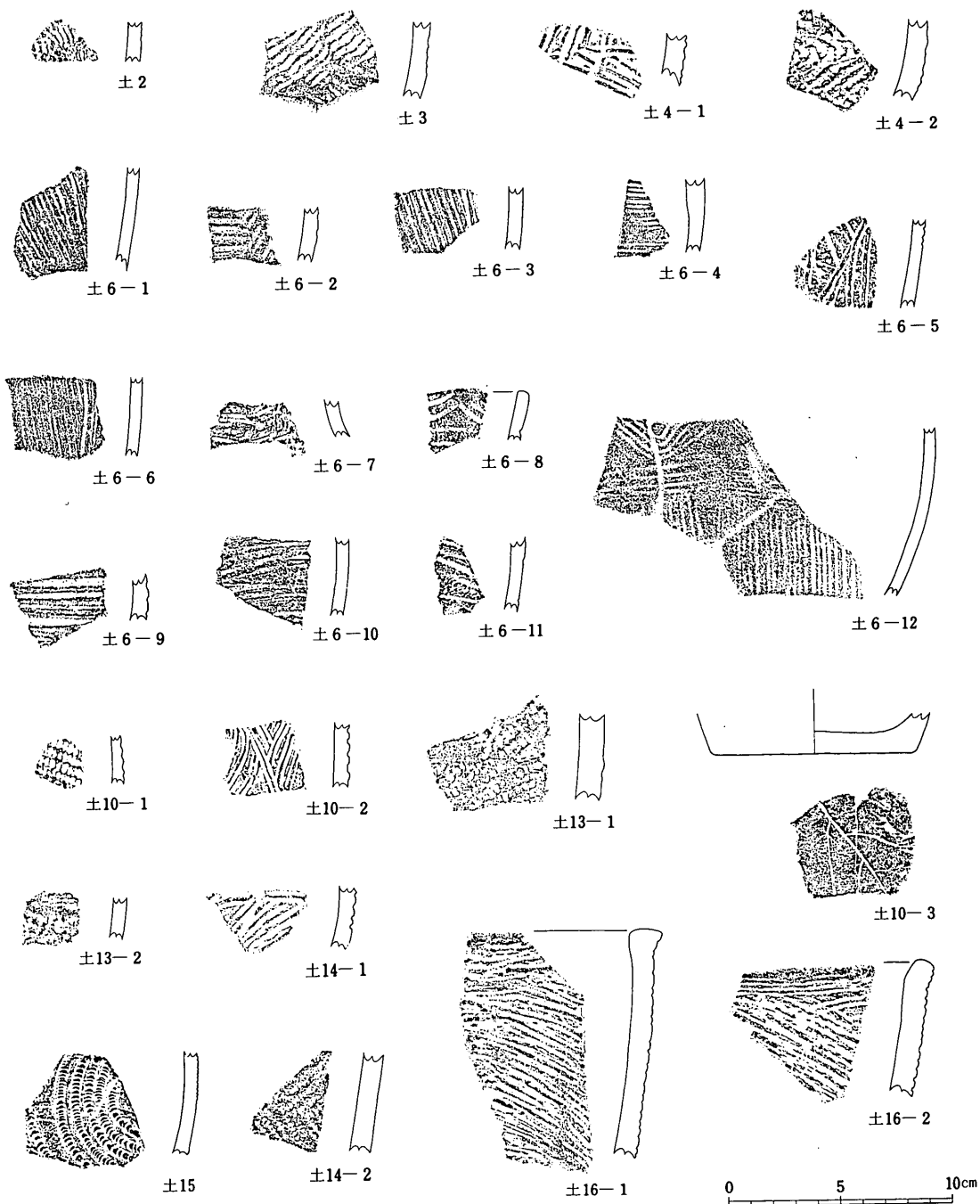
第64図 白神場遺跡住居址出土土器拓影 (14)



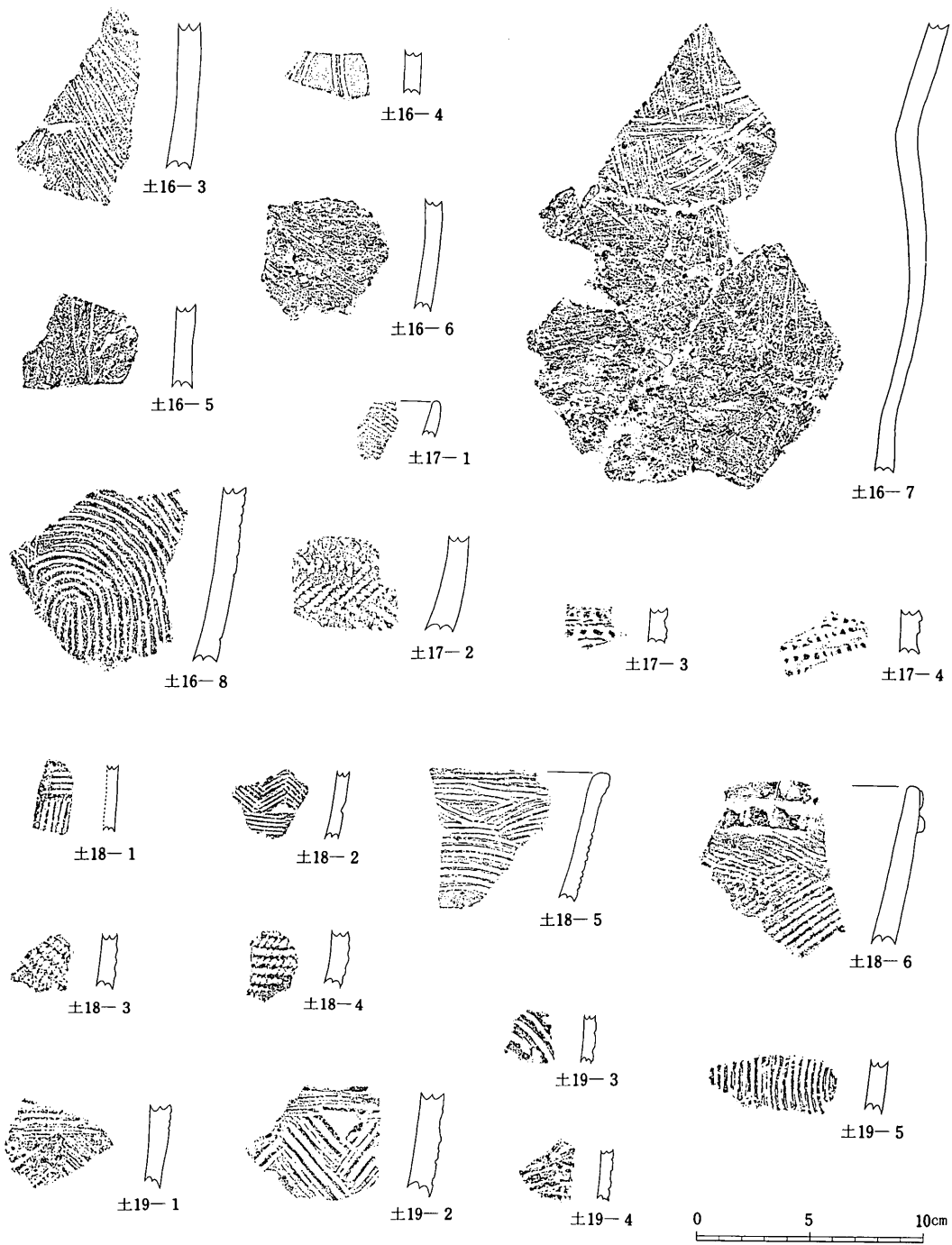
第65図 白神場遺跡住居址その他出土土器拓影 (15)



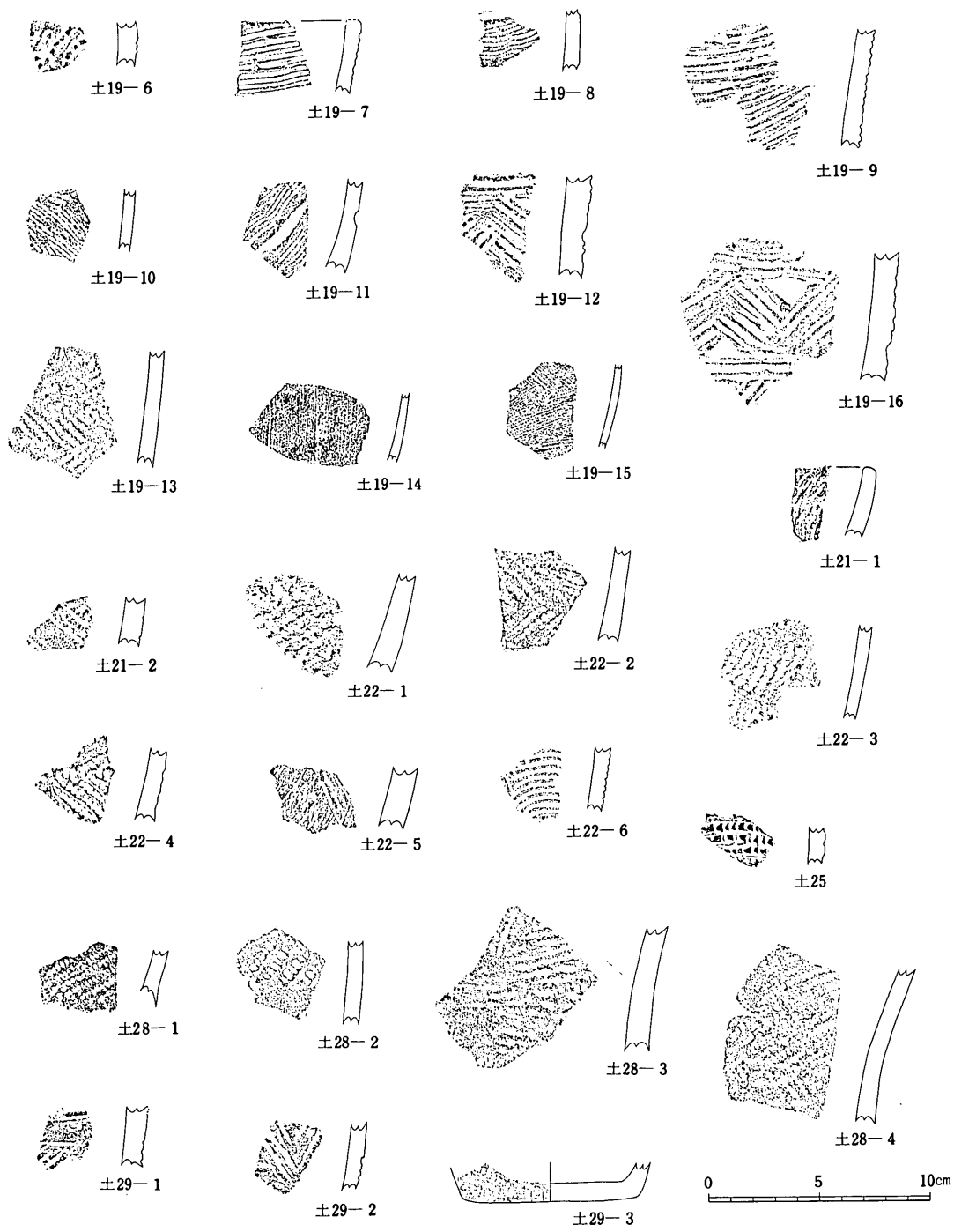
第66図 白神場遺跡住居址その他出土土器拓影 (16)



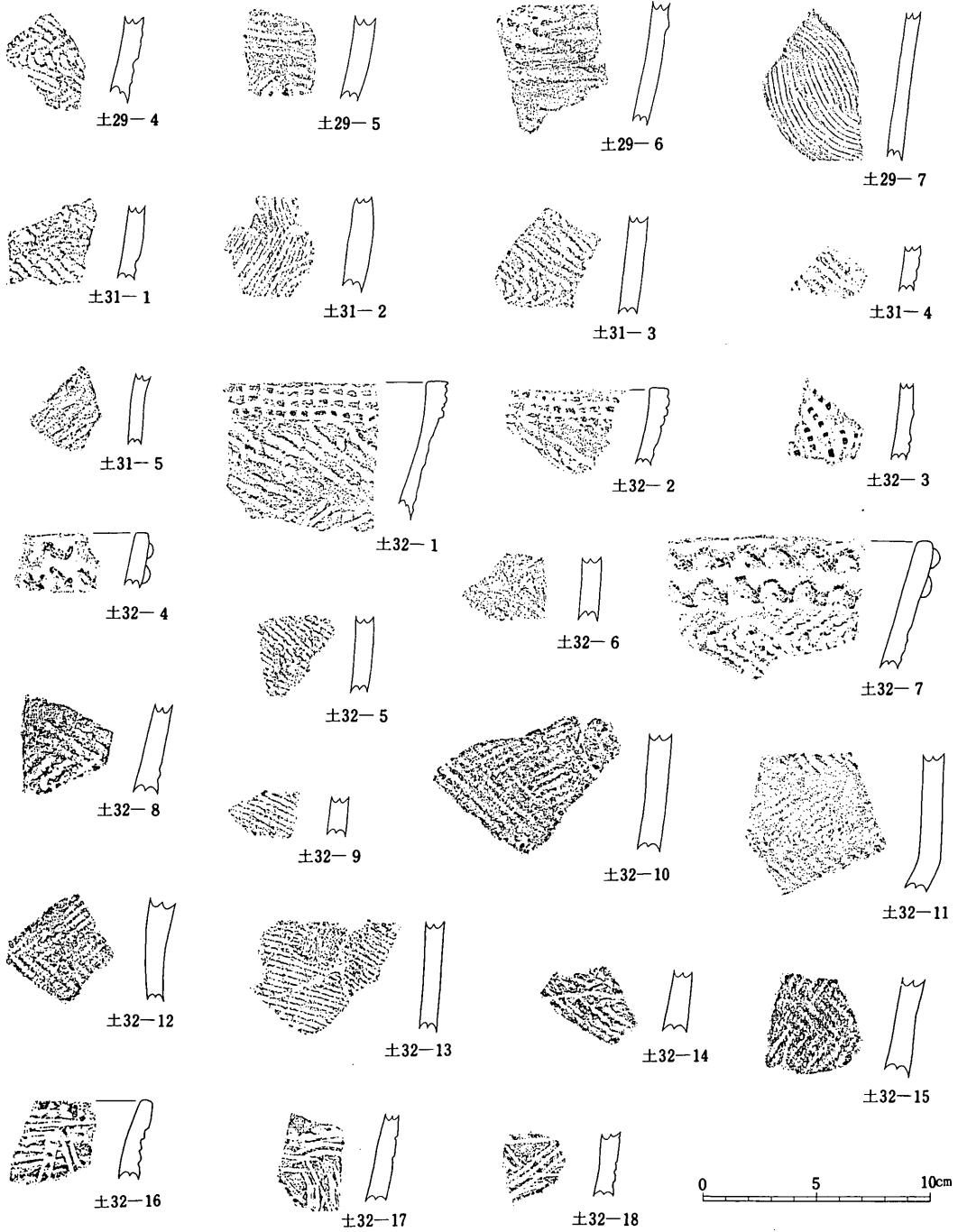
第67図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (1)



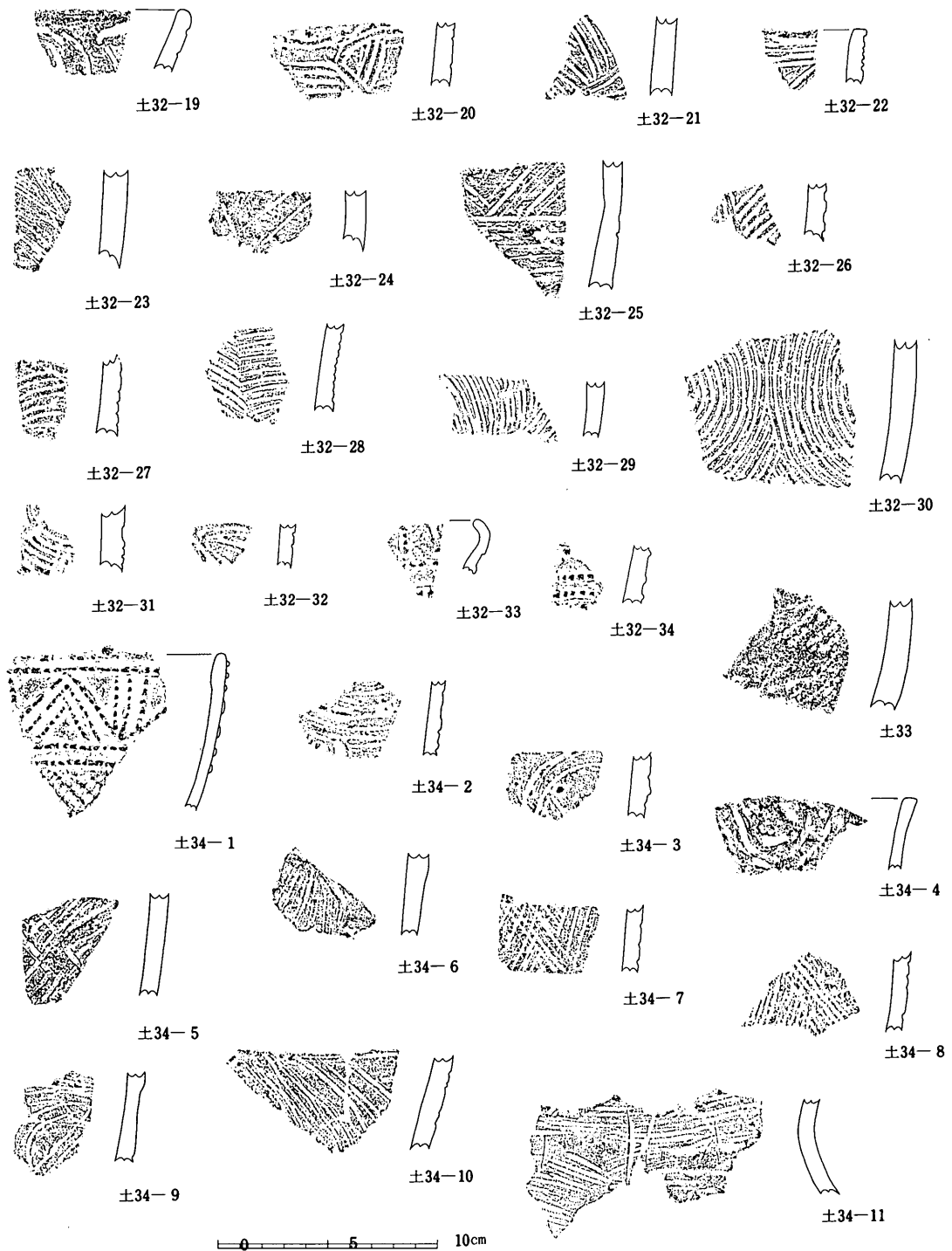
第68図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (2)



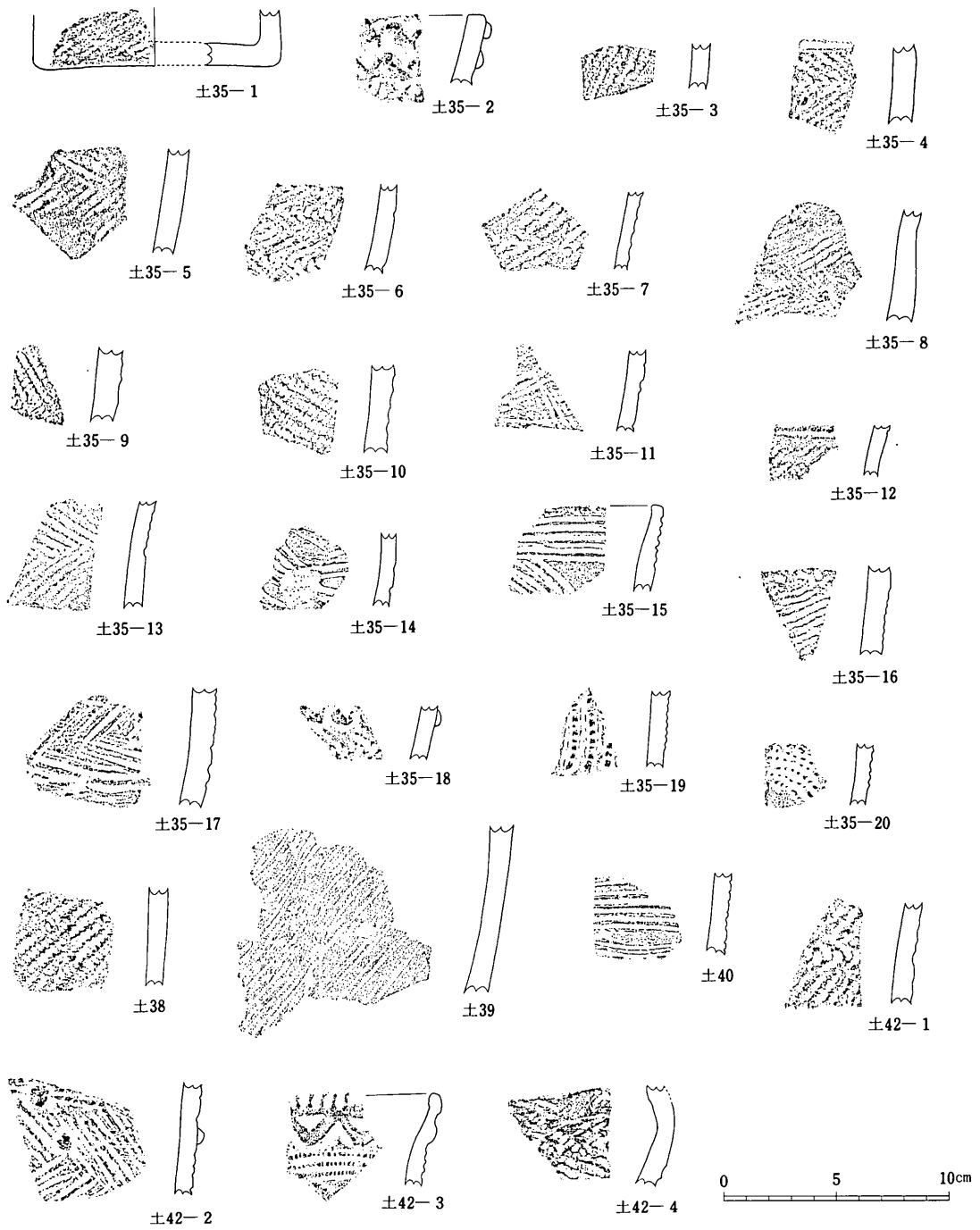
第69図 白神場遺跡土壇出土土器拓影 (3)



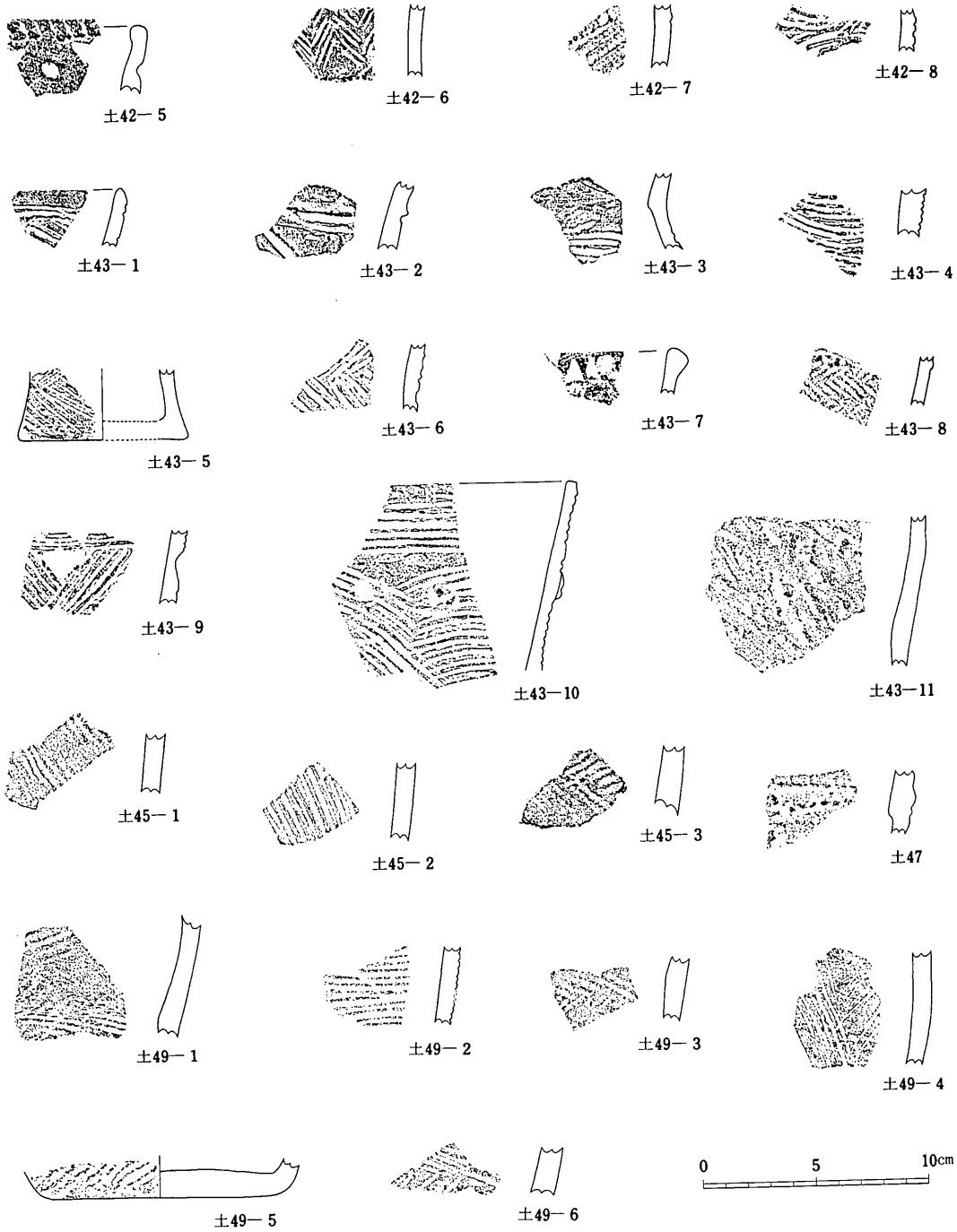
第70図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (4)



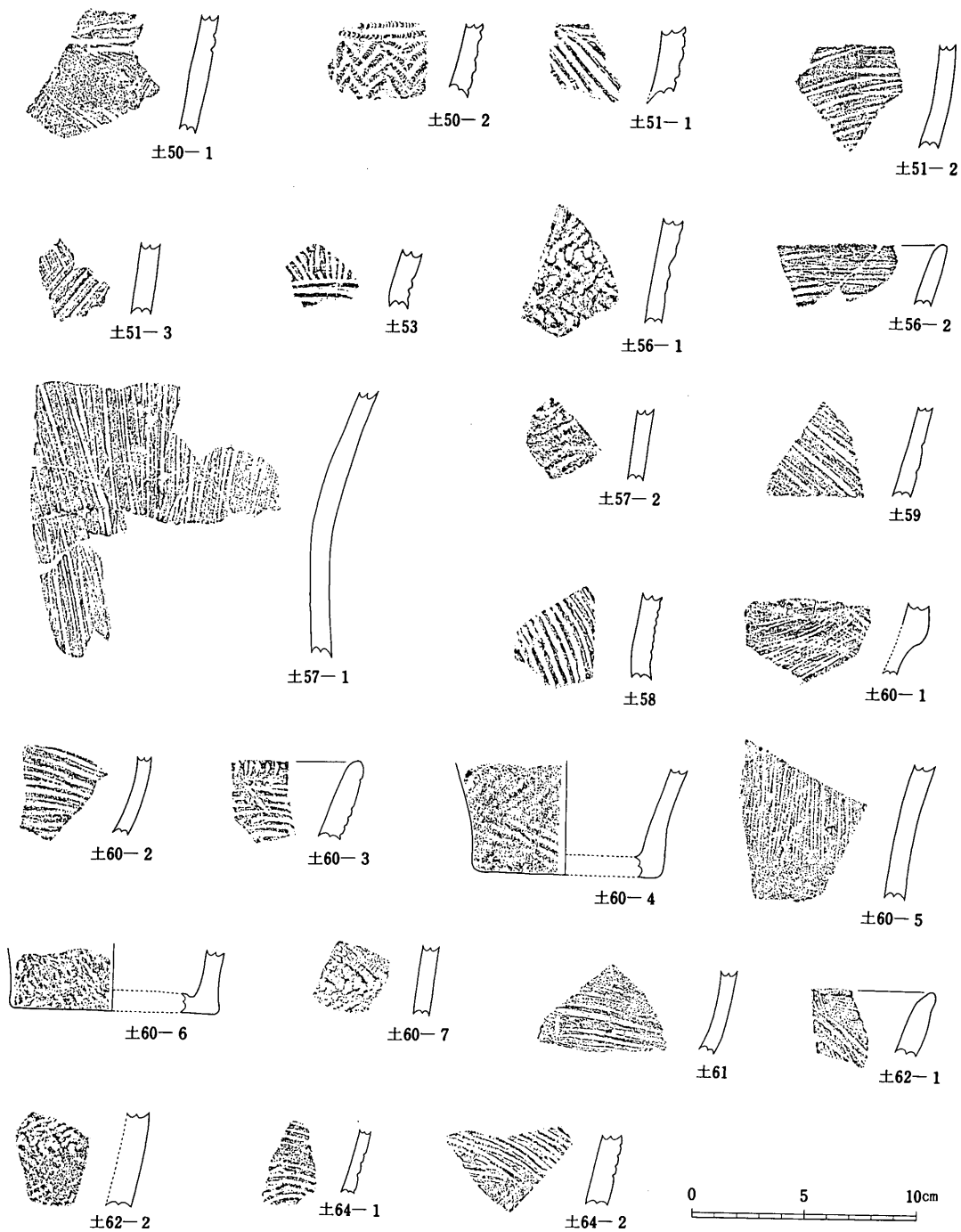
第71図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (5)



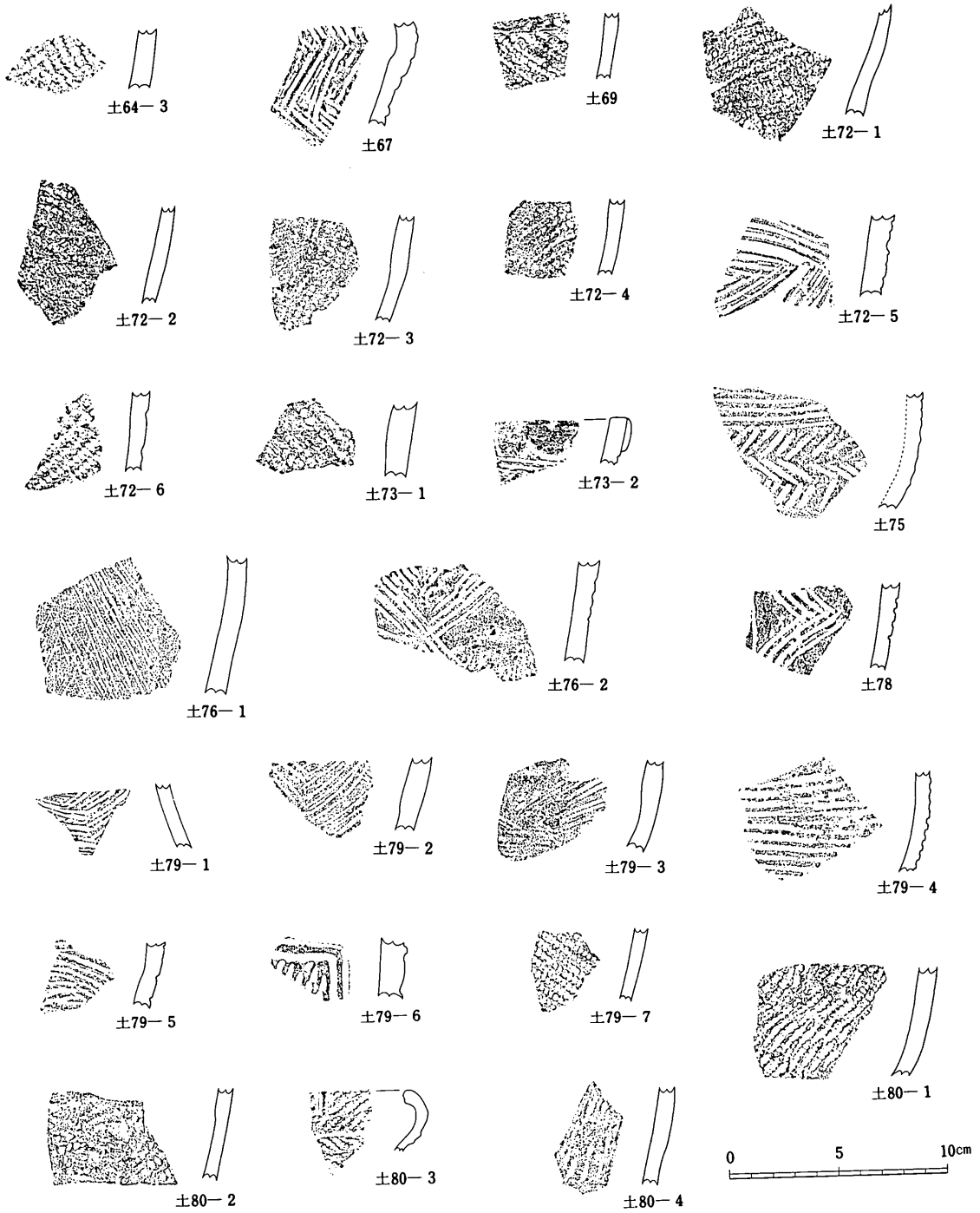
第72図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (6)



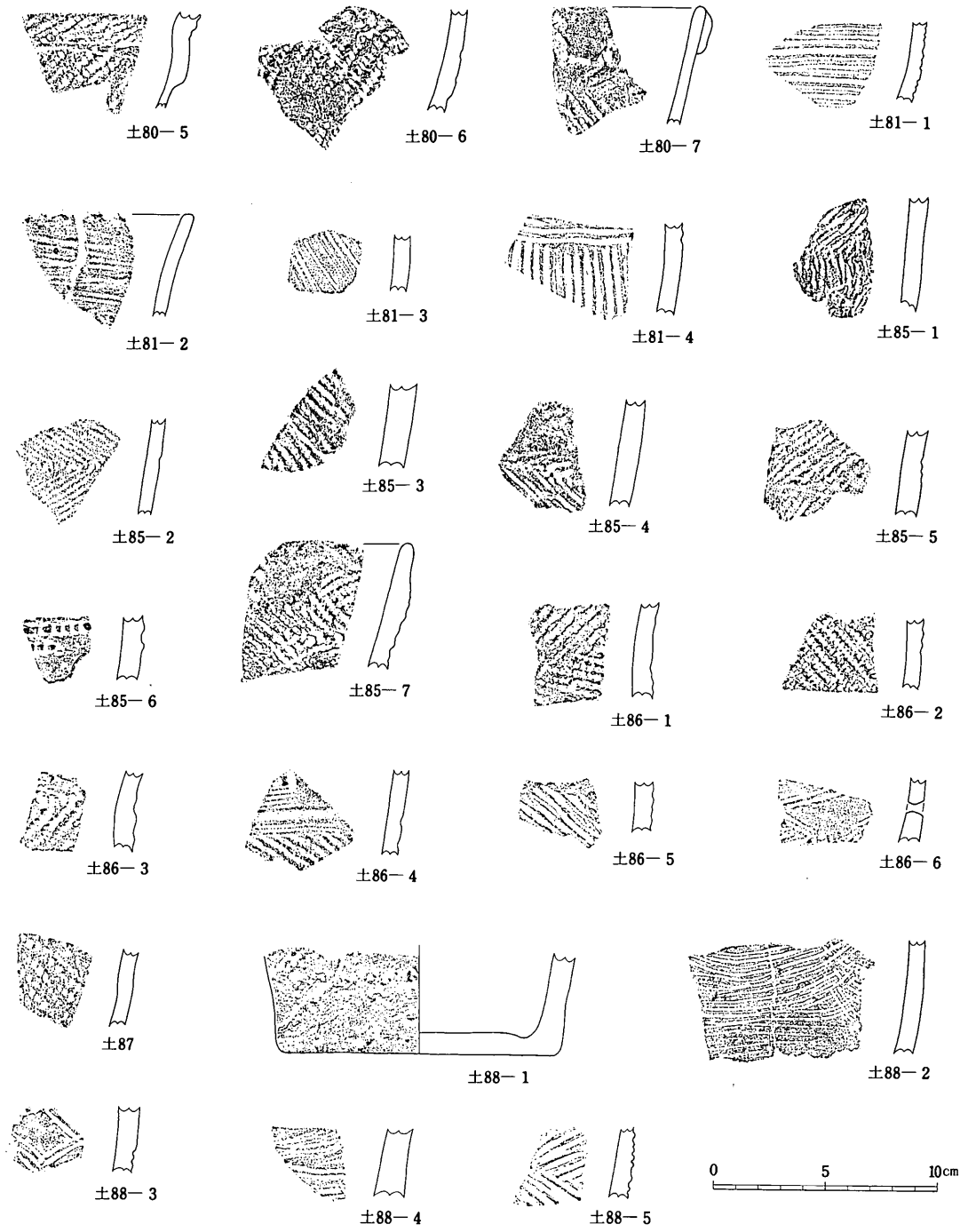
第73図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (7)



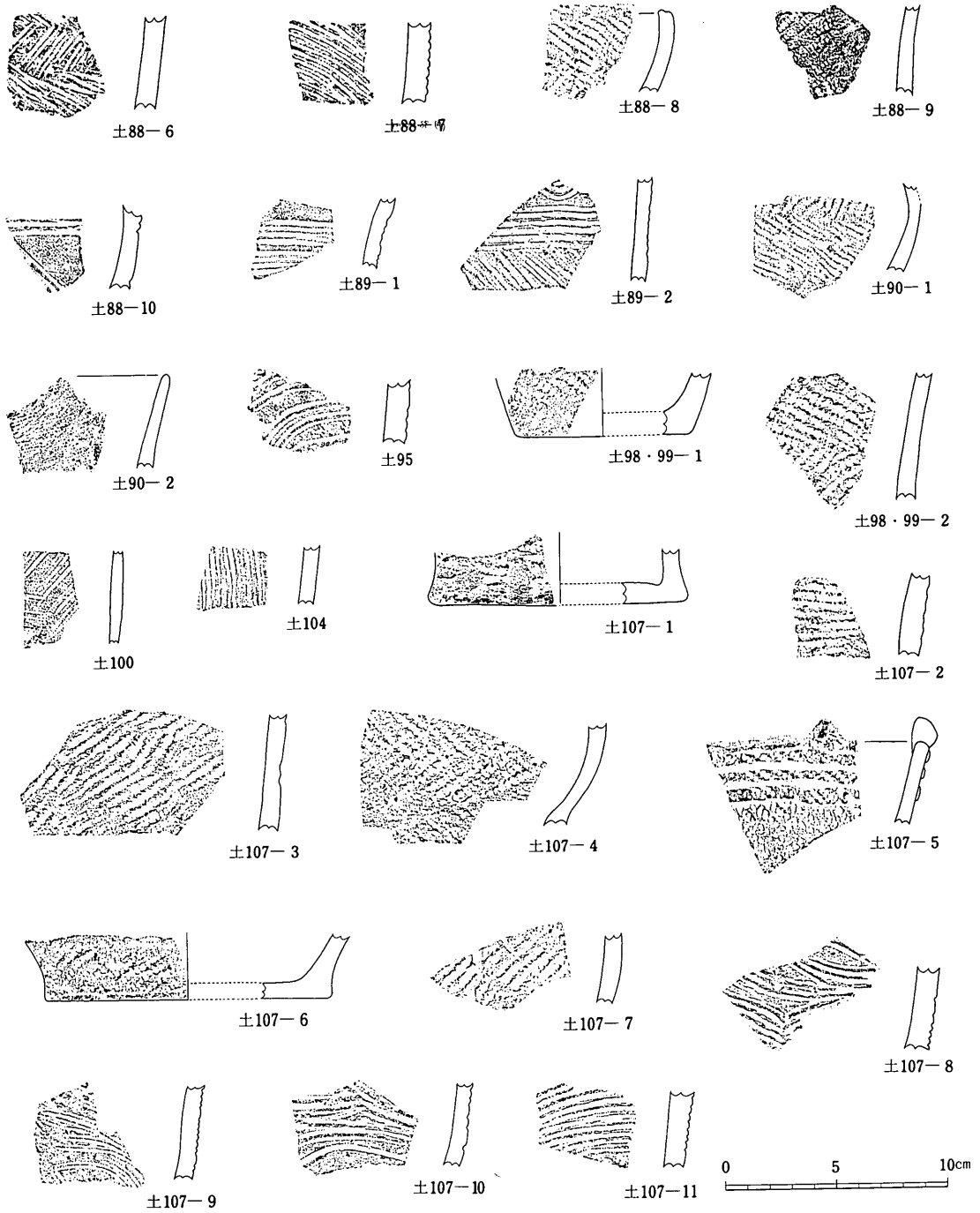
第74図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (8)



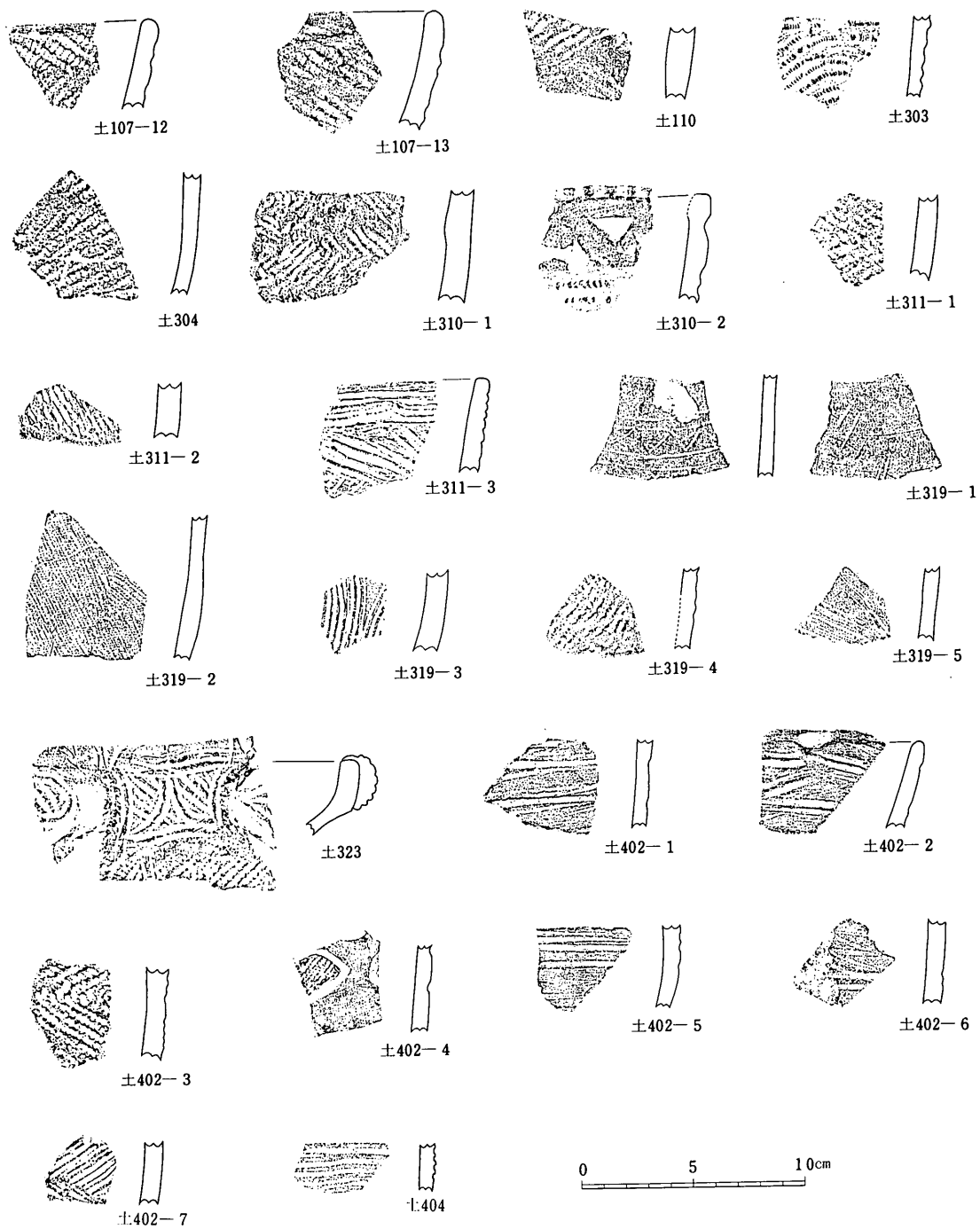
第75図 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (9)



第76图 白神場遺跡土壤出土土器拓影 (10)



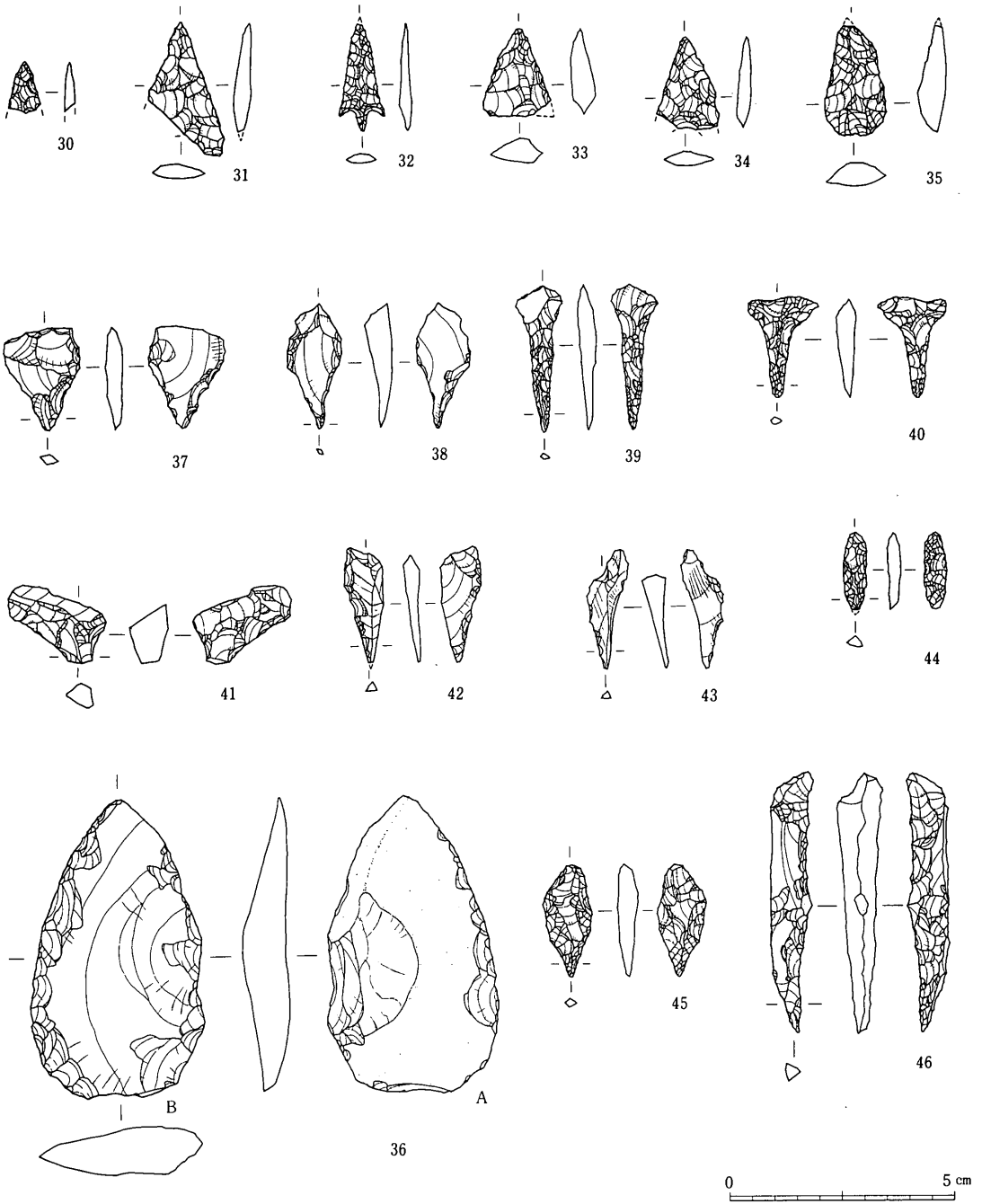
第77図 白神場遺跡土壙 出土土器拓影 (11)



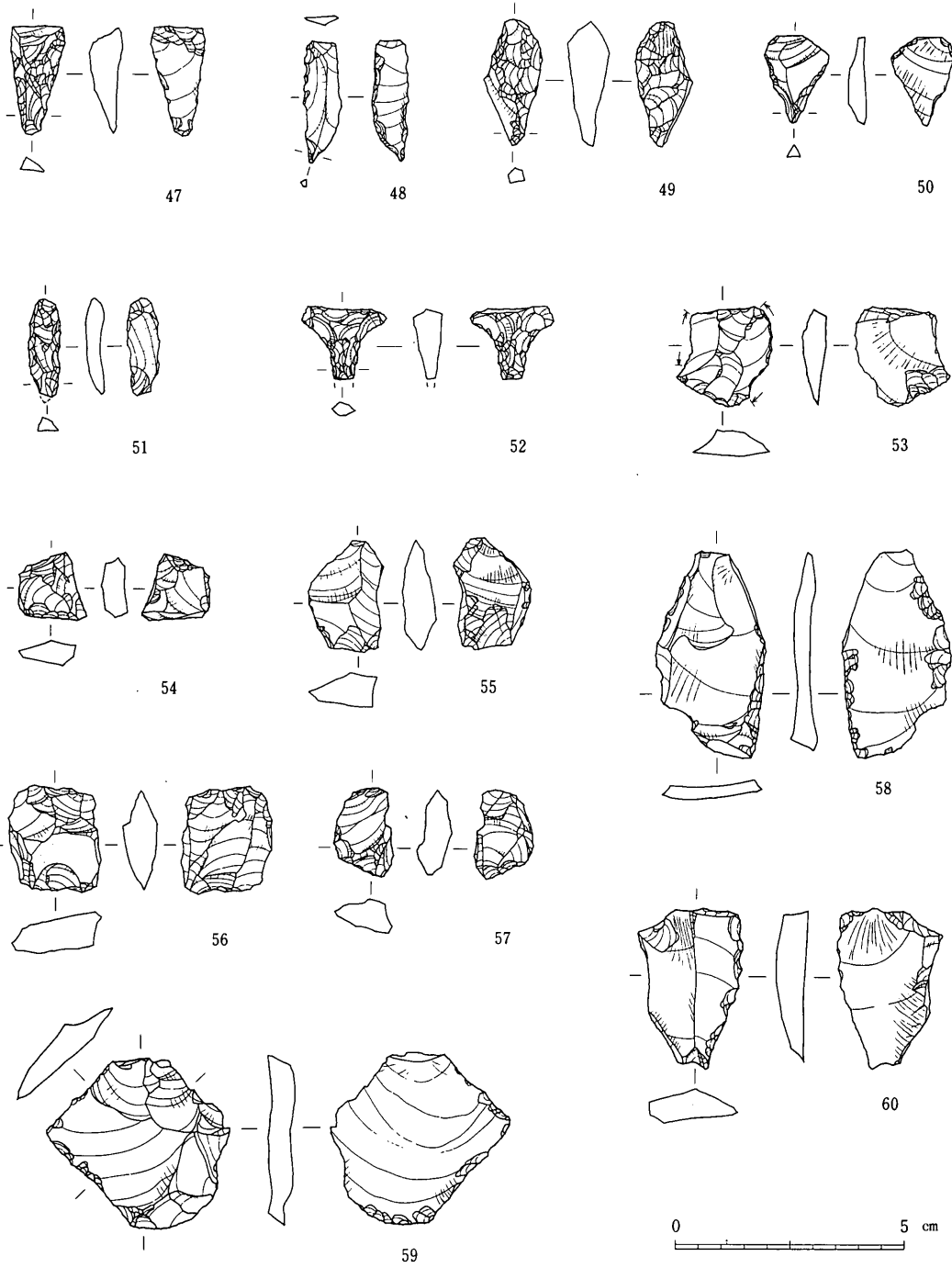
第78图 白神場遺跡土坑出土土器拓影 (12)



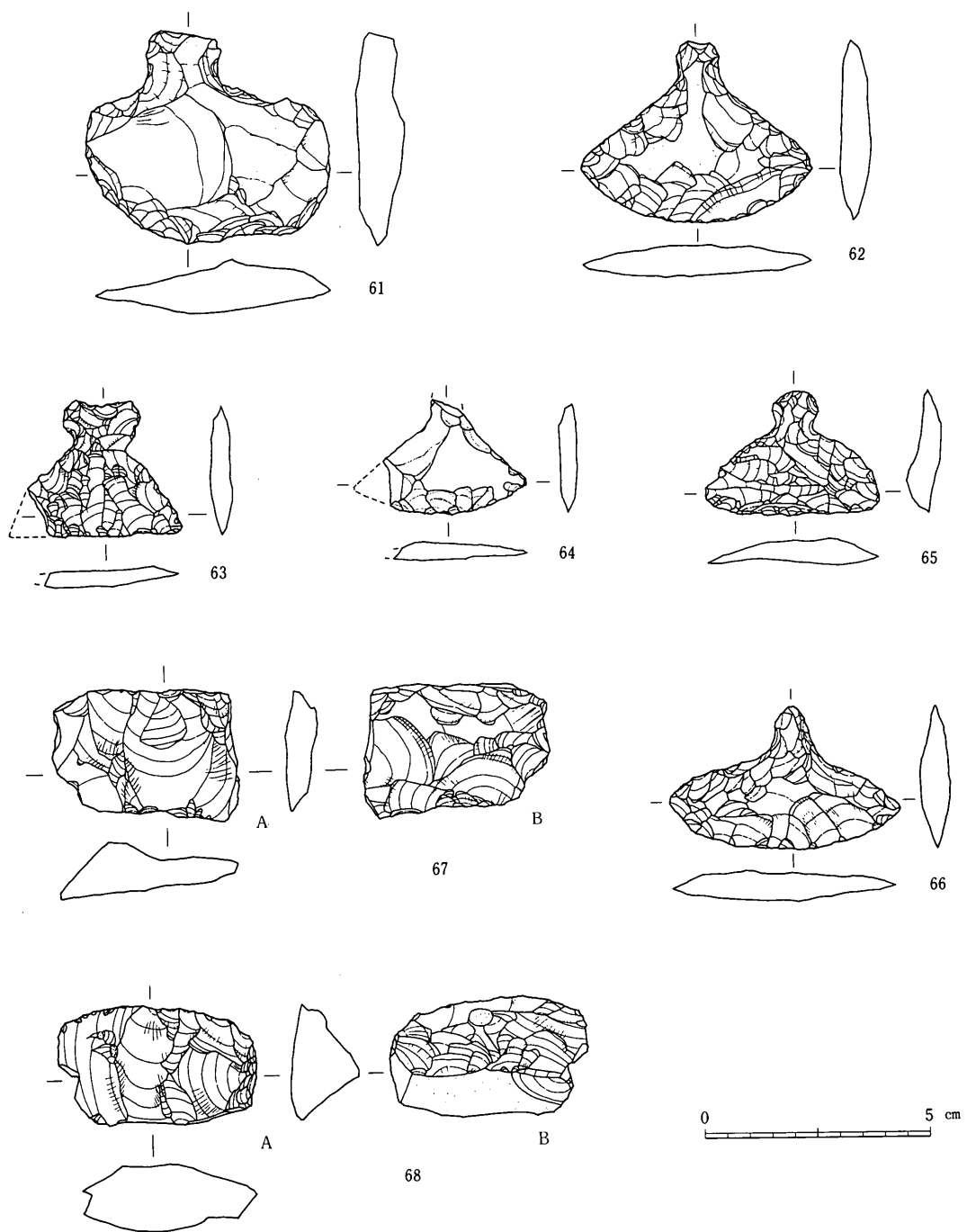
第79図 白神場遺跡 出土石器 (1)



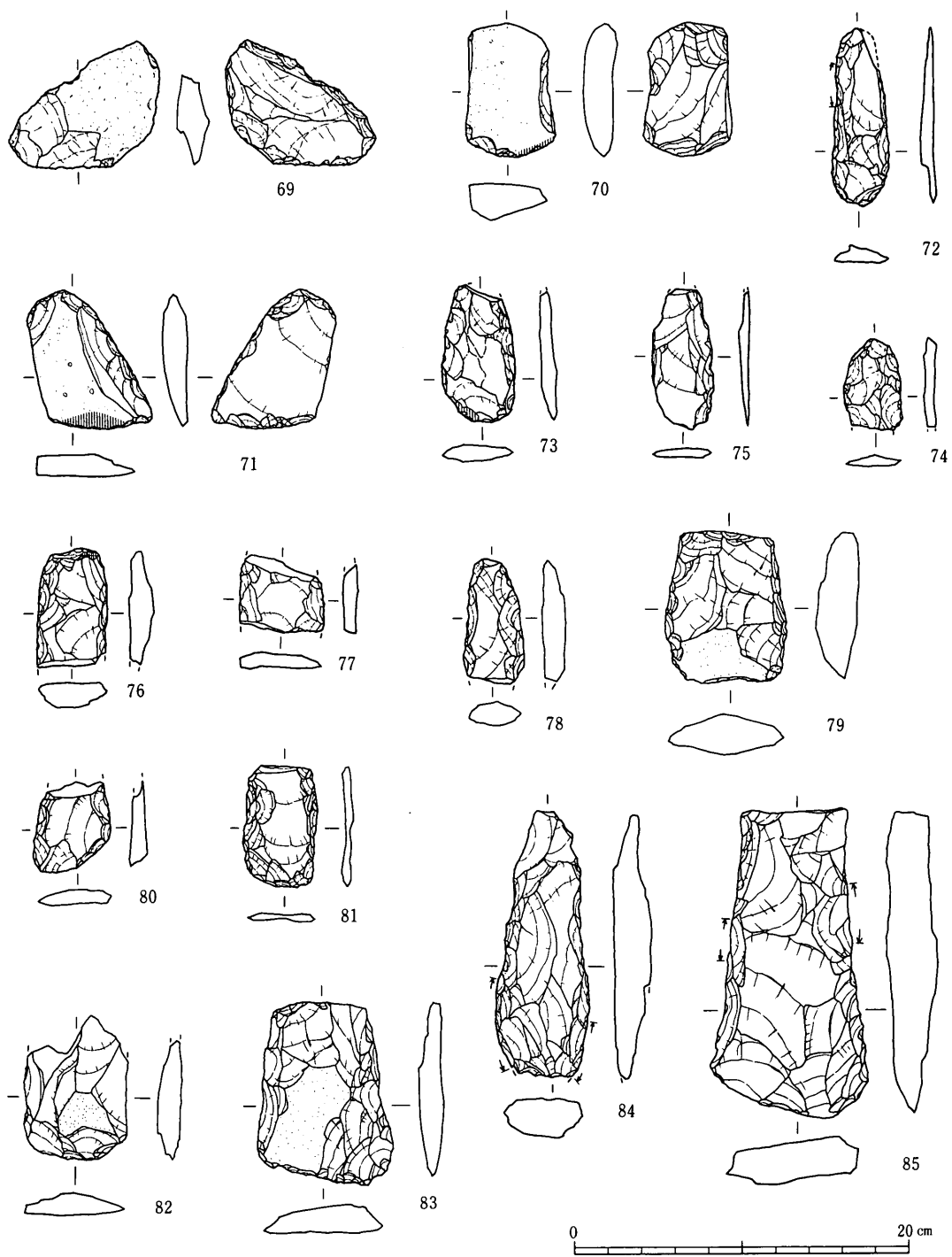
第80図 白神場遺跡 出土石器 (2)



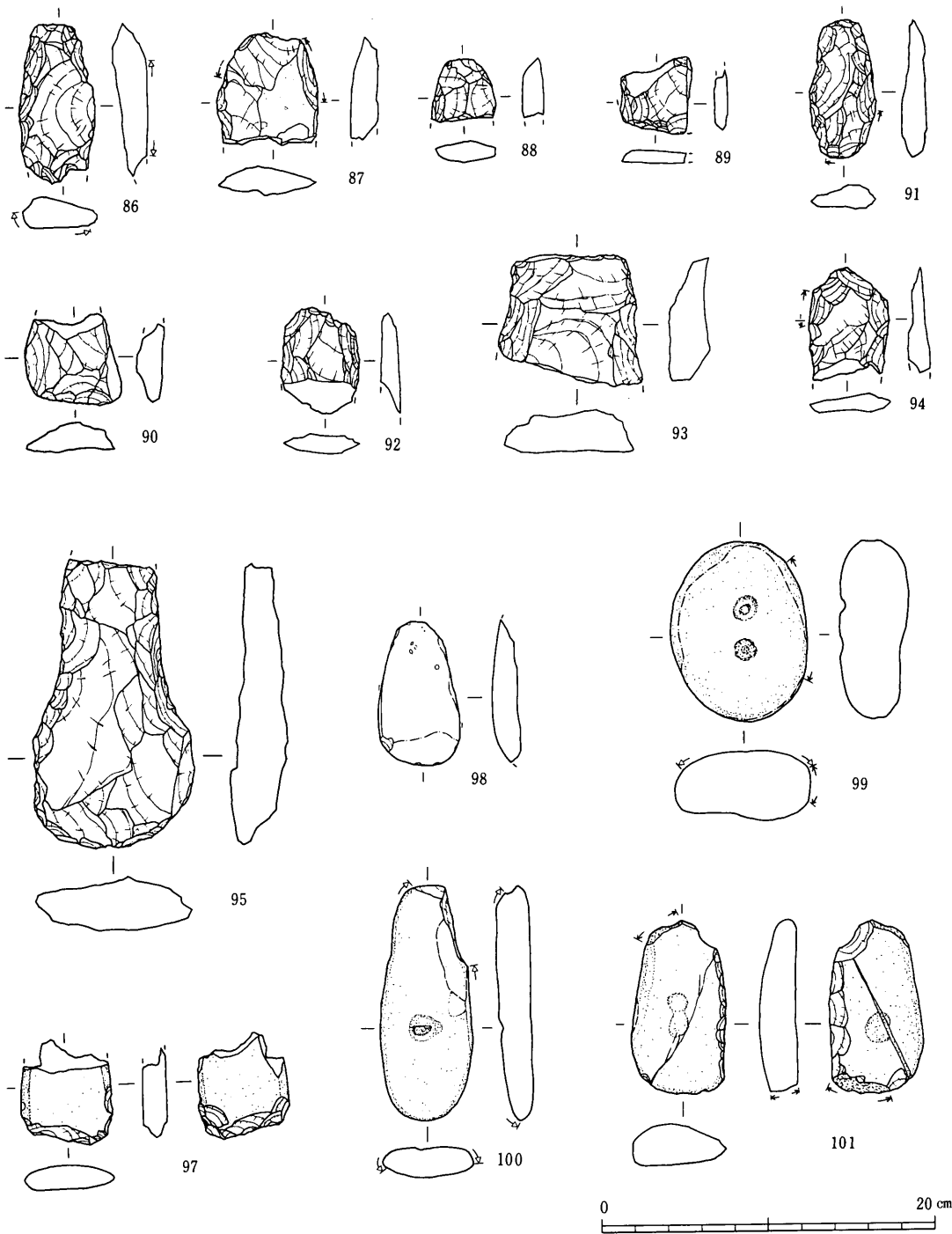
第81図 白神場遺跡出土石器 (3)



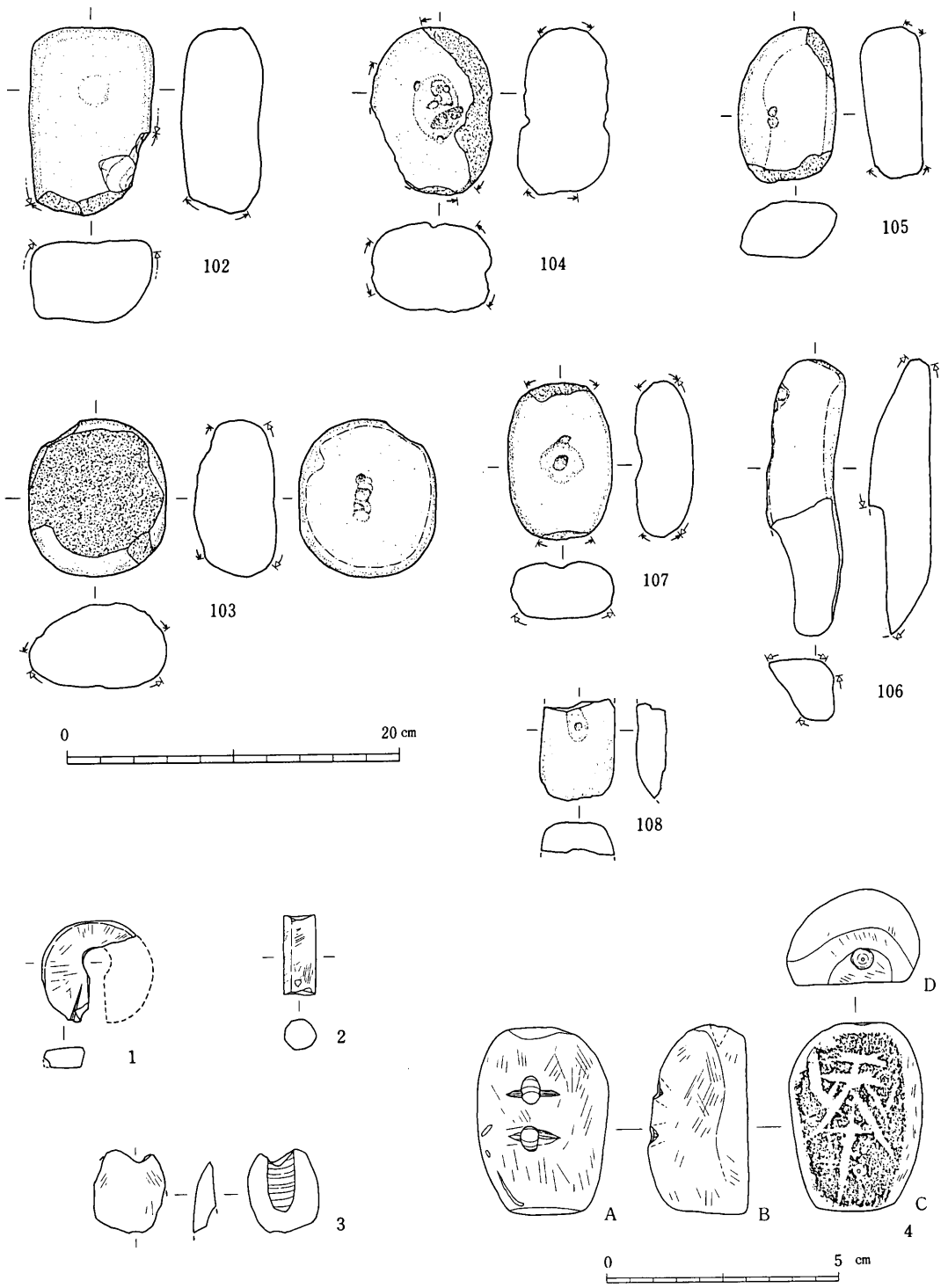
第82図 白神場遺跡出土石器 (4)



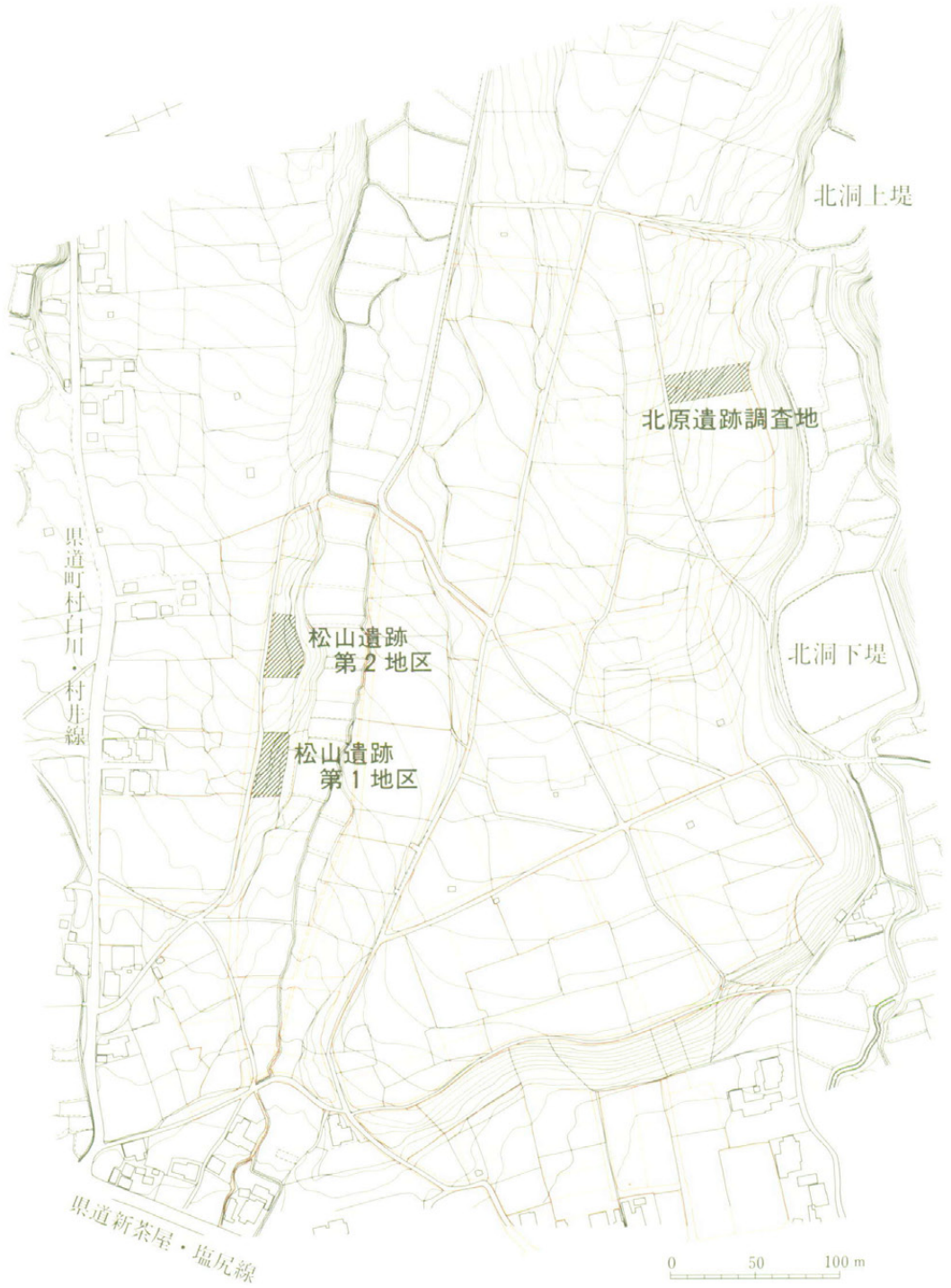
第83図 白神場遺跡出土石器 (5)



第84図 白神場遺跡出土石器 (6) (96は図なし)



第85图 白神場遺跡出土石器・石製品 (7)



第86図 調査範囲(北原・松山遺跡) 赤はほ場整備後

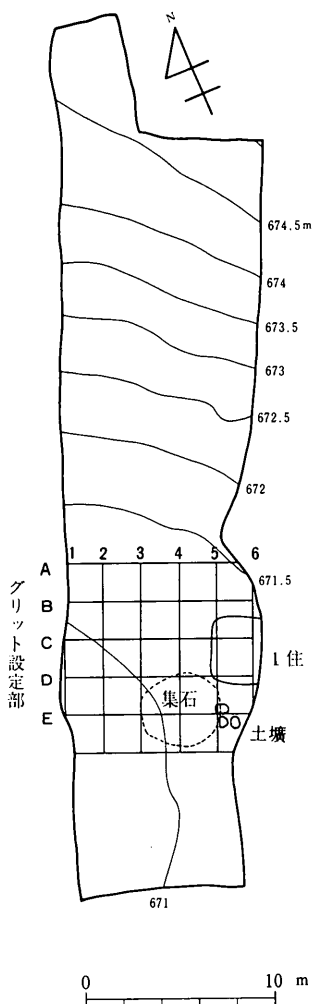
第4章 北原遺跡の調査

第1節 調査の概要

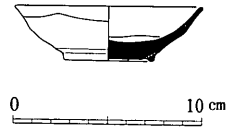
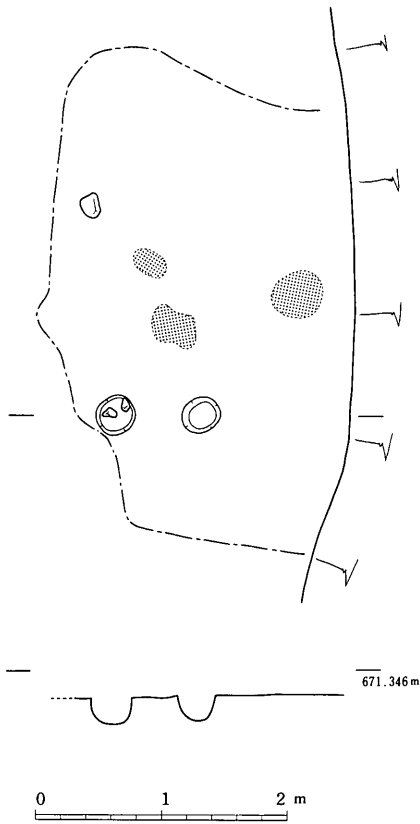
北原遺跡は、松山遺跡とともに赤木山の北端部に位置し、緩かに西に傾斜する丘陵上に東西に広く展開している。今回の調査は、ほ場整備の工事によって大幅に削平される部分のうちから、農作物の作付けと調査時期が整合する畑地を選定して実施した。排土置き場などを除き、実際に遺構検出を行った面積は約390㎡である。

発見された遺構は、縄文時代早期のものとして推定される集石、平安時代末の住居址の一部及びこれに伴うと考えられる底部に礫をもつ浅い土壌3基である。遺物には土器、石器があるが、土器のほとんどは胎土に多量の植物質の繊維を含んで、条痕文や絡条体圧痕文などを施文される縄文時代早期のものであり、僅かに縄文時代前期末から中期初頭にかけてのもの及び平安時代のもので出土した。石器には、器種として石鏃・石匙・スクレイパー・磨石・特殊磨石などがあり、やはりそのほとんどが縄文時代早期の土器群に伴うものと考えられる。

調査結果の概要は以上の様であるが、出土している土器の時期が縄文時代早期であるだけに、実際の調査時には遺物を出土する一帯を該期の遺物包含層として捉え、グリットを設けて慎重に掘り下げを進めた。しかし、調査地周辺は、20～30cmと表土が浅いうえに、以前果樹園であったのを抜根して畑地にしたらしく、大きな攪乱がいくつもはいて、どこまでが本来の土層であるか見分けがほとんどつかなかった。このため今回出土した遺物は層位的な資料としては全く期待できないものとなり、残念である。

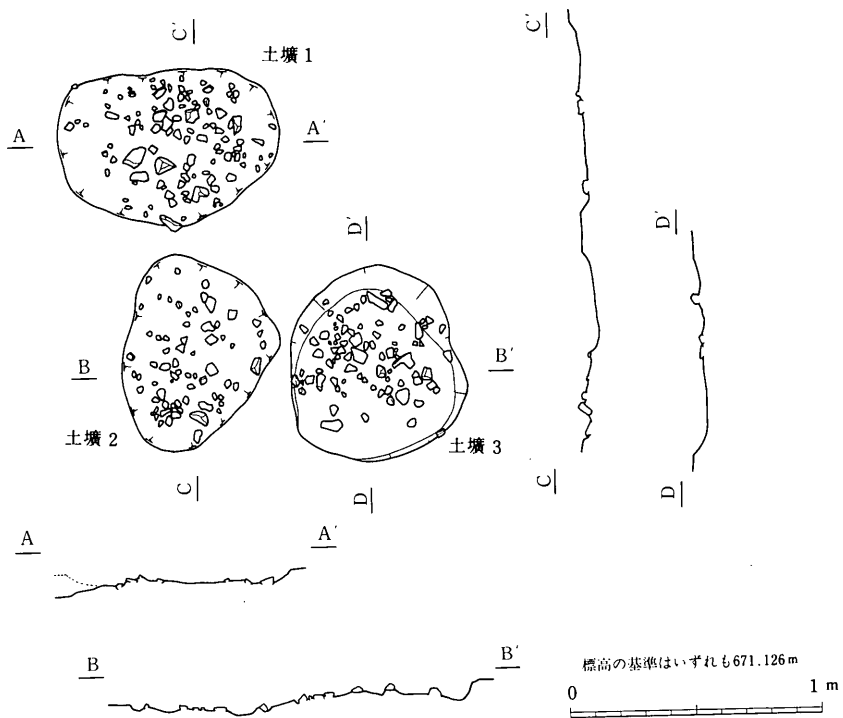


第87図 北原遺跡調査地全体図



北原第1号住居址 出土土器

第90図 北原遺跡第1号住居址、出土土器



第91図 北原遺跡 土壙1～3

第2節 遺構

1. 集石（第89図）

グリット設定部の南端に検出した。3.8×4.2m位の楕円形の範囲の中に、径5～20cmの礫が散在していたが、上層からの攪乱が各所にはいっており、本来の形状ではないとみられる。土層から観察すると、集石の帯はいくぶん落ち込みになっており、若干の色の違いにより上下2層に分層した暗褐色土の上層下面に礫が連なっている。礫の半数は熱をうけており、円礫が加熱により割れて角ばったものも数多くみられた。集石中及びその上層からは、多数の縄文時代早期土器及びそれに伴うと考えられる石器が出土した。特に磨石類は他の礫に混じって集石の一部として存在した如くであった。

2. 第1号住居址（第90図）

グリット設定部の東端に位置し、半分は調査地区外にかかる。暗褐色土中に床面をつくっており実際には床面を追求することにより範囲を確定した。南北約3.5m、東西は調査部分が2.4mの規模をもつ。平面形が不整であるのは攪乱により床面が破壊されて端部が正確に捉えられなかったことによるっており、壁の立ち上がりは全くつかめなかった。柱穴らしいものはなく、南半部に小形のピットが2個検出された。炉、カマドと思われるものもなく、床上3ヶ所が熱をうけて小規模に焼土化していたのみであった。遺物は、直接本址に伴うものとしては、灰釉小壺の完形品が1点、床面北端より得られただけである。先述の様に本址は暗褐色土中に床面を構築しているため、隣接する縄文早期の集石より5～10cm高い。

3. 土壇（第91図）

グリット設定部南東隅に位置する。1が南北0.6m東西0.9m、2が同じく0.8m×0.65m、3が同じく0.8×0.7mを測る不整楕円のプランをもつ。いずれも深さが約5cmと浅く、床面に径2～10cmの小角礫が敷いたように集めてあった。検出した面は、北に隣接する第1号住居址と同じ暗褐色土層中であり、西隣の集石より一段高い位置になる。この点からみて第1号住居址に伴う可能性もあると考えられる。土壇1より羽釜の鏝の部分出土している。

第3節 遺物

1. 土器

今回の発掘調査では、縄文時代早期後半の土器を主体として、量的に少なかったが、縄文時代前期末の土器も出土した。これらは、遺構からの出土遺物は、集石といった面的な遺構のみで、層位的にとらえられるものではなく、約30cmの同一包含層の中に何型式かが混在していた。

出土遺物で、完形及び完形に近いものはなく、総て破片であったが、中には同一 体と思われるものもあるが、接合できるものはなかった。ここではこの土器群の型式がもつ文様及び特徴的な土器についてはその土器の様相を含めて分類してみた。ただこの分類は型式といってもその土器群がもつ特徴的な文様及び要素からのものであるため、土器型式及びその順を無視した部分がある。

第I群土器(第92図・1～13) 繊維を含まない。沈線文系土器群を一括する。沈線文、刺突文を施文した土器群で、石英、雲母、長石、砂粒を多く含み、焼成は良好堅緻で、色調は、淡橙色、褐色、暗褐色を呈する。

1類(1～9) 刺突文を多用するものである。工具として半截竹管を使用している。1・2・7は太い沈線を一本ずつ三条引き、その間に刺突文を施したものである。1は口縁部で縁端部まで刺突文を施している。3・4は連続する刺突文を施し、部分的に浅い波状の沈線を施している。3は2種類の刺突文を施しており、半截竹管の他に先端が2つに割れたへら状工具を使用している部分がわずかに残る。5・6は、刺突文のみであるが、6には、左隅に円状の工具を刺突した円文が見られる。8は、浅い沈線を引き、その間に先端の鈍いへら状工具で刺突文を施している。9は、刺突文のみで、口縁端部とその直下に刺突文を施している。

2類(10～12・31) 沈線を主体に施文したものである。10は口縁端部に短かく浅い沈線を、11は、浅く広い沈線を施文しており、横位の沈線上は格子目状と思われる。12は、口縁端部と3cm下に押し引き沈線を施し、その間を縦位及び斜位の沈線を充填したものである。31は、口縁部で外側に端部が外反し、斜行するやや太い沈線を施文している。

3類(13・32) 13は縄文を地文とし押し引き沈線を、32は縄文を地文とし浅い沈線を縦位斜位に引いて区画しその中に綾杉状に沈線を充填している。

第II群土器(第92図・14～28) 繊維を含まない。縄文系土器を一括する。胎土は荒く、石英、雲母粒を多く含み、焼成はI群と同様である。17は底部に近い位置の破片でおそらくは丸底か尖底になるものと考えられる。14は口縁部で口縁端部まで縄文を転がしている。

第III群(第92図・29) 1片のみであるが繊維をわずかに含み、石英、雲母粒を多く含む縄文施文の土器で裏面には薄い条痕が見られる。

第IV群(第92・93図30・33～44) 胎土に繊維を含んだ沈線文系の土器である。焼成は、良好で堅緻なものが多い。

1類(30・33～36・38～40) 沈線のみ施文で30・33・34・36・39は内面に条痕が見られず、35・37・38・40には内面に条痕が見られる。30・33・34は繊維の含有量がわずかである。施文は30・

34・40は棒状工具か半截竹管の背での施文、33はへら状工具によるもの、他は半截竹管の腹で2条1本の施文である。

2類(41・42) 刺突文及び押し引き沈線をもつもので、41は繊維量がわずかで、沈線と刺突文を施文しており、内面はきれいに横位ナデされている。42は内面に条痕文をもち表面には2本の押し引き沈線を施文している。41は42よりも先行するものと考えられる。

3類(43~45) 縄文(LR)を地文とし、横行の押し引き沈線、沈線が施文され、43には部分的であるが押し引き沈線間に沈線を波状に施文したものが見られる。どれも内面には薄い条痕が見られ、繊維量はわずかである。

第V群(第93図、47~56) 絡条体圧痕文土器を一括する。これらは胎土に繊維を含んでいるもので内面がナデ調整されたものと、条痕文が施されたものの2種が見られる。

1類(47~49、51~53) 内面がナデ調整されているものである。絡条体は横位に押されたものの横位直線と共に曲線及び鋸歯状に押されたものが見られる。47・49は、隆帯が貼付されており、斜位に絡条体を押している。また47は、口縁を平に肥厚化し口縁部上には横位に、外面先端部には斜位に押している。48の口縁端部には縦位に押している。

2類(46・50・54) 内面に条痕文が見られるもので、この条痕文の原体は同種の絡条体をひきずったもので、絡条体条痕と呼ばれる条痕文であり、所々にその圧痕が残っている。46は口縁部が外反するもので、隆帯が貼付され、隆帯上及びその上部に大粒な絡条体圧痕文が施されている。50も隆帯が貼付され、隆帯上及びその上部に、かすれているが絡条体圧痕が施されている。54は、前者の2つに比べて小粒な圧痕文である。

3類(55・56) 上記のもの以外の絡条体圧痕文及び圧痕文とも、その原体を回転したと思われるものである。55は、胴部片で内面は条痕文で、外面は絡条体圧痕文を斜位に施し、その上下部を同原体の条痕で調整したものである。56は、内面は条痕文で、外面は施文後ナデられたらしくかすれており、はっきりしないが絡条体を回転施文したか、押圧して施文したものである。

第VI群(第94図・57~119) 繊維を含む。条痕文土器群を一括する。(ここでは東海系の条痕文は除く。)これらは原体により刷毛状工具、貝殻、絡条体に分けられ、表のみにつくもの、内外に施されるものに分けられ、繊維を多量に含むものが主で繊維の少ないもの微量のものは量的に少ない。

1類(57~63) 表面にのみ条痕が認められるものであるが、中には表裏面条痕文土器の一部であるが、その部分にはつかなかつたものもあると考えられる。ほとんどが貝殻、またはそれに類する工具の条痕文である。

2類(64~98) 内外面条痕文土器で、刷毛状工具を使用したと思われる細いもの、貝殻またはそれに類する幅の原体の条痕文土器である。74は繊維をまったく含んでいない。

3類(99~115) 内外面条痕文土器。外面ナデ、内面条痕文土器で絡条体を原体として、それを引きずって条痕文とした絡条体条痕をまとめた。所々に原体の圧痕が残っているものも見られ、すべて繊維を多量に含んでいる。条痕文は2類のものよりは弱々しいものである。

4類(116・117) 条痕文の底部をまとめた。116は尖底で、内、外面条痕(貝殻か?)が見られ

る。117な小さな平底?になるもので、内外面に薄く条痕が残っている。

5類(118) 内面条痕文 外面はナデ調整した。外反する口縁部で、おそらく絡条体圧痕文が施された土器の口縁部と考えられる。

6類(119) 内面は軽いナデ、外面には隆帯を貼付した土器で、繊維の含有量は極微量である。外面には薄く条痕文が見られる。

第VII群(第98~101図・108・120~153) 東海系の土器を一括した。東海系の土器は本遺跡の遺物中約20%をしめており、口縁部にへラ状工具を刺突した爪形文を施文した条痕文土器で胎土は明褐色、繊維をやや多く含むものとまた少ないものにと2分される。

1類(108・120・121・123~125・127・128・130~132・134・135・137・139~143・145・148) 繊維をやや多く含むもので内外面条痕文が施され、口縁部には、外面2~3段、内面に1段爪形文を施している。108の様に楕円形皿状の把手部を付けてあるもの、138のように口縁端部を肥厚化したものもある。

2類(122・126・129・133・138・144・146・149・151・153) 繊維の含有量が少ない、焼成が1類よりも堅緻な土器群である。外面には条痕が見られるものが多く、内面にも条痕が一部に見られるがほとんどはナデ調整されているもので、外面口縁部には3段で1類と同様な刺突文が見られ、口縁部にはきざみがみられる。151は底が小さい平底の底部である。

3類(152) 胎土、焼成が1類に近似しているが、口縁部の内外面は条痕文のみの土器である。条痕文の感じは、VI群2類のものに似ている。

第VIII群(第101図・154~160) 縄文前期末の土器を一括した。縄文を施文した土器と、半截竹管の2条1本の施文をしたもの、結節浮線文を施したものが見られ、八ヶ岳山麓の日向II~竈畑I式期併行のものである。

以上分類を試みたが一応群を土器型式にあてはめてみると、I群は施文方法等から田戸下層式併行と考えられる。II群の縄文施文の土器も田戸下層式に伴うかどうかははっきりしないが、胎土、調整が近似することから一応ここに入れておきたい。IV群は沈線文、押し引き沈線文系で繊維を含んでいるので田戸上層式と考えておきたい。ただし42は、胎土、施文等から後出するもので田戸上層式以後であろう。又、III群の縄文土器も胎土がIV群に近似するので田戸上層式併行であろう。VI群は区分が難かしく、田戸上層~茅山上層式併行のものが混在しているが、東海系で茅山上層式と併行する粕畑式が多く出土していること、茅山上層式以前の土器が少ないことから茅山上層式のものが多いと考えられる。VI群3類の絡条体条痕を施したものは、茅野市頭殿沢遺跡で出土しており、田戸上層式以後~茅山上層式以前としている。本遺跡においては、子母口~茅山下層式の土器はほとんど出土していないことから、ここでは茅山上層式併行のものと考えたい。VII群1類は東海地方粕畑式併行の土器群と考えられる。2類は繊維が少なく堅緻な焼成であるが条痕文がしっかりとしており粕畑式と考えられる。V群の絡条体圧痕文土器は早期末を通して共伴する土器であるがVII群との関係からこれも茅山上層式併行と考えられる。分類を一応土器型式にあてはめてみたが完全な分類とはなっていない。土器群の性格付と編年的位置付については検討の余地がある。

2. 石器 (第102～105図)

今回の調査で表採・出土した石器のうち、本報告で掲載できるのは定形的な石器59点である。このほかに、使用痕のある剥片、2次加工のある剥片等が相当量出土しているが、整理期間の都合で今回は、これらについては扱うことができなかった。白神場遺跡とともに、石器群全体についての把握は今後に残された課題である。

なお、石器の図化・記述にあたっては、打製石斧、凹・敲・磨石、特殊磨石については実測可能なものを、その他の器種については出土したすべてを対象とした。

1) 石鏃 (1～26)

26点出土した。チャート製5点、黒曜石製21点である。黒曜石は透明なものから漆黒のものまで各種みられるが、7・10にはその表面に半透明のコーティングがみられる。本遺跡の石鏃は基部の形態により、円基(1)、平基(2～4)、凹基(5～25)に分類される。さらに、凹基の石鏃については、えぐりこみの深さにより、平基に近いごく浅いもの(5～13)、逆U字状の深いもの(23・24)、中間形態のもの(14～22)に細分できる。全体的には、平基やえぐりこみの浅い凹基無茎のものが半数以上を占めているようである。調整加工については、すべて両面調整で、素材の形状をとどめるものはほとんどないが、2・9は縦長剥片を素材としたものである。この2点は、腹面に大きく主要剥離面を残し、整形調整は剥片の縁辺部にのみ施されている。

2) 尖頭器 (27・28)

2点出土した。チャート製。大半を失い基部の形状は不明であるが、両面加工で横断面が凸レンズ状を呈するものである。28は縦長剥片を素材とするもので、B面にはポジティブな打瘤と打瘤裂痕をみる。両面ともに、剥片の縁辺部に整形剥離が施され、先端及び側辺部がつくりだされているが、基部には剥離は及んでいない。

3) 石錐 (29～35)

7点出土した。29がチャート製、残りは黒曜石製である。本遺跡の石錐は、頭部にはほとんど調整が施されず、錐部に簡単な調整剥離をみるものが大半である。29～31は、短いが幅広の錐部をもち、錐部と頭部とは明瞭な角度をもってわかれ、平面形が五角形を呈するものである。これらは、素材の主要剥離面を残すB面の2側縁と、A面の一方の側縁に錐部を形成するための調整剥離が施されている点で共通している。32・33は前述のものに較べてやや長い錐部をもつものである。錐部への調整剥離は、32が片側縁の両面にわたって、33はA面の片側縁に施されている。34は、大きなつまみ状の頭部を有するもので、頭部への調整に較べて錐部の調整は明瞭でない。なお、表面のほとんどに半透明のコーティングがみられる。35は、B面の片側縁にのみ調整剥離をみるものである。A面には、打面を伴ったネガティブな剥離面が2枚残され、その剥離の加撃方向(→)のなす角度は90° ちかい。また、B面には、ポジティブな打瘤と打瘤裂痕をみる主要剥離面が残されているがその打面は、A面上方の剥離の打面と同じである。また、この打面にはかすかであるが打撃痕が観察される。これらのことから、A面のネガティブな剥離面が剥片剥離に伴うものであるならば、この石錐の素材を提供した石核は、約90° 打面を転位して剥片剥離が行われたと考えられよう。

4) ピエス・エスキーユ (36~39)

4点出土した。36は赤色チャート製。本遺跡出土のチャート製石器のうち、赤色チャート製はこの1点のみである。37~39は黒曜石製。4点ともに、顕著な両極剥離面と截断面が観察される。なお、37は裏面に自然面を残している。

5) 彫器様石器 (40)

1点出土した。黒曜石製。素材である剥片の一方の側辺に、その中ほどまで達する3条のファシット様の剥離が施されている。

6) スクレーパー (41)

1点出土した。硅長岩製。縦長剥片素材の外彎刃のスクレーパーである。調整は外彎する刃部のみみられ、主要剥離面側は刃部の全長にわたって、背面側はその一部に調整剥離が施されている。

7) 石匙 (42)

1点出土した。チャート製の縦形石匙である。左右からの剥離で作りだされた幅広のつまみに、半月形の刃部をもつものである。図は石匙の腹面であるが、中央に残された主要剥離面から、素材は横長剥片であったと思われる。調整加工についてみると、半月形刃部の外彎部の剥離は深く、一部では階段状剥離がみられる。これは、整形に加えて、素材である横長剥片の器厚を減じることにも兼ねた調整と思われる。これに対し、半月形刃部の直線部は連続する浅い剥離が施され、素材の剥片の末端方向にもあたることから、この部分が主に刃部として機能していたと考えられる。

8) 横刃型石器 (43)

1点出土した。砂岩製。背面に自然面を残す剥片の縁辺に、両面から簡単な調整剥離が施されている。

9) 打製石斧 (44・45)

2点図示した。千枚岩製。44は片面加工のもので、背面は自然面である。45は両面加工であるが、背面に自然面を一部残している。なお、刃縁部には使用によると思われる磨耗痕(← →)がみられる。

10) 磨製石斧 (46)

1点出土した。凝灰岩製。頭部を折損していて、刃部には使用の際に生じたと思われる剥離痕が一部みられる。

11) 凹・敲・磨石 (47~51)

5点図示した。47は砂岩製。磨面は両面にあり、やや黒みを帯びた色調を呈し、自然面と区別される。48は砂岩製、50は凝灰岩製で、ともに両面に平坦な磨面をもち、自然面との間に鈍い稜を形成している。なお48は約 $\frac{1}{2}$ を失っているが、片面に凹部をもち、50も凹部様の痕跡がみられる。49は凝灰岩製。約 $\frac{1}{2}$ を失っているが、片面に平坦な磨面と凹部をもち、磨面と自然面との間に鈍い稜を形成している。51は石英閃緑岩製。これも約 $\frac{1}{2}$ を失っているが、片面に凹部をもち、頭部から片側縁にかけて敲打痕を残している。

12) 特殊磨石 (52~59)

8点図示した。すべて欠損品である。特殊磨石は、その横断面と機能磨面のありかたから、形態分類がされているが(八木1976)、本遺跡の特殊磨石もその横断面と機能磨面のありかたにより、いくつかのバリエーションがみられる。52は凝灰岩製。横断面が隅丸の多角柱状を呈すもので、巾が狭くザラザラとした機能磨面を3面もち、その間には調整磨面がみられる。また、先端の一部には敲打痕を残している。53は石英閃緑岩製。横断面が不整四角形を呈し、2側面に機能磨面をもち、その間には調整磨面が観察される。また、一方の機能磨面と調整磨面との間には、敲打によると思われる剝離痕が一部観察される。54～56・58は横断面が三角形を呈し、その頂部に機能磨面を残すものである。54は礫岩製。機能磨面は1面で、先端部には敲打痕を残している。55は砂岩製、機能磨面は3面あり、その間に調整磨面がみられる。56は砂岩製、機能磨面は2面、その間には調整磨面がみられる。58は砂岩製、機能磨面は1面あり、隣接する調整磨面との間に敲打によると思われる剝離痕を残している。57・59は砂岩製、横断面が狭長な隅丸三角形の頂部に1面の機能磨面をもつもので、他のものに較べて扁平な素材が用いられている。57は顕著な調整磨面を残し、特に機能磨面付近での磨耗度が激しい。また、機能磨面と調整磨面との間には、敲打によると思われる剝離痕を残している。59は、一方の調整磨面上に凹部をもつものである。

なお特殊磨石に用いられている砂岩は、古生層の砂岩で、田川から運ばれてきた可能性をもつものである。

なお、本遺跡の石質については、太田守夫氏の御教示を受けた。

註 (1) 石錐の各部名称については、

矢島國雄・前山精明 「石錐」【縄文文化の研究】7 1983 を参考にした。

(2) 凹・敲・磨石については、器面に残された使用痕等を表現するため、図中で次の記号を用いた。

・敲打痕の範囲は、スクリーントーン及び← →

・磨面の範囲は、点線及び← →

(3) 特殊磨石の各部名称については、

八木光則「いわゆる【特殊磨石】について—中部地方における縄文早期の石器研究への問題提起—」【信濃】第28巻第4号 1976 を参考にした。

また、器面に残された使用痕等を表現するため、図中で次の記号を用いた。

機能磨面の範囲は、スクリーントーン及び← →

調整磨面の範囲は、← →

敲打痕については、凹・敲・磨石と同じものを用いた。

第4表 北原遺跡石器一覽表

石 鏃

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	基 部	註記	備 考
1	2.1	(1.7)	0.5	(1.52)	(チャート)	片側縁	凹基	集石No.20	
2	3.3	1.9	0.5	2.06	黒曜石		平基(無蓋)	No. 122	
3	(2.0)	(1.7)	0.6	(1.71)	"	先端・片側縁	"	No. 143	
4	2.2	(1.9)	0.5	(1.58)	"	ほぼ完形	"	表 採	
5	1.95	1.3	0.4	0.82	"	片脚	凹基(無蓋)	No. 10	
6	2.4	1.6	0.5	1.19	"		"	集石No.17	
7	(3.1)	(1.9)	0.7	(2.74)	"	片脚端	"	No. 52	
8	2.1	1.5	0.5	0.85	"		"	No. 101	
9	(2.1)	(1.1)	0.2	(0.34)	"	片脚端	"	No. 119	
10	(2.5)	(1.7)	0.5	(1.58)	"	先端・片脚端	"	No. 165	
11	2.2	1.4	0.5	1.15	チャート		"	No. 168	
12	(2.3)	(1.7)	0.5	(1.36)	黒曜石	先端・片脚端	"	No. 184	
13	2.1	1.55	0.4	1.00	"		"		
14	(1.6)	(1.4)	0.4	(0.65)	チャート	片脚端	"	No. 2	
15	3.2	2.0	0.5	2.52	黒曜石		"	No. 7	
16	(2.3)	(1.6)	0.5	(1.04)	"	片脚	"	No. 8	
17	2.5	1.45	0.4	1.11	"		"	No. 11	
18	(2.2)	1.4	0.4	(0.97)	"	先端	"	No. 15	
19	(2.6)	(1.3)	0.4	(0.84)	"	片端	"	No. 16	
20	2.5	1.5	0.5	1.31	"		"	No. 157	
21	(1.4)	1.3	0.4	(0.53)	"	先端	"	No. 180	
22	1.95	1.45	0.4	0.78	"		"	フク土	
23	(3.2)	(1.4)	0.4	(1.36)	チャート	片脚	"	No. 1	
24	(1.6)	(1.6)	(0.4)	(0.67)	黒曜石	頭部・片脚	"	検出面	
25	(2.7)	(1.7)	0.5	(1.67)	"	片脚端	"	No. 3	
26	(1.7)	(1.3)	(0.3)	(0.65)	チャート	胴～基部		No. 183	

尖 頭 器

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
27	(2.7)	2.5	1.0	(5.97)	チャート	胴～基部	No. 13	
28	3.7	2.3	0.6	4.42	"		No. 160	

石 鏃

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	鏃部調整		註記	備 考
							A	B		
29	1.8	1.9	0.4	0.97	チャート		片側縁	両側縁	集石	
30	2.6	2.0	0.6	2.45	黒曜石		"	"	No. 14	
31	1.5	1.5	0.5	0.68	"		"	"	トレンチ	
32	2.6	2.0	0.7	2.02	"		"	片側縁	集石No.12	
33	2.7	2.2	1.1	3.32	"		"	—	No. 43	
34	2.9	2.1	0.8	4.90	"		"	(両側縁)	No. 243	
35	2.7	2.4	0.9	4.74	"		—	片側縁	トレンチ	

ピエス・エスキーユ

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
36	2.8	3.0	1.2	11.63	(赤色チャート)		No. 12	
37	2.7	1.5	0.9	2.95	"		No. 77	

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
38	2.0	1.2	0.9	1.70	(赤色チャート)			
39	2.75	1.2	0.7	1.90	"		検出面	

彫器様石器

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
40	2.5	1.1	0.7	1.75	(赤色チャート)			

スクレーパー

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
41	3.9	3.8	0.7	7.77	硅長岩		検出面	

石 匙

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
42	5.2	2.6	0.9	11.17	チャート		No. 182	縦型石匙

横刃型石器

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
43	9.0	6.9	1.7	120	砂岩			

打製石斧

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
44	12.5	6.0	2.9	220	千枚岩		No. 198	
45	7.3	4.3	1.6	65	"		検出面	刃縁部磨耗

磨製石斧

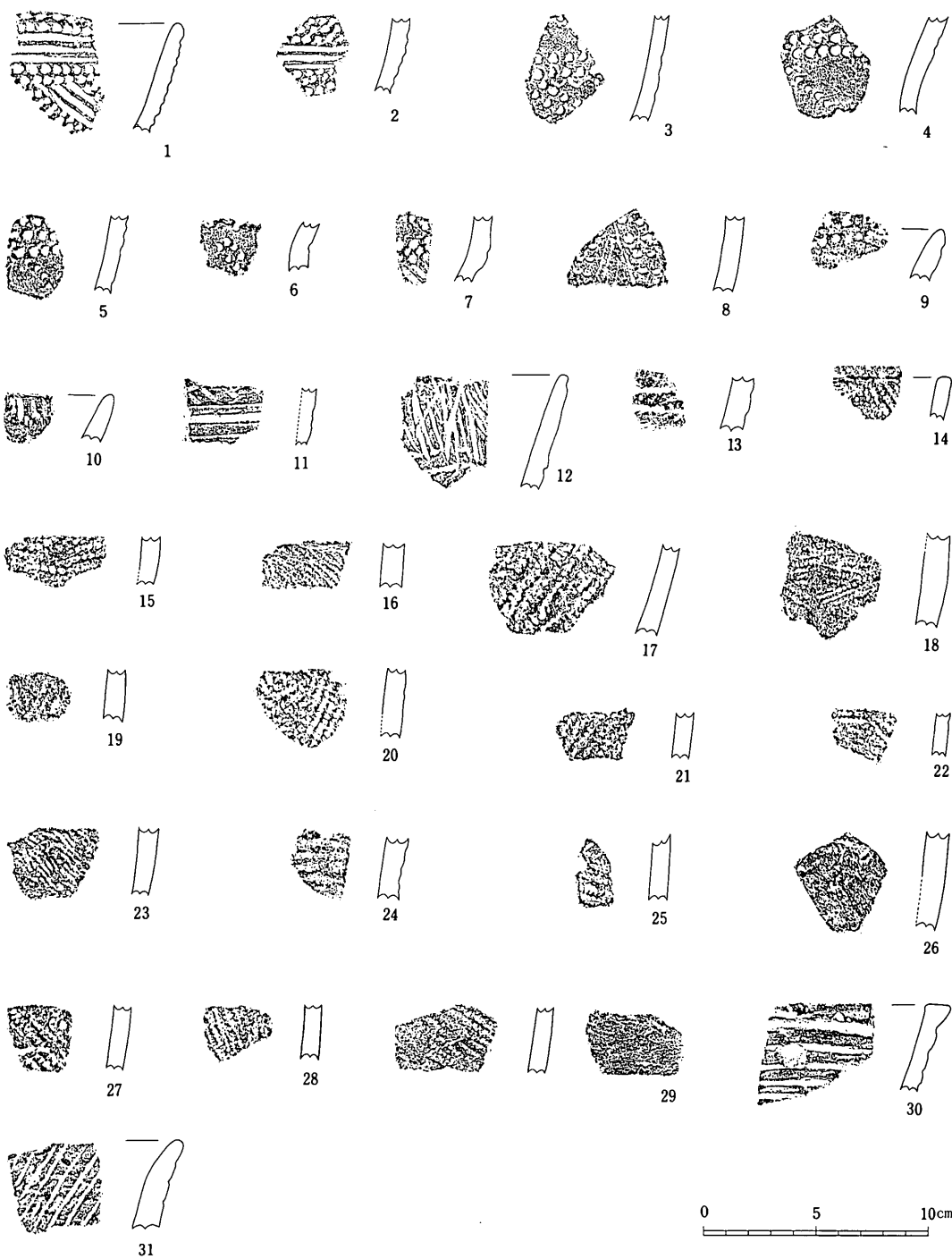
No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
46	(11.8)	6.8	5.1	(685)	凝灰岩	頭部	No. 20	

凹・敲・磨石

No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	凹部	敲打痕	磨面	備 考
47	9.8	8.1	3.6	435	砂岩		No. 23			○(×2)	
48	(5.0)	(8.1)	(3.9)	(215)	"	約1/2欠	集石No.25	○		○(×2)	
49	(9.1)	(5.7)	(4.5)	(280)	凝灰岩	"	No. 83	○		○	
50	9.5	7.5	4.1	410	"		検出面	?		○(×2)	
51	9.9	7.8	4.2	460	石英閃緑岩	約1/2欠	試掘10	○	○		

特殊磨石

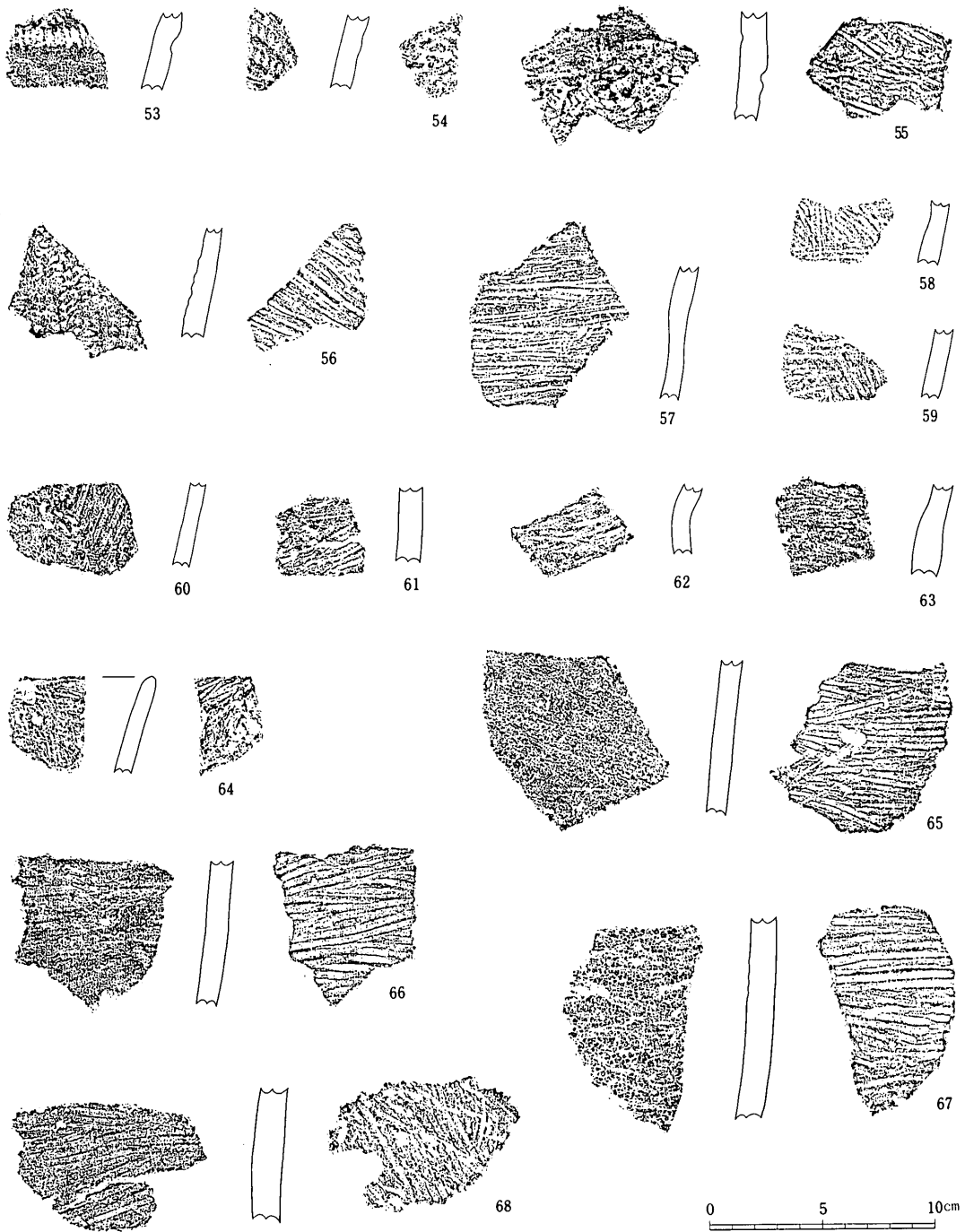
No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	欠損状況	註 記	備 考
52	(8.3)	(7.1)	(6.8)	(670)	凝灰岩	欠	No. 18	先端部に敲打痕
53	(10.4)	6.1	4.9	(490)	石英閃緑岩	"	検出面	
54	(8.1)	(6.4)	(5.6)	(380)	礫岩	"	集石No.3	先端部に敲打痕
55	(6.8)	(6.4)	(6.1)	(325)	砂岩	"	集石	
56	(10.1)	(6.3)	(6.0)	(435)	"	約1/2欠	No. 187	
57	(10.7)	(7.7)	(4.4)	(460)	"	欠	No. 22	
58	(8.0)	6.6	8.0	(650)	"	約1/2欠	検出面	
59	(10.6)	6.9	4.1	(445)	"	約1/2欠	検出面	片面に凹部



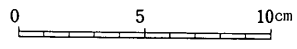
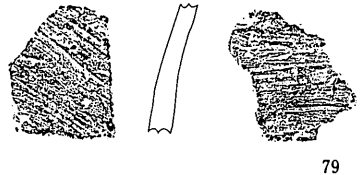
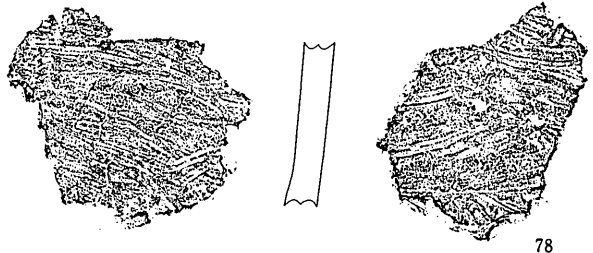
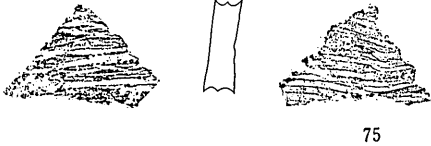
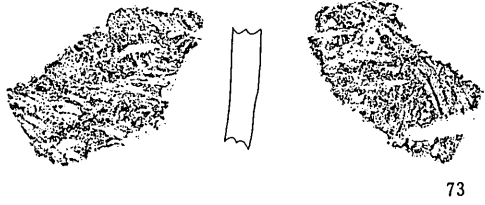
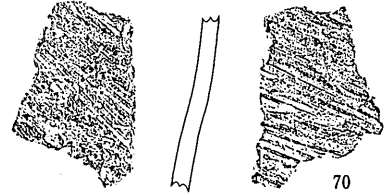
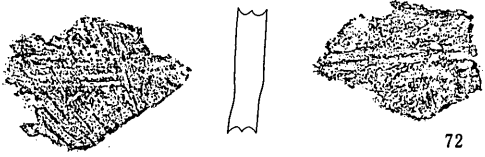
第92图 北原遺跡出土土器拓影 (1)



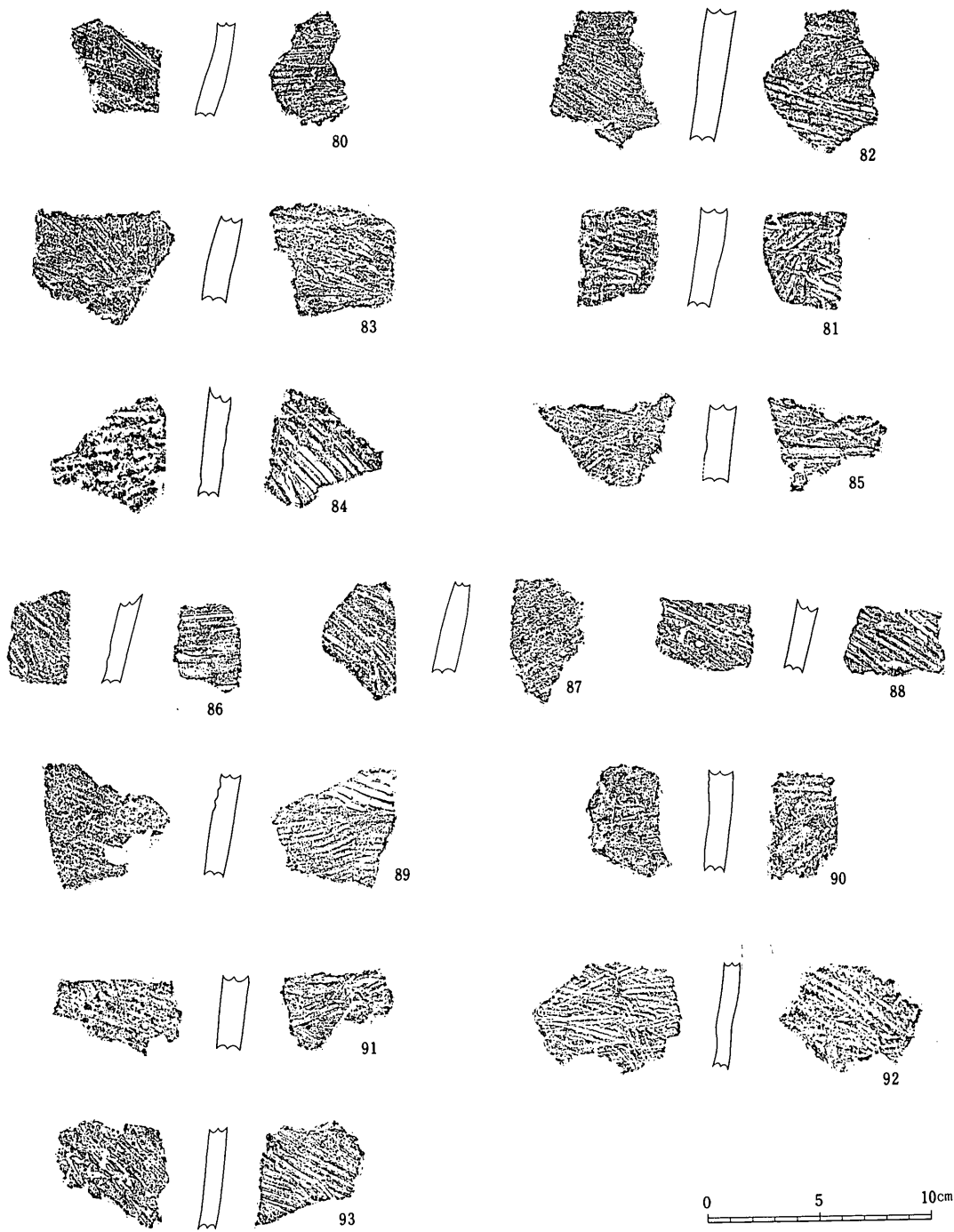
第93图 北原遺跡出土土器拓影 (2)



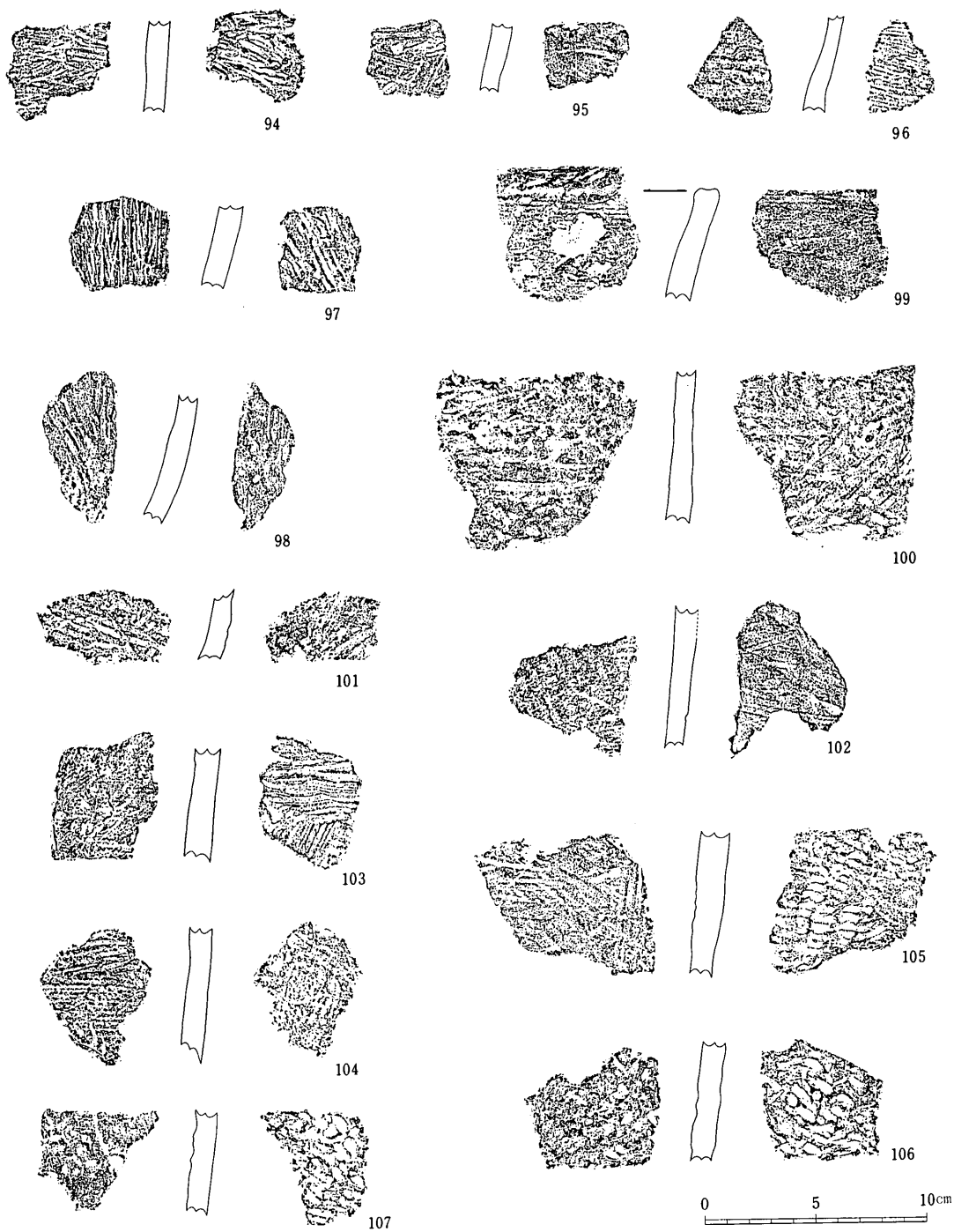
第94図 北原遺跡出土土器拓影 (3)



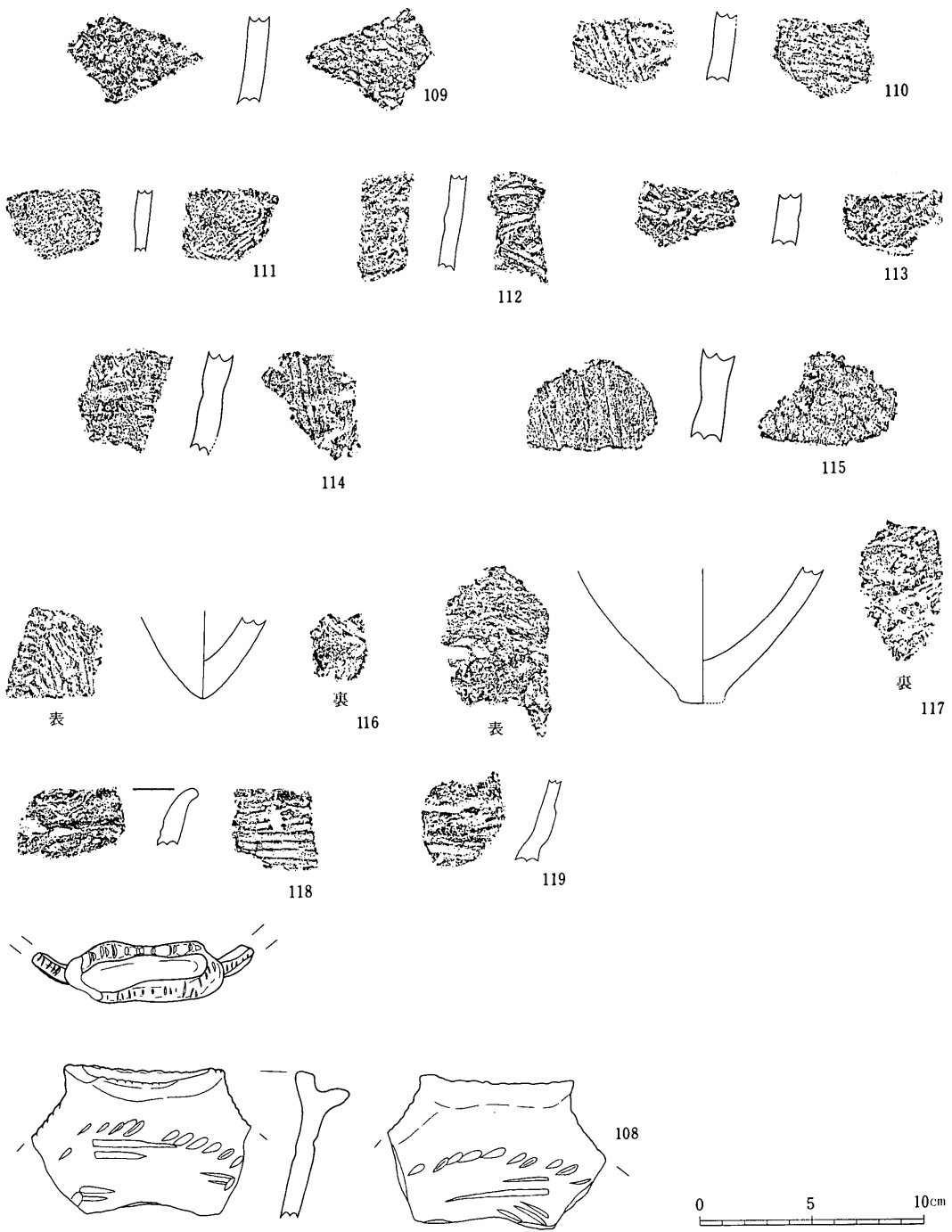
第95图 北原遺跡出土土器拓影 (4)



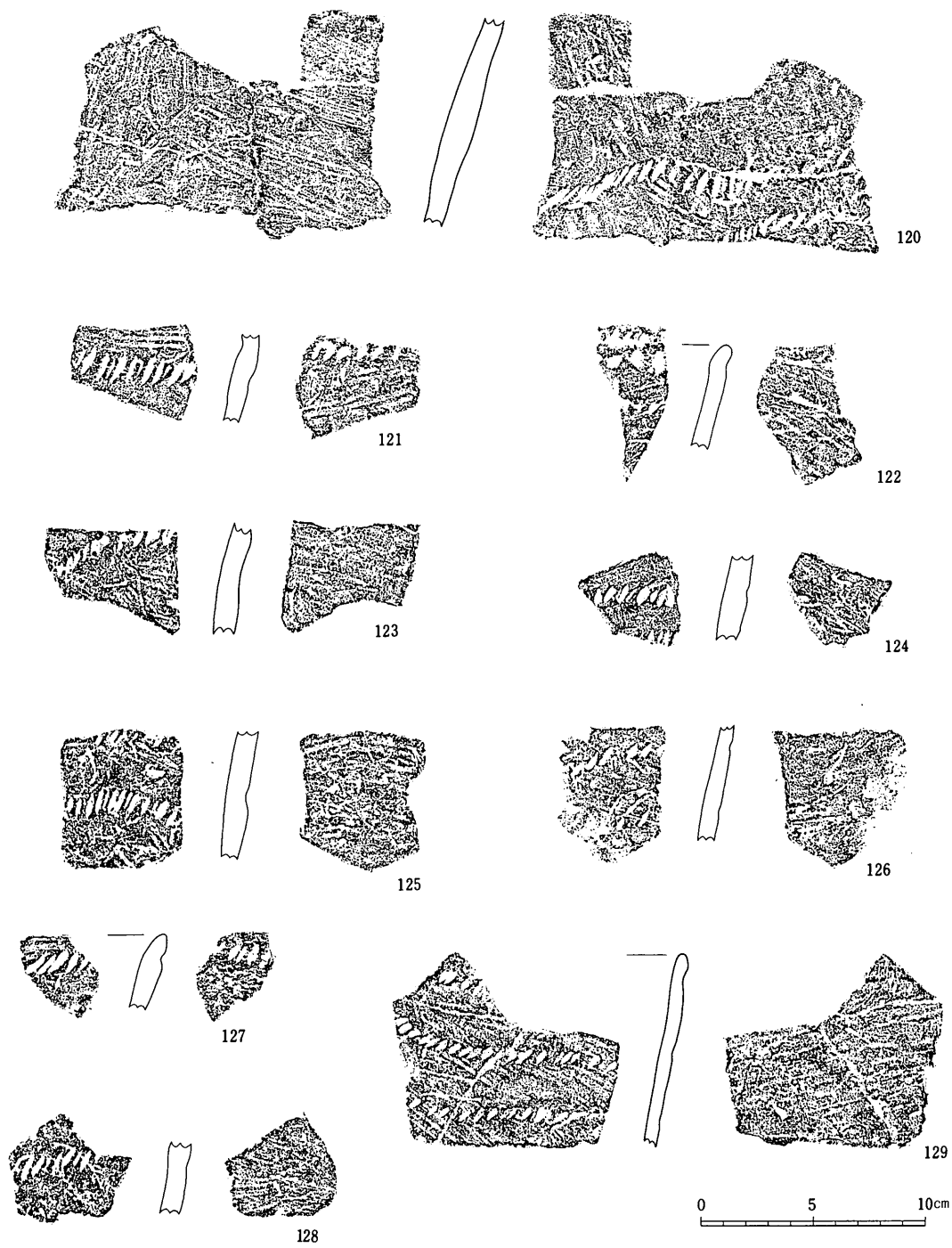
第96图 北原遺跡出土土器拓影 (5)



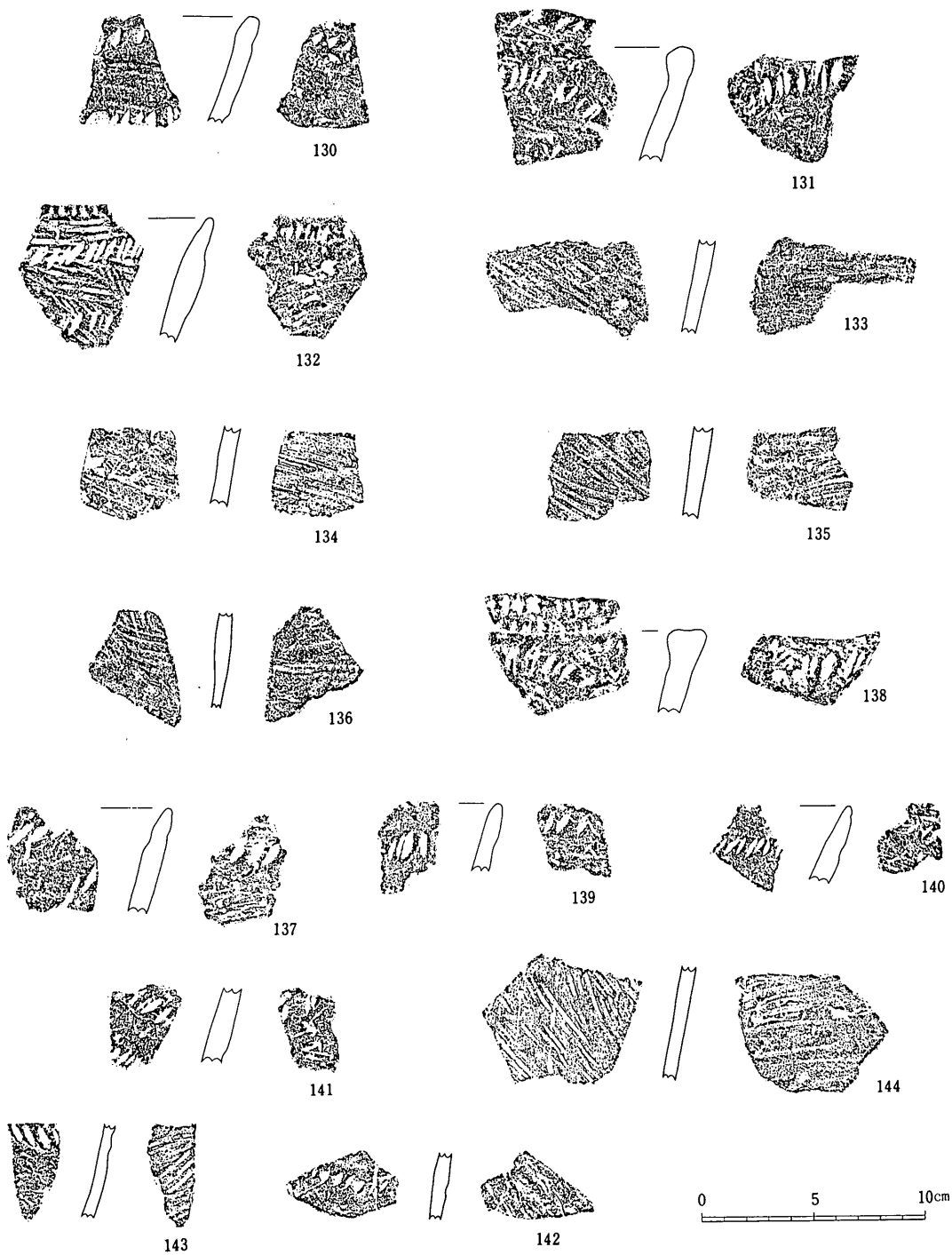
第97图 北原遺跡出土土器拓影 (6)



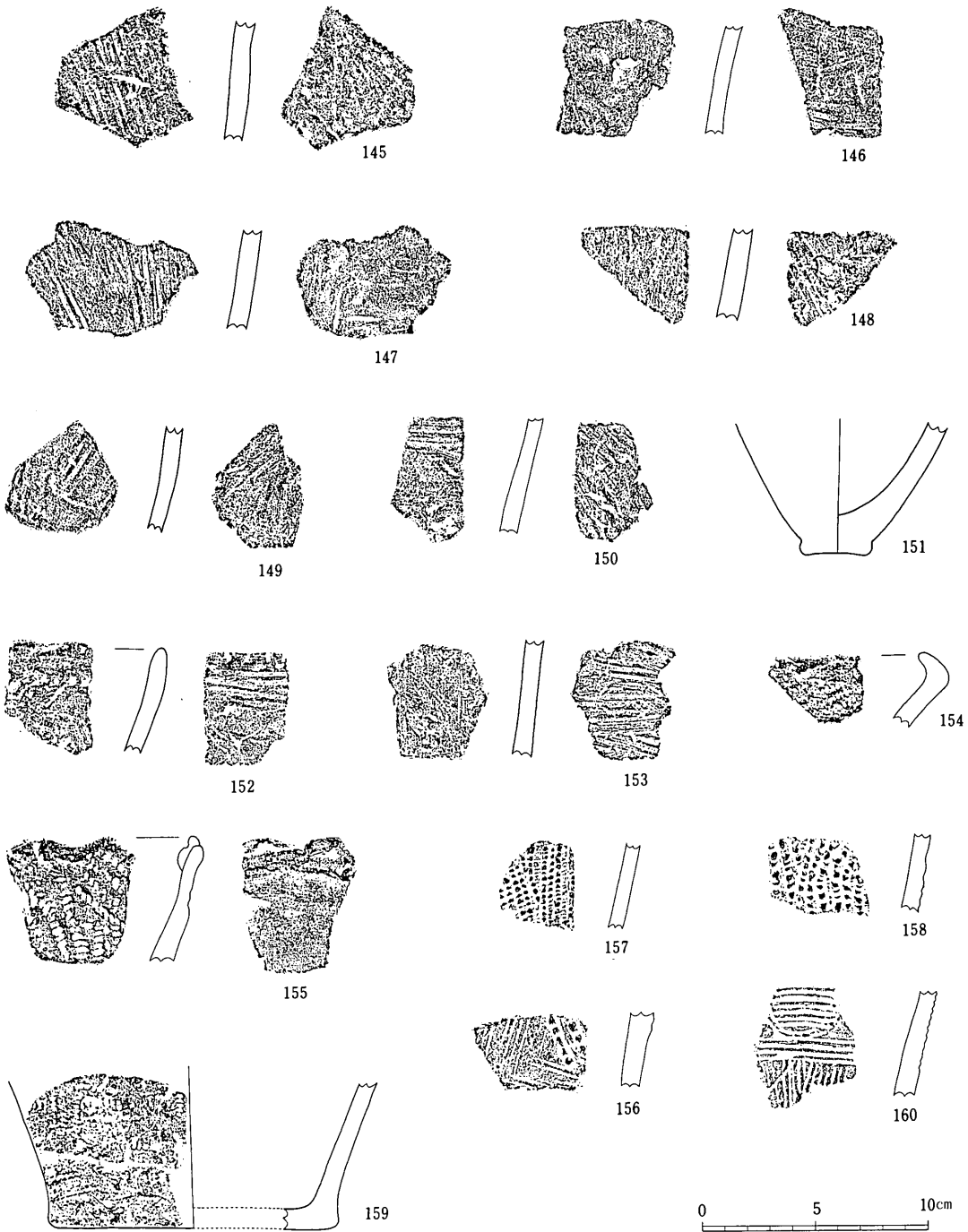
第98图 北原遺跡出土土器拓影 (7)



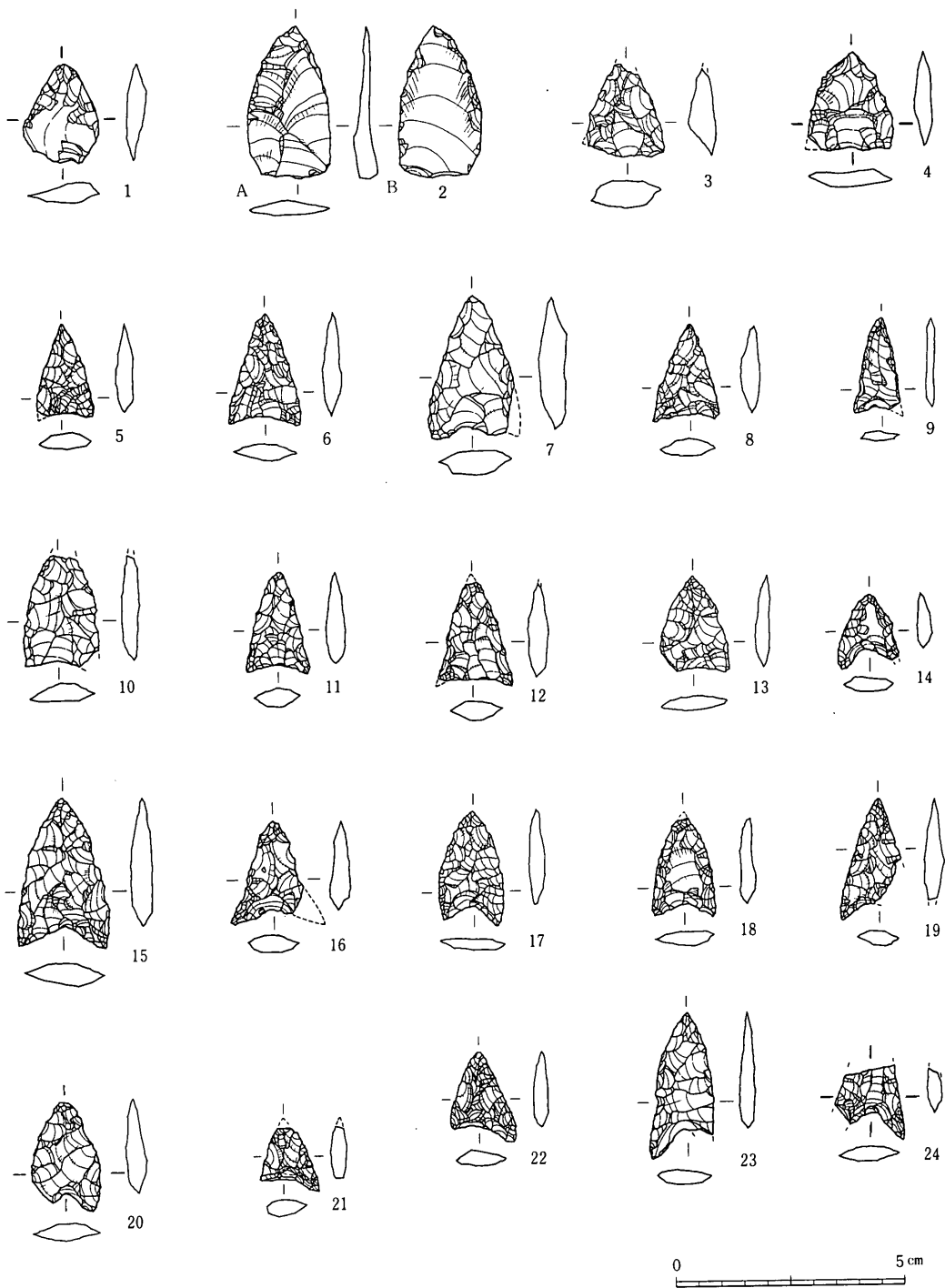
第99図 北原遺跡出土土器拓影 (8)



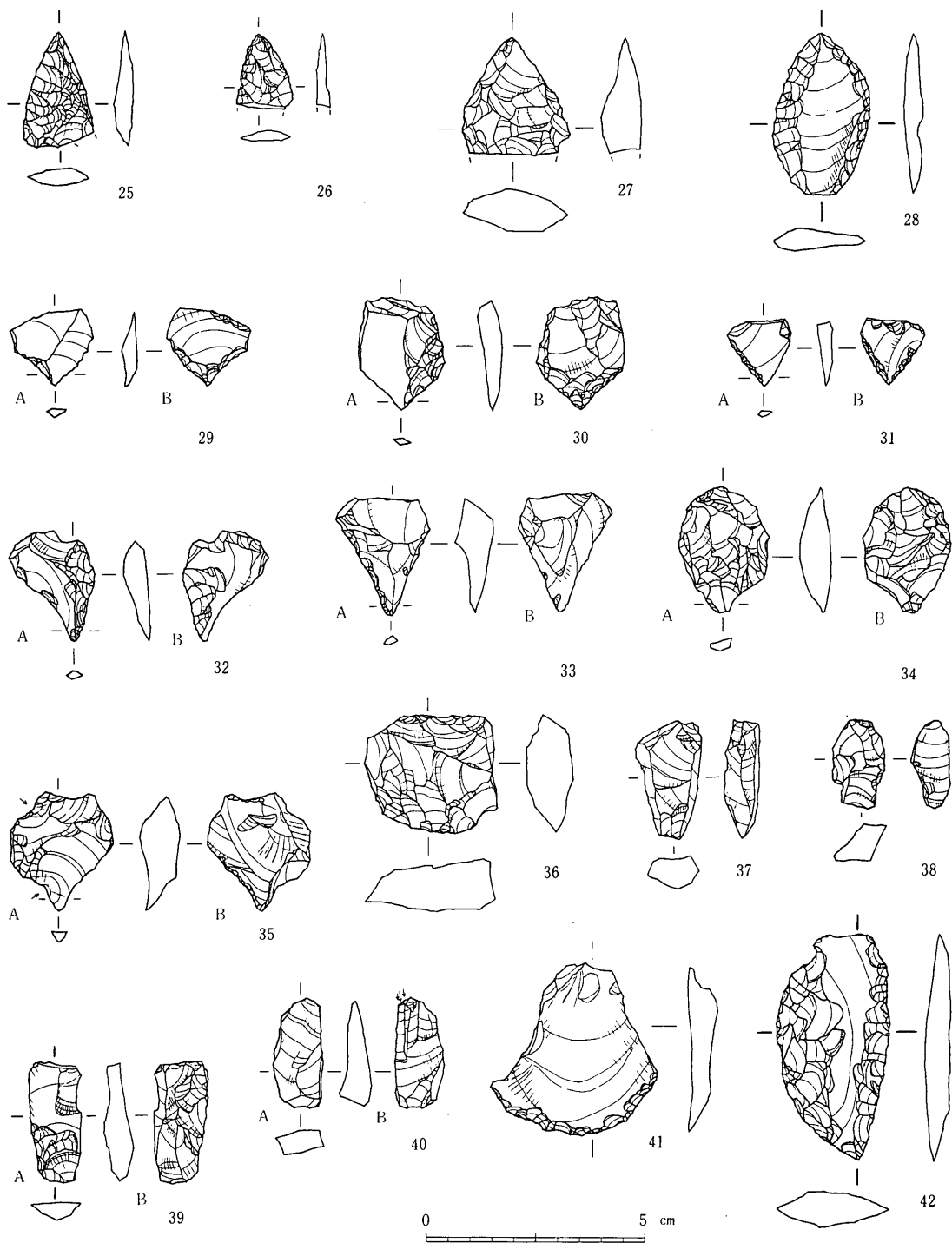
第100図 北原遺跡出土土器拓影 (9)



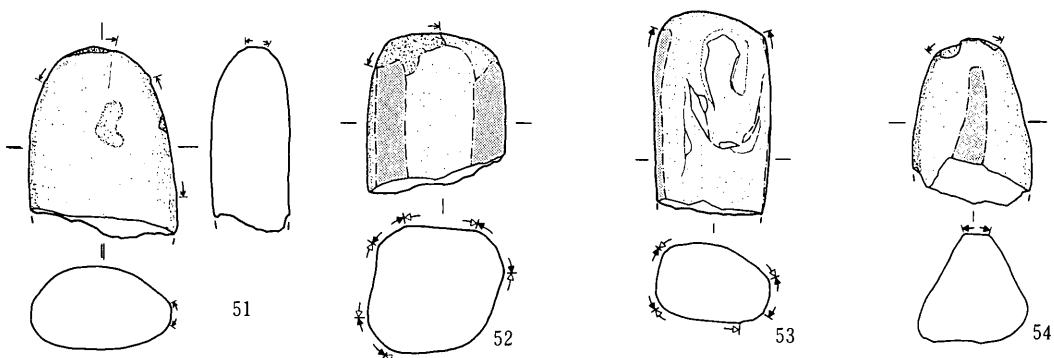
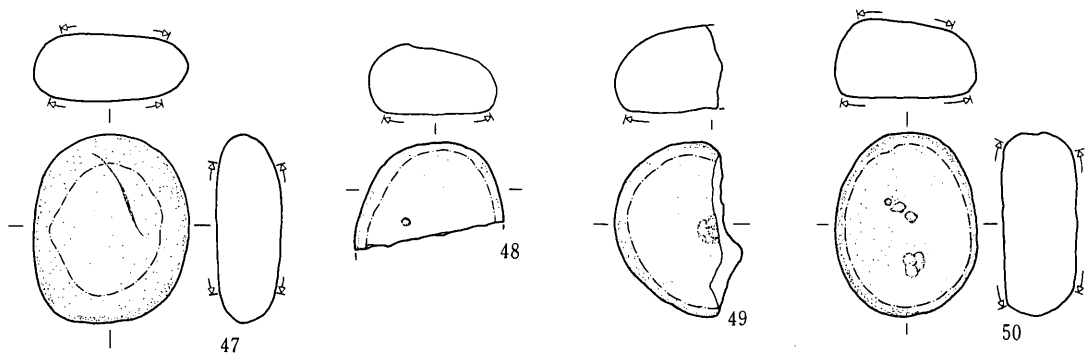
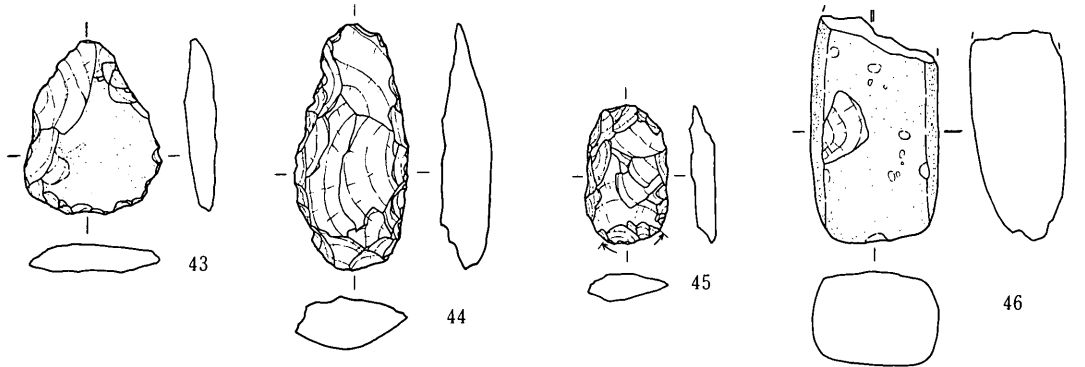
第101图 北原遺跡出土土器拓影 (10)



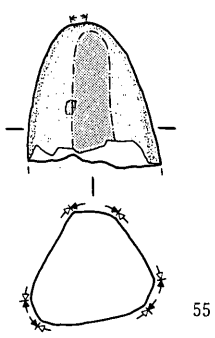
第102图 北原遺跡出土石器 (1)



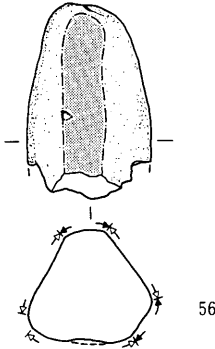
第103图 北原遺跡出土石器 (2)



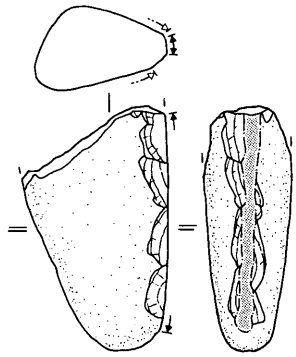
第104図 北原遺跡出土石器 (3)



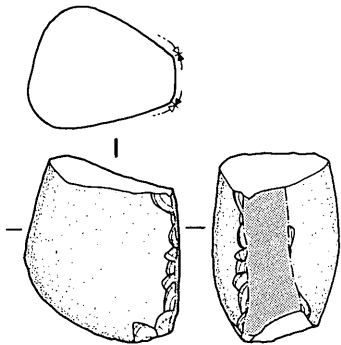
55



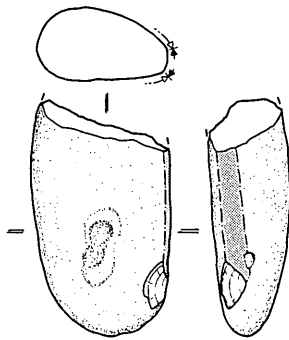
56



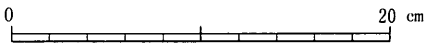
57



58



59



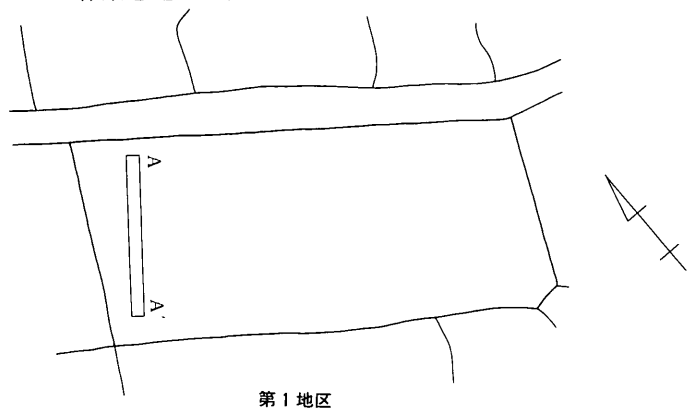
第105 図 北原遺跡出土石器 (4)

第5章 松山遺跡

松山遺跡は赤木山遺跡群の最北端に位置し、南縁を西流する涸れ谷をはさんで北原遺跡と相対している。今年度のは場整備は本遺跡の南半部にかかったが、その周辺は割合遺物の散布が薄く、遺構が存在する可能性は低いと考えられていた。このため、は場整備対象地内で工事による削平が著しい部分に絞って、遺構の存在範囲の確認に主眼を置いた調査を実施することにし、現地目との調整に考慮しながら2つの調査地点を選定した(第1地区、第2地区)。この両地区は畑地1枚をはさんで東西の関係にあり、本遺跡の南界を区切る涸れ谷に面した南向き傾斜地に位置する。

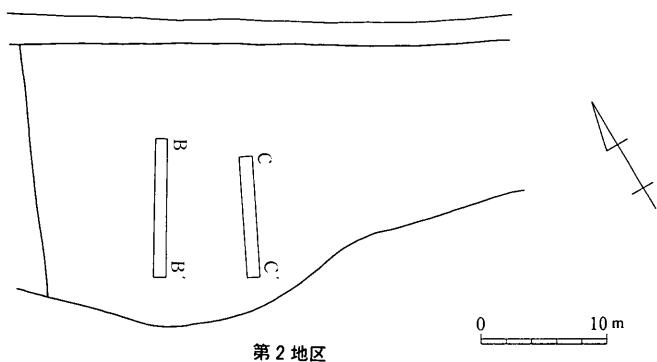
第1地区に1本、第2地区に2本のトレンチを設定した(第106図)。掘り下げは重機を導入せず表土上面から人力で行い、遺物の有無、出土状態、包含層の深さ、土層の様子などを観察しながら作業を進めた。結果は、第1地区では、表土下20~60cmで地山である礫まじり黄褐色土(再堆積の

ローム質土)へ達したが、耕土層(I層)と地山(II層)に分れ、しかもその境界がつかみにくいものであった。第2地区では10~40cmで同様の地山へ達し、遺構存在の形跡はみられなかった。両地区とも遺物は皆無であり、土層も礫質が強かったため、調査地周辺は遺構の分布からはずれると判断し、調査を打ち切った。



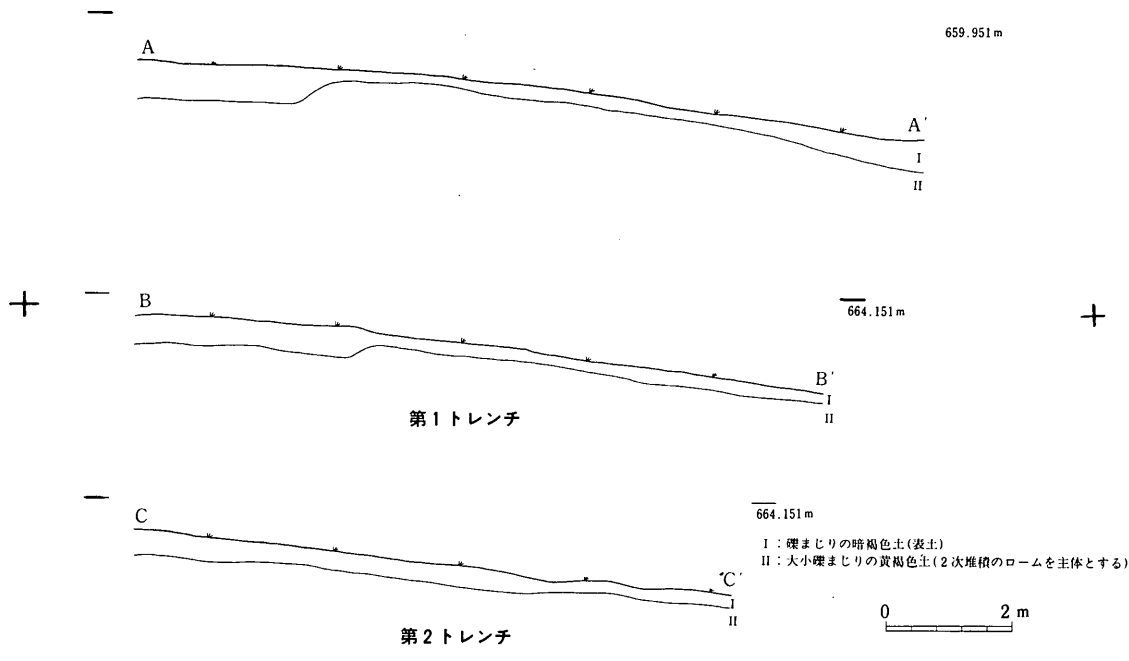
第1地区

+



第2地区

第106図 松山遺跡調査地区全体図



第107図 松山遺跡トレンチ土層図

第6章 調査のまとめ

1. 北原遺跡について

松本市内において過去に縄文時代早期土器の出土が確認されている遺跡は数箇所すぎず、発掘調査が行われているのはそのうちの2ヶ所に止まる。その1つ、内田の五斗林遺跡は昭和34年に発掘調査が行われ、2基の、生活址と思われる焼土と押型文土器が発見されている。また、山形押型文土器を伴うとみられる集石遺構が確認された、今井のこぶし畑遺跡は昭和48年の調査である。これ以降、松本市内では該期の調査例は、1・2片の土器出土の報告が散見されるだけという貧弱なものであった。この様な状況にある中で今回の調査の意義は、第1に縄文時代早期の遺跡新発見ということそのものにあるといえる。当地方の遺跡分布に貴重な1点を加えることができた訳である。さらに、赤木山遺跡群における時期の空白がまた1つ埋められたことも重要であろう。

出土遺物については、それぞれの項で述べられたとおりであるが、土器は編年上でみると、田戸下層式、粕畑式、茅山上層式など早期後半の諸相を示すものが多量に出土し、これらに石鏃、磨石を中心とする多数の石器が伴って、該期研究の上で良好な資料を提供したといえる。今後の課題は、最近、塩尻市堂の前遺跡、栗木沢遺跡など本遺跡と同じ東山麓に位置する遺跡から該期の資料が多数出土しており、それらとの比較検討が当面のものとなろう。

2. 白神場遺跡について

(1)縄文時代前期末

今回調査の最大の成果は、この時期の小規模な集落の全容をほぼ露呈させたことである。集落址は、具体的には第1・5～9号の6軒の住居址と多数の土壙から構成され、特に土壙は弥生時代に属するもの及び特殊なものを除いても100基あまりが該当すると推定される。これらの遺構が調査地内の南から南東向きの斜面上及びその背後の平坦地部分、計4500m²あまりの面積に展開していたのである。遺構分布を垂直方向にみると、住居址は第1号住居址がI区東半の平坦地部分に、また第7号住居址がII区北端の平坦地部分が傾斜し始める付近に位置する他は斜面上に占地し、一方土壙はほとんどが平坦地部分に掘り込まれていた。遺構の平面的な位置関係は、第1・9号住居址がそれぞれ集落の東端と南東端にあって単独であるのに対し、第5～8号住居址は4軒で密集し南西端の一角を占めており、これらの住居址間、直径50mほどの円形の範囲内に土壙が集中するという形をとっていた。集落の範囲は発掘区でみるとI区中央部全域とIII区北東部、IV区北西部にわたり、各区ともこれ以外の場所にはこの時期の遺構分布が見られなくなる。このことから、西・南・東の境界は極められたものとみ、北限の確認こそできなかったが、冒頭で述べたように、集落の全容をほぼ捉えたとみて間違いなからう。出土土器については本文中にあるので詳しくは触れないが、その

ほとんどが型的にみて諸磯C式から十三菩提式の古い段階、県内では日向II式または桜沢式などと呼称されるものにほぼ等しい様相をもち、この点から集落の短期ないし同時性が強く窺われる(ただし第7号住居址上層からのみ、若干新しい型式の土器が出土している点は大きな問題点となる)。

(2) 弥生時代

土壌 総数135基発見された土壌のうち出土した土器からみて少なくとも25基以上は弥生時代中期前半のものと考えられる。分布は全体的にみるとかなりバラツキがあり、縄文時代の土壌がI区中央部を中心にまとまるのに対し、この時期のものはI区北東部からさらに北の調査地外へのびているようだ。また、土壌56~59や土壌34・46・79の様に一ヶ所に小さくまとまるものもある。個々の形態は、縄文時代のものが平面は円形、断面は長方形(いわゆるタライ状)を呈す整ったものが多かったのに対して、平面形が不整な円形・楕円形などを呈するものが目立つ。

松本市内でこの時期の遺構が検出された遺跡は少なく、内田の横山城遺跡で住居址2軒、今井のこぶし畑遺跡で住居址1軒が発見されているにすぎない。近年、里山辺の針塚遺跡で再墓墓と思われる土器棺を納めた土壌が数基発見されて注目を集めたが、これを加えても3例のみであり、近隣地域でも少なさは同様である。このように弥生時代中期前半は遺構に関しては未だ資料の蓄積段階である中で、今回調査のもつ意義は大きい。しかしその一方で、本遺跡の場合もかなり広範な面積の調査にもかかわらず土壌のみの発見で、住居址等が伴わなかったことについて、さらに調査範囲をI区の北方へ広げれば住居址等が出現するか否かは予測が全くつかない。即ち、資料の少なさが原因となって、この時期の遺跡の類型がつかめず、従って他例を引いて類推することが困難な訳である。今後へ大きな課題を残している時期といえよう。

方形周溝墓 縄文時代前期末の集落址の発見が今回の調査の最大の成果であるとするれば、3基の方形周溝墓の確認はそれに次ぐものであろう。松本市内では初めての発見、松本平では塩尻市丘中学校遺跡について2例目(本遺跡調査中に山形村殿村遺跡でも新たに1例発見された)というもので、1遺跡から複数発見されたのは松本平でも初めてである。それぞれの形態については本文中で詳しく述べてあるので、ここでは3基の関連性や性格について考えてみたい。

方形周溝墓1(以下「方周1」と略、他も同)は約7m、方周2は約7.5×9m、方周3は約6mの方形ないし長方形を呈し、大きさに違いはあるものの、周溝の陸橋部を西辺、西隅にもつことで共通する。また方周2は主体部と南西部周溝を削平されているが推定される主軸方向は方周1とほとんど一致している。3基の位置関係は、いずれも調査地の平坦地部分に占地し、西南西から東北東へのびる一直線上に方周2・1・3の順でそれぞれ65m、80mの間隔をおいて並んでいる。これらの事実を考えあわせると3基は軌を一にして造られている可能性があり、特に方周1・2は関連が深いと考えられる。

造営の時期については、いずれも明確に決定するような出土状態を示した遺物がない点で共通している。方周1及び2の周溝からは縄文前期末と弥生時代中期前半の土器片が、ある程度の量出土

しており、従来の方法でいけばその土器の中の最新の時期、即ち弥生中期前半をもって遺構の時期とするところである。しかし長野県内での類例を調べると、第1に弥生中期に遡るとされる例は長野市塩崎小学校地点遺跡の1例しかなく、しかも中期後半であって、本例を中期前半とみるととびぬけて古くなってしまい、県内の方周初源期に重大な問題を引き起こすことになる。第2に周溝プランでみると方周1に代表される形はまた伊那谷に分布する弥生時代後期のものと等しい。第3に県内の弥生時代の方周には造営時期の遺物を出土していないものも多い。以上のことから、本例は、出土土器はすべて覆土への混入と捉え、一応、弥生時代後期の造営になるものと結論づけたい。

造営集団の居住地はどこであろうか。本遺跡自体は南から南東へ向くが、方周の主軸のとりかたなどからみて、むしろ遺跡西側の急斜面を下ったところ、即ち田川流域に対象地を考えたい。具体的には、前年度調査の前田遺跡一帯、あるいは塩尻市の花見遺跡などが該当するのではないかとと思われる。

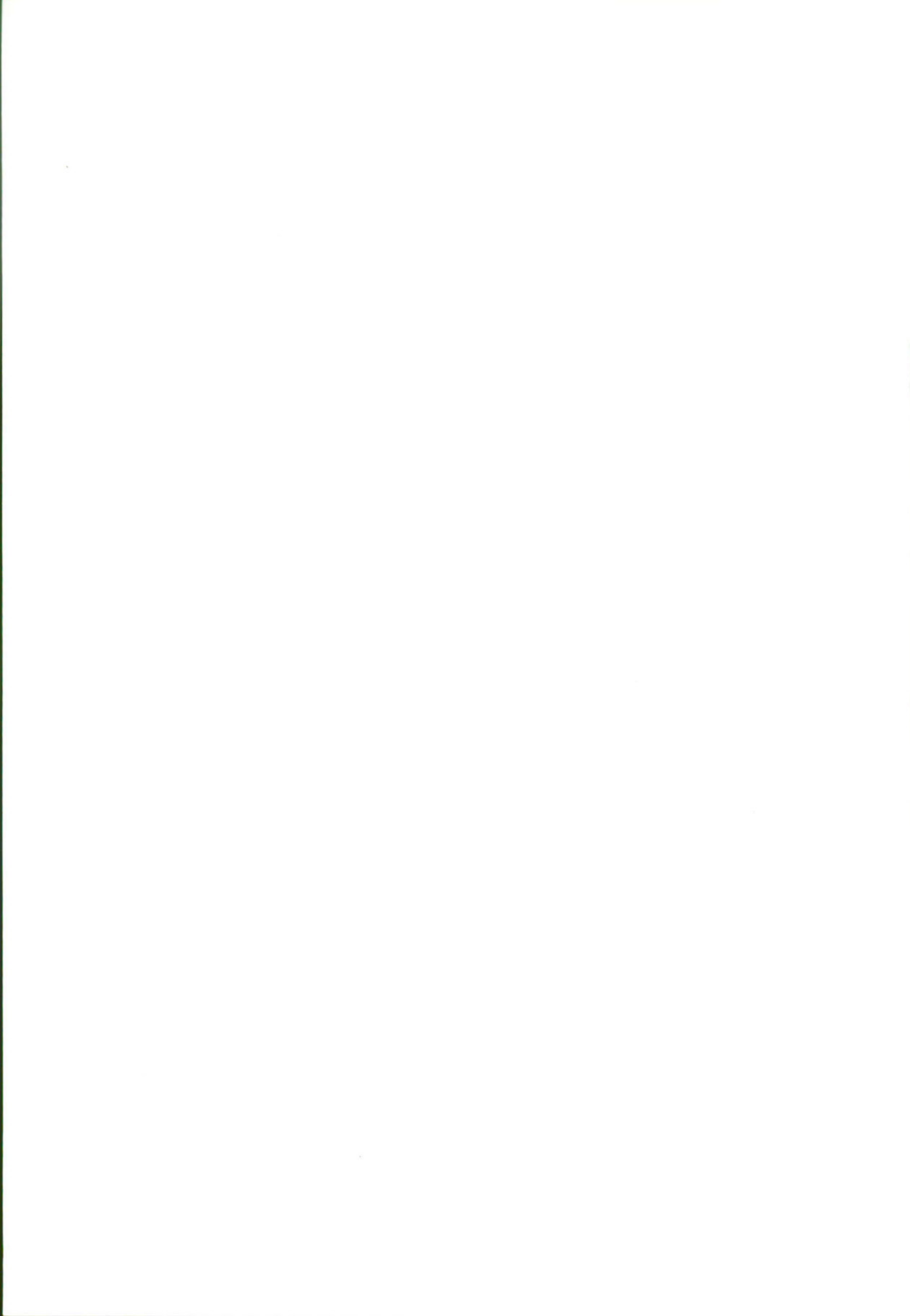
(3)古墳時代

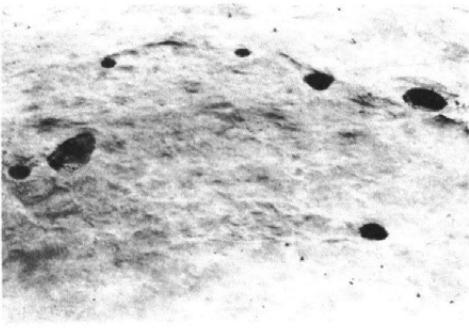
前期に属する第2～4号住居址と土壙20、中期の第12号住居址がある。両期の住居址の松本市内での調査例は全くなく、新知見であった。前期の第2～4号住居址はI区東半の平坦地部分に集中し、土壙20を伴って小規模な集落を形成していたとみられ、北の未調査地内へののくらしい遺構が続くか興味が持たれるところである。中期の第12号住居址は調査地内では全く単独で存在するが、IV区の東端に偏って位置することや、大きな面積をもつ住居址であることから、IV区東あるいは南の未調査地に同期の住居址が続くことも想像される。

3. 調査体制について

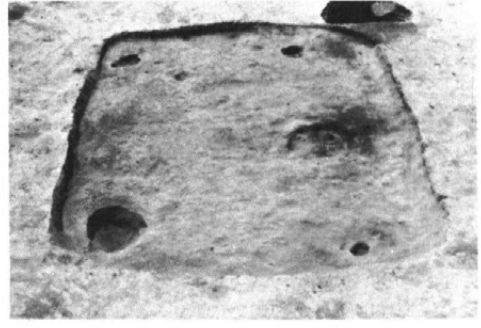
本遺跡群の発掘調査は既述のごとく延5ヶ月間を現場作業にあて、1月下旬より整理作業に入って3月によく報告書原稿の脱稿をみた。この超人的なスケジュールでつくる報告書は、その短い時間内では最大の努力をして正確な“記録保存”につとめたつもりである。

これは発掘現場での意識と同じであるが、今続々と進められている開発の波の中にあって、発掘調査は工事の一環の中に組み込まれ、短日時で現場作業（発掘調査）の完了が求められている。行政と学問という両者の板ばさみの中で、今我々にできることは、遺跡を最大限に発掘調査し、詳細な報告書にまとめて記録保存をはかるとしか言えない。そのため上記の闘いとも言える自己との葛藤が続くのである。ここではその原因の因果関係を追求する場ではないが“埋文”が一人前の評価を与えられずに、鬼子として迷惑者扱いされていることに義憤がわくし、国あげて意識の変革をせねばならない問題と思われる。このような状態の中にあって、今次調査は信大佐々木明助教授をはじめ、寿史談会、土地改良区、公民館他多くの方々のご援助ご協力をいただいて完了することができた。記して感謝申し上げるとともに60年度における調査においてもよろしくお願い申し上げます次第である。





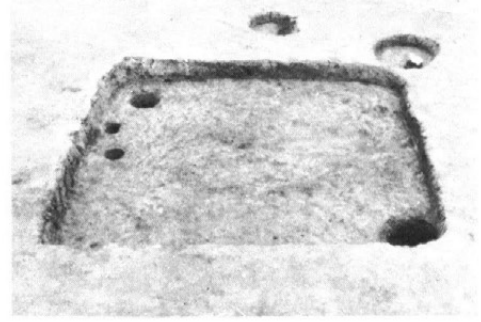
白神場遺跡第1号住居址



白神場遺跡第2号住居址



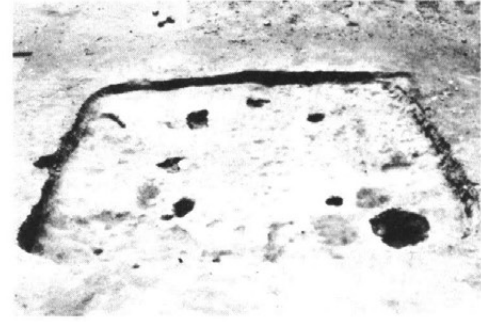
白神場遺跡第3号住居址



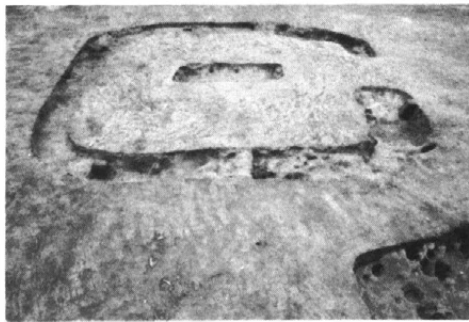
白神場遺跡第4号住居址



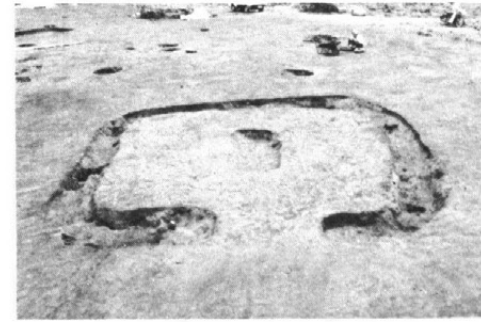
白神場遺跡第7号住居址



白神場遺跡第12号住居址



白神場遺跡方形周溝墓1

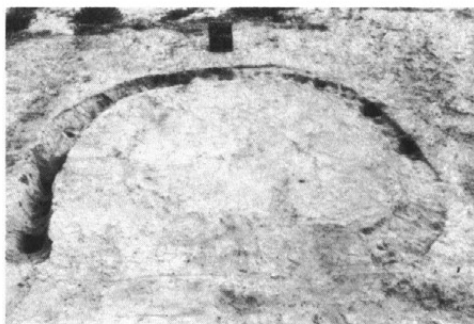


白神場遺跡方形周溝墓1

図版1



白神場遺跡方形周溝墓 2



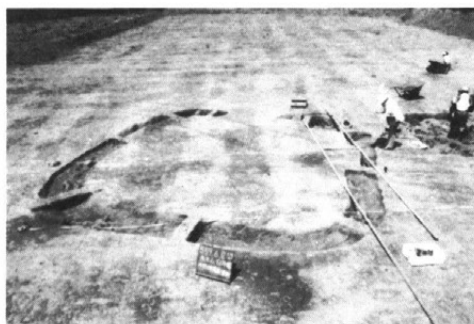
白神場遺跡方形周溝墓 3



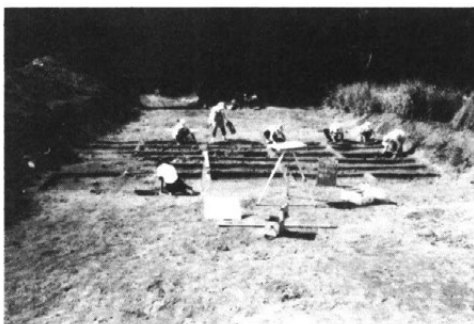
北原遺跡集石



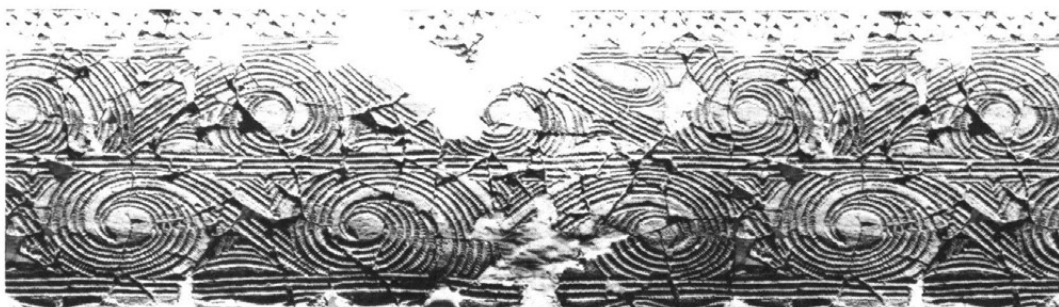
北原遺跡第 1 号住居址



白神場遺跡調査スナップ



北原遺跡調査スナップ



白神場遺跡第 9 号住居址出土土器展開写真

図版 2

松本市文化財調査報告No.34

—松本市赤木山遺跡群Ⅰ緊急発掘調査報告書—

昭和60年3月25日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会
印刷 株式会社 総合印刷所
